

---

# ドラゴンクエストV～友と絆と男と女

あちゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンクエストV〜友と絆と男と女

### 【Nコード】

N7273V

### 【作者名】

あちゃ

### 【あらすじ】

DQ5に詳しくない男が、DQ5の世界へ転生してきた。うる覚えだけど、俺主人公だし何とかなんだろ！的なノリの主人公な話。

無事完結致しました。

1・焼きノリ・味ノリ・その場のノリ(前書き)

初投稿のド素人です。

暖かい目で見守ってやってください。

## 1・焼きノリ・味ノリ・その場のノリ

磯の香りが漂う中目を覚ますと、そこには一人の男がいる。

「ん！おお、起きたか！よく眠れたかりユカ？昼前にはビスタ港に着くはずだ。順調にいけば夕方にはサンタローズに着く。2年ぶりの我が家だぞ！」

この男の名はパパス。この世界での俺の父親だ。

「うん！おはよう、お父さん！船って凄いよね！僕が眠っている間も、進んでるんだもんね！」

「そうだな。だが、船員の人達が頑張ってくれたからなんだぞ！後で皆さんにお礼を言っ来てなさい」

「うん！」

そう元気に答えると俺は船室に備え付いてある洗面台で顔を洗い、小走りで船室を出て行く。

俺の名前はリュカ。

前世ではないリーマンだったが、何故かドラクエ5の世界に転生してきた。

正直ドラクエ5の事はあまり詳しくはない！

俺自身はプレイしてないのだ！

兄貴や友人のプレイを横で見っていたので多少の名称は覚えていただけで、ストーリーについては殆ど知らない！所々うる覚えだ。

ま、何とかかなんたる！人生ノリが大事だよね！

まあ、そんな訳でリュカとして生まれた時からの記憶が俺にはある！普通あり得ないよね！

父さんが俺に『トンヌラ』という名前を付けようとした事もバツチり覚えてる！

あり得無くね！？『トンヌラ』って！

もう一つあり得ないのは、母マーサが攫われた瞬間だ！

母が俺に授乳をしようとオツパイをペロつと出した瞬間、紫のフリ  
ーザ様みたいな喋り方したのが出てきて攫ってった！

最悪ツスよ！

もう俺の中の千人の俺が、「授乳・授乳」と、授乳コールの中俺  
のオツパイが連れ攫われました…

そりゃないだろ！

終わるまで待つてくれてもよくね？

そりゃ前にも2ヶ月付き合った彼女と、やっとやれるであろう時に  
元彼が現れて「やっぱり俺、お前の事が忘れられない！」とか言っ  
てホテル街へ攫われた事があるけど…

もうちよつと待てよ！どつちもさあ！1回ぐらいいいじゃん！

まあ、過去を嘆いても仕方がない！未来への希望を胸にノリで邁進  
しましょ！

それに、俺にはもの凄い武器があるのだ！

それを今からお見せしよう。

俺は小走りで食堂へ行き奥の厨房に入り料理人達に元気よく挨拶を  
する。

「皆さん、毎日美味しいご飯をありがとうございました。僕、皆さ  
んの事と皆さんが作ってくれたご飯の事は忘れません！」

俺は満面の笑みで、一人一人の目をしっかりと見ながら挨拶をする。  
すると…

「へへっ、俺もリユー坊の事、忘れねえよ！ほら、これ持ってけ！  
と、リンゴを貰う。

「リユー坊は何でも旨い旨いって言ってくれたからなあ…作りがいが  
あったよ」

と、スイートパイを貰う。

「俺たちの料理が食えなくなっても、何でも残さず食うんだぞ！」  
と、チョコを貰う。

等、色々な物を貰い厨房から退出し甲板へ上がる俺。

そう、俺の武器とは天使の様に愛らしい顔である！

自分で言っちゃあなんだが今の俺はかなりのイケメンだ！

今はまだ（可愛い）（愛らしい）で済むが、あと10年ほどすればジャーニーズ事務所からお声がかかる位、いやハリウッドからお呼びが来るレベルのイケメンになるだろう。

これはもう、色々食い放題だね！

「初めては、一桁の時です」なんつったりして！

お馬鹿な妄想をフルスロットルでかましつつ、朝食代わりに貰った食べ物をついたらげると水平線の先に陸地が見えてきた。

それと同時に甲板の上が慌ただしくなる。

どうやらもうすぐ目的地に着く様だ。

そんな事を考えていると船長が声をかけてきた。

「坊や。もうすぐビスタ港に着くから、お父さんと呼んできなさい」

「はい！船長さん色々ありがとうございました。おかげでお家に帰る事ができます」

「私も坊やと一緒に旅が出来て楽しかったよ。こちらこそありがとう。さあ、お父さんと呼んできなさい」

俺は、笑顔で頭を下げると踵を返し父の元へ向かった。

パンツと勢い良く戸を開けると

「お父さん！もう港へ付くって船長さんが呼んでるよ！」

「ほお、もう付くか？リュカ忘れ物は無いか？」

「うん！」

と元気よく答えた俺は、ひのきの棒と着替え等が入った小さなバッグを持ち父の後を追い甲板へ上がった。

もう既に水夫達が接舷の準備をしている最中だった。

準備が整うとこれから乗船する人が渡し板の上を通り乗り込んで来た。

恰幅のいい身形のきちんとした、いかにも「お金持ち」なおっさんが乗り込み、それに続いて黒髪のド派手な服着た女の子が「邪魔よ！退きなさいよ！」と、威嚇しつつ乗り込む。

続いて青い髪のお淑やかそうな女の子が乗り込………めないでいる。どうやら渡し板と船との段差が大きすぎて超えられない様だ。

「おや、フローラにはこの段差は大きすぎるかな？」

等とほざいているおっさんを横目に俺は女の子に手を差し伸べる。

フローラと呼ばれた女の子は躊躇いがちに手を握ると、なんとか乗船してきた。

「坊や、どうもありがとう。ついでに、フローラを船室まで連れて行ってくれないかね？おじさんはまだ船長と話があるんでね」

俺はフローラの手を取りそのまま船室の方へと歩き出す。

「僕、リュカ。よろしくね」

フローラの瞳を見ながら、エンジェルスマイルで自己紹介をする。

「私はフローラ。さっきは、どうもありがとうリュカ」

頬を赤くしながら、か細い声でフローラが囁く。

「フローラはお父さんと一緒に旅をしているの？僕もお父さんと二人で旅をしていたんだ！」

「まあ！そうなの？二人つきりなんて大変でしょう？次は何処へ向かうの？」

「全然大変じゃないよ！それに僕の家、サンタローズにあるんだ。

2年ぶりに帰ってきたんだよ！」

「すごい！2年間も旅をしてきたの！？」

「うん！フローラは何処へ行ってきたの？」

急にフローラの顔から笑みが消え沈黙が訪れた。

俺はそのままフローラの手を引き船室へ入る。

俺と父が使用していた船室とは違い『豪華絢爛』の一言だ！

別に俺自身はあの船室でも不満はないが、さすが金持ち令嬢となる

とランクが大幅に上がるらしい。

まあ、もう降りる船の事はどうでもいい。

フローラを椅子に誘い正面で少し屈み顔を覗き込む。

別に俺はロリコンじゃない！

それでもフローラはかなりの美少女だと思うし、美少女は笑顔の方が断然いい！

それにフローラは将来絶対に美人になるだろう！

今のうちに媚びを売って俺のバラ色人生計画の為にフラグを立てる行動をした方がいいだろう。

だから俺はフローラ的笑顔を少しでも取り戻す為に、お悩み相談員になるうと思う。

「どうしたの？何かイヤな事でもあったの？」

・  
・  
・

…まあ簡単に言うとフローラは修道院に入るらしく、その下見の為に父さんと一緒に旅行をしたらしい。親元を離れ、慣れ親しんだ家・街・友人と別れ、見知らぬ土地、見知らぬ人々と生活をしなければいけない事に不安を感じ、ひどく落ち込んでいたというのが今回のご相談者のお悩みです。

「うーん…そうだよねえ…お父さん、お母さんと離れるのは寂しいよね」

「うん。リユカもお父さんとお母さんと離れ離れになるのはイヤでしょ？」

「僕、お母さんいないんだ！ずっと小さい時から」

「あー！ごめんなさい…」

フローラが泣きそうな顔をしたので、俺は殊更明るい笑顔で続けた。「でもお父さんがいつも一緒だったから寂しくなかったよ！それに、旅先で色んな人達に出会う事が出来たから、すごく楽しかったんだ

！」

「リユカは強いよね」

「そんな事無いよお。色んな人達に出会って色々なお話を聞けば、フローラも寂しくなくなるし楽しくなるよ！」

色々な人達から話を聞く事に興味があるらしくフローラの顔から少し陰りが消えていった。

「それに僕、フローラのお父さんに感謝してるんだ！」

「あら？何故？」

フローラは驚き訪ねてきた。

「だって、修道院の事を考えてくれなければ、僕フローラに会う事無かったもん！」

「え！」

フローラはかなり驚き俺を見詰めている。

「フローラは凄く可愛いから、出会えて本当に良かった！お父さんに感謝だよ！」

フローラは顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに俯いてしまった。

よっしゃ！これでフラグ立ったよね！

これで将来、劇的な再会を果たせば『キャッキヤ！ウフフ！』は確実だよな！

等と脳内で千人の俺が、一大パレードを開催していると甲板の方から父さんが呼びかけてきた。

「おーい！リユカ！そろそろ行くぞー！」

「あ！じゃあ僕、もう行くね！」

「うん！今日はありがとう！」

やっぱ美少女は笑顔に限るね。

俺は踵を返し出て行くこうとしたが、立ち止まりバックの中から綺麗な鳥が描かれているワッペンを取り出しフローラにプレゼントした。  
「これ前に人から貰った物だけど、僕と出会った事を忘れないで欲しいから、フローラにあげるね！」

「え！こんな綺麗な物貰っていいの？」

「うん！フローラは笑顔の方が可愛いから！もし悲しい事があったらそれを見て僕の事思い出してね」

「うん！ありがとう！私も何か記念にあげたいけど…何を渡せばいいか…」

別に物々交換をしたかった訳では無いのだが…将来再会した時用に渡したただけなんだけどね。

よし！ここは別れ際のギャグで取り纏めよう。

「じゃあさ…フローラのパンツ頂戴！さっき船に乗り込む時に見えちゃったんだけど、すごく可愛かったから、アレが欲しいな」

顔を真っ赤にしながらスカートを押さえている。

さ！これで更に印象を強める事に成功したし、あまり父さんを待たせる訳にはいかないのでお暇しよう。

「わかったわ！ちよつとこつちを見ないでね！」

え！？なんつった今！？

どうやら気配からすると、俺の背後でパンツを脱いでいるらしい！え？なに？あり得ないから！？どうしても物々交換じゃないといけない子なの？

「はい、どうぞ…」

恥ずかしそうに俯きながら俺にパンツを手渡す。

そして笑顔で俺に「また逢えるといいね」と言い残し、上の階へ上がっていった。

俺は軽いパニック状態の中、再度父に呼ばれ船室を後にする。

そして気付く。

パンツを手にしたまま父の元に赴くのはヤバイよね！

慌ててバックの中にパンツをしまい、混乱冷めやらぬ中船を降りた。

## 2・7 転び8 起きって言うけど、7 回転んだら7 回しか起き上がれない

<ビスタ港近隣の森>

俺は今、3匹の魔物に囲まれている！

魔物と言ってもスライムだ！

こう言うてはなんだが俺は同年代の子に比べるとかなり強い！

父さんと旅をしてきた事もあるが、何より父さんに戦闘訓練を解かされているのだ！

剣術も基本的な部分ならほぼ問題ないし、魔法も使える！

『バギ』という風を操る攻撃魔法だ！

父さんが言うには俺のバギは一般のバギより威力が高いそうだ。

本当かどうかは定かではない。

ちよつとは親馬鹿が入っているかもしれないけどね。

等と考え事をしていたら、後ろからスライムにど突かれ前のめりに転んだ！

ハッキリ言おう！戦闘訓練をしていようが、魔法を使えようが痛い物は痛い。

痛いのは嫌いです！

これ以上ど突かれては堪らないので、素早く起きあがりスライムに手を翳し魔法を唱える！

「バギ！」

2匹のスライムに風が巻き起こり、真空の刃が切り刻む。

俺の事をど突いたスライムは離れた所にいた為か魔法の影響を受けず再度、俺に襲いかかってきた！

しかし俺はスライムの攻撃を危なげなくかわすと、持っていたひのきの棒で力一杯攻撃をする。

勝負は着いた。

力尽きたスライムが泡状に消え去り、後にはゴールドが現れる。

これがこの世界の通貨だ。

仕組みはよく分からんが、こうやってお金を稼ぐ事が出来る。

俺はゴールドを拾い集めていると背後から父が現れた。

「リュカよ、見事だったぞ！まあ、スライム程度なら楽勝だな！」  
どうやら初めから見えていたらしく、もし危険になれば助けるつもりだった様だ。

「しかし、楽勝だと思っても油断は禁物だぞ！一撃貰ってしまった様だな！」

そう言う俺の服に付いた泥を叩き落としながら魔法を唱えた。

「ホイミ」

暖かい光が俺を包み、戦闘で受けた傷を癒す。

「ありがとうお父さん！ちよっと考え事をしてたから失敗しちゃった！」

「ん？考え事？さつき出会った女の子の事かな？可愛い子だったな！リュカはああいう子が好きなのかな？」

俺は流石に赤くなり俯いてしまった。

フローラ自身の事よりフローラのパンツの事の方が気になってしかたない！

父さんは俺の反応を年頃の男の子の反応と勘違いしたらしく、嬉しそうにサンタローズへの帰路を促してきた。

<サンタローズ>

日が傾き影が主の身長を超える頃、俺たちはサンタローズの村に帰り着く事が出来た。

きっと父一人なら、もっと日が高い内に到着したのだろうが俺に合わせた為はかなり時間がかかってしまった。

もっと努力をせねばと少々の自己嫌悪に浸っている中『パパス凱旋』の報は村中に広がり、村人達の殆どが父の元に群がり「お帰りなさ

い」「待っていたよ」等と、皆に歓迎されていた。  
100人もいないであろうこの村の村長的な父は、皆に尊敬されているのだ。

そんな人集りの中、俺はこの村で最も会いたかった人物を捜し出し声をかけて近づき飛びついた！

「フレアおねーちゃん！」

「わーい！リユウ君とパパスさんが帰ってきたー！」

この人はフレアさんといい、この村の教会でシスターをしている。年の頃なら15・6歳くらい、少し垂れ目気味だがかなり可愛いおねーさん。

何より、そのナイスバディが堪らない！

今回の旅に出る前に一緒に風呂に入った事があるのだが、その時点でかなりの物だったが2年たってグレードがアップしたね！

2年前まではZガンダムだったけど、今やZZガンダムにまで育っちゃてる！

俺は、そんなたわわに実ったオツパイに子供の特権とばかりに顔を埋めしきりに「ずっと会いたかった」アピールをし母性本能くすぐり攻撃をかます。

「おいおい！もうこの辺で今日はいいだろ？もうすぐ日も暮れる。つもる話はまた後日しよう」

そう言い俺を抱きかかえ家の方へと歩いて行く。

ああ！俺のオツパイ…（お前のじゃありません！）

<サンタローズ・パパス宅>

家に入ると早々に、

「坊ちゃん、旦那様、お帰りなさいませ！」

と、叫びながら恰幅の良い男性に抱きつかれた！

「サンチヨ…苦しいよお。」

いやマジ！ヤメテ下さい。

フレアさんの余韻が消え去るから！

マジ勘弁して下さい！

この人はサンチヨ。この家の家事全般を一手に引き受ける、無くてはならない頼れる味方。

それがサンチヨです。

「おじさま、リュカ、お帰りなさい！」

振り返ると、そこには豪華な金髪を左右対象にお下げにした、活発そうな可愛い女の子が笑顔で立っていた。

「？この子「ビアンカ！」は……」

俺はサンチヨのハグから逃れ、ビアンカに抱きついた！

「あら！私の事を覚えていてくれたの？嬉しいわ！」

この子は隣の町（隣町と言っても大人の足で半日はかかる）アルカパに住む幼なじみのビアンカ。

「大好きなビアンカの事を忘れる訳無いじゃないかあ！」

ビアンカは頬を染め、嬉しそうに俺の頭を撫でる。

その後ろからビアンカのお母さんのアマダさんが近づいて来た。

「久しぶりだねえ！パパス。私たちも良いタイミングで、サンタロズへ来たもんだねえ！」

「そうか、アマダの子のビアンカちゃんか……しばらく見ぬ間に可愛くなったので判らなかつたぞ！」

ビアンカは更に顔を赤くして嬉しそうに微笑んでいる。

俺が最初に目を付けたのがビアンカだ！

彼女は将来確実に美人になる！

これは間違いない！

だから、今の内から俺好みになる様に誘導していつている。

俺より2歳年上の為か、俺に対してお姉さんぶる所がある。

それを上手く利用して可愛い弟を演じ、時折男として頼れる所を醸し出す。

そうする事で将来『姉御肌的だが二人きりの時は俺に甘える』そんな

な美女が完成するはずだ！

これで俺の『キャツキャ！ウフフ！』な、バラ色人生が造られていくのだ！

やべー！テンション上がったよー！

「ところでアマンダ。何故サンタローズに訪れているんだ？」

「いやねえ…内の旦那が風邪を拗らしてねえ…ここの薬師に薬の調合を依頼しているんだよ！」

「ねえ！大人のお話って長いから、2階に行きましょう！」

そう言つとビアンカは、有無を言わず俺を2階へ引つ張つていった。

「ご本を読んであげる！」

本棚から適当に引つ張り出してきた本を開くと俺にお姉さんぶりをアピールしてきた。

いや、別にいいんですよ！

お姉さんアピールがイヤなわけではないんですよ！

ビアンカは可愛いし眺めているだけで楽しいし。

ただ、長旅で疲れているので振り回さないで欲しいなあ…なんて、ちよつと思つただけ！

「…ああ！もう！この本難しい字が多くて読めない！」

と、勝手に引つ張り出した本に悪態を吐いていると、1階からアマンダさんの声が聞こえてきた。

「ビアンカ！そろそろ宿屋へ帰るわよー」

「はいー！」

元気よく答えると颯爽と階段を下りていった。

勝手に引つ張り出した本を俺の目の前に残し…かなり分厚い本を俺の前に残し…ビアンカは我が家を後にした。

疲れた体に鞭を打ち、分厚く重い本を両手で抱え本棚に戻す俺。

俺、結構綺麗好き。

とは言え、子供の身体には1日中歩き詰め+戦闘数回は堪えたらし

く、そのままベッドに入って泥の様に眠ってしまった。

### 3・歌に国境は無い！でも周囲の雰囲気に合わせて歌う事！

<サンタローズ・パパス宅>

その日は朝から元気モリモリ！

長旅の疲れも一晩の熟睡で綺麗さっぱり吹き飛ばし朝食を大人二人前くらい食べてると、サンチヨに「坊ちゃんはよく食べますねえ！」って、呆れ褒められました。

『食べる時に食つとかないとね！』（by武蔵っぽい人）ってのが俺の信条です。

朝食が終わると俺は一旦2階上がりバツクの中から幾つかアイテムを取りだし、小さなウエストポーチに入れ替える。

そして家を後にし丘の上にある教会へ脇目もふれずダッシュする。

<サンタローズの教会>

フレアSIDE

昨日パパスさんが帰ってきた！

2年ぶりに帰ってきたパパスさんは、やっぱり格好いい！

一緒に付いていったリユー君も私に懐いてくれて、すごく可愛い！そのリユー君が朝から私の元にやって来た。

「フレアおねーちゃん！」

「あああら、朝からリユー君は元気ね」

私の胸に顔を埋め頻りに甘える。

やはり母親が恋しいのだろう。

私はパパスさんさえ良ければ、本当にリユー君の母親になりたいのに……

そんな事を考えているとリユー君は私から離れ腰に下げたポーチか

ら、白く綺麗な巻き貝の殻に穴を開け紐を通したネックレスを私に差し出した。

「あのね、凄く綺麗な貝殻を見つけたからね、フレアおねーちゃんにあげようと思って持って帰ってきたの！」

そう言っていると私の手に貝殻のネックレスを渡した。

どうしよ！この子凄く可愛い！

私は思わずリユー君を抱きしめた。

この後もリユー君は旅先で遭遇した色々な事を楽しそうに話してくれたが、私は教会でのお勤めがある為、

「ごめんねリユー君。もつとお話聞きたいけど、私お仕事があるから……」

リユー君は少し寂しそうに俯くと、笑顔で顔を上げ、

「じゃあ、また明日来るから！バイバイ！おねーちゃん！」

そう言い残り教会を出て行った。

どうしよ！可愛すぎるあの子！

それにパパスさんの子！将来絶対格好良くなるに違いないわ！

パパスさんがダメでもあの子なら……等と、不埒な考えをする私をどうか神様お許し下さい。

フレアSIDE END

<サンタローズ>

いやあ、今日もいい乳してたなあ！

結構ポイント稼いだよね！俺！

どうする！どうするう！このまま行くといい感じで行っちゃっよお！  
シスターったらアレだろ。

神様に全てを捧げるんだよな！

っーことは処女だろ！処女！だって神様手出さないだろ？もー』

ちそうさまー』て感じ？

等と、俺が教会横でヘラヘラくねくねしていると、丘の下にある一軒の民家の裏庭から父さんが出てきた。

父さんは裏庭の横を流れる川に留めてあるイガダに乗ると、川を上り洞窟へ入っていった。

「？」

何だろ？何か『調べ物があるうー』（そんな言い方してねえーよ！）とか言ってたけど、何で洞窟に入るんだ？

は！まさかあの中に愛人でも困ってるんじゃない？

イヤイヤイヤ、無い無い無い！それじゃあ困うどころか、監禁だろ！大方子供（俺の事）の教育に良くない、えっちい物とかを保管してあるのかもね。

父さんも男だしね！しょうがないよね！

くだらない事を考えつつ、俺は次のターゲットへ向けて進路を取った。

<サンタローズ宿屋>

ピアノカSIDE

はあ〜…暇ねえ〜…

リュカの所にも行くのかしら？

でも、長旅から帰ってきたばかりで疲れていると悪いしなあ…パパスおじさまも忙しそうで、私の相手なんてしてくれないだろうし…等と、今日の予定を真剣に考えているとリュカが礼儀正しくノックをして入ってきた。

「おはようございます。アマンダさん。ピアノカ」

「おや？おはよう。どうしたんだい？こんな朝早くから？ピアノカに何か用かい？」

リュカは笑顔で頷くと私の所に近寄ってきた。

この子は可愛い！

そして素直でいい子だ！

他の男の子は、私がおママゴトをやるうとするといやがるが、リュカはイヤがらず私と遊ぶ。

時折大人びた行動を取ったりもするが、そこがまた可愛い！

「あのね。ビアンカにお土産があっただけ、昨日渡すの忘れちゃって…だから今日持ってきたの！」

そう言う私に小さな石を手渡した。

「？これがお土産？」

「うん！」

その石は私の手の平にも収まる大きさで、黒く光沢を帯びている。

まあ、綺麗と言えば綺麗だけど…これがお土産？

やっぱり子供なのかしらねえ。

「その石ね、不思議な石なんだよ！」

リュカは私の考えを読んだかの様に説明を始めた。

「明るい所だとただの石だけど、暗い所で見ると光るんだよ！」

えっ！？そんな石があるの？

私は両手で石を包み光を遮って両手の中を覗く。

私の両手の中から青白い光が見える。

「綺麗…」

私は思わずため息混じりに呟いた。

「わざわざありがとうリュカ。ほら、ビアンカもお礼を言いなさい。」

「

「うん！ありがとうリュカ！とってもステキ！」

私はこの石を気に入ってしまった。

さっきまでただの石ころと思っていたのに…リュカは私の事をよく分かっている。

「ねえ、ビアンカは何時アルカパに帰っちゃうの？また明日も遊ぶ？」

「本当はあまり長居してられないんだけどねえ…薬師が洞窟に薬草

を探りに行ったきり帰ってこなくてねえ… 私たちも薬がないと帰る訳にいかないから…」

「薬？」

「私のお父さん病気のな」

「だから薬師に調査を依頼したんだけどねえ… 本当はパパスにでも探しに行つて貰いたいんだけど、パパスも忙しいだろ… どうしたものかねえ？」

リュカは少し寂しそうに俯き、何か考えている。そして顔を上げると、

「じゃあ僕が探してくる！」

そう言うと、制止する間も無く走り去っていった。

「洞窟内はモンスターも出るから子供一人じゃ無理だよ… まあ、洞窟に入る前に番をしている人に止められるだろう」

「リュカ… 無茶しないといいね。お母さん」

ピアンカSIDE END

<サンタローズの洞窟>

俺は洞窟内を大声で熱唱しながら闊歩する！

何故俺はこんな危険な事をするのか皆疑問だろう。

だが、俺には完璧なプランがある！

重要なのは『俺が一人で洞窟内へ探しに行った』という、事実である。

薬師を見つけられなくても別に構わない。

ピアンカに『私たちの為に勇気ある！ 男らしい所もあるのね？』てな具合にポイント稼ぎを行いたいだけなのだ！

モンスターに襲われる事が考慮されてないって!?

誰だい?そんな野暮な事言う奴は!(全部俺の脳内会議です)

皆さんお忘れかもしれませんが、先刻パパスがこの洞窟に入ってきた。

大方、昨日アマンダさんの話を聞いて、気を利かせて薬師を探しに来たのだろう。

さすが俺の父さん!気が利くね!

つまり、今は一人だがいざれ父さんと合流できるのだ!

しかも既に薬師と合流した後に出くわすかもしれないね!

そんな訳で俺は、父さんに存在をアピールするべく大声で熱唱しながら洞窟内を進む。

普通洞窟内で歌が聞こえたら、そちらに来るだろう。

俺は『巨人の星』のテーマを大声で歌う。

ちなみに俺はあまり場の雰囲気を感じしないで選曲する。

以前友人の結婚式の二次会で『テントウ虫のサンバ』を歌おうと思つたら先超された!

次に思いついた歌が『サン・トワ・マ・ミー』だった。

ブーイングの嵐だったが、気持ちよく歌いきった俺は大満足だった。ただ父さんに気付いて貰うという事はモンスターのも気付かれるという事で、しきりなしに襲撃される。

気付いたら『ホイミ』を唱えられる様になっていた。

ど田舎の洞窟内で『大都会』を熱唱していると、どこからともなく唸り声の様なものが聞こえてきた。

「ぐぐぐ、ぐぐぐ」

流石に身構えて周囲を索敵をすると、かなり大きい岩の下敷き(足だけ)になりながら爆睡をしているおっさんを発見!

え!?!何この状況?何で寝れるの?つか、何してるの?

よく見ると薬師のクライバーさんだ。

「ちょ！クライバーさん！クライバーさん！」

「…お！イカンイカン！誰も助けんこんから眠ってしまった！」

おい！普通ねえーだろ！

「おや！リュカじゃないか！こんな所で何してるんだい？」

そりゃ俺の台詞だ！

「クライバーさんが帰ってこないからビアンカが困っているんだ。だから探しに来たんだ！」

「いや〜そうかそうか！急にな岩が落ちてきて足が挟まってしまったのだよ！もう少しで動かせそうなのだが、リュカちよつと手伝ってくれ！」

俺は言われたとおり横から岩を押す。

隙間が少し出来足を抜く事に成功した。

「ホイミ」

俺は挟まれていた足にホイミをかけて傷を癒す。

「リュカは凄いな！ホイミなんて使えるのか！」

そう言う俺の頭を撫でながら、

「でもな、子供一人で洞窟のこんな奥まで来ちゃダメだぞ！助けて貰ってこんな事言うのもなんだが」

「ごめんなさい…でもビアンカの悲しそうな顔、見たくなかったから…」

「そうか…じゃあしようがないな…そうだ薬を調合しなければ！こっしちやおれん！」

クライバーさんは、そう言い残し疾風のように立ち去っていった！

おいおい！子供が一人でこんな所にいちゃいけないんじゃないかねえーのかよ！

おいてくなよ子供を！

あれ？そう言えば父さんは？

そんな広い洞窟じゃ無いんだけどなあ？



3 歌に国境は無い！でも周囲の雰囲気に合わせて歌う事！（後書き）

どうも、あちやです。

皆さん、歌に関しては言いたい事も有りでしょうが、大目に見て下さい。

#### 4・物を貰った時は、いらぬ物でも笑顔で貰う。それが処世術。

<サンタローズ>

洞窟から出てくると俺がクライバーさんを助けた話は、既に広まっていた。

田舎って噂の広まりが早いよね。

噂してねえーで仕事しろ！

教会の前を通り過ぎようとすると中からフレアさんが心配そうな顔で出てきて俺を抱き上げた。

「リユー君一人で洞窟に入ったの？ダメよ、何かあったら私悲しいわ」

「ごめんなさい」

そう言いつつ俺は胸に顔を埋め感触を堪能した。

ひじょーに名残惜しかったが、フレアさんと別れ教会の裏手にあるクライバーさんのアトリエを訪れた。

クライバーさんは職人の顔で薬の調合をしていたが、俺の存在に気付くと手を止めることなく俺に話しかけてきた。

「おお！リユカか！さっきは世話になったな。お礼をしたいのだが、ちよつと手が離せない。わしの後ろにあるダンスの中い物がある。それを持って行きなさい」

ダンスの中？

おっさんのパンツじゃ無いだろうな？

いらねえーぞ！さすがに！

そう思いつつダンスを漁ると、中に女の子用の『手織りのケープ』が入っていた。

おいおい…確かに女顔だけどこれはちよつと…こんな着た日にゃ、そつちの道に目覚めちゃうかもしれないだろ！

カマッ娘クラブ？1目指しちゃうかもしれないだろ！

「すまん！そんな物しか無くて」  
「ありがとうございます。大切にします」  
そう笑顔で答えてアトリエを後にした。  
物に罪は無い。

<サンタローズ・パパス宅>

帰宅すると、そこには仁王立ちの父とサンチヨ。

心配顔のアマンダがいた。

少し離れた所に不安顔のビアンカもいる。

どうやらお説教タイムだ！解ってます。

解ってますよ！この状況も俺のプランには織り込み済みだ！

「リュカ。一人で洞窟に入るなんて危ないだろ！」

「そうです坊ちゃん！お怪我でもされたら。このサンチヨ心配で心

配で！」

来た！

ビアンカもいる！

俺にとつては説教タイムじゃ無い！ポイントアップタイムだ！

「ごめんなさい。お父さん。サンチヨ。でもビアンカが悲しい顔し

てたから……」

瞳を潤ませ皆の目をまっすぐ見詰めながら俺は語る。

「ビアンカにお土産渡して喜んでくれたのに、悲しい顔になっちゃ

たから……」

みんな驚きながら俺とビアンカを交互に見る。

ビアンカは少し顔を赤く染め、嬉しそうに俺に微笑む。

も、完璧だね！これ。

これで俺の『ヤルときゃヤル男』アピール大成功だね。

これで将来、ヤルときゃヤル男だからやらせる的な事もOKっぽくねえ？

「ん、うん…そうか…まあ、無事だったのだから今回は良しとするか」

「そうだねえ、パパス。あまりリュカを叱らないでくれ  
よし！大成功！

自分の強かさがちよつと怖い。

「リュカ。私の為にありがとう」

そう言うとビアンカに抱きつかれた。

フレアさんと比べると、そういう出っ張りが無いけど、やっぱり女の子！柔らかくていい！それにいい匂いがする。

俺がロリコンだったら理性が飛んでるね。セーフ、セーフ！

「あのね…薬師のクライバーさんが、お礼に僕にくれたんだけど、ビアンカにあげる。これ可愛いからビアンカに似合うと思うんだ！」

そう言つて手織りのケープを手渡した。

更なるポイントアップ実行中。

「リュカ！ありがとう！」

そう言つて俺の頬にキスをして「じゃ、今日はこの辺で」と言うアマンダさんと一緒に宿屋に帰つていった。

頬じゃなくて口がよかつたなあ…

・  
・  
・

翌朝、俺は目を覚ます。

いやー昨日の晩は、結構な騒ぎだった。と言つても叱られた訳ではない。

6歳の子供が一人で探検に出かけ、女の子の為にミッションをこなした事への歡喜の騒動だ。

「いやー、流石は私の息子！もはや立派なナイトだ！」

「私もお仕えして鼻が高いです！」

等々…

結構な親馬鹿ぶりだ！

サンチヨはそうでもないが、父さんはツンデレ感がある。ツンデレと言っても勘違いしないで欲しい。父さんのツンは、人前だと威厳のある父親を演じ、いなくなると息子ラブリーでデレる。俺の前だけでも威厳を保とうとする時があるから、すこしこそばゆい。

着替えをし1階へ降りると、朝食の用意と共にアマンダさんとピアンカがいる。

昨日あげた手織りのケープを着ていた。

「ピアンカ可愛い」

そう言っていると顔を真っ赤にして喜んでくれた。

「リュカ、どうやら今朝葉が届いた様で、ピアンカ達は今日アルカパへ帰るそうだ」

5人で朝食を食べながら父さんが教えてくれた。

「え！帰っちゃうの？寂しくなるなあ…」

「そうだな。そこで女の二人旅は危険だからアルカパまで送ろうかと思うのだが、リュカは一緒に来るか？」

キターー！

更なるポイントアップの予感、大！

この道中で格好良くモンスターを倒し、か弱い婦女子を守るナイトアピールをすれば、そう遠くない未来にピアンカの方から『私の洞窟も探検して？』なーんつつて！

なにになに？ドラクエ5って、こんなにハッピーライフなゲームなの？も、最高ーッスよ！

「で、どうするリュカ？」

おっと！いかん！

妄想全開過ぎて答えるの忘れてた。

「うん！もちろん一緒に行くう！あ、でもその前に教会へ行きたいからちょっと待ってて！」

「お前は偉いな。毎日教会へ行つて。信仰深いな」

俺は素早く朝食を終えると教会へ向かった。  
信仰深い？それは違うな！

俺は神様を信じていない。  
もちろん口に出しては言わないが…俺はオツパイ教の信者だ。  
そこに俺にとってのご神体があるから足繁く通うのだ！

<サンタローズの教会>

「フレアおねーちゃん！」

「あら、リニュー君！今日もいらっしやい」

俺はフレアさんに抱きつき、その胸に顔を埋め頬ずりをする。  
相変わらずでけーなあー！

いったい何が入っているんだろう？

きつと希望が一杯詰まっているに違いない。だから揉みすぎると欲望に変わり男を惑わす！

お！うまい事言ったな、俺！

「あのね、僕これからビアンカ達をアルカパまで送って行かなきゃいけないの。だからごめんね。本当はもっとお話をしたかったんだけどもう行かなきゃ」

本当名残惜しいツス。オツパイ…

「そうなの残念。じゃあこれ、昨日のお土産のお礼よ」

そう言つと飴玉を数個俺のポーチに入れてくれた。

飴玉よりオツパイしゃぶりしたいなあ…

「ありがとうおねーちゃん！」

俺は笑顔でそう言い、再度胸に顔を埋め頬ずりをして教会を後にした。

早くビアンカのもあのくらい育ってくれないかなあ…育つかない？



5・失敗は成功の元。でも、成功は慢心の元。常に気を引き締めて行こーて事。

<サンタローズ〜アルカパ街道>

ビアンカSIDE

「バギ」

リユカは6歳とは思えないほど強い。

一人で洞窟を探検するのも領ける！

出発前、パパスおじさまがリユカに、銅の剣を買ってあげていた。

「一端の戦士がひのきの棒では、まずいだろ！」と、言って銅の剣を渡していた。

事実リユカは剣を使いこなしモンスターを駆逐する。

剣技だけじゃ無い！魔法の実力も桁違いだ！

私も『メラ』を使う事が出来るが、モンスターに火傷を負わせる程度…とても一撃で倒す事など出来ない。

2・3匹のグリーンワームをまとめて細切れにする事など、私には無理だ！

私がリユカに見とれていると、背後から1匹の一角ウサギが襲いかかって来た！

「きゃー！ー！」

ビアンカSIDE END

<サンタローズ〜アルカパ街道>

「きゃー！ー！」

ビアンカの悲鳴が聞こえる！

振り返ると1匹の一角ウサギがビアンカに向けて突進している。

ビアンカ達は少し離れた所に避難していた為、俺も父さんも間に合わない！

それでも助けなきゃ！そう思った瞬間俺は『バギ』の詠唱に入っていた！

いいのか？このまま唱えたらビアンカも巻き込むぞ！

ビアンカを傷つける訳にはいかない！

どるする！どうすればいい？……………よし！試してみるか！

「バギ」

俺は頭の中でバギのイメージを少し変えて唱えた。

一角ウサギに向けて風の固まりがぶつかる！

10メートルほど弾き飛び一角ウサギは慌てて逃げた。

そう、俺は『バギ』を一点集中に切り替えて、真空の刃を発生させない様に改造した。

「ビアンカー！大丈夫！！」

俺はビアンカに近づき、怪我がないかを確認するフリをしてビアンカの体中を触りまくった。

うん。やっぱりまだ胸は小さい。

「ホイミ」

不埒な事を考えつつ、俺は取って付けた様にホイミを唱えた。

「ありがとう、リュカ！私は大丈夫よ！それに私だって、戦えるのよ！もう少し近づいたら私のメラをお見舞してやったんだから！」

どうあっても、お姉さんぶりたいらしい。

まあ、いいけどね。

父さんとアマンダさんに褒められながら、俺たちは先を急ぐ事にした。

<サンタローズ〜アルカパ街道>  
ビアンカSIDE

格好いい…どうしよう、リュカの事が格好良く見える。  
可愛いじゃ無くて、格好いい…いや、可愛くて格好いい。  
私リュカの事が好きになっちゃった。

以前はパパスおじさまの事が格好良くて好きだったけど、リュカの事の方が全然好き！

だって、私を助ける為に魔法を改造しちゃうなんてすごい！

「でも、さっきの魔法はすごかったね！どうやったら、あんな魔法使えるの？」

「うん。バギを唱えようとしたんだけどピアノカに近すぎて、ピアノカに怪我させない様に、傷つけない様に思っ放したら、風だけのバギが出来た！」

「じゃあ、偶然出来ただけでもう出来そうにないの？」

「ううん！もう覚えたから、出来ると思うよ」

「じゃあ、もう一回見せて。お願い」

私は、リュカに抱きつきながら甘えた風をお願いをする。  
別にそれほど魔法を見たい訳ではなく、リュカとイチャイチャしたいだけなのだ。

私ってばエツチな娘なのかしら？

「うん！じゃあちよつと離れてて！」

そう言うと側にある綿帽子のタンポポに向けて手を翳した。

「バギ」

綿帽子のタンポポは茎や葉を切り刻まれる事無く、種子だけを舞い上がらせた。

そして私のスカートも一緒に舞い上がった！

「きゃー！」

「あ！ごめん」

「もう！ちよつと、何してんの！リュカのエツチ！」

私は慌ててスカートを押さえその場にへたり込む。

「えへ。ごめんねピアノカ。でもウサちゃんのパンツ可愛いよ」

「し、しっかり見てんじゃないわよ！もう！馬鹿！」

私は慌ててお母さんの元に駆け寄りアルカパへの道を急いだ。  
どうしよう！リュカに見られちゃった！  
もう、責任取って貰うしか無いわよね？そうよね？ね！ね！？

ピアンカSIDE END

<アルカパ・ダンカンの宿屋>

やっべー、調子にのりすぎて失敗したあー。  
スカートめくってしまった事は仕方がない！不可抗力だ！  
でも、わざわざパンツ見えた事を報告する必要は無かったな！  
いや、だってさあ！

急にベタベタしてきたしさあ！  
なんかすごく甘えた声出してたしさあ！  
なんかもあ、ベタ惚れ感あつたしさあ！  
ここで魔法成功させたら、『ちよつと向こうの物陰で男と女のラブ  
ゲーム』的に思っちゃつてさあ！  
でも、嫌われた訳ではなさそうだ。  
話しかけても答えてくれる。

ただ、視線は合わせず顔を赤くしたまま。  
きつと、恥ずかしいだけなんだよ。  
だから、どうしていいのかわからないんだ！

これはある意味チャンスだね！

「リュカ。私はもう少しダンカンを見舞っているから、アルカパの  
町でも散歩して来なさい」

俺が脳内でこのチャンスの活用法を模索していると、父さんから外  
出の許可を貰えた。

渡りに船とはこの事だ！おれは、町へ出かけようとしたがその前に…  
「ダンカンおじさん」

「おお、リュカか。うつるといけなから離れていなさい」

「うん…この飴あげる。喉の痛みが少しでも良くなると思うから…」

「ありがとう。優しいなあリュカは」

「早く良くなってピアノカを喜ばしてあげてね！じゃあお父さん！  
行ってきます！」

そう言つてその場を後にする。背後から俺を褒めちぎる大人達の声が聞こえる。

『将を射んと欲すれば先ず馬を』つてやつ！

将来ダンカンさんに『お前の様な男に娘はやらん』なんつわれない様に今の内に、気の利く良い子を演じておく。

まあ、ぶつちやけ『娘はいらんから、娘の身体だけくれ』てのが本音なんだけどね。

この本音を口に出しちゃ絶対ダメ！

地雷どころか核ミサイルのスイツチだからね。

「リュカ、お出かけするの？私が町を案内してあげるね！」

そう言つと俺の手を取り町へ出て行つた。

あれ？チャンスタイム終了？なんもしてないけど、パンツ見た事許してくれたい。

<アルカパ>

ピアノカSIDE

パンツを見られた事は恥ずかしかつたけど、やっぱり私はリュカの事が大好きだ。

いつも歩いている町並みなのに、リュカと手を繋いで歩いていると、すごく楽しい気分になる。

大好きな人と手を繋いでいるだけなのに！

酒場の前を通りすぎると、準備をしているバニーガールのおねーさんを見てリュカの足が止まった。

リュカはバニーガールのおねーさんをジッと見ている。  
特に胸を！確かに大きい！

そんなリュカに気付いたおねーさんが、リュカの前で屈み「デート中に他の女の子を見てちゃダメよ。」と言われているが、リュカの視線は胸から離れない。

私はリュカの手を引き、強引にその場を立ち去った。

やっぱりリュカは胸が大きい方が好きなのかしら？

どうやったら大きくなるのかしら？

私も頑張らないと…

私は密かに志を立て、闘志を燃やした！

道具屋の前に差し掛かりショーウィンドウを見ると、そこに可愛いヘアバンドが飾ってある。

いいなあ…あのヘアバンド…150Gかあ…私のお小遣いじゃ足りないなあ…

「可愛いヘアバンドだね。ビアンカ欲しいの？」

「うん…でも、お小遣いが…」

「おねーさん！ヘアバンドください！」

私がお金が無い事を言い終わる前に、リュカは店員さんに購入を告げている。

「ちょ、「あら、坊や。彼女へのプレゼントかな？」

「うん！すごく可愛いヘアバンドだから、可愛いビアンカに似合う

と思ってる！」

「じゃあ、おまけしちゃおうかな。140Gでいいわよ」

「ありがとう。じゃあこれ、140G」

リュカは私よりお金を持っていた！

きつとモンスターを沢山倒しているからだと思う。

男の子と手を繋いで町を散歩し、ヘアバンドを買って貰う。

これって完璧、恋人同士のデートよね！

やだ！どうしよう！

もう、嬉しいやら、恥ずかしいやらで軽いパニック状態だ。

リュカと手を繋ぎニタニタ笑いながら歩いていくと、大きな池に出た。

リュカは池の中央の小島を見ると、いきなりそこに向けて走り出した。

私は置いて行かれない様に慌てて付いていった。

それにしてもリュカの足は、あまりにも速い。正直もつと長い距離だったら見失っていただろう。

「ハアちよつと、リュカ！ハア急に、ハアどうしたの？」

リュカは私の問い掛けには答えなかった。

「その猫さんに何してるの？猫さん嫌がってるよ！放してあげて！いつも優しい口調のリュカが、少しきつめの口調で話す。

よく見るとそこには、この町の悪ガキ二人組ジャイーとスネイが1匹のちよつと変わった猫を苛めている。

「何だよ！お前には関係ないだろ！チビ！」

「そうだ、チビ！あ、ビアンカも一緒にこの猫で遊ばないか？」

「この猫、すっげー変な鳴き方するから面白いんだぜ！」

「そんなひどい事しないわよ！弱い物いじめじゃない！格好悪い！」

「な、なんだよ！そのチビは、格好いいってゆうのかよ！」

「そうだ！そうだ！じゃあ、格好いいおチビちゃんは、レヌール城のお化けを退治してこいよ！そうしたら猫を放してやるよ！」

レヌール城のお化け…

私はそれを聞いて、引きつってしまった…前にお父さんからレヌール城のお化けの話を聞いて、怖くて夜眠れなくなってしまった事がある。

今尚、誰も居なくなったレヌール城からすすり泣く声が聞こえるぞうだ。

そんな城がアルカパより少し北に行った所にある。

「いいよ！今夜レヌール城に行ってお化けを退治してくる！」

「……え!?」

私も悪ガキ二人も驚いている。

この中で一番年下のリュカが、お化け退治と聞いて承諾するとは思っていなかった。

きつと二人は無理難題をふっかけたつもりなのだ。

「そのかわり、その間猫さんを苛めないって、約束してよ」

「おう! いいよ! 一晩だけ苛めないでいてやる!」

「約束だよ。もし、破ったら…バギ!」

3メートルほど離れた所にある、大きな木にリュカは風だけのバギを唱えた。

木は大きく揺れて葉を大量に散らす。

「…破ったら、ひどいよ」

そう、冷たい口調で言い捨てて踵を返した。

悪ガキ二人は、顔から血の気が失せて固まっている。

どうやら、怒らす相手を間違えた様だ。

リュカつてば、怒ると結構怖い。

でも、やっぱり優しい。

猫さんの為にレヌール城へお化け退治に行くなんて…リュカは、お化け怖くないのかなあ?

私は…怖いなあ…お化け…

ビアンカSIDE END

6・吊り橋効果は有効だ。だからこそ誠心誠意紳士的な態度で取り組もう。

<アルカパ・ダンカンの宿屋>

ガキ相手に大人気無かったかな？

軽くブチ切れちゃったもんな…でも、動物好きなんだよ俺。

以前付き合っていた彼女が猫飼っていたよ。

彼女の部屋に行く度に猫と戯れていたよ。

全然彼女の事ほっといてね！

そしたら、ふられた！

なんだよ！

俺、動物好きの良い奴じゃん！

やっぱり男は顔か？

顔が良ければ、放置プレイもバツチ来いなのか？

あ！いけね！

そう言えばさつきもビアンカとデート中だった！

さつきから少し沈み気味のビアンカを見てフォローを入れる事にす

る。

「ごめんねビアンカ。せっかくのデート中だったのに…」

ビアンカはデートと言う言葉を聞いて顔を赤らめた。

あれ？

俺はデートのつもりだったが、ビアンカは違ったか？

うーん…ここはあまりフォローを入れない方がいいだろ。

やりすぎると、せっかくさつき買ったヘアバンドを『こんな物いら

ない！』とか言われて、叩き返されかねない。

「ねえ…リユカはお化け…怖くないの？」

ああ！お化けの事が怖くて沈んでいたのか。

俺はてつきり『私と猫。どっちが好きなの！』って、懐かしい台詞

を聞く事になると思った。

何て答えるのがベストだろうか？

ビアンカは姉御肌気味だからな…あんまり『俺、最強』的を押し出さない方がいいな。

「うん、ちよつと怖いけど…あの猫さん助けたいから！」

もう『キュン！』とか聞こえてきそうな表情だった。

瞳を潤ませ、両手を胸で握り締め俺を見ている。

「リュカ。待たせたな！ダンカンが薬が効いてきたのが良くなりつつある。あまり遅くなるとサンチョが心配する。帰るとするか」

おおつと！ここで帰る訳にはいかない！何とか駄々をこねて、一晩滞在を促さないと…

「お父さ、何言ってるんだい！ここまで世話になって、このまま帰す訳にはいかないよ！せめて、今晚だけは泊まっていきなよ！今からじゃサンタローズに着くのは真夜中になるよ！」

「うむ…そうだな。今晚だけご厄介になるか！」

ナイス！アマンダさん！

「厄介なもんかい！何だったらずーといってくれてもいいんだ！リュカなんかうちの息子にしたいぐらいだよ！」

「やだ！お母さん…」

そう言つとビアンカはアマンダさんの後ろに隠れて、恥ずかしそうに俯く。

「ビアンカ…その新しいヘアバンドだって、リュカに買って貰ったんだろ？もう、何かお返しをしたら、ビアンカお前自身を貰ってもらうしかないだろ」

おいおい！たかが140Gで娘の人生縛るなよ！

俺としては、7・8年後ビアンカとシッポリ出来れば、それでいいから。

何もかも豪快なアマンダさんの料理は、やはり豪快で非常に美味しく大満足な状態で深夜を迎えた…

よし！父さんは熟睡しているな！

剣も持ったし、道具も準備した！

明け方までには戻らないとなあ…うん！急ぐとしよう。

俺はゆっくりと部屋のドアを開け出て行く。

しかし、そこにはビアンカが待ちかまえていた。

「ビアンカ？どうしたの？眠れないの？夜這い？」

「夜這いじゃ無いわよ！もう…何でそんな事知ってのよ…！」

「じゃあ、どうしたの？僕、急がな「私も一緒に行く」

「え？トイレに？」

「違うわよ！レヌール城のお化け退治によ！」

おいおいおい！何言ってるんだ、この嬢ちゃん！お前、めっさビビッてたじゃん！

「え？でもビアンカ。お化け怖いんじゃないの？」

「そりゃ、少しだけ怖いけど、私も猫さん助けたいの！」

イヤイヤヤ！お前、ものっそい怖がってたじゃん！

「でも、モンスターだって出るし、危ないよ！」

「それはリユカだって同じでしょ！それに私だって戦えるんだからね！」

そう言う俺の目の前に『いばらの鞭』を見せつけた。

正直足手まといッス。

昼間一角ウサギに襲われた時も、ビビッて動けなかったのに。

「連れて行かないと、この場で大声出すわよ！みんなにリユカが勝手に外へ出ようとしている事、ばらすわよ！」

「分かったよ…でも、僕の側から離れないでね！危なくなったら、僕の事はほっといいて逃げてね！」

ビアンカが怪我をしない様に注意していかないと…ビアンカだけは守らないと…

あ…なんかごっさ難易度が上がった気がする。

<アルカパルレヌール城街道>

当初俺は、慎重に行動をしていた。

極力戦闘を避け、モンスターに気付かれない様に静かに行動する。しかしビアンカは恐怖に飲まれていた。

物音に過敏に反応し、悲鳴に似た声をあげメラを打ちまくる。

何も無い所4カ所にメラの焦げ跡を残した。

これだったら、戦闘をした方がいい。

戦闘をして勝てば、それが自身になり恐怖が和らぐ。

そう思ったから、俺はあえて歌を歌い出した。

明るい歌を、元気が出る歌を。

俺はトトロの『さんぽ』を大声で歌っている。

案の定レヌール城へ着くまでの小一時間、18回にも及ぶ戦闘を繰り広げた！

最初の内は、俺一人で戦っていた様なものだった。

しかし戦闘を難なくこなし、勝利していった為かビアンカの恐怖心は薄れていった。

後半はビアンカも戦闘に参加し、俺の指示通り動きコンピプレーを炸裂していった。

「ふん！私にかかればたいしたこと無いわね！」

「……」

つつこみません！ええ、つつこみませんよ！

自信を持つ事は、いい事だ。つつこみませんよ！

・  
・  
・  
……お前、さっきまでものごとくつっぴびッてたじゃん……！

<レヌール城・外>  
ピアノカSIDE

「 やつゝてきましたあゝレヌールじょゝう、お化けいゝっぱいレヌールじょゝう」

リュカが私に気を使って、変な歌を歌ってくれたから、なんとかここまで来る事が出来たけど、不気味にそびえ立っているレヌール城はやっぱり怖い…

ガチャガチャ！！

リュカが正面玄関のドアを開けようと、ドアを揺すってる。

「開かね！」

え！？開かないの？

それじゃ、中に入れない…お化けも退治出来ないし、猫さんも助ける事が出来ないわ！

「リュカどうす…る?!?!」

リュカがいない！私一人になってる…ヤダ…ウソ…どこいったのリュカ？

「リュカー!!!!!!」

私は大声でリュカを呼ぶ！

今にも泣き出しそうな声で！

「何ー？ピアノカー？」

え！？

リュカは城を回り込んだ奥の方から顔を出し、いつもの様に緊張感が無い声で私に話しかけてきた。

「こつちにハシゴがあつて、そこから中に入れそうだよー！」

「もう！勝手に動き回らないでよ！一人で行動したら、危ないですよ！」

「えへへ。ごめーん！」

そう言うと、私の手を引きハシゴの所まで誘った。

ビアンカSIDE END

<レヌール城・外>

正面玄関が開かない事について苛立ってしまい、ビアンカの事忘れて歩き回ってしまった。

泣きそうな声だったなあ…可哀想な事した。

「あら、本当！ここから上がれば中に入れそうね」

俺の手をしっかりと握りながら、ビアンカはハシゴを見上げている。

「レディー・ファーストよ！私が先に登るからリユカはハシゴを押さえておいて」

少しガタ付くハシゴをガタガタさせながらビアンカが指示をする。

はあ…戦闘以外は好きな様にさせるか…

「じゃあ、しっかりと押さえておくのよ！」

「うん！大丈夫だよ。」

そう言うと、ビアンカは一段一段ハシゴを登っていく。

俺の頭上1メートルほど登った所で、俺はある事に気付いた。

そして、いらぬ一言を発してしまった。

「あ！今日は猫さんのパンツだ」

「え！！きゃー、エッチ！！」

ビアンカは慌てて両手でスカートを押さえた。

しかし、ハシゴを登っている最中に、両手でスカートを押さえると落下する。

気付いてハシゴを掴もうとしても、もう遅い。

見上げていた俺の顔に、猫さんが近づいてくる。

そして、猫さんと口吻を交わすと、そのままの勢いで後ろに押し倒される。

うん、言うまでもないが、俺は顔をビアンカの尻に敷かれ横たわっている。

普通女性のパンツが見えたら、きつともっと見ていたいで女性には告げないだろう。

しかし、8歳の女の子のパンツなんぞ、見れても見れなくてもどっちでもいい。

きつところら辺のエロスの境界線が、災いしているのだろう。気を付けよ。

<レヌール城>

ビアンカSIDE

私は今、真つ暗闇にいる。

真つ暗闇でひとりぼっちだ。

どうしてこんな事になったんだろう？

リュカから離れてしまった事がいけなかった。

「怖いよう…リュカ…助けて…」

(少し前)

どうしよう私！

リュカの顔、お尻で踏んじやった！

リュカにエッチな事しちゃった！

私が先程起こったハプニングに、身悶えていると、突如私達が入ってきた出入り口に、鉄格子が降りてきた。

私が慌てて出入り口に駆け寄ると、お化けが現れて、私を攫っていく。

そして私は真つ暗闇で一人泣いている。

「ひっく…リュカあ…ぐすっ…」

どこからともなく、重い物が擦れる音が聞こえる。  
少しずつ視界が開けた。

そこにはリュカが心配そうな顔でこっちを見ている。  
リュカあ…

ビアンカSIDE END

<レヌール城>

心身共にダメージを受けたが、なんとか入城に成功した。

ビアンカは恥ずかしかった様ではあるが、あまり嫌な思いをした印象はない。

むしろちよつと喜んでいる様に見える。

変な趣味に目覚めないといいなあ…

俺が先を急ごうとすると、出入り口が閉ざされ、ビアンカがガイコツどもに攫われた！

どういう仕組みがよく分からんが、ビアンカごと壁をすり抜け中庭の方へ降りてった。

俺は慌てて後を追った！

階段を下り、中庭への扉を見つけそこに駆け寄る。

その瞬間、背後から殺気を感じ横に飛び退く！

振り返り身構えると、そこには動く石像がいた。

ハニワを潰した様な顔をしている。

(ぼそつ)「うわあ…不細工」

どうやら聞こえたらしく、めっちゃ攻撃してくる！

幸い石製のせいか動きは遅い。

でも堅い！斬りつけてもあまり効かない。

手が痺れる。

距離をとってのバギも効果が薄い。

「僕、君に構っている余裕無いんだけどなあ。」

無論、話して聞く様な相手じゃない。

しょうがない…

俺は銅の剣を鞘に収め、両手をヤツに翳す。

ヤツが俺に突進してくる。

両手でヤツを押さえ込み、威力を高めた『バギマ』を打ち込む！

「くらえ！ゼロ距離バギマ！」

やっと動く石像を倒し、慌てて中庭へ向かった。

そこには元は立派な墓が2つあった。

今は、見る影もなく荒れ果てている。

その墓に『リユカの墓』『ビアンカの墓』と、きつたねー文字で上

書きされてある。

おれは、『ビアンカの墓』と書いてある方を、力任せに開けた。

ビアンカが泣きながら閉じこめられている。

俺は、ビアンカを抱き起こすと、体中を確認し

「ビアンカ、怪我は無い？大丈夫？」

涙を見られたくないビアンカは、急にそっぽを向き

「遅いじゃない！何してたの！？」

と、怒り始めた。

どうやら怪我は無い様だ。

俺はビアンカの顔を胸に抱き、

「ごめんね。もう一人にしないから…ごめんね…」

と、そつと呟く。

「まあ、いいわ。助けに来てくれたから…」

そう言って、声を押し殺して泣き出した。

俺は、ビアンカが泣き終わるまでの数分間、動かずに抱きしめ続けた。



## 7・老人を労ろつ。幼子を労ろつ。両者が対峙した時はどっちを労る？

<レヌール城>

ソフィアとエリックという、二人の幽霊に出会った。（お化けと幽霊の違いって何？）

城に住み着いたモンスター達のせいで静かに眠る事が出来ないらしく、モンスター退治の依頼を請け負った。（モンスターとお化けの違いって何？）

依頼とか言ってるけど、もちろん口八だ！（口八とは、無料奉仕の事だ！）

そんな訳で俺たちは今、台所へたいまつを探しに来ている。

どういう仕組みがよく分からんが、1フロアだけ真っ暗で何も見えないフロアがある。

そこにモンスター達の親分がいるらしく、たいまつが必要なのだ。

で、何故たいまつが台所にあるかと言うと、それもよく分からん！世の中分からん事だらけだ。

「ねえ…アレ、何やってるの？」

コツクの幽霊がガイコツにど突かれ料理をしている。

「料理…？」

「お化けが料理してるの？」

「いや、違うよ。料理しているのは幽霊のコツクさんで、それを強制してるのがモンスターのガイコツだよ」

「じゃあ、お化けは何処に行っちゃったの？」

あれ？そう言えばお化けの存在が、どっか行っちゃった。よく分からん！

料理に夢中（？）のコツクとガイコツ共を無視し、難無くたいまつを手に入れた俺たちは親分ゴースト（本名知らん）の元へ急いだ。

暗闇の中玉座には、貧相な爺が座っている。

「あんたが、この城の親分？」

「おお、そうじゃ！元氣な子供達じゃのお。どれ、旨い料理をこ馳走してやる。もう少し近くに來なさい」

行く訳ねえーだろ、ボケ！そんなくだらん罠に引つかかるか！

「なんじゃ？ワシの事が怖いのか？恐がりなガキじゃのう」

「怖くなんてないわよ！」

「ちよ、ビアンカ！」

「もつとも、食材はお主らじゃがのう」

そう言つと床が抜け、俺たちは奈落へ落ちる。

ちよ、この高さは、洒落にならんぞ。

最悪死ぬし、良くても骨折する。

俺はビアンカを抱き寄せて、タイミングを見計らい地面に向けて風だけの『バギマ』を放つ。落下の勢いを押さえた俺は、ビアンカを抱き抱えたまま背中から地面に落ちた。

受け身をとる事が出来なかつた為、かなり痛かつた。

「ビアンカ！大丈夫！？ホイミ！！」

俺はビアンカに怪我がないか確認しつつホイミを唱える。

何か今日俺ビアンカの身体触りまくつてるな。

「大丈夫よ、ありがとうリユカ！」

俺は周りを見渡す。コツクの幽霊とガイコツ共が対照的な反応でそこにいる。

コツクは驚き戸惑い、ガイコツ共は喜びはしゃぐ。

「わ、私には出来ない！子供を料理するなんて！！」

あ？料理？

「ごちやごちや言つてねえーで、さつさと取りかかれ！」

ガイコツ共にボコられ、ベソをかきながら俺たちに、塩・こしょう・その他調味料を振りかける。

「ちよ、やめて！ハックシユン！」

「いやー！！お塩が目に入ったー！！」

俺とビアンカは何だか判らない状態になっていた。

「よし！ここで仕上げに、俺たち特製のソースをぶっかける！」

「くくく おおー！！」「くくく」

ハッキリ言おう。

俺は綺麗好きだ！

そりゃあ、旅をし洞窟・廃屋を探検し、戦闘で地べたを転げたり、泥沼の中に入ったりするのは仕方がない。我慢できる。

しかし、だからこそ、こんな意味のない、しかも生臭いソースなんかで汚されるのが、我慢できない！！

「よし、食いまくるぞー！」

「バギマー！！」

油断しまくりに近づいてきたガイコツに向けて、俺はバギマを唱えた。

怒りで加減が出来ず、ガイコツ共だけでなく壺・皿・鍋等、あらゆる物を巻き込み台所をカオスにした。

振り返ると、へたり込み目を擦るビアンカに躡り寄るガイコツ共が、まだ4体いたのでバギマを唱えようと手を翳す。

いや、いかん！ビアンカを巻き込む。

慌てて剣を抜き放ち、ガイコツ共に飛びかかる。

1体、2体、3体、4体！

ほぼ瞬殺！ガイコツ共を蹴散らし、ビアンカに駆け寄る。

ポーチからきれいなハンカチを取り出し、ビアンカの顔に付いた生臭いソースを優しく拭き取る。

やっと目を開ける事が出来る様になったビアンカは俺の顔を見ると自分のポーチからハンカチを取り出し、俺の顔を優しく拭いてくれた。

このシーンだけ見ると微笑ましいのだが、ともかく生臭い。

また怒りが沸々と沸いてきた俺は、俺の顔を拭くのを遮り、ハンカチを持ったビアンカの手を握り、あのクソ爺の元へ駆け上がった！

ピアノカの『メラ』でたいまつに火を灯し、玉座の間を見渡す。  
いない！？あのクソ爺、何処行きやがった！

背後のテラスで気配を感じた俺は、テラスへのドアを蹴破りテラスへ躍り出る。

そこにはヤツがいた！

「なんと！！ガイコツ共はお前達を食い損ねたか！？ならばワシが食って…うげ！！」

ヤツの台詞を聞きもせず、俺はたいまつを下段の構えからヤツの股間に振り上げた！

振り上げた勢いで、炎こそ消えたがたいまつのはきは、まだ高温だ。

『ジユツ』とゆう音と共にヤツの股間から焦げ臭い臭いがする。

「ここは…反則…じゃろ！？」

そう言うと、その場にうずくまり身悶える。

怒りの収まらない俺は、うずくまるヤツをたいまつでボコ殴りにする！

「ちょ！やめて！！老人を労って！！」

「やかましい！幼児虐待しておいて舐めた事言うな！！」

「ちよつと！リュカ！やりすぎよ！リュカ、やめたげて！リュカ！リュカあー！」

結論から言うと、俺は許してやった。

ピアノカにマジ泣きをされ手を止めた。

『女を泣かしちゃイカン！』これは俺の以前の親父が言っていた言葉だ。

『女に泣かされても、女を泣かすな！』女で苦労した親父の、ありがたい言葉だ。

いったい何があったのかは知らんが…話を戻そう。

とにかく、「もうしない。心入れ替える」等と言っていたので見逃してやった。

去り際に「あんた、立派な大人になるよ」と嘯いていたので、顔に唾吐いてやった！

ソフィアとエリックが出てきて、「ありがとう。これで静かに眠れる」とか言つて俺とビアンカの服を一瞬できれいにしてくれた。

こんな便利機能があるのに、お化けはどうにも出来なかった様だ。よく分らん。

帰ろうとすると、床に落ちてた玉を踏んでしまい、盛大にすっころぶ！

「いつてえー！！誰だよ、こんな所に物置いたヤツは！」

金色に輝く宝玉を拾い、悪態を吐く。

「うわあー…綺麗な宝玉ねえ…」

こんな物ここにあつたけ？

「きつとお礼にくれたのよ！リュカが頑張ったんだから、リュカが貰つていいんじゃない？」

確かに綺麗な宝玉だ！お言葉に甘えて貰うとしよう。

サンタローズに戻ったら、フレアさんにプレゼントしちゃおうかなあ。

『まあ、綺麗な宝玉！でも私はリュウ君の宝玉に興味があるの？』  
な〜て言われたりして。

そんな馬鹿妄想を繰り広げつつ、アルカパへの帰路についた。

<アルカパ>

俺は朝一から、あの悪ガキ二人組の元へ向かった。

夜明け前には帰ってくる事が出来たが、町の入り口の兵士に見つかり、ちよつと怒られたが父さんには気付かれてなさそうなので、少しだけ眠る事にした。

数時間後、再度ベッドを抜け出し出て行く。

おかしいな？父さんがまだ寝ている？早起きな人なのにな？  
途中ピアノカと合流し、池の中の小島へ向かう。

「さあ！約束通り、レヌール城のお化けを退治して来たわよ！その猫さんを放しなさいよ！」

正直、証拠なんて何も無い。

「ごちゃごちゃ因縁付けてきたら、ぶっ飛ばそう。」

「よし！お前らも頑張ったし、認めてやるよ！」

え！？納得するの？

「でも、すげーよなあ！大人達みんな噂してるぞ。子供二人でお化け退治したって！」

噂広まるの早！

まあいい…好都合だ。

俺は悪ガキ二人組から猫をひったくると、無言でその場を後にする。  
この二人組はピアノカに気があるみたいだから、無言の圧力をかけて俺の女に手を出させない様にしておく。

8・ゲームは1日1時間。エッチは大人になってから。世の決まり事です。

<アルカパ>

ピアンカSIDE

やっぱりリユカは、怒ると怖いなあー。

さっきも何も喋らず睨んでたし。

昨日も私がソースまみれになったのを見て、すごく怒ってくれてた。優しいからこそ、怒ると怖いだよ。

そんな優しいリユカの事が、私は大好き。

でも、今日サンタローズに帰っちゃうのよね…寂しくなるなあ…いつそアルカパに住めばいいのに！せめてリユカだけでも。

そんな訳いかないわよね。

リユカを見ると、嬉しそうに猫さんを撫でてる。

猫さんも嬉しそう。

リユカに良く懐いてる。

あ！そうだわ！

何時までも『猫さん』じゃ可哀想だから名前を付けてあげないと。

ピアンカSIDE END

<アルカパ>

「ねえ、リユカ！」

「ん？なあに？」

「猫さんに名前を付けてあげなきゃ！」

ああ、そうか。名前付けなきゃいけないのか…

以前付き合っていた彼女の飼い猫は『ゴンベイ』だった。センス悪！

「私が幾つか考えてあげるから、リュカが決めて」

「うん」

「じゃあ、ゲレゲレ、ボロンゴ、プックル、チロル」

「……………」

「さあ、どれにする？」

え！その四択？他の選択肢は？

『ゲレゲレ』ってセンス悪っ！それもう名前じゃ無いからね！なんか汚い物を表す擬音だから！

『ボロンゴ』ってのもひでーな！そのうち「うちのカミさんが」とか言って殺人事件解決しだすよ。

「ねえ！どれにするの！」

怒られた！！

「えっと、あの…じゃ、じゃあプックル？」

「じゃあ、あなたは今日からプックルちゃんよ！よろしくね」

「ふにや〜」

正直どつちもどつちだが、その時触っていた肉球がプッキリしてたから、プックルと言ってしまった。

まあ、本人（本猫？）が嫌がってないからいいか。

ちなみに、プックルは俺が飼う事になった。

ピアノカの家は客商売をしているから、飼えないんだよね。

父さんをお願いしてみよ。

ダメって言われたらどうしよう。

フレアさんに泣き付いてみますか。

<アルカパ・ダンカンの宿屋>

部屋へ戻ると、父さんがまだ寝ている。

おいおい！ちょっと寝すぎだぞ！

「お父さん、朝だよ！サントローズへ帰らないとサンチヨが心配す

るよ！」

そう言い父さんを揺する。

熱っ……！

ちよ、何！？すごい熱なんですけど！

どうやら、ダンカンさんの風邪をうつされた様だ。

俺は、アマンダさんに事を告げると、その場で延泊する事が決定された。

父さんは2日後には全快したのだが、その2日間は楽しいものだった。

ビアンカ・プックルと一緒に遊び回ったり、食事の準備をするアマンダさんを手伝ったり、教会に保管されてある、魔法に関する書物を読み漁ったり。

まあ、俺が本を読んでいる時は、ビアンカはつまらなそうだったが、あ、そうそう。

ビアンカと遊んでいる時、悪ガキ二人組が遊びたそうに近づいてきた時があったが、プックルが威嚇をし、俺が氷の様な冷たい視線を浴びせると、半ベソかいて逃げてった。

何より楽しかったのは、夜寝る時だ。

俺は風邪がうつるといけないから、ビアンカと寝る事になった。

正直、襲っちゃおっかなあ〜と思ったけど心はともかく、身体が反応しなかったので断念した。（お子ちゃまの身体とは不便よのう）でも、ビアンカはとてもいい匂いがして、一緒に寝ると心が安らいだ。

<アルカパ・ダンカンの宿屋・ビアンカの部屋>  
ビアンカSIDE

パパスおじさまの風邪も治り、とうとうサンタローズに帰る日が訪

れた。

リユカは私の部屋で帰り支度をしている。

アルカパとサンタローズ。

そんなに離れている訳ではない。

会おうと思えば何時でも会える。

でも、リユカの事が好き過ぎて、少しの別れでも悲しくなってきた。泣きそうになった私は、プツクルちゃんと会話を始めた。

「プツクルちゃんも良い子だね。そうだ、プツクルちゃんに、これあげる」

私はお下げ髪からリボンを取り、プツクルちゃんの首に巻き付ける。そして、もう一本をリユカの手首に、巻き付ける。

しかし視界がぼやけて、上手く結べない。

こんな顔で別れたくないのに…笑顔で別れたいのに…

私の涙を手で拭くと、リユカは優しく囁いた。

「僕、ビアンカのリボンもいいけど、ビアンカが穿いているパンツが欲しいな」

………は？

な、何言ってるの！この子すごいエッチな事言ってるわよね！

ど、どう言うこと？どうすればいいの？

「ビアンカと一緒に寝たら、すごくいい匂いがしたんだ。だからビアンカの匂いが残るパンツが欲しいんだ」

つまり、そう言う事。

リユカも私の事が、好きって事？

エッチな意味も含めて、好きって事！

将来私はリユカのお嫁さんになる！

これはその約束よ！

だから私はパンツを渡す。

こんなエッチな事をさせたのだから、責任をとって結婚して貰う。

私は穿いてたパンツを脱いで、差し出した。

ビアンカSIDE END

<アルカパ・ダンカンの宿屋・ビアンカの部屋>

「プックルちゃんも良い子だね。そうだ、プックルちゃんに、これあげる」

ビアンカはお下げからリボンを取ると、プックルの首に巻き付けた。次いで俺の手首に巻き付けようとしているが、もう泣き出してしまいい上手く結べないでいる。

また泣かせてしまった。

ここはちよつと怒らせて、最後に「やっぱりビアンカは笑っている方が可愛い。」なんて言葉で、最高の別れを演出できる。

もう、ビアンカ俺にベタ惚れだね！

ビアンカの涙を拭ってあげて、俺は続けてこう言った。

「僕、ビアンカのリボンもいいけど、ビアンカが穿いているパンツが欲しいな」

さすがに固まっている。

当たり前だ！いきなり「パンツ寄せせ！」って言われればドン引きだ。

「ビアンカと一緒に寝たら、すごくいい匂いがしたんだ。だからビアンカの匂いが残るパンツが欲しいんだ」

残り香があるパンツくれって、どんだけ変態さんだ！

『何、変な事言ってるの！エッチ、馬鹿、変態。』ってな事言ってくれると、『笑顔がステキ』って台詞が際だつよね。

が、現実俺の予想と違った。

俺の目の前でパンツを脱ぐビアンカ。（その際タテスジが見えてしまいました。）

俺の手にパンツを握らせ、恥ずかしそうに呟く。

「これ私だと思って大事にしてね。無くしちゃダメよ」

今までのアニマルプリントとは違い、純白の小さい布地が俺の手の中で、温もりを放っている。

ええ、この世界の女って、みんなこうなの？

フローラが頭のネジ緩いんじゃないかって、みんなこうなの？  
ええ！

<アルカパ・ダンカンの宿屋前>  
ピアンカSIDE

ちよつとスースーして恥ずかしいな。

リュカとパパスおじさまのお見送りには、お父さんとお母さん以外に、出入り口を番する兵隊さんも来ていた。

何故か悪ガキ二人組も来ている。

小声で『早く帰れ』とか『もう来るな』とか言っている。  
頭にくるわねえ！

パパスおじさまもみんななどの話が終わり、リュカを誘い町の出口へ歩き出す。

リュカも私の方を見て、手を振り別れを告げる。

私は、堪らなくなりリュカの元へ走り寄り、

「リュカ、また一緒に冒険しましょうね。きつとよ！」

本当は、もっと違う事を言いたかったけど、みんながいる前では恥ずかしくて言えなかった。

でも、そのかわり私はリュカにキスをした。

リュカの唇は柔らかかった。

リュカのキョトンとした顔が可愛かったが、またすぐにいつもの笑顔に戻ると、

「またね」

って、優しく微笑んでくれた。

…絶対約束だよ…

ビアンカSIDE END

<アルカパ〜サンタローズ街道>

「リュカよ。どうやらビアンカに、相当好かれた様だな」  
父さんはニヤケながら、俺をからかう様に言う。  
まさか、あの場でキスしてくるとは、思わなかった。  
しかも、口に。

頬にとかじらないからね！  
俺もビアンカの事を好きになってきてる。  
もつと、一緒にいたいと思ってる。

「リュカよ。レヌール城のお化けを、退治した事。話は聞いたぞ」  
父さんは真面目な口調で切りだした。

「その歳で大した物だ」  
父さんは褒めてくれた。

「しかし、ビアンカちゃんを危険に晒したのも事実！慢心している  
と、いつか取り返しのつかないことになるぞ」  
その通りだ！

ビアンカが無事だったのは、偶然でしかない。  
危険な場面は、何度もあった。

…もつと強くないと…

8・ゲームは1日1時間。エッチは大人になってから。世の決まり事です。(後

毎度まとまりの悪い駄文を恐縮です。

次話は2・3日中に更新予定です。

すこしアダルティな内容を盛り込む予定です。(本当少しだけ)

苦手な方はご容赦下さい。

お好きな方も違った意味ご容赦下さい。

## 9・出会いは突然。別れは必然。恋する乙女は超天然。

<サンタローズ・パパス邸前>

俺は父さんに、剣術の稽古をつけてもらっている。

俺は銅の剣で斬りかかる。

父さんは自分の剣で、受け流し、弾き、去なす。

時折父さんの攻撃が、俺に降りかかる。ほぼ、寸止めで勝負が決まる。

2度程かすって頬から血を流す。

「ここ最近で、随分と腕を上げたな！力加減が難しくなった」

「でも、もっと強くないと。ビアンカと約束したんだ、また冒険しようねって！」

「そうか。では、頑張らないとな！とは言え、今日はここまでだ。父さん、調べ物があるのでな。家には居るが…また今度にしよう」  
そう言うと、家の中へ入っていった。

俺はブックル相手に、稽古を続けた。

ブックルは素早く、いい稽古相手だ！

3度程引つかかれたけど…

<サンタローズの教会>

俺はあの後、軽く水浴びをし、汗を洗い流して着替え、宝玉を見せる為フレアさんの元へ赴く。

汗臭い状態で抱き付くのは失礼だろう。

教会の中に入り、手にした宝玉を見せる為、フレアさんを探すが誰も居ない。

神父様も居ない。(まあ、こっちはどうでもいいけどね)

「……あつ……………ん……………」

裏手からフレアさんの声が聞こえる。

俺は教会の裏へ回り込み、フレアさんを探す。

どうやら、物置小屋から声が聞こえる。甘く湿った声が…

もしかしてフレアさん、一人エッチでもしてるんじゃない？

そう思い、扉を少しだけ開け、中をそっと覗く。

フレアさんが居た。

一人エッチはしてなかった。

一人じゃないエッチをしていた…

俺の思考は停止した。

フレアさんは髪を振り乱し、胸は開けたわわな膨らみを上下に揺らしてらる。

スカートは腰まで捲し上げられ、そこに男の腰が打ち付けられる。

男はこの村では見た事のない、旅人風の若い男。紫のターバンを巻き、マントを着けている。

顔は日に焼け、腕は父さんと変わりないぐらい、筋肉で盛り上がっている。

数分……………いや、数十分！俺は動けないでいた。目を離せないでいた。

どちらともなく、果てると濃厚なキスをし、余韻を味わう。

その瞬間、男と目が合い俺は慌てて、その場を離れた。

教会の正面で途方に暮れる。

フレアさんを奪われた気分がした。汚された気分がした。

フレアさんにも個人の意志があり、俺はそれを束縛する立場などではない。

それは解っている、解っているが、イヤな気分が心に広がる。

「やあ、リユカ。綺麗な宝玉だねえ」

事をサツサと済ませた男は、俺の名を呼ぶと、俺の手から宝玉を掠

め取る。

「あ！ちよ「あら？リユー君。私に会いに来てくれたの？」

俺が男に文句を言おうとすると、奥からフレアさんが現れた。いつもの口調。いつもの声。

でも、どこか潤った甘い感じに聞こえる。

フレアさんの顔は上気し、心なしか歩みもふらつく。

服も所々不自然にシワが付き、さっきの光景が脳裏に過ぎる。

俺が思わず俯くと、

「ありがとう。これ返すよ」

そう言つと、男は俺と視線を同じにし、勝手に腰の袋へ宝玉をしま  
い込む。

男の瞳は、吸い込まれそうな程澄んでいた。

俺は、この瞳を知っている。

どこかで見た事がある。

それを思い出そうとしたが、男から微かに漂う、フレアさんの香りが邪魔をして、思い出す事が出来ない。

「その宝玉は、とても貴重な物だ。人にあげたりせず、大事にするんだよ」

「う、うん……」

この瞳で言われると、逆らう事が出来なくなる……

そして男は、俺の耳元へ顔を寄せ呟いた。

「フレアさんの処女は俺が貰った」

な！！

俺は信じられない物を見る様な目で、男を睨んでいた。

男は、全く気にせずフレアさんに別れを告げる。

「それではシスター。私はこの辺で……あなたに出会えた事は、私の一生の宝です」

「まあ……」

すげー顔を赤らめ、クネクネしている。

「あの……お名前を教えてくださいますか？」

名前も知らない相手とヤってたのかよ！この世界のシスターって、  
そうゆうもんなの？

「次、お会いした時に名乗らせて頂きます。では、またお会いしま  
しょう」

フレアさんは俺を抱き抱えると、去りゆく男を、ただぼーっと見詰  
めている。

男が見えなくなるまで。そして、見えなくなっても。

普段なら、フレアさんの胸に顔を埋めるのだが、今はそんな気分になれない。

なにより、フレアさんから栗の花の匂いがして、とても憂鬱な気分になる。

フレアさんは、さっきの男の話で一人盛り上がっている。

聞くに堪えず、早々に家路につく。

<サンタローズ>

自宅付近までくると、あの男が我が家から出てくるのを発見する。  
何やら怒りがこみ上げてきた。石でも投げ付けてやろうと思いつ、男  
の後を追う。

この村は、山間にありアップダウンが激しい。慣れない者は歩く事  
すら苦勞する。

しかし、あの男はスイスイ村の出口へ向かっていき、俺は見失った。  
村の出入り口で番兵をしている、トーマスに聞くと、

「誰も村から出てないよ！？」

じゃあ、まだ村内にいるはずだ。

色んな人に話を聞き、絶対見つけ出す。

パパス宅前で焚き火に当たる青年の証言。

「そういえば、パパスさんの所から出て行ったよ。そしてリュカ君がその後を追っていった」

馬鹿じゃないの？そんなの分かってるよ。後、追ってるんだから。馬鹿じゃないの！

可哀想な義父を持つ嫁の証言。

「うちのお義父さん、お鍋のシチュー全部食べちゃったのに、食べてないって言い張るの！」

もう手遅れだから、生暖かい目で見守ろう。

宿屋の旦那の証言。

「誰かが宿帳に落書きしたんだ。まあ、お客なんていないからいいけどね」

この宿屋、経営大丈夫！？

と、まあ…役に立つ情報は無い。

つか、ぶつちゃけもう、どうでもよくなってるんだけどね。男の尻を追っかけるのに飽きた。

とは言え、最後に酒場を確認する事にした。

もしかしたら『一発やった後のビールは旨い！』なんて、飲んでい  
るかもしれないし。

酒場に下りて見渡す。

やはりあの男はいない。

その代わり、変なのがいる。

年の頃なら、12歳前後。薄紫色の髪をし、尖った耳が特徴的な少女。

行儀悪くカウンターの上で胡座をかき頬杖をついている。

そして何より身体が透けてる。

他の誰にも見えていないらしく、本人もその事を理解しているせい

か、パンツが見えているのに大股を開いている。  
俺はただ黙って、パンツを觀賞していた。  
ピンクのパンツだ。

俺の視線に気付いたのか、彼女が話しかけてきた。

「あなた、私の事が見えるの？」

「うん。（ピンクのパンツが）見えるよ」

カウンターから飛び降りると、

「ここじゃ落ち着いて話が出来ないから、他の所で話しましょう。この村に地下室のある家があるから、そこに来て」

そう一方的に言い残して、去っていった。

酒場のマスターに、あの男の事を聞いたが知らない様だ。

搜索を諦めて家に帰ろう…

<サンタローズ・パパス宅>

家に帰ると、サンチヨがまな板を探していたので、一緒になって探し始めた。

何処にも無いので、地下室へ探しに行くと、そこにさっきのスケスケの女の子がいた。

何やってんだ？人んちで？

「ちょっと！遅いじゃない！何時まで待たせるのよ！！」

あゝ？無い言ってたんだ？このスケスケ女！？

・  
・  
・

…話をまとめると、

彼女はエルフのベラ。

俺は彼女のパンツしか見てなく、話を聞いてなかったと言う事が判明。

彼女の住む妖精の国が一大事。  
そこまで話すと、有無を言わさず俺を拉致った！

9 ・ 出会いは突然。別れは必然。恋する乙女は超天然。(後書き)

ご批判もお有りかと思いますが、  
なにとぞご容赦お願いします。

10・可愛く迫られ男は落ちる。浅慮悔やんで男は育つ。

<妖精の国>

「ようこそ。可愛い戦士様。私が妖精の国の女王、ポワンです」  
俺の前に、ポワンと名乗るエルフの女王がいる。

歳は20歳前後。

とても可愛い。

すごい可愛い。

服装も可愛い。

若干控えめな胸を、花が可愛く飾る。

短めのスカートは、見えそで見えないじらしさ。

俺はあまりの可愛さに、ただ見とれる。

「リュカ。あなたにお願いがあります。聞いていただけます?」

可愛く上目遣いで聞いてくる。

「はい。なあ〜んでも言つて下さい」

俺は何も考えず全てを了承した。

ポワン様のお願いは、次の通りだ。

春風のフルートを取り返す。

単純明快超楽勝!

事情を解っているベラと一緒に、妖精の国から外へ出る。

<妖精の世界>

『トンネルを抜けるとそこは雪国by川端康成』  
なんてもんじゃねえーぞ!

妖精の国を抜けると猛吹雪!

さみー！冗談じゃ無いくらいさみー！！

「してやられた！美人の色香に惑わされ、とんでもねえー頼み事引き受けちゃった！あの女、それを承知で可愛く迫ったな！」

「ちよつと！ポワン様に失礼でしょ！あの人は、天然なのよ！」  
それも失礼な気がする。

ダメだ！全然、前が見えない。

俺は歌を歌い、気分を紛らわす。

(ゴー！！！！ビューウ！！)

無理ッス！もう無理ッス！自然の猛威には勝てません。

「もう無理。もうヤダ。もう休ませて」

「休むつても、どうすんのこんな所で」

「かまくら掘る」

俺はふんだんにありすぎる雪を掘り、かまくらを作る。

中に逃げ込むと、燃やせる物を集め火をつけて暖をとる。

まだ寒い。俺はプツクルを抱きしめた。

「うわあ、冷てー！！こいつ、びしょびしょじゃねえーか！」

プツクルを諦めベラに抱き付く。

最初は嫌がつていたが、ものっそい力で抱き付き震えていたら、諦めてたらしく抱きしめてくれた。

ベラの膨らみかけの胸が心地よかった。

体も温まり、余裕が出来た俺はベラの胸を揉んでいた。

おもつきしぶつ飛ばされ、かまくらの外へ放り出される。

さっきまでの猛吹雪が、嘘の様に止み視界が開け見渡すと、10メートルほどの所に、氷の館があった。

あれ？ビバーク意味無かった？

<氷の館>

そこは、ほぼ氷で出来てる館だ。

入り口も分厚い氷で出来てる。

しかも鍵がかかっている。

「ダメだ！開かね！どうする？」

「ふふ、この程度の鍵なら、私の鍵の技法で開けちゃうわ」

「何それ！便利ー…って、ピッキングじゃねえーか！」

ベラはヘアピンで鍵穴をいじってる。

「前にドワーフのエーグさんに教わったの」

「何でそんな事教わってるんだよ！」

「ここを開ける為よ。(ガチャリ)開いたわ！行くわよ！」

「？何で前もって、ここを開ける方法を知ってるの？」

「呆れた、ポワン様の話、何も聞いてなかったの？」

そう言うと、呆れた様に(100%呆れてました)説明してくれた。

春風のフルートを盗んだのは、ドワーフのザイル。

その祖父さんが鍵の技法を生み出したエーグ。

その技法のせいで、エーグは前の女王に追い出された。

ザイルは、それを逆裏んでフルートを盗む。

でも、ザイル一人じゃ到底無理。

背後に誰か協力者がいる様なので、人間界に助けを求めた。

そして俺がここにいます。

「へー…」

「へー、じゃないわよ！(つるー！)きゃー！！」

どうやら氷の館は、床まで氷で出来ている！

「痛った〜…」

ベラは滑って転んで、3メートル程先の壁際に尻餅をついている。

パンツ丸見え！

チャンスー！！

「ワア、コロンジッター」

ほぼ棒読みの台詞で俺はダイブした。

そして、そのままベラのパンツに向かって、頭から突進。

「ごめえ〜ん！ワザとじゃないの〜！」

とか言いながら、ベラの股間へ顔を埋める。

・  
・  
・  
ベラにボコられました。

何とか氷の床のコツを掴み、ザイルの元へ辿り着く。(僕へっちゃら)

「何だ！お前達は！？さては、ポワンがよこした奴だな！」

「春風のフルート、返しなさいよ！」

「ポワンは祖父ちゃんを追い出した憎い奴だ！そんな奴にフルートは返さん！」

「ポワン様がそんな事する訳無いでしょ！前の女王様よ！」

「ふん！騙されるもんか！雪の女王様が教えてくれたんだ」

「その雪女が嘔吐してるのよ！ばっかじゃないの!？」

…俺…いらなくねえ？

ベラとザイルで勝手に話が進む。…俺…いらなくねえ？(僕へっちゃら)

「雪の女王様みたいな、美人が嘔吐く訳無いだろ！雪の女王様に謝れ！」

何！！美人！？是非見たいぞ、それは！何処にいるの？ここにいるの？

「うつさい！どうせ、化粧厚塗りのイカサマ女でしょ！」

ブチ切れたザイルは、俺たちに突撃してきた。

俺はベラを抱き寄せると、闘牛の要領でザイルをクルツとかわす。

氷の床に滑り、2メートル程先の壁に激突するザイル。

うわぁ！痛そ〜…

ザイルは生まれたての子鹿の様に、プルプル震え片膝で立つと、

「ちきしょう…、ヤリやがったな…!!」

え？何？ギャグなの？ギャグパートなの今？次の台詞は、『今日は

この辺で勘弁してやる。』かな？

「お〜ほっほっほ！」

やっぱりギャグパート？笑い屋が場を盛り上げた？

「子供を誑かすと言う、私の考えは甘かったようですねえ。」

「雪の女王様！」

先程までザイルがいた所に、雪の竜巻と共に姿を現す。

この人が雪の女王！確かに、いい女だ！

雪の様な白い肌、少しツリ目だがそれがまたいい。

雪を絡った様な白いドレスは、胸元が大きく開いてる。

その大きな胸の谷間は露出してる。

スリットは腰まであり、色っぽい太腿が俺を誘う。

「雪の女王様：このエルフが言ってる事は本当ですか？」

「お〜ほっほっほ！馬鹿なザイル。私の言葉に騙されて、よくぞ春風のフルートを、奪ってきてくれました」

「そ、そんな…俺を騙してたなんて…」

「ザイル。あなたには褒美に一思いに凍らせてあげます。これでこの世は、もつとも美しい季節『冬』のまま！冬こそ美…ちよっ、なんなの！この子？」

「わあ〜、下着は黒なんだー！肌が白いから、すごくキレイー！」

俺は会話の流れを無視して雪の女王に近づくと、勝手にスカートの中を覗く。

「あら、私の美を理解できるなんて、センス良いわね」

「うん！おねーさん、すっごい美人！オツパイも大きいし僕好きー

！」

俺は露出した胸に飛び付くと、頬ずりをする。

いわゆるパフパフだ！

「何、この子ー！チヨー可愛いー！」

「おねーさんも、チヨー美人！これだけの美貌を維持するのって大変でしょう？」

「そーなのよ！やっぱり〜、適度な運動？これが大変なの〜！やり

すぎると筋肉質になっちゃうしー」

「そうだよねー。でも食事も気を使っくんじゃない？」

「あなた、よく解ってるじゃない！特に野菜！食物繊維は必要よ！」

「やっぱり野菜は必要だよねえー！でも冬が続くと野菜は育たないよ」

「え！？」

「野菜だけじゃない、肉も魚も全部無くなっちゃうよ！」

「まぢ！？」

「うん！まぢ！」

どうやら雪の女王は、頭のネジが緩い女の様だ。

「ちよつと！！ポワンの奴は何やってんのよ！！春はあの娘の担当でしょ！サボってんじやないわよ！」

「おねーさんが春風のフルートを返さないと、春を呼ぶ事が出来ないんだつてさ。ポワン様に返してあげて」

「返せる訳無いでしょ！奪ったのよ！盗んだのよ！！あの娘、怒ってるに決まってるじゃない！………どうしょ…坊や？」

どうしよう、この女…めんどくせー！ベソかいて子供に頼るなよ…

「じゃあ僕と一緒に行ってあげる。一緒に謝ってあげる。だから一緒にポワン様の所へ、春風のフルートを返しに行こう？」

そんで許してくれなくても、俺知らねー！

「坊や、チヨー優しい！うん、一緒に行く」

「うん！じゃ一緒に行こう！僕リュカ。よろしくね。おねーさんは？」

「私スノウ。よろしくお願いします」

俺はスノウの手を引いて、妖精の国への帰路についた。

ボロボロのザイルと、ぐったりしたベラ・プツクルと一緒に。

11 子供は父を見て大きくなる。大人は乳を見て大きくなる。男限定だけど。

<妖精の国>

ベラSIDE

「違うのよ、これは！あれよ、あれ！そう言うんじゃない！ね！ね？解るでしょ！そう言う事なのよ！」

雪の女王事、スノウは訳の解らない言い訳をしている。

「ごめんなさいポワン様：スノウを許してあげて：冬が好きすぎただけなの」

リユカも約束通り、一緒に謝っている。

リユカつてば結構優しいのね。

スケベなだけかと思つてた。

「ふざけんな！馬鹿女！」

一人怒っているのは、ザイルだ。

リユカに押さえ付けられ暴れている。

ポワン様の後ろに隠れているスノウに、飛び付きそうな勢いだ。

「いい加減にせんか！ばかもん！」

空気が揺れるぐらいの大声で、ザイルの祖父エーグが叱りつけた。

「申し訳ありません、ポワン様。ワシはともかく、孫には寛大なご処置を、お願い致します」

「いいえ、エーグ殿。私は誰も処断するつもりはありません。リユカのおかげで、春風のフルートも戻りました。誰も大怪我をするこ  
となく」

「おお！リユカ殿。あなたには、感謝に絶えません。ありがとうございます  
ございます」

「ううん。僕は訳も解らず行動してただけ。一緒に来てくれたベラ  
のおかげだよ」

あら？殊勝な事言うじゃない。

「それに最後はスノウが返したんだし。スノウのおかげだよ」

「リユー君大好き！」

そう言うと、リユカに抱き付きイチャイチャします。

ウザー！この女！

「それでは、春の訪れを迎えましょう」

ポワン様が春風のフルートを奏でる。

美しい音色は、そこら中に響き渡り空気を暖かい物に変えた。

「リユカ。本当にありがとう。いずれあなたが大人になった時、何か困った事が起きたら、必ずあなたの力になりましょう。その時まで、誓いの証にこれをお持ちなさい」

ポワン様はリユカに『サクラの一枝』を渡した。

「それではリユカ。あなたはあなたの世界へお帰りなさい。……………」

スノウ。離れてくれませんか？」

「イヤー！リユー君と離れるなんてイヤー！」

「スノウ！リユカには帰る所があるので。こことは違う世界で生きています」

「嫌、嫌、嫌！ぜったいたい、嫌！私とこっちで暮らす！私が育てる！私好みに育てるう！絶対離れない！」

「スノウ？いい加減にしないと、落とすわよ？」

ぎゃー！ポワン様がすっごい怒ってるー！

「スノウ。これあげる！」

リユカは、自分のターバンをスノウの首に巻き付けて優しく諭す様に言った。

「僕の代わりにはなれないけど、僕の事忘れない為に、これ持つて」

「リユー君……………わ、私もリユー君が私の事忘れない様に、なんかあげる！」

そう言うと自分の体を見回した。

あんた露出度の高いドレスと、黒の下着しか着けてないじゃない！

「じゃ、リユー君がキレーって言うてくれた、私の下着あげる！」

そう言つて、リュカの頭にパンツを被せる。

あんた馬鹿じゃないの？何でターバンの代わりにパンツ被せてるのよ！

「スノウありがとう。スノウの匂いがする。僕スノウの事忘れないよ！」

リュカも何で喜んでんのよ！

それじゃただの変態よ！

「…それでは、リュカ。よろしいですか？」

「はい。お世話になりました、ポワン様」

リュカとブックルの身体が光に包まれる。

次の瞬間、リュカ達は消えた…

そして、騒がしい奴らが、ここに残された。

はあ…私も、あつちの世界へ逃げたいわあ…

ベラSIDE END

<サンタローズ・パパス宅>

イエーイ！また、ゲッター！

もうこれ集めるの趣味にしちゃおうかな。

スノウのパンツの匂いを嗅いで、ポーチの奥へしまい込む。

地下より上がり、サンチヨに話しかけると、父さんが俺を捜して、教会へ行ったそうだ。

何でもラインハットの城に呼ばれたらしく、俺を連れて行くつもりの様だ。

俺は一旦部屋に戻り、代えのターバンを巻き教会へ赴く。

ああ…フレアさんに会いづねー！どんな顔して会えばいいんだ？

<サンタローズの教会>  
フレアSIDE

パパスさんがリユー君を探しに来ている。

これからラインハットのお城に行く為、探している。

もう！パパスさんは、この間帰ってきたばかりなのだから、呼びつけたりせず、あっちから来ればいいのに！

「それでは、シスター・フレアの所にも、リユカはいませんか？参つたな…」

「ごめんなさい。昼前にここに来ていたんですが、すぐに何処かへ行ったしまいました。…それ以後は…」

そう言えばリユー君、あの時様子がおかしかったわ。

どうしたのかしら？

は！？もしかして、物置小屋での事見られてたのかしら！？

それで、私の事嫌いになっちゃた？

あの時抱き上げて、いつもの様にオツパイに埋まってこなかったもの！

そんな…嫌われちゃった…

「ん？どうしました。シスター・フレア？」

「もしかしたら私、リユー君に嫌われちゃったかもしれない」

「え！？」

「だからリユー君、私に会わないどこか遠い所へ、逃げちゃったのかもしれない」

「そんな事「お父さん！」

あつ！リユー君だ！よかった、私から逃げていた訳じゃなかった！

「おお！リユカ。何処に行っていた。」

「うん、ちよつと…」

！やっぱり、私に対して余所余所しい！

「そうか…父さんはこれから、ラインハットへ赴かねばならぬ。そ

れ程長旅にはならぬが、お前も連れて行くつもりだ。いつもお前の事を気にかけてくれている、シスター・フレアに挨拶を済ませておけ！父さんは村の入り口で待っているからな」

パパスさんがこの場を去ると、俯くリユー君が呟く。

「あ、あの…シスター・フレア…僕…」

私の事をおねーちゃんと呼んでくれない！

私はリユー君の前に座り、顔を覗き込むが目を合わせてくれない。

私はリユー君の透き通る様な、あの瞳が好きだ。

今朝会った彼も、同じ瞳をしていた。

だから私はリユー君が好きだ。

「ねえ、リユー君。私リユー君に嫌われる様な事しちゃったかな？」

リユー君の瞳が潤んでる。

すごく苦しそうに…

「ごめんね。謝って許して貰えるか判らないけど…私リユー君に、

嫌われたくないから…リユー君の事好きだから…」

リユー君の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちる。

「ごめんなさい…フレアさんが悪いんじゃないの…今朝、男の人と

の事…見ちゃった僕がいけないの…」

やっぱり、アレを見られてた。

私、最低だ…

「フレアさんを取られた気がして…フレアさんを汚された気がして

…ごめんなさい…フレアさんは悪くないの…僕が悪いの…」

心が潰れるくらい苦しくなった。切なくなつた。

私はリユー君を抱きしめ、二人で涙を流していた。

ただずつと…声も出さずに…

・

「えへへ。じゃあ、僕行かないと。」

リユー君はいつもの笑顔を見せてくれた。

少しだけ目が赤い…きつと私も同じだ。

「なるべく早く、帰ってきてね。」

「うーん、お父さんの用事が終わらないと、僕には…」  
くすっ、それもそうね。

「そうだ！フレアさん、これお願いしていい？」

懐から綺麗な桜の枝を取り出し、私に託す。

「僕これから、ラインハットに行かなくっちゃいけないし、僕じゃ枯らしちゃうかもしれないし」

「じゃあ、リユー君が帰ってくるまで、私が育てるわ」

「ありがとう、フレアさん！それとこれ…」

リユー君は腰の袋から光り輝く宝玉を取り出し私に渡す。

「これは？」

「本当は今朝プレゼントしようと思ってたんだけど…渡しそびれちゃって…」

「こんな高価な物貰えないわ！」

「フレアさんに持っててほしいの。僕、フレアさんが好きだから」

「私も大好きよ」

私はリユー君にキスをした。

柔らかいリユー君の唇を味わい瞳を見つめる。

「じゃ僕行ってくるね」

「行つてらっしゃい、リユー君。気を付けてね」

リユー君を見送り、私は別れを惜しむ気持ちで切なくなる。

10歳年下の少年に、恋心を抱き苦しくなる。

あのリユー君と同じ瞳をした彼は、大人になったリユー君なのだろう。

大人になったリユー君が、私に会いに来てくれた…そう思う事にする。

リユー君の事が好きだから。

フレアSIDE END

<ラインハットの関所>

父さんの肩に乗り雄大なラインハット川を一望する。

以前、インドでガンジス川を見た時も、その雄大さに心を奪われた。このラインハット川も俺の心を魅了する。

父さんは少し離れた所で、やはり川を眺める爺さんに話しかけていたが、何やら偏屈な応対だったので、さっさと忘れる事にする。

「さて、もういいだろ。そろそろ行かぬと、夜になってしまっ」

正直まだ眺めていたかったが、諦め父さんの後続く………が、

「…お父さん!？」

「?何だ?まだ川を見ていたいのか？」

「いや…そうじゃなくて…そっち…サンタローズだよ!？」

「…!そ、そうか!いや間違えた!わっはっはっは…!」

父さんは、恥ずかしかったのか、暗くなる前に辿り着きたかったのか、早足だった。

この身体だと、付いて行くのがしんどい!

<ラインハットの城下町>

暗くなる前に辿り着いたけど、今から謁見するのは、マズイよね! って事で、宿をとり一泊する事になった。

アクティブな俺は、暗くなるまでの少しの時間、町へ繰り出す事にする。

アルカパの町も活気があったが、さすがは王都!ツパないね!

人、人、人…主婦、仕事帰りのおっさん、沢山の人が入り乱れる。

この身体では、人混みに入っていけず、遠巻きに移動する事にする。数十分程彷徨うと、そこには立派な城がそびえ立っていた。

「これがラインハット城かあ……」

俺はどうやら、大きい物が好きな様だ。大きい川、大きい城、大きいオツパイ……

「ぴぎゃー、ぴぎゃー！」

堀の脇の木の根元で、赤ん坊をあやす一組の若い夫婦がいた。

お父さんの方は兵士の様で、仕事が終わったばかりなのか、まだ鎧を着たままだ。

お母さんの方は、まだかなり若い。フレアさんと同じくらいだ。

赤ちゃんにお乳を与えていたらしく、オツパイを出しっぱなしだ。

大きいオツパイ……

「困ったわ？もうお腹いっぱいなのに泣きやまない！」

「おしめは？」

「……………大丈夫みたい」

気付くと俺は、そんな夫婦の側に近寄っていた。オツパイの魔力に誘われて……大きいオツパイ……

「何かしら？坊や？」

俺は無意識にオツパイへ手を伸ばしていた。

「え！あ、つと……赤ちゃん可愛いなあ〜と思って！あは、あは……」

俺は慌てて手の軌道を変え、赤ん坊の頭を撫でる。

「あら、坊やに撫でて貰うと泣きやむわ！」

確かに！泣きやみ静かに俺を見る。

「おや？君が手を放すと、泣き出すのか！？」

俺が手を放すと、堰を切った様に泣き出す赤ん坊。

「坊やお名前は？」

「リュカです」

「マリソルは、リュカ君の事が好きになっちゃったみたいでちゅねえー」

でちゅねー……じゃ、ねえー！

完全に帰るタイミングを逃した。

今帰ると、泣きじゃくる赤ん坊を見捨てる様で、なんかヤダ！

とは言え、ずっとこうしている訳にもいかない。

赤ん坊を撫でる手を見て思いついた。

「じゃあマリソルちゃんに、これあげる」

手首に巻いてあった、ビアンカのリボンをとると、赤ん坊の髪に結い着けた。

「いいの？貰っちゃって？彼女に貰った大切な物とかじゃないの？」

「うん！大丈夫。それにほら。猫のプックルも同じ物持ってるから、平気なの」

そう言つて、プックルを抱き抱えリボンを見せる。

若夫婦は、喜び感謝の言葉をくれた。

さすがに、『お母さんのパンツと交換して下さい』とは、言えなかった。

旦那さんいたし。（いなきや言つてたのかよ！）

11・子供は父を見て大きくなる。大人は乳を見て大きくなる。男限定だけど。

とぅとぅラインハットへやって来ました。

次回、存在を忘れがちなブックルにスポットライトが！

更に、皆さん大好きゲマゲマ60分（古いなオイ！）が登場！  
作者の中ではフリーザ様の声です。

12・世の中やってもダメな事ばかり。どうせダメなら酒飲んで寝ようか！

<ラインハット城>

俺は今、城内を探索中だ。

さつきヘンリーとか言う生意気なガキに出会った。

これでも第一王子らしい。

この国ヤバイね。

も、最悪なガキだったので、さつさと撤退させてもらおう。

デルルと言う大人しめの子に出会った。

彼が第二王子の様だ。

とっても良い子だったが母親がアレだ！まあアレだ！近づかない方がアレだ。

どうやら王位継承問題で当人達以外が揉めている様だ。

よくあるアレだ！

曰く、「順当に行けば、ヘンリー様が次の国王だ」ふむふむ。

曰く、「国王陛下がご健在なのに次期国王の話題をするなど、不見識だ」いやいや、今の内にどちらに与するか決めておかないとね。

曰く、「ヘンリー様の悪戯には苦勞する。人の嫌いな蛙を背中に入れるんだ」おいおい、そんな奴王様にして大丈夫か？国民が嫌がる増税を悪戯感覚でするかもよ。

曰く、「みんなヘンリー様を悪く言うけど、早くに母親を亡くして寂しいのよ」とんだ甘えん坊だな。そんな奴が権力を持つと、ハーレムとか造ったりするんだぜ！いいなあ…ハーレム…

曰く、「昔、巨大な城が天空より落ちてきたそうです」なんと！それは一大事！って、カンケーねーな。

なるほど…まとめると、結構可哀想な奴で将来王様になって重税を

敷きハーレムを造る奴か。

うーん…今の内に仲良くなつて俺もハーレムで遊ばせてもらおうと！

ヘンリーの部屋へ向かうと廊下に父さんが佇んでいる。？何してんだ？張り込みか？

「おお、リユカ！ヘンリー王子の家庭教師を仰せつかったのだが、嫌われてしまつてな…お前となら、子供同士仲良くなれるかもしれない。頼めるか？」

「うん！いいよ！」

ハーレムの為に、僕頑張る。

「なんだ、お前！また来たのか！そんなに俺の子分になりたいのか？」

ハーレムで遊ばせて貰えるのなら「うん！」

「じゃあ、奥の部屋の箱の中に子分の印があるから、それを持ってこい」

イライラ…いや、イカンイカン。

落ち着こうか。子供だから相手は…

俺は奥の部屋に行き目立つ様に置いてある（と言つより、他に何も無い）箱を開ける。

何も入ってない。

イライラ…いや、落ち着け！

そう言う試練なのだ、親分の言う事を聞くと言つ試練なのだ！

俺は戻り報告する。

「子分の印、無かつた…よ？」

いない。

誰もいない。

イライライラ！俺はもうかなり苛ついている。

廊下に出ると父さんがいた。

ヘンリーはいない？

父さんに聞いても出てきて無いそう。

部屋に戻ると…いた！

殴るか！殴つちまうか！？

いや、ダメだ！

ハーレムがかかっているんだ！ここは我慢だ！

「早く自分の印持ってこいよお！」

どうやら始めつから自分の印なんぞ無かったようだ。

俺は奥の部屋に行きドアの隙間からヘンリーの行動を観察する。

壁にスイッチ！床に階段出現！

あいつボッコボコ決定！

待ってるよ！あいつ泣かす！ぜってえー泣かす！！

<ラインハット近郊>

父さんを見失いました。

ヘンリーを追って下へ降りたら、ならず共にヘンリーが攫われま  
した。

ざまあーと思っただけど、父さんの立場からしてヤバくね？

父さんに伝えたら、『まっぢーい？チョーやべえーじゃーん！』（

そんな言い方していません）てな事言っつて猛ダツシユ。

慌てて後を追っただけど父の姿はもう彼方。

途方に暮れる6歳児。

うーん…どうすんべ？

ダメ元でプツクルの嗅覚を頼ってみる事にする。

「ねえ、プツクル。お父さんの匂いを辿って行ってよ」

「にゃう！」

お！言ってみるもんだな！

プツクルが鼻をクンクンさせ地面の匂いを嗅ぎ動き出した。

「プツクルー、辿り着いた所が可愛い雌猫の所なんてないよなあ」

「にゃうにゃー！」

「可愛い雌猫の上に乗っかる、何って事ないよなあ」

「にゃーにゃうー！」

違う意味での雌猫ちゃんなら大歓迎なんだけど…

<ラインハット近郊>

プックルSIDE

にゃーにゃーにゃうにゃ、にゃにゃにゃにゃにゃにゃ。

にゃーにゃうふにゃあん。

「プックルー、まだかかるうー…」

「にゃうにゃーん！」

「本当ー！よかったー」

にゃうにゃうにゃにゃにゃにゃーん、にゃうふにゃにゃあん。

プックルSIDE END

<古代の遺跡>

その部屋はアルコールの臭気で充満していた。

火を点けたら引火しそうな程、酒の匂いで充満する部屋にヘンリーを攫ったならず者共が酒盛りをしている。

「いやー、あの王妃は相当の悪だなあー！」

「全くだ！『第一王子を始末しろ！』なんて、女はおっかねー！」

「でも、殺すのは勿体ねーっての！奴隷として売れば更に金が入る！わっはっはっは…ん！なんだこいつ？おい、ベビーパンサーと一緒にガキがいるぞ！？」

「なんだお前、もう酔っぱらっちゃったのか？」

「ベビーパンサーと一緒にいるのなら、ガキみたいに見えるモンスタ―だよ！」

うわあゝ、こいつら殴りてえゝ。

「おい！ガキ！」

酒飲んで大騒ぎする中、一人が俺の肩を掴み酒臭い息で話しかけてきた。

「俺にはよお…生きていればお前さんぐらいのガキがいたんだよ。でも貧乏でよお。病気になっても助けてやれなかった…」

「……………」

「早く、ここから逃げる！素面に戻ったら俺もこいつらの同類なんだ！さつさと消えろ！クソガキ！」

小声で俺に囁くと俺の事を突き飛ばし、また酒を浴びる様に飲む。

俺は、父さんを探す事にする。

今はそれしか出来ないから…

<古代の遺跡>

ヘンリーSIDE

ちきしょう…

俺、ここで死ぬのかな…

きつと俺の事なんか誰も助けにこないだろうしなあ…

リュカって奴も怒ってたもんなあ…

攫われた事なんか誰にも言わず、俺の事なんか見てない事にするだろうなあ…

お父様…お母様…

ん？声がする？

あの、人攫い共か？

ヘンリーSIDE END

< 古代の遺跡 >

俺はビビッてるヘンリーの為に、大声で歌いながら歩く。

父さんが追っ手を蹴散らしている内に、俺はヘンリーを連れて出口まで向かう。

いやぁー、父さんがいると心強いね！俺はさっさと安全な所へ避難ですよ。

「おい！歌うのやめろよ！奴らに気付かれるだろ！」

相変わらず生意気なヘンリーに、笑顔でデコピン。

「あいた！」

「んも〜。ビビッてるヘンリーを和ませてるんじゃないかあ〜」

「ビビッてねーよ！ってか、呼び捨てにすんなよ！」

「お〜っほっほっほ。いけませんねえ〜。逃げようなどとしては目の前に紫色のフリーザ様みたいな喋り方する男が現れた。

あれ！？こいつどっかで見た様な…ま、いいつか！

「はい！ごめんよ〜」

俺は手を顔の前で縦に振り、紫フリーザの横を通り抜けようとした。

その瞬間！

ドカッ！！

もの凄い衝撃が俺たちを襲う！

後方に吹き飛ばされプツクルとヘンリーが気を失う。

何をされたのか全く分からない！？

「ほ〜っほっほっほ。逃げては、ダメですよ」

まずい！

こいつは強すぎる！

俺では太刀打ち出来ない！

どうする！どうする！！

俺はヘンリーとプツクルを抱え、遺跡の奥へ逆進した！

父さんの元へ！父さんさえいれば何とかなるから。  
だから……………

< 古代の遺跡 >

ヘンリー SIDE

パパスさんが、モンスター2匹に嬲られている。  
まともにやり合えばパパスさんの方が強いだろう。  
いや、実際勝っていた！

しかし、紫の魔道士がリュカを人質に取った！

リュカは俺を抱えて逃げようとしたため、奴らにやられた。  
リュカー人なら逃げれたに違いない。

その為パパスさんは奴らに反撃が出来ない。

「お、お父…さん…負けない…で…た、戦っ…て」  
リュカは気が付いていた。

あんなにボロボロになっても…

「お、お父…さん…僕…の事は…いいから…お…願…い…負…け  
ないで」

しかし、パパスさんはもう戦えない…体中から血を流し手足を切り  
落とされている。

「リュ、リュカよ、聞こえるか…私はもうダメだ…お前の母は生き  
ている！魔族に攫われ…そ、その、ゲマに攫われまだ生きている  
！私に代わり、母を…マーサを助け出してくれ！だ、だから…死ぬ  
な！生き延びろ…！」

力強い声だ！

リュカを、子を思う父親の声だ！

「ほほほっ。子を思う親の気持ち。いつ見てもいい物ですねえ。」

しかし安心して下さい。この子達は、この後一生、奴隷として幸せ  
に暮らします。光の教団の奴隷として！」

そう言うとゲマは巨大な火球をパスさんに叩きつけた。  
轟音が響き渡り、パスさんの身体は跡形もなく消え去った。  
俺はこの日を、この瞬間を、忘れない。忘れられない…忘れてはい  
けない！

ヘンリー SIDE END

12・世の中やってもダメな事ばかり。どうせダメなら酒飲んで寝ようか！（後

すみません。

本当すみません。

ブックルSIDE…

やってみたかったんです…

本当すみませんでした。

多分もうやりません。

ちなみにサブタイトルですが、

某、不敗の名将の鼻歌です。

大ファンの方々、本当にすみません。

作者もファンです。（紅茶党だし）

13・将来を真剣に悩むと不安になる。楽観視すると失敗する。どうすればいい

さあ、お待ちかねのリニューアル君青年記です。

13 将来を真剣に悩むと不安になる。楽観視すると失敗する。どうすればいい

<セントベレス山・山頂大神殿建設地>

目の前で父を殺され、自由を奪われ早10年。

奴隷へと身を落とされ、10年間過酷な労働を強いられた俺は今日も鞭で打たれている。

ビシッ！

「歌あ、歌ってねえーで働け。ボケエ！」

「いたっ！いたいツスよ！旦那あ〜」

「てめーは目を離すとすぐサボる！いい加減にしる！」

そう怒鳴り散らし獄卒は巡回を再開させた。

うむ？今日も怒られてしまった。

何だ？選曲が悪かったのかな？

『それが大事』は、場の雰囲気合っていると思ったのだが？

今度は『ガッツだぜ！』にしよう。

「お前は相変わらずだな」

振り向くとヘンリーがそこにいる。

「ヘンリーこそ、またサボってんのかよ」

「俺のは『ちよっと、一休憩』だから」

「随分長い『ちよっと』だな…何でサボってるヘンリーは怒られなくて、頑張っている僕ばかり怒られるんだ！？」

「…お前、歌ってるからだらる」

「みんなの心に活力を与える為に、頑張って歌ってるのにい〜！」

「……………」

翌日早朝、タコ部屋（奴隷達が食事と睡眠をする部屋）に新人がやって来た。

かなりの美人！

これは仲良くなるしかないね！

「やあ！お嬢さん。僕はリュ（ドカ！）力はあゝ……………」  
ヘンリーにドロップキックをされた。

「お前はマリアさんに近づくな！」

彼女マリアさんって言うのか…じゃなくって！

「何すんのヘンリー！」

「お前はマリアさんに近づくなと言っている。彼女が汚れる！」  
何かひどい事言われている気がする。

「そんなへまはしないよ！それに今まで全部ヘンリーが邪魔してきたじゃないか！」

「当たり前だ馬鹿！もし彼女が身籠もりでもしたらどうする！ここでは身籠もった女は殺されるんだ！」

そう…妊娠した女性は働き手として役に立たない。

産まれてくる子供も無駄飯ぐらいと見なされる。

奴隷同士で愛し合い、殺される女性を何度か見てきた…

更に許せないのは獄卒の慰み物にされた拳げ句、身籠もった為殺すという事もある事だ。

俺たちに人権は無い…イヤになる！

タコ部屋でダべっていると、いつの間にか時間になっていた。

今日もステキな20時間労働！

他の奴隷が二人がかりで運ぶ様な木材を、一人で運び（10年間の努力の成果）マリアさんの事を思い出す。

酷い話だ…長年に渡り教団に使えてきたのに、教祖のお気に入りのお皿を割っただけで奴隷かよ！

番町皿屋敷を思い出すね。

そんなこんなで俺は鼻歌交じりで『ガッツだぜ！』を歌い木材を運んでいると、前方の人集りの向こうで女性の悲鳴と鞭の音が聞こえる！

「またか…」

そう呟き、俺も人集りの中へ入る。

みなそれぞれの仕事の手を止め、一人の奴隷とその奴隷に鞭を打つ獄卒達を見ている。

辺りを気にすると横にヘンリーの姿もある。

…何でこいつ何時も手ぶらなんだ!?

「…くそっ! あいつら…許せねえ…」

そう呟くヘンリーの視線の先を見ると、マリアさんが獄卒達に暴行されている!

「俺様の靴に泥を付けるなんざあ許せねえ! おめえ新人だったな。

へっへっへ…この詫びはその身体で払ってもらおうか!」

獄卒(名前知らないの)「A」と呼ぶ)はイヤらしい笑みを浮かべると、マリアさんの服を引き裂いた!

「野郎!」

俺とヘンリーは同時に飛び出した!

その女は俺が目をつけたんだ! ヘンリーの目を盗んで絶対ものにするつもりなんだよ!

そんな思いを込めて持っていた木材を獄卒Aに投げ付けた。

あり得ない大きさの木材を、あり得ない力で投げ付けて、あり得ない勢いで押し潰されれば、あり得る事態はただ一つ…獄卒Aは無惨な姿になった。

ヘンリーの方を見ると落ちてたスコップを武器に、獄卒B・Cとやり合っている。

その間に獄卒D・E・F・Gが、俺の方に怒り狂って攻撃してきた!

俺はバギマを唱え、ほぼ瞬殺にする。

連中は知らない。

俺が魔法を使える事を。

今までホイミやスカラで自分や仲間達を守ってきたが、ばれない様にこっそり使っていた為、連中は知らないのだ!

俺はマリアさんに近づきホイミで傷を治す。

マリアさんは服を裂かれ、白い肌を露わにしている。

うん！いいオツパイだ！

やっと獄卒B・Cを倒したヘンリーはボロボロになりながら（弱えーな…こいつ！）俺を押しつけ、マリアさんに自分の服をかけてあげた。

何か俺が一番活躍したのに、美味しい所持って行かれた気がする？  
そうこうしていると騒ぎを聞きつけた兵士達が、大勢で俺達を取り囲む様に布陣する。

やっべー！逃げるタイミング逸した！

ヘンリーは壊れたスコップを構えまだ戦うつもりの様だが…しかし俺は両手をゆっくり上げて降参する。

「ヘンリーもうよせ！これ以上は、他の人達に被害が及ぶ！」

「ちっ！」ヘンリーも状況を理解したらしく、渋々スコップを捨て、両手を上げた。

「これは…いつたいどういう事だ！ん！？その女は…」

兵士の中から兵士長が現れ状況を確認する。

「は、はい…この女が反抗的でしたので、指導していたら…そいつら二人が突然暴れ出しまして…」

辛うじて生き残った獄卒がチクリやがった！

「…うむ！では、その二人を牢に閉じこめておけ！女の方は…向こうで手当をしてやれ」

そう言くとマリアさんを連れて行くとした。

手当の必要無いし！俺が治したし！

「あー、そんな事言っただけにエッチな事するつもりだろ！」

「黙れ！」

兵士の一人が俺を殴る。

「いいや、黙らん！あの顔はスケベ男の顔だ！同類だから分かるもんね！」

しかし俺の事を無視して、マリアさんは連れて行かれた。

俺は兵士に小突かれ連行された。

俺の訴えは無視された…

俺とヘンリーは、牢屋へ閉じこめられている。

「あゝあゝきつと今頃マリアさん、あのスケベ兵士達に、あゝんな事や、こゝんな事されてるんだらうなあゝ…」

「ちよつと、黙れ…」

「僕が狙つてたのになあゝ。あゝんな事や、こゝんな事、そゝんな事をしようと思つてたのになあゝ…」

「黙れ…いい加減…」

「きつと彼女、処女だったよ！さっきまではね！それなのに、あの兵士達に今こゝうるせえー！お前、黙れよ！」

ちよゝ怒られちゃった。

あれ？もしかしてヘンリー、

「ヘンリーさん、ヘンリーさん！」

「んだよ！もう静かにしてくれよ！」

「ヘンリーさん、もしかして彼女に『ム』の字？」

「『ホ』の字だ！馬鹿！……はっ！い、いや、これはその…」

ニヤリ！

「それならそうと言ってくれればいいのにいゝ」

ヘンリーは顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。

純情よのう。

「よし！そゝゆう事なら！ナイトヘンリー殿。囚われの姫君を助けに参りましょうか」

「助けるつて…閉じこめられているんだぞ！どうやって…？」

「ふつ…こんな扉こじ開ける！」

そう言つて扉に向かう…が、

カチャリ、キイゝ

勝手に扉が開いた…

「？」

「何事？」

「…僕の…おかげ？」

「…何が起きたかは解らないが、これだけは判る！お前のおかげじゃない！」  
イヤン！

牢から出ると、そこにはマリアさんがいた。  
どうやらエツチい事はされてないらしい。

「マリアさん！無事ですか？」

ヘンリーが駆け寄り無事を確認する。

「ええ！私は大丈夫です。ヘンリー様とリュカ様こそご無事でしよ  
うか？」

「俺は全然平気です！鍛え方が違いますから」

嘔吐け！お前ボッコボコ状態だったくせに！

俺がホイミで治したんだよ！俺が…

気付くと脇の水路の方から先程の兵士長が姿を現した！

ヘンリーは慌ててマリアさんを庇う様に立ちはだかり、俺は二人と  
兵士長の間に立ちはだかる！

「待って下さい！その人は味方です！」

今にも襲いかかりそうな俺達を止める様に叫ぶマリアさん。

「？」

「…？味方？…味方ってアレ…あの、味方？」

俺とヘンリーが混乱していると、

「兄のヨシユアです」

「妹のマリアが世話になった…心から感謝する！」

兄！？妹！？俺、ピンチ！？

・

長年、教団に使えてきたが妹を奴隷にされて忠誠心は無くなり、教  
団に対して愛想も尽きた。

奴隷の中に生きて目をした俺達に妹を託し、ここから逃がそうとし

ている。

と、言う事だ。

「逃がすって言っても、どうやって!?!」

「どうやらヘンリーは半信半疑の様だ。」

「死体を捨てる為の樽がこの奥にある。それを使いお前達三人をこの水路から流せば、脱出出来るはずだ」

「三人つて、ヨシユアさんはどうすんだよ!」

「樽を流す為のスイッチが離れた所にあつてな!それを押す人間が一人いるのだよ!ヘンリー、リュカ…妹を…マリアを頼む!」

「…」

ヘンリーは俯き黙って頷いた。

「マリアさんはそれでいいの?」

「…私は…」

「リュカ!マリアさんの気持ちも解つてやれ!」

「いや!『マリアさんを頼む』と言われた!だからマリアさんの気持ちを優先する!」

「…私は…ヘンリー様にもリュカ様にも無事でいて欲しい!だからこれしか方法が無いのなら…うつつつつ…兄さん…」

マリアさんは俯き涙を流す。

ヘンリーとヨシユアさんは俯き唇を噛んでいる。

「つまりマリアさんもヨシユアさんを犠牲にはしたくない…って事だよね!」

「そうですね、しかし…」

「リュカ!無理言つな…どうすることも「ヨシユアさん。鎧を全部脱いで下さい」

俺はヘンリーの言葉を遮り、ヨシユアさんに指示を出す。

「…え!」「…」

「鎧を脱げば、なんとか四人樽に入れる!」

「スイッチはどうすんだよ!」

「まあ、何とかすつから、入って、入って!」



13・将来を真剣に悩むと不安になる。楽観視すると失敗する。どうすればいい

ども！あちゃです。

何とか中盤戦に突入です。

奴隷時代のエピソードも考えてはいたのですが、またの機会にいたします。

前話で悲壮感漂う終わり方をした為、リカバーに悩みましたが如何ですか？

良い作品になればと頑張ります。

14 天国と地獄の違い。それは天国には美女がいて、地獄には悪友がいる事。

<海辺の修道院>

気が付くと視界には、白く清潔な天井が映った。

視界の隅には若く優しそうな美しい女性がこちらを見ている。

「ここは…天国ですか？」

「いえ、ここは「何、寝ぼけた事言っただ！」

視線を声のする方へ向けると、ヘンリーが人の悪そうな笑みを浮かべて立っている。

「はあ、何だ…地獄か…」

俺は身体を起ここしふて腐れる。

「美しい女神様が佇んでるから天国かと思ったのに。ヘンリーがいたよ！天国の訳無いね！死んでるのなら、ここは地獄だ。間違いないね！」

「お前なあ…」

・  
・  
・  
どうやら俺は三日間も意識を失っていた。

その間シスター・アンジェラが付きつきりで看病をしてくれたらしい。

俺、マリアさん、ヨシユアさん、ついでにヘンリーも無事助かり、この海辺の修道院にご厄介になっている。

「アンジェラさん！僕の為にありがとうございます！ついでと言っちゃあなんだけど、まだ少し気分が優れないんです」

俺はアンジェラさんの両手を握り締めアンジェラさんに迫る。

「まあ…大丈夫ですか？」

「アンジェラさんが添い寝をしてくれれば（ゲシ！）あた！」

ヘンリーの踵が後頭部にヒットする。

「シスターを口説くな！馬鹿者！」

「ど、どうやら元気になられた様で…」

アンジェラさんが顔を赤らめ去っていく。

「何で人の恋路を邪魔するの？だいたい、命の恩人に対して酷くねえ？」

そう俺はあの水路で四人の命を救った。

ヨシユアさんのヤリを投じて、10メートル程奥にあるスイッチを押しただの！

「すぐくね！？俺、すぐくねえ！？」

「お前のそれは恋路じゃない！！…まあいい、それより来いよ。これからマリアさんのシスターとしての洗礼式があるんだ」

ほう…シスターとは益々俺好み。

洗礼式は厳かに行われた。

さすがに場の空気を読んだね俺、歌わなかったもん。

はあ…シスターかあ……いいのう…

はっ！俺にはフレアさんつと言うシスターがいるではないか！

サンタローズに帰らないと！

あの胸に抱き付かないと！

「リュカ！目が覚めたか。心配したぞ」

いつの間にか儀式は終わり、ヨシユアさんが俺に話し掛けてきた。

「私まで救って貰い感謝に絶えない。これからどうするのだ？私は

ここの留まり、マリアを守る為この修道院で働こうと思っている」

「僕は、サンタローズに帰らないと」

「そうだ！リュカは一旦サンタローズへ帰り、パパスさんの遺言を実行するんだ！」

遺言！？

何だそれ？

…何だったけ？

「俺も付き合っぜりユカ！お前の母親を魔族の手から救い出す旅に！」

あー…言ってたた…確かに、言ってた！  
忘れてないよ。

本当だよ。

「そうか…こんな事しか出来ないが、これを受け取ってくれ！」  
そう言っただけ出した袋を、ヘンリーが受け取る。

何でお前が受け取るんだよ！俺にくれたんだろ！

「2000G！こんなにいいんですか！？」

「いや、少ないくらいだ！お前達がしてくれた事に比べれば…」

お前達って…殆ど俺じゃん！

頑張ったの、俺じゃん！

何でお前が金受け取んだよ！

「ヘンリー様、リュカ様。本当にありがとうございます」

マリアさんが瞳を潤ませて謝意を伝えてきた。

「私には、お二人の旅の無事を祈る事しか出来ませんが、どうか御  
自愛を」

「ヘンリー、リュカ。行くのですか？」

するとそこへ修道長が話し掛けてきた。

「はい。修道長」

ヘンリーが勝手に話を進める。

「リュカ。あなたはもう立派な大人です」

まだ未経験だけど。

「自分の行く道は自分で見つけなくてはなりません。どうか神の御  
慈悲があります様に」

修道院のみんなから快く送り出されて、俺とヘンリーは旅に出る。

ああ、もう少しゆっくりしてたかったなあ…

<オラクルベリー>

ヘンリーSIDE

修道院を出て半日。

何とか日暮れ前にはオラクルベリーに辿り着いた。

ここまで数度モンスターと戦闘をしたが、武器を持たぬ俺はまるで役に立たなかった。

殆どリュカのバギで乗り切った。

ただ、リュカはあまり戦いたくない様で、俺も素手を…メラを使い戦った。

本来ならば俺はかなりの傷を負っているのだが、リュカのホイミでほぼ無傷状態だ。

リュカは優しすぎる。

俺がもつと強くないと…

俺達は町に着くと装備を調える為、武器屋や防具屋を回る。

俺は鎖鎌などを買い装備を調える。

しかしリュカは自分好みの装備が無いらしく、何も買わずに町を眺めている。

確かにリュカは強い。

ここら辺のモンスターなら武器等いらないだろう。

しかしこの金は、殆どリュカのおかげで手に入れた金だ。

俺一人が使っていい物ではない。

「リュカ、お前も何か買っておいた方がいいんじゃないか？」

既に暗くなった町を歩きながら、俺はリュカに問いかける。

「うん…じゃあ、アレ買ってくる」

既に目当ての物はあったらしく明確な足取りで目的の場所まで足を進める。

少し開けた所に、一人の女性が佇んでいる。

リュカはその女性に話し掛けた。

え？

「ねえ？君いくら？…2000!？」  
え!？」

「うーん…一晩好き放題で2000?…よし!あつ、お金持ってくるから待つてて。」

そう言つて俺の所へやつて来た。

「ヘンリーはもう十分買い物したでしょ?残りのお金ちようだい」  
俺は力任せにリュカの胸ぐらを掴み、その場から移動する。

「痛い、痛いよ!何!?何なの?あつ、ちよつと…彼女待たせてるから…ヘンリー、ちよつと、ヘンリー!？」

人気のない路地へ来ると、リュカを壁際に押しつけ俺は怒鳴りだした。

「この金はお前の旅の無事を祈るヨシユアさんが、無理してくれた大切な金だ!一時の快楽の為に無駄に使う事は絶対に許さん!」

「分かつたよ、分かつた!じゃあ別に欲しいもん無いからいいよ」  
リュカの目を見れば分かる。

本当に欲しい物が他に無いのだろう。

こいつは何時も本気だから厄介だ。

「女以外欲しい物が無いつてどういう事だよ!もつとこつと、旅に必要な物とかあるだろ」

「?、例えば?」

…そう言われても、俺は旅なんてした事がないから答えられないでいい。

ふと見ると、リュカの横の壁に『馬車有リマス』の張り紙に気付いた。

「馬車だよ…馬車があれば旅が楽になる!」

「馬車つて…今いくら残つてるの?」

「800Gくらい」

「いくら安い馬車でも、その倍はするよ。ないない!800の馬車なんて。200で女買った方が現実的だよ」

「うるさい！頭金ぐらいにはなるかもしれないだろ！もう決めた！馬車買う、絶対買う！この旅で財布は俺が預かる。お前は碌な使い方しない！」

「馬車売ってるの…ここ？」

怪しげな店の前でリュカが呟く。

「『オラクル屋』って書いてあるし…ここだろう…」

俺とリュカは、そつと店内に入った。

「いらっしやい！お客さん、旅人だね！だったら馬車が必要不可欠

！さあ、買った、買った！毎度ありい！」

店主らしきドワーフが、勝手に話を進める。

「いや、買うにしても値段次第です」

リュカの問いに喜んだ店主は、

「今なら、立派な馬付きで3000Gだよ！」

さ、3000G…馬付きで3000Gは確かに安い…しかし今の俺達には…

「高いなあ…まけてよ」

「兄さん綺麗な目をしているなあ！いいだろ！まけてやる！」

「ほんとう！？嬉しいな。あつ、でも僕そっちの気は無いからね！」

「がっはっはっは！兄さんは面白い。よっしや！300Gでどうだ  
！」

3000Gが3000！？これは買うしかない。

「買った…うん…まだ高い！この、鉄の杖もおまけに付けてよ！」

なっ！この馬鹿！300で十分だろ！

「兄さんは買い物も上手いなあ！よし！鉄の杖付きで500G！ど  
うだ！」

「よし！買った！」

「ほれ、鉄の杖は持って行きな。馬車は明日の朝には用意しておくから、朝になったら町の外へ取りに来てくれ」

翌朝、俺達はかなり立派な馬車を手に入れた。

リュカ曰く

「あの時点で馬車がどんな物かは分からない。もしかしたら騙されるかもしれない。だから、鉄の杖も買う事にした。馬車が騙されても、鉄の杖が500Gならお釣りが来る」

なるほど…ちゃんと考えてたんだ…なんか、すごいなこいつ。

そのリュカは、馬車馬とじゃれている。

「やあ、随分と美人なお馬さんだねえ。お名前は何て言うの?」

「ヒヒン!」

「パトリシアって言うの!綺麗な名前だ。よろしく、パティ!」  
なんで馬と会話が成立してるんだ?やっぱ、すごいなこいつ。

ヘンリー SIDE END

14 天国と地獄の違い。それは天国には美女がいて、地獄には悪友がいる事。

次回、

麗しのサンタローズです。

皆様、

心の準備をお願いします。

15・10年一昔。初恋のあの娘はもう…

<オラクルベリー〜サンタローズ街道>

ヘンリーSIDE

俺とリュカは野宿の為、食事の用意をしている途中だった。

もう何度目の戦闘だろう…俺は鎖鎌を駆使し、時には『メラ』と『イオ』の魔法を使いモンスターを駆逐していく。

相変わらずリュカは積極的に戦闘へ参加してこない。

しかし今回は特に何もしない。

焚き火の側に座り、食事の準備を（準備と言っても、携行食品を軽く火で炙るだけ）進めている。

時折、自分の所へ向かってきた敵を払いのけるだけ。

「少しはお前も戦え！」

全てを駆逐しリュカの元に戻り文句を言う。

「ピキーン！」

スライム！

俺は身構える…が、

「ね！ヘンリーは強いんだよ。だから一人で大丈夫。その間に僕が食事の準備をする。無駄がないでしょ！？」

え！？

「ピキーン！」

いつの間にかスライムと仲良くなっていたリュカは、俺に携行食を渡すとスライムの事を紹介してきた。

「この子スラリン。行く宛が無いから一緒に行く事になったから」

「…ああ…そ…」

怒る気も、つつこむ気も無くなった。

ヘンリーSIDE END

<サンタローズ近郊の山道>

俺とスラリンは歌を歌い、サンタローズを目指す。

ヘンリーは疲れ切った表情で付いてくる。

戦闘任せすぎたかな？

丘の上の教会が見えた。

「ヘンリー。もう少しだよ、頑張って！」

俺は自然と歩みが早まった。

フレアさ〜ん！！

<サンタローズ>

そこは、俺の思い描いていたサンタローズとは違った。

家は壊され至る所に火を放った跡がゴゲ跡として残る。

そこら中に毒を撒き植物が育たない様にされてる。

俺は村を一望出来る丘の上の教会へ向かう。

教会だけは元のまま残っていると思っただが、近くで見ると教会も一

度破壊された形跡がある。

きつと『教会だけは』と、瓦礫の中から廃材を集めて立て直したのだらう…

「酷い…こんなことが…」

声も出せないでいる俺を気遣いながらヘンリーが呻く。

「ようこそ、旅の人。ここはサンタローズ。昔は風光明媚な美しい村でした」

振り返ると、そこには一人の若くて美しいシスターが寂しげな微笑みを浮かべ立っていた。

「10年前、ここにはパパスと言う一人の戦士が住んでおりました。

ある日パパスはラインハットからの呼び出しに応じ、幼い息子を連れてラインハットへ赴きました。しかし、その直後に第一王子のヘンリー殿下が行方不明になり、時の王グレック陛下もショックにより御崩御され、第二王子のデール殿下が即位されました」

「ヘンリーを見ると俯き唇を噛んでいる。」  
「ラインハットが変わったのは、その時からです」  
シスターの口調が強くなりがこもる。

「ヘンリー殿下を攫ったのはパパスだと言い、この村に大勢の兵士が攻め込んできました。いえ！あんなの兵士等ではありません！山賊と同じ！村へやって来ると、壊し、奪い、人々を殺し、女子供を襲う！欲望の限りを行うと、満足したかの様に帰っていきました」  
シスターは泣き出し、訴えた。

「パパスさんは、そんな事しない！パパスさんは子供を攫ったりしない！それなのに！うつつ…それなのに…」

「その通りだよフレアさん」  
「え！？」

俺は優しく、俺のもてる限りの優しい口調でフレアさんに語りかける。

「父さんは、パパスはそんな事してない。攫われたヘンリーを助けに行っただ」

フレアさんは涙で溢れた目で俺を見つめる。

「…リユー君？…本当に、リユー君！？」

「ただいま、フレアさん。長い間ごめんね」

「ふえくん…リユー君だ！リユー君が生きていた！ふえくん！」

フレアさんが俺の胸に抱き付き泣きじゃくる。

10年前は俺が彼女の胸に抱き付いていたのに…

「ぐすつ…それでパパスさんは？」

俺は重い口調でフレアさんに告げた。

フレアさんの表情が沈痛な物になる。

しかし次の瞬間、明るい笑顔に戻すと、

「パパスさんの事は、リユウ君のせいじゃないからね！元氣を出してね」

「…うん…」

「じゃあ、パパスさんのご意志を継ぐのなら、あの洞窟を探した方がいいわね」

そう言うと丘の麓にある洞窟に目を向けた。

あの洞窟は父さんが時折赴いていた所だ。

工口本でもあるのだろうと当時は考えていたが…

「取りあえず今日はもう暗くなるから教会に泊まって行って」  
そう言いフレアさんは今更ながらヘンリーの事に気が付いた。

「ところで、お連れの方の紹介はしてくれないの？」

あどけなく言うフレアさんとは対照的に、ヘンリーは顔面蒼白で今にも吐きそうだった。

「お、俺は…その…」

「彼は、僕の大親友のヘンリー。彼も奴隷だった。彼がいなかったら僕は10年間絶えられなかっただろう！大切な、本当に大切な僕の友だ！」

「ヘンリー…さん…ですか…」

フレアさんも分かったのだろう、それ以上追求はしてこなかった。でもヘンリーに対しては、かなりぎこちなかった。

<サンタローズの教会>

ヘンリーSIDE

夜更けの教会。

静寂が包む中、リユカが起きあがり出かけようとしている。

「リュカ。水くさいぞ！俺も一緒に洞窟探索を手伝うぜ！」  
リュカは俺に気を使い、一人で洞窟に向かうつもりの様だ。  
リュカは俺の事を親友と大切な友と呼んでくれた。

俺はこいつの為なら何でも出来る！こいつの為なら何も惜しくない！  
「え！？」

リュカは俺が起きていた事に驚いている。

「いや…でも…悪いから…」

「ふざけるな！お前の旅の目的は、俺の旅の目的だ！」

「あ…つと、そうだね…」

「ほら！シスターを起こさない様に静かに出るぞ！」

俺とリュカは洞窟に向けて歩み出す。

親友と共に…

ヘンリー SIDE END

<サンタローズの洞窟>

はあ…何でこんな夜中に洞窟探検してるんだろ？

明日の朝でも良かったのに。

ヘンリー寝てると思ったのになあ…

フレアさんに夜這いかけようと思ったのに…

何か勝手に勘違いして『俺も行く』って、空気読めつての！

本当に親友かよ！

洞窟内での戦闘は、ほぼヘンリーが一人で頑張ってくれた。（秘技、丸投げバトル）と、言ってもスラリンの活躍も大した物だった。  
（俺的に）楽に洞窟の最深部に辿り着いた俺達は父さんが残してくれた品を発見した。

パパスの手紙と鈍い光を放つ剣が一降り。

手紙には、母マーサの事、母を攫った魔族の事、母を救う為には伝説の勇者探さねばならない事、勇者のみが装備出来る武具の事、その一つの剣がここにある事、等が書かれていた。つまり、ここにあるのが伝説の『天空の剣』だ。

俺は天空の剣を地面から抜き構える！

が、剣はあまりにも重く装備が出来ない。

「えー！？僕、伝説の勇者じゃないの？僕、主人公じゃないの？！」

「何言ってるんだお前！？でも、お前なら装備出来ると俺も思ったんだが…っと、これ本当に重いな！俺にも装備出来ない！」

ホッとした！マジ、ホッとした！めっさ、ホッとした！ものっそい、ホッとした！

「お前：俺に装備出来ないの見てホッとしてないか？」

「だあってえ…：ヘンリーが伝説の勇者なんて…：ムカつく！」

「いや、分かるよ！分かるけどさあ…：当人を前に言うなよ！」

「…：ムカつく？」

「…：もう、慣れた…！」

そう言って剣を布で包み出口へ向かう。

はあ…：俺、勇者じゃないのかあ…：

<サンタローズの洞窟>

ヘンリーSIDE

さすがのリユカも落ち込んでいるな。

あの手紙を読めば落ち込みもする。

パパスさんは自分の死を予測していた…：いや、それ程危険な旅をしていたと言う事だろう！

俺はそんなあいつの力になれるのだろうか？

落ち込んだあいつを励ます事が出来るのか？

「…そ、そう言えば。この近くなんだろ？」

「何がぁ？」

「アルカパだよ。お前が以前言っていただろ。幼馴染みの女の子が住んでいるって」

「ああ、そうだ！ビアンカがいる！」

「なら、行って無事を伝えないと」

リュカの瞳に光が戻った。

「そうだ！今行こう！すぐ行こう！サツサと行こう！」

どうやら元気になってくれた様だ。

走り出すリュカを追いかけ思った…こいつ足早えーよ！

ヘンリーSIDE END

<サンタローズの洞窟>

そうだ！ビアンカがいる！

俺にはビアンカがいる！

きっと美人になつてるに違いない！

あゝ、彼氏とかいたら、どうしよう…

いや！そんなかんけーねえー！

もう、押し倒す！

ぜってー押し倒す！

怒られたら、身の上の不幸を語り同情を誘う！

よっしゃー！

元氣出てきた！

やる氣出てきた！



15・10年一昔。初恋のあの娘はもう…（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？

なにやら、話がサクサク出てきます。

何かの病気でしょうか？

逆スランプ症候群（内容はともかく…）

明日は出かけるのでどうなるか分かりませんが、  
可能な限り頑張ります。

16・人生には驚きの再会がある。これって重要なフラグだよな。

<ラインハットの関所>

今、ハッキリ言ってる気0状態です。

アルカパ行ったら、ピアンカは引越していた。

代わりにラインハットのダメダメ情報を仕入れた。

んで、ヘンリーは「俺、ラインハットに帰らなきゃ！」って、言い出した。

止める理由も無いので見送るつもりだったが、流れるに「リュカも一緒に」ってな流れで今ここにいる。

「太后さまの命令で許可証の無いよそ者は通す訳にいかない！」

何これ？

ラインハット行けねえーじゃん。

こいつぶっ飛ばして強行突破しちゃおうかな…って、そんな事したらお尋ね者だね。

そんな馬鹿な事俺はしない。

ポカリ！

「あいた！いたたたた…」

ええええええ！！

やっちゃった！やっちゃったよ、この子！

衛兵なぐっちゃた！

お尋ね者って事！？

俺、違う！

俺、殴ってない！

殴ったのこの人！

俺、この人知らない！

知らん子です！

「な、何をす「随分と偉そうだなトム！」

「？何故私の名を？」

「まだ、蛙が苦手なのか。蛙を背中に入れた時が、一番けつさくだったな！」

「ま、まさか…ヘンリー様？ヘンリー王子様ですか？」

「そうだよ、俺だよ！長い間留守にして悪かったな…」

「お懐かしゅうございます！思えばあの頃が一番良かったです。今のラインハットは…」

「よせ！兵士のお前が国の事を悪く言うのは、マズイだろ…」

「通してくれるよな」

「は、はい！どうぞ…どうぞ！」

「さすがはヘンリー。腐っても王子様だね」

「腐ってもつてのは、余計だ！」

「ヘンリーの事、信じてました」

「あー、よかった…お尋ね者にならなくて。」

<ラインハット>

10年前にここに訪れた時も夕暮れ前だった。

しかし、あの時とはあからさまに違う。

この国は荒みきっている。

商店は殆どが閉まっており、町を出歩く人の姿も殆ど無い。ともかく、開いている宿屋を探し町を歩く。

城にほど近い所にある宿屋が開いているのを発見。

「あ、あの…」

宿屋へ行こうとすると、横から浮浪児と思われる姉弟から声をかけられた。

「す、少しでいいので、お金を恵んで頂けませんか…」

薄汚れて酷い臭いを放つ浮浪児の姉が物乞いをしている。

「もう、3日も何も食べてません…私はともかく、弟には…」  
まだ、10歳ぐらいの少女が弟を気遣い物乞いをしている。

「3日って、奴隷時代でも3日何も食えないなんてなかったぞ…」  
ヘンリーの一言のせいか、また別の理由かは分からない。

俺は姉弟を両脇に抱えると、宿屋に入り有無を言わさず部屋を取った。

宿屋のオヤジは二人を見てイヤな顔をしていたが金を払えばこっちは客だ！

部屋に付くなり、

二人を風呂に入らせルームサービスで食事を頼む…

二人は食事を終えると生い立ちを話してくれた。

二人の父親は城の兵士をしていた。

しかし、幾多の理不尽かつ非人道的な命令に嫌気がさし不平を漏らした。

その事が太后の耳に入り、逆賊の烙印を押され即刻処刑された！

そして、家宅捜査の名の下に略奪が行われ、それに抵抗した母親も

兵士達に鬮り殺された。

この子達の目の前で…

少女は泣きながら語る…慰める言葉が見つからない…

ふと、小綺麗になった少女を見て思った。

もう5・6年もすれば美女になる事が間違いない少女。

長い艶やかな黒髪を古く薄汚れたリボンで結っている。

見覚えのある、懐かしいリボンで…

「君の名は、マリソルかな？」

少女は驚いた様に頷く。

「何故、私の事を？」

「10年前、泣きじゃくる君にリボンをプレゼントしたんだよ」

「あなたが、リュカさん!？」

「僕の事聞いているの？」

「はい、私に幸せのリボンをくれた男の子だって母が…」  
「幸せか…」

「ヘンリー」

「ああ！」

「何処か、忍び込む場所はある？」

「ある！俺に任せろ！」

俺は久しぶりに本気になっていた。

<ラインハット城地下通路>

あー最悪う！

怒りにまかせ即刻行動に出たけど、ゆっくり疲れをとってからにすれば良かった。

城の地下という事もあり、通常のモンスターはいないのだが…人がいる。

いや、生きた人ならいいのだが、元生きていた人達が大勢いる。

「ぎゃー、襲ってきたー！」

「お前がでけえー声で歌ってるからだろ！」

「ゾンビー！ゾンビがいるー！」

「いや、アレは『腐った死体』だ」

「言い方代えりゃいいってもんじゃないだろ！」

ヘンリーはメラを唱えてゾンビ達に攻撃をしている。

しかし、ヘンリーのメラじゃ埒があかない。

すぐそこまで迫ってこられ、パニックった俺はバギマを唱える。

ゾンビ達は細切れになり消え去った。跡にはゴールドが落ちている。

「あれ？アレってモンスターなの？」

「だから、腐った死体だって言っただろ！」

モンスターだったら怖くねえーや！

と、思ったけど大群で押し迫られるとマジ怖い。

慎重（歌わず）に少し進むと、そこには他にもゾンビ達と戦闘を行っている者がいる。

通常より2回り程大きいスライムに乗る騎士風の一風変わったお方がゾンビ達を相手に、一人（？）で大立ち回りを繰り返している。

「あれは、スライムナイトじゃないか！」

「ヘンリーの知り合い？」

「ちげえーよ！モンスターの一種だよ！と言っても、モンスターなのは下のスライムの部分だけだけど」

「で？何でいんの？」

「俺が知るかよ！」

ゾンビ達を消滅し終わったスライムナイトは、こちらに気付くと怒りを露わに問いかけてきた。

「貴様ら何者だ！この国の…太后の関係者か！」

「ん！まあ…、義理の息子だ」

ヘンリーの答えを聞き終わるや、もの凄いスピードで打ち込んできた！

俺とヘンリーは咄嗟に飛び退く。

しかしヘンリーはスライムナイトのスピードに対応しきれなかった！腹部から大量の血を流し壁際に退避する。

致命傷は避けた様だが、俺がベホイミをかけてやらないと危険だろう。

今は壁際でスラリンに薬草で応急手当をされている。

スライムナイトはというと、俺に回復させまいと猛攻撃を仕掛けてきた！

「ちょ…なんで…僕…達を…そんなに…憎ん…で…いるの？」

何とか疾風の様な剣撃をかわしつつ訪ねた。

「知らぬとは言わせぬ！レヴェリア村を滅ぼしておいて！」

「知らないよ！そんな事！」

思わず言ってしまった一言だったが、逆鱗に触れるには十分だった！

「貴様ー！そんな事だと！大切な村が滅ぼされたのに、そんな事だと！」

「違う！誤解だ！そんな事と言うのは、その様な事実があった事だ。君の村の事を侮辱した訳ではない！だから、だから落ち着こう！話し合いで解決しよう！？な！？」

「黙れ！！」

ヘンリーを見ると、更に物陰へ避難しこちらを覗いている。助ける気0かよ！

「死ねえー！！」

稲妻の様な剣速で襲う来る攻撃をかわし、落ち着かせる方法を考える。

故郷を滅ぼされる気持ちは解る。

出来れば殺さずに済ませたいなあ…しかし、兜から覗く瞳は怒りが満ち溢れている。

あれ？この目…もしかして…

<ラインハット城地下通路>

スライムナイト（ピエール）SIDE

こんな事があるのだろうか！？

私はナイトとして数々の修行を積んできた。

最早、人間如きに私の剣速を見切る事など出来ないと自負している。

しかし、目の前の男には掠りもしない。

しかも余裕を持ってかわしている。

では、何故攻撃をしてこないのか？

私はこの男に殺意を持って攻撃をしている、この男の仲間は大怪我を負わせている。なのに何故？

「貴様！何故攻撃をしてこない！私を侮辱したいのか！」

「え！？いいの？攻撃して？僕の攻撃は、最悪だよー！！」

「でかい口叩くな！」

私は言い終わるより先に渾身の一撃を放つ。  
しかし、今そこにいた男は瞬時に消えた！

そして背後に気配を感じた瞬間…

すぽっ！

「え！？」

私の兜が奪われた。

くっ！この男、私の防御力から奪うつもりか！

慌てて間合いを取り剣を構え直す。そして、この男の発言に愕然とする！

スライムナイト（ピエール）SIDE END

16・人生には驚きの再会がある。これって重要なフラグだよね。(後書き)

毎度どーも。あちゃです。

ご存じの方もいるかと思いますが、

浮浪児姉弟の元キャラ(姉マリソル、弟デルコ)は、

米ドラマの『CSIマイアミ』です。

申し訳ありませんがファンの方々、

クレーム・投石等は受け付けておりません。

予めご了承下さい。

ちなみに作者もファンです。

17・真実は常に一つ。しかし、それを見る目は複数ある。

<ラインハット城地下通路>

俺はスライムナイトの攻撃を避け後ろに回り込む。

そしてスライムナイトの兜を頭から奪い素顔を晒させた。

そこには、栗色の長い髪の毛に同じ色の瞳をした美少女の顔が現れた。

「やっぱり美少女だった！声からして、そうじゃないかなあーって、思ってたんだよねー！」

「な！？」

「ねえ、君可愛いね！名前は何て言うの？」

「こ、これが貴様の攻撃か！」

顔を真っ赤にして俯き震えている。

あら？恥ずかしがっちゃってる？もしかして！

「んー…まあ、その一環…かな？」

「ふざけるなー！！」

彼女が再度攻撃を再開し始めた。

しかし、『可愛い』と言われたのが恥ずかしいのか、先程よりスピードがない。

とは言え、これ以上退がるとヘンリーの隠れている所まで被害が出る。

俺は渋々鉄の杖で彼女の剣撃を去なす。

さらに彼女の隙を付いて鎧の継ぎ目に杖の枝を差し込み、カ一杯にコジリ切る！

ベキッ！

鎧を繋ぎ止める金具が壊れ鎧が地面に落ちた。

鎧の中には青いウエットスーツの様なボディ・ラインに沿った服を着ていた。

お！スレンダーながら女性らしい膨らみが色っぽい！

<ラインハット城地下通路>

スライムナイト（ピエール）SIDE

この男、強い！

私の再三の攻撃も杖如きに去なされている。

しかも余裕を持って。

後ろで蹲る仲間にベホイミをかける余裕があるのだ！

そして私の隙を突き強烈な一撃を繰り出した。

「くっ!?!」

しかし、私の身体にダメージはなく攻撃されたのは鎧だけだった。

私の鎧は、あの男の杖により留め具が壊され地面に落ちた。

「?」

この男、私の防御力を削ぐ事ばかりしてくる。

いや、そもそも殺気を感じない。

私など大したこと無い…たかが村が滅ぼされただけで怒り狂う女など、取るに足りない…そう言う事なのか？それとも…

男は私の集中力が途切れた刹那、私の後ろに回り込み羽交い締めにする。

いや、もつと最悪だった！

「おおお！小ぶりに見えたけど結構大きいぞ、このオツパイ！」

「き、き、きやあー!!!!!!」

こ、この男は最悪だ！私の胸を揉みまくと体中をなで回し始めた！

「やっぱ女の子の身体は柔らかくていいなあー！」

男は私を抱き上げて体中を触り撫でまくる。

「いやー!!やめろー!!きやー!!触るなー!!」

私は持っている剣で切りまくる！

しかし、この近距離で当たらない！

私のスライムのスラツシユも、体当たりで攻撃しているが軽くステツプを踏んで全てかわす。

何者だ！？

いや、何なんだ、この男は！？

イヤすぎる！誰か助けて！誰か！！

ポカリ！！

「あいた！」

男の仲間が近寄り男の頭を殴りつけた。

男の腕から力が抜け私の身体が自由になった。

すぐさまスラツシユと共に男より離れ、壁際でスラツシユの後ろに隠れつつ剣を男らに向ける。

「何すんの？ヘンリー！」

「うるさい！黙れ！俺の目の前で女性へのセクハラは許さん！」

どうやら仲間の方は、ヘンリーと呼ばれている方はまともな様だ。

「申し訳ない。もう、こいつにはセクハラはさせない。だから取りあえず戦うのを止めて、俺達の話聞いて欲しいんだ。頼む！」

ヘンリーと呼ばれる男は真剣な眼差しで語りかけてきた。

「…取りあえず…一時休戦だ！だが、まだ信用した訳では無い！」

「それで構わない。こっちへ近づかなくてもいい。この場で話をしよう。まずは自己紹介から。俺はヘンリー。で、こっちの最悪最低

な男がリュカ。君の名は？」

「私はピエール。」

夜中の地下通路で、ぎこちない会話が始まった。

ピエールSIDE END

<ラインハット城地下通路>

ヘンリーSIDE

俺達は互いの事情を話し、ある程度の理解をし合う事ができた。彼女の名はピエール。

そしてスライムの方はスラツシユ。無論スライムの方はモンスターだが、彼女の方はホビット族だ。

彼女が以前、暮らしお世話になっていた村が税金を払わなかったと言う理由で太后に滅ぼされた。

そして、怒り狂った彼女は太后を殺害すべく城に忍び込んだという事だ。

「なるほど、あなたが10年前行方不明になられたヘンリー様でしたか。知らぬ事とはいえ大変失礼致しました。」

「いや、それは構わないさ。」

「しかし、この男は何なんです!? 私は、この男は許せない! 先程の行為の事だけは許せない! 他の事は認めます。彼の村も滅ぼされた事や、奴隷になっていた事は…しかし、先程の行為は常軌を逸している!」

「確かに、やりすぎの感があった。心からお詫びを申し上げさせてもらうし、こいつにも謝罪させる。おら! 謝れ! 馬鹿者!」

「あー、ごめんね! 久しく美少女に触れたもんだから、ついやりすぎました。本当にごめんなさい。」

「くっ! しかし…」

「だが、やりすぎた事については悪かったが、やった事については正しかったと思ってる。」

「な!? 貴方まで非常識な事を…」

「いや、非常識なのは俺じゃない。先程までの君だ。ピエール!」

「わ、私を愚弄する気か!」

ピエールは剣を構え身を乗り出した。

「落ち着け! 今は話し合いをするのだろう! それとも、騎士であるのに君は嘘を吐いているという事か!？」

「…いや、失礼した…話を聞こう!」

「先程の君は怒りで話を聞かない状態だった。俺も太后の縁者であ

ると言ってしまったのがいけなかったが。」

「うっ…確かに…」

「こいつと…リュカと戦って分かっただろうが、君では…少なくとも、今の君では勝てない。なのに、こいつは君を攻撃しなかった。何故だか分かるかい？」

「こいつがスケベなだけだろう！」

「それが無いとは言わない。いや、言えない。だが、リュカは君の村が滅ぼされた事を理解した。だから攻撃出来なかった。敵では無いから…」

ピエールは目を閉じ静かに考えている。

「…確かに、私が間違っていた…私は、リュカに救われたのかもしれない。」

「謝意の言葉はいらないよ。両手いっぱい前払いしてもらったから。」

リュカはそう言うと、イヤらしい手付きで両手の指を動かす。

ピエールは顔を真っ赤にし、両腕で身体を隠す様な仕草をした。

「あゝ、本当、やりすぎはすまなかった。で、どうだ？俺達と一緒に行かないか？目的は同じだろ？」

「…その前に一つ、聞きたい事がある。リュカ！」

リュカに対し真剣な目で問いかけてきた。

「何故スライムがお前と一緒にいる？そのスライムは、お前にとって何だ！？手下か？家来か？」

リュカの顔から笑みが消えた。

ピエールに近づくと平手打ちをかます。

パシン！

「え！」

思わず驚き、声を上げてしまった。

ピエールも頬を押さえ、驚き戸惑っている。

「手下？家来？ふざけるな！友達以外に見えるのか！？」  
なるほど！こういう奴なんだ、こいつは…

「スラリンに謝れ！スラリンは自分の意志で僕らに付いてきたんだ！」

「ご、ごめんなさい。リュカ！」

「違う！スラリンに謝れ！僕は構わないんだ！慣れてるから。」

「あ！スラリン。ごめんね。」

「びっきー。」

「スラリンは心が広いな！」

「びっきーびっきー。」

「ああ、なるほど。」

え！？何が？

「ポヨン、ポヨヨン！」

「な、スラツシュまで！」

俺の目の前で、二人と二匹が会話に花を咲かせる。

「ポヨ〜ン！」

「いいぞ！スラツシュ！言ってやれ！」

「ちよつと、裏切る気！スラツシュ！」

「ポヨヨ〜ン、ポヨヨン！」

「びっきー！」

「うっ…わかった！わかったよ！二人してリュカの味方するなんて

…」

何で会話が成立してるんだ？

「ヘンリーは、どう思う？」

うっ…どうもこうも一個も分からん。

「…俺は…中立だ！」

「びっききー…」

「しょうがないよ。ヘンリーはそう言う奴さ。」

「ポヨンポ。」

「本当…ガツカリだ。」

くっそー…訳分からんが屈辱だ！

>NUSHSIDE  
E  
E  
D

17・**真実は常に一つ。しかし、それを見る目は複数ある。**（後書き）

美少女ピエールちゃんですが、

スライム族の言葉だけが理解出来る。

そんな裏設定です。

それ以上はご想像にお任せします。

18・大物と小物の違いは、他人を利用出来るか出来ないか。

<ラインハット城地下通路>

地下通路を進むと、そこは牢獄だった。

そこの特別監房に彼女は囚われていた。

「ん!? 誰じゃ? そこにいるのは何やつじゃ? まあ、よい…妾を、妾を助けよ! 妾はこの国の太后じゃぞ!」

「…あ?」

何言つてんだ、この女?

「太后は城の最上階で、ふんぞり返ってる。こんな所にいる訳ねえーだろ!」

「ええい! 察しの悪い奴じゃ! 上にいるのは妾の偽者! 妾になり代わり、この国を牛耳っておるのだ! あの偽者がこの国を悪しき国へ変えたのじゃ!」

「たしかに…この女、本物の太后の様だ…」

ヘンリーが言うのなら間違いないのだろう。と、なると…

「10年前ヘンリー王子を攫わせたのも、あんたの偽者か?」

「…あれは…妾じゃ…我が子、デールを…どうしても王にしたかった…我が子可愛さに行ってしまったのじゃ! 恐ろしい事をしてしまった…今では、反省しておる…」

反省…か…

「じゃが、それ以外は偽者がやったのじゃ! 妾は権力を欲した事は無い! デールの人生を良き物にしたかった、ただそれだけなんじゃ!」

「ただそれだけだと! そのせいでどれほど!」よせ! 今はそれどころじゃないよ!」

俺は怒り出すヘンリーを宥め今後の事を小声で告げる。

「ヘンリー。偽者が元凶ならば楽にこの国を変える事が出来る」

「どづいつことだ？」

「つまり…偽者が元凶で、その偽者を退治した事が国中に知れ渡れば国民の意識改革も行いやすいんだ！」

「なるほど！」

納得したヘンリーを誘い先へ進む。後ろでは、あの馬鹿女が「助ける！」と騒いでいるが、そんな無視だ！

<ラインハット城>

目の前にデル王が鎮座している。

城内へ侵入した俺達は兵士の鎧をちよつぱねて（倉庫に可哀想な裸の兵士が二人倒れています）玉座の間へやって来た。

デル君、大きくなつたなあ…今、14歳かな？全然王様らしく見えぬ！

「…余は今気分が優れぬ…下がれ！」

不機嫌なデル君を無視しヘンリーは耳元で話し掛ける！

「しかし王様！子分は親分の言う事を聞くのでは？」

「！？ま、まさか…おい！大臣！」

「は！？」

「余はこの者達に話がある！お前は退室せよ！」

「は？…はあ…」

大臣が渋々出て行くと、

「義兄さん！ヘンリー義兄さん！生きていたんですね！」

「長い間留守にしてすまなかつた。時間がない！早速本題へ入ろう」

・

「義兄さん達も苦勞をされた様で…しかし母が偽者とは…」

「信じられないのも無理はないが…」

「いえ、そう言われれば思い当たる節が幾つかあります。あんなに優しくった母が人が変わった様に僕を邪険にしましたから」

「まさに人が変わってたのさ！」

「義兄さん。この城の書物庫に『ラーの鏡』の文献がありました。」

「真実を映すラーの鏡があれば、この事態を解決出来るかもしれませ  
ん」

「さすがは我が子分！良い情報を持っている」

「義兄さん、お気を付けて！」

俺達はピエール達と合流し書物庫を漁る。

ラーの鏡に関する書はすぐに見つかった。

ちなみに俺は全く関係ない書を読みふけり、ピエールに蹴飛ばされた。（あの娘Sなの？）

書によると、オラクルベリーの遙か南にある『神の塔』に鏡は奉られているそうだ。

< 神の塔 >

ピエールSIDE

我々は神の塔に入り幾度めかの戦闘をしている。

その後、城内に設置されていた『旅の扉』を使い、神の塔の近くまで来た我々だが夜も遅い為『攻略は明日朝から』と言うリュカの意見（我が儘）により、近くの海辺の修道院で一晩厄介になった。

ここにはヘンリー殿とリュカの縁者がいる様で、神の塔の事を告げたら協力を申し出てきた。

何でも神の塔に入るには『心清き巫女』が必要らしくマリア殿が、そしてその兄のヨシユア殿が随行してきた。

神の塔内は神々しい雰囲気とは別にモンスターも多く戦闘が絶えない！

さらに、リュカの馬鹿が大声で歌うのでモンスターが寄ってくるの

だ！

しかも当のリユカは殆ど戦わない！

後方でマリア殿を守りつつ援護魔法を唱えるだけだ！

「イオ！」

私のイオが炸裂する！

ガメゴン、ホイミスライム、インスペクターを吹き飛ばす。

しかし致命傷ではない！

すかさずヘンリー殿とヨシユア殿がとどめを刺す！

残りはホイミスライムのみ。向き直り剣を構える。

ホイミスライムは先程のイオで傷つきながらも、事切れたガメゴンにホイミを唱える。

しかしホイミで死者は蘇らない。

仲間の死が理解出来ないのか、ホイミスライムは長い手蝕で亡骸を揺すり「ホイミ！ホイミい…」そう悲しげに繰り返す。

これでは、どちらが悪なのか…

リユカがホイミスライムに近づく。

「ごめんね…君の友達を…ごめんね…」

そう言いホイミスライムを優しく抱きしめる。

「リユカ、離れる！そいつは敵だ！」

私は思わず叫んでしまった。リユカの気持ちに痛い程分かるのに…

「そうだね、この子は敵だった。でも君もそうだったろ？」

私は何も言えなくなる。

リユカの瞳は優しく、そして悲しく光る。

私はこの男を過小評価しているのかもしれない…

「ホイミ」

リユカがホイミでホイミスライムの傷を治す。

「さあ…君は逃げなさい」

「ふわわん」

「え！？でも、僕たちは君の友達を…」

「ふわわわん！」

「そう。じゃあ、これからよろしく。ホイミン！」  
そう言つとリュカは何事もなかった様に先を歩き出した。ホイミン  
とじゃれながら…  
私はリュカの優しさが、懐の深さが心地よかった。

ピエールSIDE END

19・人生の落とし穴は至る所にある。でも気付いた者の方が落ちやすい。

<神の塔>

マリアSIDE

リュカさんがスラリンさんとホイミンさんと一緒に不思議な歌を歌っている。

既にここは塔の最上階。

揚々と歌うリュカさんを先頭に、両際に壁も手摺りも無い空中回廊を進む。

きつと、この回廊の先にラーの鏡があるのだろう。この回廊こそ、神様の試練が待つ回廊なのだろう。

そして試練の時はきた。

私達の行く手の床が途切れている！

神様の試練とは、かくも難解な物なのか！？

皆が足を止め途方に暮れる中、リュカさんだけが歌いながら突き進んでいた。

私達は信じられない物を見た。

リュカさんが何も無い空中を歩いているのだ！

正確には歌いながら左右にステップを踏み進んで行く。

向こう側に渡りきると祭壇にラーの鏡が奉られてあり、それに気付いたリュカさんは足早に駆け寄りラーの鏡を手にする。

「お！？これかなあー？ラーの鏡って！」

リュカさんは振り返り、ラーの鏡を掲げ小躍りしながら来た道を私達の元へ戻ってくる。

「イエーイ！ラーの鏡、ゲットー！」

「リュカ？お前？どうなってるの？」

「何が？」

ヘンリーさんが途切れた床を指さしリュカさんが不思議そうに振り

返る。

「おわ！床が無い！え！？何？何で？さっきまであったよね！？」

「さっきからねえーよ！」

「リュカさん、空中を歩いていました。」

「えー！」

どうやらリュカさんは歌う事に集中しすぎて足下を見ていなかった様です。

「この試練を造った神は泣いているな！馬鹿が台無しにしたって。」

「ピエールさん、酷い！！僕のおかげでラーの鏡が手に入ったのにいー！」

リュカさんとピエールさんの掛け合いが微笑ましい。

何か、お似合いかも。

「さて、ラーの鏡も手に入った事だし…時間が惜しいので、このままラインハット城に乗り込む！」

私にも何かお手伝い出来るかもしれない。

ヘンリーさんの為に。ラインハットの人々の為に。

マリアSIDE END

<ラインハット城>

ピエールSIDE

私達は旅の扉を通りラインハット城へ舞い戻ってきた。

しかし何やら中庭が騒がしい。

我々は慌てて中庭に出ると、そこには中年女性が取っ組み合いのケンカをしているではないか！

しかも、ただの女性ではない。

二人の太后が泥だらけになりながらケンカをしている。

「義兄さん！ちょうど良い所へ。僕、少しでも義兄さんの力になり

たくて、地下牢から母を連れ出した所に、偽者が現れて…」

「それで、どつちが偽者？」

「…それが…その…すみません…」

リュカの悪意はないが最悪の質問に落ち込むデール陛下。

「空気読め馬鹿！判らない事くらい、分かれ！」

私は思わず怒鳴る。

「相変わらずデールはトロくさいなあ。」

「ごめんなさい…義兄さん。」

「まあ、そう落ち込むな。こんな時の為に俺がいるんだ！」

「違うよヘンリー。僕たちがいるんだよ。」

リュカが優しく微笑み、ヘンリー殿の肩に手を置く。

いいなあ…男の友情って…

「だいたい、ラーの鏡は僕の功績で手に入ったんだ！自分一人で活躍してみたいな言い方やめてもらいたいなあ。」

この男はあ…前言撤回する。

「はいはい…お前のおかげですよ。おい！その兵士二人！」

ヘンリー殿は兵士二人に、二人の太后を引き離させる様に指示した。

そしてリュカが各太后をラーの鏡越しに確認する。

「お！こつちが偽者だ！何か、ぶつさいくな物が映ってる。」

そう言い片方の太后を指さす。

「そ、その鏡は！」

次の瞬間、偽太后は3倍以上に膨れあがり魔界のモンスター『トロール』の姿に変わっていた。

「おのれ…。よくもオレの計画を邪魔してくれたなあ…！」

皆が瞬時に身構える！

デール陛下が、衛兵達に攻撃を命じた！

トロールは側に生えていた大木（直径1メートルくらい）を易々と引き抜き振り回し、衛兵を薙ぎ払う！

気付くとリュカは、側にいた太后と戦闘の出来ないデール陛下とマリア殿を抱え後方に退避した。

「偶には気が利く様だ。これで心おきなく大暴れ出来る！」

「全くだ！ヘンリー！ピエール！同時に行くぞ！」

ヨシユア殿の掛け声と共に、私、ヨシユア殿、ヘンリー殿がトロルへ襲いかかる！

トロルの怪力から繰り出される攻撃を避け、トロルの身体に剣撃を加え魔法を当てる。

堅い！！トロルの身体には傷一つ付かなかった！

逆に我々三人はトロルに吹き飛ばされた！

トロルの持つ大木が私めがけて振り下ろされそうになった瞬間、リユカがトロルの顔面めがけて強烈な一撃を振り抜いた！

トロルの巨体が後ろへ倒れる。

リユカは私へ近づきベホイミをかける。そしてトロルに向かい、

「今なら、ごめんなさいすれば許してやる。僕が本気を出す前に、

ごめんなさいって言っとけ！」

「ふざけるな！そんな壊れた杖で何が出来る。」

リユカは持っている杖を見て驚いていた。

「ああ！！僕の鉄の杖が！気に入ってたのに！馬車とセットで500Gもしたんだぞ！」

とんだ安物ではないか！

先程の一撃で折れてヒビの入った杖を捨てトロルに怒鳴り出す。

トロルが再度、私とリユカに向けて大木を振り下ろす。

リユカは私とスラッシュを抱え、後ろに飛び退き我らを降ろすと一転トロルに接近し、バギマを放つ。

しかし、リユカのバギマも効果は無かった。

何らかの方法で魔法を無効化させている様だ。

今戦えるのは武器を持たぬリユカのみ。

私は絶望を感じ諦めかけたその時！

「リユカ！これを使え！！」

ヨシユア殿が、ご自身の剣をリユカに投げ渡した。

その剣はリユカの身長の上半分以上もある、バスタードソード。

手入れの行き届いている業物だ。

「ん〜…刃物振り回すの、好きじゃないんだよなあ…」  
そう言いつつもトルルに向かい剣を構える。

「そんななまくら刀じゃ、オレの身体に傷一つ付けられん！先程実証済みだ！」

言い終わるとトルルは大木を振り上げる。

その瞬間リュカの姿が消えトルルの後方へ現れる。

トルルが振り上げた大木は、あらぬ方向へ飛んで行った。トルルの腕と一緒に。

「オレの腕が…オレの腕が！！」

驚きのたうち回るトルルを見下ろし、優しい笑顔でリュカが呟いた。  
「もう、ごめんなさいしても許してやんない！」

トルルの頭は、体と永遠の別れを経験した。

私はリュカの恐ろしさを、リュカの剣の技量を思い知らされた。

…普段も少し真面目なら尊敬出来るのに…

ピエールSIDE END

20. じめで済めば警察はいらない。いや、そうでもないだろ！

<ラインハット城>

デルSIDE

昨日の一件は、瞬間に人々の知る所となった。

今までの悪政は全て偽太后が行った事、そして行方不明だった  
ヘンリー王子が戻り偽太后を倒した事は、国民を喜ばせ安堵させる  
事となった。

そして一晩明けた今日！僕を悩ませる事態が発生した。

「リュカさんからも言ってお下さい！王位を継ぐようにと！」

「デル君、こいつに何を言っても無駄だよ。分かっているだろ？  
君の義兄さんなんだから。」

「そうです陛下。自分は親分の言う事に従うべきです。」

「義兄さん……」

「それにヘンリーが王様なんて何かムカつくから、僕は説得はしな  
いよ。」

「お前なあ……まあ、いい。そんな訳で王位はこのままと言う事に。」

「僕は国王の器では無いのです。今回の一件で、その不甲斐なさを  
実感しました！」

「陛下、この兄は陛下を見捨てるつもりはございません。微力なが  
ら陛下を全力でサポート致します。陛下はまだお若い。この国を立  
て直し、この国と一緒に成長して行きましょう。」

僕は黙って頷く事しか出来なかった。義兄の優しさが嬉しすぎて……  
「そんな訳だリュカ！すまんが俺はラインハットに残らなければな  
らない。」

「正直助かる。何時も僕のナンパを邪魔していたヘンリーは、ここ  
で置いて行くこうと思っていたから。」

「てめえー…」

義兄さんとリュカさんは、お互い笑顔で言い合っている。ちょっと羨ましいな。

「リュカさんには感謝に絶えません。何か僕に出来る事はありませんか？」

「無論あります。」

リュカさんは真剣な面持ちで要求してきた。

「まず、父パパスの名誉の回復。そしてサントローズの…いや、サントローズに限らず君の不甲斐なさで滅んだ村への復興の援助。この2点！」

リュカさんの辛辣な一言に胸が痛む。

「何で貴様は、そう言う言い方するんだ！」

「ピエールさん、構いません。真実ですから。」

僕はリュカさんに負けない様、真剣な面持ちでリュカさんに告げた。「言われるまでもありません。その2点は僕が真の王になる為に必要な案件です。必ず実行致します。」

「ん、なら僕はラインハットには…この国には、何も要求は無い。」  
そう笑顔で言うと、そのまま母へ向き直った。

「太后様。僕は貴女にこそ要求があります。」

みんなの視線が母とリュカさんに向く。

「リュカさん！それは「黙っているデール！」

義兄さんが僕の訴えを遮った。

「貴女は僕に、どのような謝罪賠償を支払って頂けますか？」

「わ、妾の愚かな考えで、そなたに多大な迷惑をかけた事、誠に済まなかったと深く反省をしている。」

母はリュカさんの無表情で感情の無い瞳に怯えながら言葉を続ける。「もう、妾は出しゃばらずデールとヘンリーを静かに見守って「ふざけるな!!!」

空気を揺るがす程のリュカさんの怒鳴り声に皆が言葉を失った。

「父の死の原因は、あんたが作った！サントローズや他の村々を滅

ぼしたのは偽太后だろう。その罪は命を持って償わせた！だが、父のパスの死の原因だけは、あんたのせいだ！」  
母は顔面蒼白で立ち竦んでいる。

「僕は父さんが髑り殺される様を、この目で見ていた。あの光景は一生忘れない！」

「わ、妾は…そなたの父の殺害を命じてはおらぬ。」

「ヘンリーを誘拐した犯人が、救出に来た者へ危害を加えないと思っていたのか？大人しくヘンリーを返し、降伏するとも思っていたのか？そう指示をしておいたのか？」

「それは…」

「あんたは僕に何をしてくれる？目の前で最愛の父を髑り殺された僕に、どう償ってくれる？」

リュカさんは母を責める権利がある。

でも僕には…

「…妾も、命を持って償おう！」

「そんな！母上！どうか「そんなんでは僕の気はすまない！」

そんな！リュカさん…

「…では、どうすれば…妾に出来る事は、その程度…」

「僕は最愛の家族を目の前で失った。」

そう言つとリュカさんはピエールさんの剣を抜き、僕の方へ向き直つた。

「貴女にも同じ苦しみを味わってもらふ。家族を目の前で殺される苦しみを！」

「そ、そんな！デールは関係ない！妾を…私を殺せ！どうかデールだけは…デールだけは許してほしい。」

母は泣き崩れリュカさんの足に縋り付く。

だが、僕の心は決まっていた。

「母上！貴女はリュカさんに償わなければいけない。それは死して一瞬で終わる様な償い方ではいけない。息子の死を心の重石にして生きていかなければいけない。リュカさん、どうぞ。これで母を許

してあげて下さい。」

「いい覚悟だ。その覚悟に敬意を表し、一思いにやってやる。」

「やめてー!! お願いします!! どんな苦痛も…どんな苦しみも私は受けます! だから…デールだけは!! どんな事でもしますから…

デールだけは…」

その瞬間リユカさんとヘンリー義兄さんに、人の悪い笑みが戻った! してやられた!

この二人にしてやられた!

「どんな事でもって、言ったよな!? ヘンリー?」

「ああ! 確かに言ってた! この場にいる、みんなが証人だ!」

「え!?!」

母は涙や鼻水でグチャグチャな顔で二人を見上げキョトンとしている。

「マリアさーん!」

奥から美しいシスターが二人の子供を連れてきた。

「太后様、あなたには直接は関係ないのだが、この二人マリソルとデルコは偽太后のせいで両親を失った。この二人の親代わりになつ

てもらおう。」

「私が…!?!」

「ただ親代わりになればいい訳じゃ無い。デールを見れば分かるが、あなたの子育てレベルは低そうだ。」

何か酷い事言われてます。

「ただ甘やかすだけでなく、時には叱り、時には褒め、立派な大人にする事が、この罪に対する償いだ!」

「おっと! 言っておくが、この二人だけじゃないぞ! この国には数多くの孤児がいる。それを全部とは言わないが、他の人達と共に力を尽くしてもらいますよ。義母上。」

母は孤児二人を抱きしめ泣きながら呟く「私が育てます…償いだからではなく…私の子供達だから…」何度も、何度も呟き泣いていた。

デールSIDE END

20.じめで済めば警察はいらない。いや、そつでもないだろ！（後書き）

次回、リユ一君卒業します。  
お楽しみに。

21・女の心は移ろいやすい。男の心は狼狽えやすい。(前書き)

ちよいエロです。

お嫌いな方申し訳ありません。

21・女の心は移ろいやすい。男の心は狼狽えやすい。

<サンタローズ>

俺は今、サンタローズで瓦礫の撤去をしている。

ビスタ港から船に乗る予定だが出港が10日後の為、少しでもサンタローズの復興に尽力出来ればと、柄にもなく殊勝な事をしている。ラインハットを出る時は結構な騒ぎだった。

マリソルとデルコは『別れたくない』と泣き駄々をこねる。

『美人に成長したら、また遊びに来るよ。』とマリソルの額にキスをし、デルコには『お前の姉ちゃん俺が目をつけた。悪い虫が寄り付かない様に見張っておけよ。』と念を押しておいた。

それを聞いたピエールが俺に蹴りを入れてきた。(この娘、絶対Sだよね！)

それを見て何となくは気持ちを理解したのか、泣きながら見送ってくれた。

マリアさんとヨシユアさんはラインハットに残り復興の手伝いをする様だ。

『ヘンリー！チャンスだ！マリアさんを絶対物にしろよ！』そうヘンリーに耳打ちすると、顔を真っ赤にして恥ずかしがりながら『が、頑張るよ…お、お前に奪われたくないから。』って呟く様に言った。とてつもなく純情だ。

これじゃハーレムなんて作らないなあ…頑張ったのに計画狂っちゃたなあ…

ヨシユアさんは俺に自分の剣を持って行く様に勧めてきた。

『でかすぎて、使いづらいからいらね！』って断ったら、何故かピエールが『お前、もう少し言葉を選べ！』って脇腹を殴ってきた。

(俺Mじゃないから！やめて！マジで！)

当のピエールはラインハットに残るのかと思ったが随行を表明して

きた。

『僕に惚れちゃったのおく？しょうがないなあ〜！』って戯けたら  
『ヘンリー殿に、お前の常軌を逸した行動を押さえる様、依頼され  
た。』ってさ！

ちえっ… やつとモテモテライフ、テイクオフ！かと思っただのに！  
まあ、そんな訳で短い間だが、今はサンタローズで働いている。（  
無償）

10年前にあった物が殆ど無くなってしまったが、10年前には無  
かった美しい物もある。

教会の横手で咲いている美しい桜の木だ。

10年前にフレアさんに渡した桜の枝を、挿し木にして育て続けた  
様だ。

ラインハットの兵が踏みにじり毒を撒いても成長し続けた桜。

フレアさんは『リユー君桜』と呼びこの木を心の支えに頑張ってきたと、話してくれた。

胸が熱くなるのを感じフレアさんを抱き締め二人して泣いてしまっ  
たのをピエール達に見られ恥ずかしかった。

<サンタローズ>  
フレアSIDE

リユー君がまた帰ってきてくれた。

しかもラインハットを正し、パパスさんの名誉を回復してくれた。  
そしてパパスさんのお墓を、実家だった所の裏に建てるそうだ。

最初は手伝おうとしたのだが寂しそうな瞳で断られた…

少しの期間だがサンタローズの復興も手伝ってくれている。

瓦礫を易々と運ぶリユー君は逞しくて格好いい。

私は兵士達に襲われて以来、男性に触れる事が出来ない。

男性特有の男臭さを感じると、過去の事が脳裏に蘇りパニックを起こしてしまう。

でもリユー君には平気だった。

再会をした時も、そして今も。

「リユー君？何を探しているの？」

教会裏の物置小屋でリユー君が捜し物をしている。

狭い小屋の中にリユー君の汗臭さが漂っている。でも、全然怖くない。全然嫌じゃ無い。

むしろ、もっとリユー君を近くで感じたいと思っている。

「釘抜きを探してるんだけど…フレアさん知らない？」

「釘抜きなら、その奥に…きゃー！！」

私はリユー君の向こう側にある棚に手を伸ばしバランスを崩した。

リユー君にもたれかかる様に抱き付き、リユー君の顔を…瞳を見つめている。

私からか…リユー君からか、分からない。互いに唇を求め重なり合う。

唇を離し、互いの身体をまさぐり合いながら私はリユー君の耳元で呟く。

「私…いつぱいの男性に、汚されちゃった…そんな私でも…リユー君…いいの？」

私はリユー君が求める様な女では無くなっていた。

今更ながらその事を告げ過去を悔やんだ！

しかしリユー君は私の体中にキスをする時、

「フレアさんは昔のまま綺麗なフレアさんだ。僕の大好きなフレアさんだ。」

そう優しく諭してくれた。

私達はもう止まらない。誰に見られても。誰に咎められても。

もし10年前、パパスさんがラインハットへ行かなかったら私達はどんな10年を過ごしたのだろうか…

リユー君の息づかいを感じ温もりを感じながら、そんな事を考えて

しまつ。

フレアSIDE END

<サンタローズ>

祝！卒業おめでとう。祝！大人の仲間入りおめでとう。  
いや〜…今夜あたりーって考えていたけど、まさか向こうから来る  
とは…

やっぱ昔にフラグを立てておいた甲斐があつたね！

心地よい疲労感を纏い実家跡へ歩いていくと、ものっそい怖い目で  
俺を睨むピエールが立っていた。

「な、何ツスカ？怖い顔して…」

「貴様…この村に寄つたのは、シスターに良からぬ事をする為か！  
はい。ご名答！なんて言つたらきつと殺されるので秘匿する。」

「ち、違いますよお。え！？もしかして、さっきの見てたの？」

「釘抜きを取りに行つて、なかなか戻らんから心配になつたんだ！  
「もお〜えつちい！じゃあ、見てたら分かるだろ。釘抜きを探して  
いたら、フレアさんと接近してしまい、色々と込み上げてしまった  
拳げ句あぁなつたつて。」

ピエールはジト目で睨んでいる。

「まあ…いい。で、釘抜きは？」

「あ！別の物抜くのに気を取られて、釘抜き忘れた！」

「もういい！私が取ってくる！！」

「そんな事言つて、フレアさんにエッチな事すんなよ！あれは僕の  
女だぞ！」

「イオ！」

俺は、怒りに任せた彼女のイオで吹っ飛ばされた。

普通、こんな所でイオなんて唱えないよね！？

残りの数日間はフレアさんのベットで目を覚ました。

ぶっちゃけ、旅の目的なんて忘れていたけど、ピエールのおかげで  
思い出す事が出来た。船が出港する当日の朝に…ギリギリだったけ  
ど…

## 22・話せば分かり合える。言葉が通じればだけど。

<ポートセルミ・酒場>

船旅は楽でいい。でも、水夫は男ばかりなので楽しくない。仕方ないので、痛いのを我慢し。ピエールにちょっかいを出す。だけど、ピエールの剣の技量を上げるだけに止まった。(めっさ、拒否られた)

ポートセルミに着いたらまず酒場による。

聞いた話じゃ、裸同然の格好をした踊り子さん達が、激しいダンスを繰り広げるステージがあるらしい!

俺は鼻息を荒くして乗り込んだ。

そこは宿屋と酒場が一つになった大きな施設だ。中央にかなり広いステージが有り、左に宿屋のロビー、右に酒場がある。

残念ながら裸ダンスは夜の様で、今はまだ朝でした。

仕方がないのでちょっと遅めの朝食にします。

テーブル席に着こうとしたら、少し奥で農夫っぽい服装のおっさん一人を、兵士崩れっぽい服装の三人が取り囲みナンパしていた。

変わった趣味だな!?

仮にそっちの気が有ったとしても、あのおっさんに魅力は感じないが...?

好奇の目で眺めていると、兵士崩れの一人と目があつた!

俺、美少年だからピンチ!?

<ポートセルミ・酒場>

ピエールSIDE

人様の思考を制限するつもりはない。

何を考え、何を妄想しようと構わない。

しかし口に出すのは控えてもらいたい。

「この町、裸で踊るねーちゃんのステージがあるらしいぜ！」

水夫から仕入れた情報を無駄に発表している。

「チップはずんだら、僕の上で踊ってくれるかなあ！」

本当に最悪だ。

ヘンリー殿が『リュカに財布を渡すな！』と、言っていた意味がようやく分かった。

ステージが夜からと聞き、リュカのテンションが落ち着いてくれた。鬱陶しかったので助かった。

食事をしようとテーブルに向かうと、奥で一人の男性が三人のならず者に囲まれている。

「いいから、さっさと出せよ！」

どうやら恐喝の様だ。

不届きな台詞が耳に入る。

ならず者のリーダー格がこちらに気付き近寄ってくる。

そこそ腕は立ちそうだ。私一人だと苦戦するかもしれない。

どうやらリュカが不快感を露わに睨んでいたのが気に入らない様だ。

「何見てんだ！？にいちやん！！」

ありきたりの台詞に思わず笑いそうになる。

「いえ…変わったナンパだな」と思っています。あ！どーぞ…気にせず続けて下さい。邪魔しちゃ悪いから。」

「ぶーっ！！」

私は思わず吹き出してしまった。

リュカの台詞か、私が吹き出した事か判断付かぬが、怒りを露わにしたならず者は剣を抜きリュカに斬りかかった。

リュカは難無く攻撃を流すと、勢いをそのままにならず者を壁際に投げ飛ばした。

勝負は一瞬で着いた。

リーダーをやられ、手下二人は慌てて逃げて行く。（伸びてるリー

ダーも連れられて)

この近距離で、あの剣速を去なすとは…流石はリユカだ。

「あつぶねえとこ、助けていたただきい、あんがとなあ。」

絡まれていた男性が、お礼と共に自身の状況を説明してきた。(多分：訛りが強すぎてイマイチ理解しにくい)

ピエールSIDE END

<ポートセルミ・酒場>

「そつたら訳でえ、先に1500Gわたすとくんでえ、よーしくたのんますだ!」

一方的に喋り、金を置いてモテモテ農夫は去っていった。

何が起こったのか一個も分からん!?

急に笑い出したピエールにキレて、兵士崩れが剣を抜いた。(え!

?そんな怒る事?)

でも俺に攻撃してきた。(俺笑ってないし。)

あまりに近かったので避けきれず兵士崩れを押したら、勝手に飛んできた。(そしたら、三人とも帰っちゃった。何かのコント?)

そしたら、モテモテ農夫が理解出来ない言葉で喋り、金置いて帰った!(何この金え!怖くて下手に使えない!後で利息が付いて100倍返しとか言われない!?)

「ひょくっほっほっほ。随分と厄介な事を引き受けましたなあ。」

いきなりローブを着た骨みたいに痩せた爺さんに話し掛けられた。

「あの…貴方は?」

ピエールが恐る恐る聞く。

「ワシは魔法使いのマーリン。まあ、お主らから言えばモンスターじゃな。おあと、警戒せんでいい。人間の中に紛れて暮らしているだけで、危害を加えるつもりはない。」

「ところで…何が厄介な事なんですか？」

俺の問いに呆れて答えた。

「なんじゃ！理解せずに依頼を受けたのか？」

「だあて、何言ってるか分かねーだもん！」

「しょうがない、かいつまんで説明してやるから、一杯おぐれ。」

・  
・  
・

マーリンの説明は分かりやすかった。

ここより南のド田舎にカボチ村があり、そこで虎の様な狼の様な大きな化け物に、作物を荒らされ困り果てている。だから腕の立つ俺達が、化け物退治をする事になった。その前金として、半額の1500Gを置いていった。

「なるほどね！そんな事を言ってたんだ！？ところで爺さん。」

「なんじゃ？」

「一杯おぐれって、それ三杯目。」

「細かい事言うな！1500Gも手に入ったんじゃ。ケチくさい事言うんじゃない。」

「依頼を失敗したら、返せとか言われるかもしれないだろ！まだ使えないよ！」

「はあ？そんなもん、持ち逃げしちまえばいいじゃろ！勝手に金だけ置いてった向こうの落ち度じゃ！貰っちゃまえ！」

「ざけんな！僕はそんな卑しい育ち方していない！人様から金を盗むなんて！もし、盗むとしたら、女の子のハートだけ。」

「…随分と馬鹿がいたもんだ。」

ムツ！何この爺！ムカつくう！ちよつと言ってみただけじゃん！

銭形 部に『ヤツは貴女のハートを盗みました』なんて言われてみたいだけじゃん！

「馬鹿じゃが面白い。どれ、ワシも手伝ってやろう。」  
え……なんか、めんどくせーのが増えた。



22・話せば分かり合える。言葉が通じればだけど。(後書き)

カボチ村の訛りにつつこみを入れないで下さい。

作者もよく分かってません。

従って、今回と次回だけでカボチ村は2度と登場しません。  
カボチファンの方にはすいません。

### 23・ペットの躰は飼い主の義務。不可抗力なんて存在しない。

<カボチ村西の洞窟>

ピエールSIDE

魔法使いのマーリンを仲間に加え、即刻出立した我々は昼前にカボチに着いた。

タイミング良く畑を荒らす化け物に出会した。

あれはたぶん、キラーパンサーだろうが大きさが半端じゃない！

通常のキラーパンサーより二回りは大きい。

まさに化け物だ。

しかし我々の気配に気付くと踵を返して去っていった。

カボチ村の村民は皆、理解する事が出来ない訛りの人々で、辛うじて村長とは会話が出来た。

村長曰く「あの化け物は西の洞窟からやって来る。」

私もマーリン老師も待ち構える戦術を提示したのだが、リュカが乗り込む事を強行した。

本来ならば魔獣の巣へ乗り込むのは危険なのだが、リュカは一人で乗り込みそうな勢いだったので渋々ついて行く。

何か変だ！

カボチ村からここまで、黙り考えている。

それまでは揚々と歌っていた。

あの魔獣を見てから表情が硬くなった。

私は怖くなってきた。

リュカは村に被害が出る事を危惧し村での戦いを避けた。

それ程強敵なのだ！リュカ程の男を、これ程緊張させる。

強敵との戦いは騎士の本懐、そう思っていたのに…今は逃げ出した程恐怖している。

リュカは分かっていたのだ。

恐怖で押し潰されそうになる我々の心を。  
だから歌い、緊張をほぐしてくれていた。  
だが、今はその余裕が消えた。

我らが束になっても勝てなかったトロールを、一人で瞬殺してしまう程の男が…

奥に進むにつれ魔獣の気配が高まっていく。  
そして魔獣の巣へ辿り着く。

巣の奥で魔獣がこちらを睨んでいる。  
剣を握る手が震える。

こんなじゃまともには戦えない！リュカの足を引っ張ってしまう！  
「ここからは僕一人で行く。みんなはここで待機していてくれ。」

心を見透かされた。リュカは我らを守る為、一人巣の奥へ進む。  
私は恐怖で声が出ない。

一歩も動けない。  
リュカ一人を見殺しにしている。

いやだ！そんなの、いやだ！！私は、兎に角叫んだ！  
「リュカ！！！」

次の瞬間、キラーパンサーは襲いかかりリュカを押し倒して噛み付いている…様に見えた。

「ふにゃ〜。」  
「あははは、やっぱりプツクルだ！」

え！？  
「くすぐつたいよ！大きくなつたなあ！」

「ふにゃふにゃごろにゃーお！」  
ええ！！

「あ〜…リュカ？何じゃ…その、説明を…」  
「ん？ああ！紹介するね、10年前に僕が飼っていた猫のプツクル。  
僕の大事な家族だ。」

私の緊張の糸が切れ、その場にへたり込む。  
「あれ？どしたの、ピエール？猫、嫌い？」

「ね、猫じゃない！それは、猫じゃない！！キラパンサーだ！地獄の殺し屋、キラパンサーだ！！」

「どつちでもいいよ！そんなん！プックルはプックルだ！」

私はこの怒りをどうすればいいのか…やり場のない怒りをどうすればいいのか…途方に暮れる。

老師が私の肩に手を置き、瞳を閉じて首を横に振る…きつと、同じ気持ちなのだろう。

「ふにゃーご。」

リュカとじゃれてたプックルが突然、巢の奥から一降りの剣を持ってきた。

リュカは剣を手に取り抜き放つ。

その刀身は10年間手入れをされてなかったにも関わらず、美しい光を放っていた。

「父さんの剣だ。プックルがずっと守っていてくれたんだね。ありがとう。」

剣を構えるリュカを見て、私の背中に稲妻が走った。

美しかった。リュカの為に存在するかの様な剣。

そして、それを構えるリュカ。

そのどちらも美しく、私の目と心は奪われた。

リュカは剣を納め腰に携えると、こちらに戻ってきた。

思わず顔を背けると、楽しそうにニヤけている老師と目があった。

くっ！見られた！

「も、もう用は無いだろ！さっさと帰るぞ！」

恥ずかしさから、先頭を歩き出す。

「はあ…：やっぱり、報告しないとダメだよな？」

往路よりテンションの低いリュカがいる。

私は、助けん。お前が話をつける！

ピエールSIDE END

<カボチ村>

「なぐんも言うな！分かってからあ、なぐんも言うな！ほれえ！約束の金だあ！それ持って、とつとと出てってくんろ！」

1500G入った袋を投げ付けられ立ち尽くす。

感じ悪！ものっそい感じ悪！

「あの、お金は受け取れません！前金の1500Gもお返しします。

」

「いんや、まゝた、あつたら恐ろしい化け物けしかけられてえこまるけえ！その金持ってこんの村から出てけえ！」

さすがに腹立つ！言い方が腹立つ！

「ええ！こんな胸くそ悪い村からは、出て行きますよ！胸くそ悪い村の、胸くそ悪い金なんぞいらん！」

「んなあー！」

「ご安心下さい！もう二度とこんな胸くそ悪い村には来ません！旅する先々で、ここに胸くそ悪い村がある事を広めておきます！近づくと胸くそ悪い思いをするだけだつと！」

言い終わると、後ろでギャーギャーわめく村長を無視して退室した。

<カボチ〜ポートセル三街道>

ピエールSIDE

私達は暗い街道を黙々と進む。

疲労感が募る中歩き続ける。

リュカ以外、我々は皆モンスターだ。

そのモンスターをリュカは、仲間と言い、友達と言い、家族と言っ  
てくれる。

しかし、世の人々にはモンスターと言うだけで忌諱する人がいる。そんなモンスターと仲の良いリユカも忌諱の対象になる。そんな思いが我々に重くのし掛かる。

「ふにゃ〜…」

「馬鹿だなあ〜。プツクルは悪くないって。」

「ぐるにゃ〜…」

「この10年…色々あったのだから、しょうがないさ。」  
リユカの優しさが心に染みる。

私はリユカの為に尽力しよう。そう心に誓いを立てた！

ピエールSIDE END

24・自分の好きな事に熱中したい。でもまず好きな事を見つけないとね。

<ポートセルミ・酒場>  
ピエールSIDE

ポートセルミに着いたのは深夜になってからだ。  
寢床を確保すべく宿屋で記帳する。

ステージではダンサー達が煌びやかにダンスを披露している。

一人元気になったリュカは、ステージにかぶりつきヒートアップしている。

もはやつつこむ気力もない我々は割り当てられた部屋に行くと、手間取ることなく眠りについた。

翌朝、併設される酒場で遅めの朝食をとっていると、リュカだけがなかなか起きてこない。

次の目的地を話し合わねばならない為、部屋まで起こしに行く。

「リュカ！何時まで寝ているつもりだ！」

そう言いリュカの布団を剥ぎ取った。

リュカは裸で寝ていた。

そして、見知らぬ女が裸でリュカに寄り添い寝ていた。

「な、な、な…、何をしているか！！馬鹿者！！！」

二人揃って起きあがり、私を見て互いを見る。

「やあ、おはよう、クラリス。ごめんね、騒がしい朝で。」

「おはよう。しょうがないよ、すぐに出発するんでしょリュウちゃん？」

そう言っただけで女はそのそと服を着る。

いや、服などとは呼べない。

裸より幾分マシな、ほぼ裸のステージ衣装を身に着け「リュウちゃん！今度寄った時は、すぐ声かけてね！リュウちゃんの上だけで踊

ってあ・げ・る？」そう投げキッスを残し部屋を出て行った。

「ひょくっほっほっほ！リユーちゃんはお盛んじゃのお。」

「わくっはっはっは！若さ満喫！」

リユカと老師が下品な会話を繰り広げる。

「馬鹿な事言ってないで今後の事を考えろ！」

「いや、もう決めてあるよ。」

「ほう。何処へ向かうのじゃ？」

「ここから西に行った町、ルラフェンへ。」

「確か：複雑な町の造りで有名じゃが：何があるんじゃ？」

「可愛い女の子がいるから、等と言う理由なら許さんぞ！」

「違う違う！なんでも、すごい魔法を研究している爺さんがいるらしい。今後の旅に役立つかなあーと思っただ。」

思いの外まともな理由に安心した。

「して、どんな魔法何じゃ？」

「それは知らん！」

「どこから仕入れた情報じゃ？」

「昨晚クラリスが教えてくれた。」

「ひょくっほっほっほ！自慢の剣を使って情報収集をしておったのか！」

「わくっはっはっは！僕が腰を振って、彼女が情報を出す！ギブ・アンド・テイクってヤツですよ！」

私は、不快感を露わに睨み付けていた。

PIERRE SLIDE END

<ルラフェン>

この町は入り組んでいる。まるで巨大迷路の様だ。

転生前の子供時代、俺は喜んで遊園地などのアトラクション、巨大迷路に飛び込んだ。

大人になってからも彼女と巨大迷路に入ってイチャつく事も暫し…しかし今日は喜んで飛び込んでもないし、イチャつく彼女もいない！（ピエールにそんな事しようものなら、最近覚えた『イオラ』をかまされる！）

「あゝ！腹立つ！何、この町！全然行きたい所に行けないじゃん！目的の場所は見えている。

余計に腹立つ！

「誰だよ、こんな町に行くなんて言ったのは！」

「お前だ！！」

ちよー怒られちゃった！みんなイラついてたのね…

そんな中、急にプックルが走り出した。

『ワシあゝ疲れた』とか言つて、勝手にプックルの背中に乗り楽をしていたマーリンを振り落として走り出した。

「いたたたた…なんじゃ、あいつは！」

「いや…ほら、猫だから…」

「猫じゃない！キラーパンサーじゃ！」

プックルを追いかけると、目的地に到着！

さすがプックル！大好きプックル！君は僕らのヒーローだ！

皆プックルを褒めまくる！撫でまくる！

祝賀ムードで盛り上がっていた。

「やかましい！人んちの前でガタガタ騒ぐなー！！」

中の住人に怒られました。

みんな、しょんぼりムード…

「申し訳ありません。魔法の研究で有名な先生がいると聞いてやって来ました。この町の入り組んだ構造のせいで辿り着くのに難儀してしまいましたが、今辿り着き嬉しさのあまり、はしゃいでしまいました。どうか許して下さい。」

「ほ〜ほっほっほ！ワシは有名か！？」

「はい！先生！」

「先生なんて、照れるのお〜。ワシの名はベネットじゃ。ま、入れ、入れ！」

ふっ…チヨロいぜ…

中に入るとイカニモな室内だ！

色々な物が散らばり、足の踏み場もない。

イヤだ…俺、この部屋じゃ住めない…話を終わらせて、サッサと出て行きたい。

「それで、どのような魔法を研究しているのですか？」

「うむ！『ルーラ』と言う魔法を知つとるか？」

「ルーラ…ですか？何かエツチな響きですね。」

「エツチじゃないわ！この魔法は、行った事のある場所なら瞬時に移動する事の出来る魔法じゃぞ！」

え！瞬時に移動！？瞬間移動の事か？

「…すげえ〜…」

「ふっふっふ…そうじゃろ！そうじゃろ！！」

「じゃあ…じゃあさ！ベットで寝ていてトイレ行きたくなったらビュン！とか、お腹空いたら食料庫へビュン！とか、高い所へ風船が引っかかっちゃったからビュン！とか出来ちゃう訳！？」

「ま、まあ…可能じゃが…もうちつと広大な範囲で使つて欲しいのお…」

「覚えたい！すぐ覚えたい！今覚えたい！」

「では、ここより西に一山超えた所にある、『ルラムーン草』を採つてきてくれ！それがあれば、ルーラが完成する。」

「その草の特徴は！」

「夜になると、淡く光る。」

俺は聞き終わると、疾風の如く翔だした。

しかしルラフェン迷宮に嵌り、プツクルに救出されるまでベソをか

いていた。

25・「押すなよ！押すなよ！！」と言うのは、「押せ！」って言っているのよ

<ルラフェン〉西の草原>  
ピエールSIDE

これ程やる気のあるリュカ見るのは初めてだ！

幾度と無くモンスターの群れに襲われたが、その全てをリュカ一人で蹴散らしていく。

よほど『ルラ』を手に入れたいのだろう。

我々の出番がない。

モンスターが現れても、剣を抜く前に終わっている。

これ程強いのなら、普段も少しは協力してくれればいいのに…

ルラフェンの西の山を登り切ると、そこは台地になっていた。

広く綺麗な湖が広がる。

今日はここで野営する。

食事も終わり寝ようとする、リュカが服を脱ぎだした。

「な、何だ！いきなり！変な物見せるな！」

「変な物って…ポートセルミじや隅々まで観察してたじゃないか！レポート提出してもらおうかと思ったくらいに。」

「観察してない！お前が服を着なかつただけだ！それより何で今服を脱ぐ！」

私は手で顔を覆い、文句を叫ぶ！（しかし指の隙間からしっかりと見える。すい…）

「せっかく綺麗な湖があるから、水浴びでもしようと思って。ピエールもどう？今、汗臭いでしょ！？何なら優しく洗ってあげるよ。」

「いらん！」

リュカは悪びれもせず、クスクス笑うと湖へ入り身体を洗いだす。

リュカの体は傷だらけだ。

全て奴隷時代の傷らしい。

傷を見るだけで、どれほど過酷だったかが伺える！

私はリュカの逞しい身体に見とれていた。老師の視線に気付かず…水浴びが終わり、私の所に戻ってきたリュカは「覗いたりしないから、ピエールも汗を流しておいで。」と、優しく勧める。

正直言うと、私も水浴びをしたかった。だが…

「本当に見るなよ！」

「見ないって。」

「絶対だぞ！」

「絶対見ないよ。」

「お前！本当に見るなよ！見たら、殺すぞ！」

「あのねえ…あまりしつこいと本当は見えてほしいんじゃない？って、勘ぐるよ！」

「うっ…老師！見張っていて下さい！リュカを見張っていて下さい！」

「信用無いのお。」

「ね！」

私は物陰で素早く服を脱ぎ湖に浸かる。

身体を素早く洗い汗を流す。

リュカの事だ。きつと覗いているに違いない。すごく恥ずかしい。でも、リュカがせっかく汗を流す様勧めてくれたのだ。

それに、リュカになら見られても…恥ずかしいけど、リュカになら…

私は水浴びを終えると、服を着て皆の元へ戻った。

「老師！リュカは覗いてないだろうな！」

「安心せい。すぐ寝てもうた。覗いとりやせんよ。」

「…」

くそ！何か腹立つ！

ピエールSIDE END

<ルラフェン>

俺達はルラムーン草を手に入れると、鬼神の如きスピードで町に戻り、ブックルの案内でベネットさんの所に帰ってきた。

ベネットさんにルラムーン草を渡すと、早速調合にとりかかる。

ベネットさんの説明では、魔道書を読んでも魔法適正が無いと使えないので、調合した薬を飲む事で、魔法適正を付けると言う事だ。

つまり、ベネットさんが作る薬を飲んで、ルーラの魔道書を理解すれば、ルーラを唱える事が出来るらしい。

ベネットさんが調合している間、ルーラの書を読み理解した。

もしかしたら最初から適正が有るかもしれない…なんせ主人公ですから！

試しに唱えてみる。

「ルーラ」

…………… 静かに時が流れた。

「よし！薬が出来たぞい！」

出来上がった薬は形容し難い臭いを放っている。

100%断言出来る！味も最悪だろうと…だって、入れてた物がすごかったもん！

「ただ、残念な事に…一人分しか薬はない。誰が飲むかのう？」  
満場一致で俺になった。

正直俺もこんな物飲みたくない…が、ルーラの魅力の方が勝る！俺は躊躇わず一気に飲み干した。

走馬燈が見えました。(父さん…)

気が付くとみんなが心配そうに俺の事を覗き込んでいる。

特にピエールの顔が近い。どうやらピエールに膝枕されているようだ。柔らかい太腿が俺を刺激する。

思わずピエールを押し倒す俺！

「トチ狂うな！」と股間を蹴り上げられ身悶える俺！  
心配してくれたみんなに呆れられる俺！

そんな俺が大好きな俺！

「さっさと起きんか！」

股間を押さえながら、へっぴり腰で立ち上がる。

「さ、ルーラを唱えてみい。何処か遠くをイメージして唱えてみい。」

「

む、無理ッス…いま、イメージ出来ねッス…」

・  
・  
・

よし！気を取り直して（宝玉が定位置に戻ったし）意識を集中する。

うーん…何処行こう？

フレアさんの所に行くか？

いや、成功すれば何時でも行ける。

ヘンリーの所に行って自慢するか？

うん！そうしよう！

「ルーラ」

目の前にラインハット城がそびえていた。

大成功！

26・ペットを撫で回してもご主人に怒られないが、嫁を撫で回すと怒られる。

<ラインハット城>

大成功！

俺も無敵！

やばくなったら即座に逃げられる。

「なんと！！おぬしの魔法力は途轍もないのお！」

ベネットさんも連れてきてしまった様だ。

「何を驚いているのですが、ご老人？」

「本来、この魔法は個人単体用なのじゃよ。」

個人単体用？なんじゃそれは？

「術者一人だけに効果がある魔法なんじゃ。」

何だかよく分からんが俺すごいらしい。

ま、どうでもいいや。

「そんな事より、ヘンリーに自慢してくる。」

「そ、そんな事って…すごい事なんじゃぞ…」

ヘンリーの所に行ってルーラの事話したら驚いてくれた。

でも、俺達結婚しましたって発表の方が俺驚いた。

ヘンリーとマリアさんが結婚して本当にめでたいと思う。

思うけど、何か悔しいので嫁さんにセクハラをする。

マリアさんの身体を撫で回す。胸、腹、尻を優しく、やらしく撫で回す。

あれ？何か違和感があった…

ブチ切れるヘンリーに真面目な口調で問いかけた。

「出来ちゃった結婚？」

「な！何で分かるの！？」

切れてたヘンリー、一転して驚く。

「マリアさんのお腹触ったら、命の暖かさを感じた。」  
「お前…やっぱり、すげーな！」

この後マリソルやデルコ、デールに会って近況を報告し合った。  
デールから『天空の盾』の情報を貰った。

サラボナと言う町の豪商。ルドマンさんが家宝として所有しているらしい。

ベネットさんを送り届けたら、次の目的地はサラボナだ。  
ちなみに帰り際、またしてもマリソルに泣き付かれました。ちょー  
かわいいー！

<サラボナ>

フローラSIDE

はあ…困ったわ、私結婚なんて考えていないのに…  
相変わらずお父様は強引すぎるわ。

あら？あれはアンディ！？どうしたのかしら？

「アンディ、どうしたの？」

「うーきゃんきゃん！！」

「や、やあフローラ！あの、この犬どっかやってくれないかな？」

「リリアン！ダメよ！」

私はリリアンを抱き上げアンディに向き直る。

「うー！」

リリアンはまだ唸っている。私以外には懐かない。

「フローラ、聞いたよ結婚の事。」

「そうなのよ。私も困ってしまっ…」

「フローラ！僕も婚約者選びの試練に参加するつもりだ！」

「え！？アンディどうしちゃったの！？お父様はとて危険な試練  
を用意するつもりよ！危険すぎるわー！」

「そんな事関係ないよ。ぼ、僕は君の事が好きなんだ！ずっと…ずっと前から！」

「ア、アンディ…そんな…私は…」

「だから、試練を成功させたら…その時は…」

そこまで言つとアンディは私の家に入つていった。

今日、お父様が試練の内容を発表するから…

戸惑い惚けていると、私の腕からリリアンが飛び出した。

いけない！リリアンは私以外に懐かない！捕まえないと！

人通りも疎らな並木道。

町の入り口に程近い所でリリアンを見つけた。

なんと、リリアンは男性に飛び付いていた！

よくアンディが噛み付かれているのを思い出し、私は慌てて近寄つた。

「申し訳ありません！うちの子が…」

私は目を疑つた！私以外…家族にも懐かないリリアンが、見ず知らずの男性にじやれついている。

私と同じくらいの歳の男性は、紫のターバンを巻き顔は日に焼け、逞しい体付きをしている。

その人の澄んだ美しい瞳が私の心を惹きつけた。

「リリアンちゃんは可愛いですね。」

私は我に返り慌てて謝罪した。

「申し訳ありません！うちの子がご迷惑を…何故…リリアンの名前を！？」

フローラSIDE END

<サラボナ>

サラボナの町は活気に満ち溢れていた。

そんな町を歩いてみると、前方からふわふわな毛並みの小型犬が、走り寄り飛び付いてきた。(動物好きゲージMAX!!) ちよー可愛い!すげー可愛い!

俺は犬を撫で回し話し掛ける。

「君の名前は何て言うの?…そう、リリアンって言うの。可愛い名前だねー!」

ふと顔を上げると、そこには一人の女性がこちらを見て立っている。とても美しい…清く可憐なと言う形容が彼女以外に使えない程の、美しくお淑やかそうな女性が俺を見て立ち尽くしている。

リリアンが「きゃん!(ご主人様)」と、鳴くのが聞こえる。

この人引いてるよね!そりや普通引くよ!自分の犬と戯れ喋っている、見ず知らずの男を見たら…

せつかく美人と仲良くなるチャンスなのに『なに、こいつ!キモッ!』とか思われるのヤダー!

なんとかしないと…

「リリアンちゃんは可愛いですね。」

「申し訳ありません!うちの子がご迷惑を…何故…リリアンの名前を!?!」

しまったー!!!

何て言う!?!何て言い訳する?「犬に直接聞きました」って、電波なの!?!俺、電波受けてんの!?!

何これ!?!何このドン引きスパイラル!?!

どうしよう、どうしよう!不審がつてるよ彼女!

何か答えないと…何か言わないと…

「あ、あの…お名前は…?」

名前聞かれた!やばい!『不振人物が町に潜入!』なんて町中に警戒を呼びかけるのか!?!

ヘンリーの名前騙るか!?!いや、仮にも王族の名はまずい!色々まずい…

「リユカと申します。美しいお嬢さん。」

ムリです。もうムリです。諦めましょう…傷付いた心はサンタローズで癒そう。

26 ペットを撫で回してもご主人に怒られないが、嫁を撫で回すと怒られる。

ついに、嫁選び編突入！

27・何だかよく分からない状況になったら考えるのを止める。だってよく分か

<サラボナ>

フローラSIDE

「リュカと申します。美しいお嬢さん。」

リュカ！？もしかして…

私は懐から、美しいカワセミを描いたワッペンを取り出し男性に見せた。

「これに…見覚えありますか？」

彼の瞳が綺麗に輝く。（この人格好いい）

「もしかしてフローラ…？君、フローラかい？」

ああ…やっぱりあの時のリュカだ。

優しく私を諭してくれたリュカだ。

私の初恋のリュカ…とても遅く格好良く素敵に素敵な男性になっている。

「覚えていてくれたんですね。」

「忘れる訳ないよ。ステキな物を貰っちゃったし。」

やだ、恥ずかしい…そう言えば私、リュカにとんでもない物を渡してたんだ…

・  
・  
・

リュカはこの町に天空の盾を探しに来たという。

天空の盾とは我が家の家宝の盾の事だと思っ。

これはチャンスだ！

私の婚約者選びの試験に合格すれば我が家の財産…つまり天空の盾も手に入れる事になる。

リュカが合格してくれば、好きでもない人と結婚しなくても…いえ！リュカと結婚出来る！

「リュカ…私に天空の盾について心当たりがあります。」

「本当かい！それは助かるよフローラ。君は僕の女神様かもしれないね。」

「そんな…恥ずかしい…リュカこそ私の…」

「あ、歩きながら話しましょう。」

「恥ずかしさのあまりリュカの顔をまともに見れない私は、リュカに背を向け歩き出す。」

「多分その盾は、私の家の家宝の盾だと思います。」

「フローラの…」

「今、我が家ではあるコンテストが催されています。いえ、コンテストなどと言う生易しいものではなく、とても危険な試練が！」

「危険な試練…」

リュカの声に緊張感が混じる。

「その試練に成功した方に、我が家の財産を譲渡する。もちろん天空の盾も譲渡対象です。」

「うん…財産はともかく、盾だけでいいんだが…」

私は彼の呟きに驚いた。

普通の人達は財産のフレーズに色めき立つのに、リュカは興味を示さない。

やはり彼は他の人と違う。

私は彼に成功して欲しい。

だから結婚の事はギリギリまで黙っておく。

だって…私と結婚したくないと言われたくないもの、そんな事言われたら私…

フローラSIDE END

<サラボナ>

危険な試練かあ…

やだなー…危険な事なんて…やだなー！

楽に金持ちになれるならいいけど、危険な事してまでは…

「うーん…財産はともかく、盾だけでいいんだが…」

盾だけでいいので危険な試練を受けなくていいですか？って言うてもダメかなあー。

あー！ヤダ、ヤダヤダヤダ…危険な事ヤダ！

と、脳内で千人の俺が駄々っ子の様にのたうち回っていると、すごい豪邸に到着した。

「ここがフローラのお家？」

「いえ…こちらはゲストハウスです。母屋はこの奥に…」

世の中舐めてました。奥にもこのつそい豪邸が控えてました。

喻えるならゲストハウスは、幼児用のビニールプール。

母屋はウォータースライダー付きの流れるプールだ。

もはや庶民の家など水溜まり以下だ。

そのウォータースライダーから、そろそろと沢山の男達が出て行く。

「あの方達は？」

「今回の試練を挑戦する方々です。」

こんなにいんの！

どんだけ財産あるんだよ！

このウォータースライダー見れば一目瞭然だね。

これきつとアレだよ。

一度穿いたパンツは二度と穿かない様な人生送ってたんだよ。

ああ、だからか！だからフローラはパンツくれたのか！

これ相当すごいよ。

ツパない危険度の試練が待ってるよ。

目でピーナッツ噛めとか、そんなもんじゃないよ。

中に入ると、またすごかった。

高そうな絵画とかシャンデリアとか…もう、ムリッス…

何より俺の気を惹き付けたのは、沢山の美人メイドさん達だ！イエ  
ー！(何が?)

メイドさん達も財産に入るのかな？

「お父様。」

「おお、フローラ！何処へ行っておったのだ？ん？そちらの方は？」

「はい。今回の試練をお受けしたいそうです。ご説明をお願いしま  
すわ。」

「なんと！今、終わって皆出て行った所なのに。」

「あの？時間切れ…ですかねえ？」

ぶつちやけ構わん！むしろその方がいい！そうすれば『盾だけくだ  
さい』って言いやすい。

「まあ、構わん。」

えええ！いいのおお！？ちょー怖いんですけどお！

「あの…試練って何するんですか？」

「うむ。ここから南に行った所にある『死の火山』へ行き『炎のリ  
ング』を取ってくる事。さらに、ここより北に行った『滝の洞窟』  
で『水のリング』を取ってくる事だ。」

「え！？そんなんでいいんですか？」

「あ、ああ…ただしルールがある！」

「るーるるる？」

「ルールだ、ルール！」

ああルールか。てつきり『夜明けのスキヤット』かと思った。

「必ず挑戦者である君が直接行く事。もう一つは、協力者を連れて  
行っても良いが一人だけだ。」

「一つ質問が。」

「何かね？」

「僕はモンスター使いです。仲間の中にスライムナイトがいます。  
一人にカウントしてもいいですか？」

「ふむ。いいだろ。」



28・口約束も契約の内。迂闊な事は言えない。

<サラボナ>

取りあえずピエールを連れてつても大丈夫な様だ。一安心。  
あ、そうだ！一応天空の盾を確認させて貰えないだろうか？  
全然関係のない盾に苦労はしたくない。

「あの、家宝の盾を見せて頂いてもよろしいですか？」

「おお、構わんよ。その壁に飾ってあるのがその盾だ。」  
しれつと飾つてあるから気付かなかつた！

俺は持つてきた天空の剣を包みから出し、盾に近づける。  
盾と剣は共鳴する様に、淡い光を放つ。

間違いない、天空の盾だ。

「き、君！その剣は何だね！何で我が家の盾と共に光っている？」  
俺は全てを説明した。

天空の武具の事、伝説の勇者の事、我が父パパスの事、母マーサの  
事、そして俺の人生の事を…

<サラボナ>

フローラSIDE

「なんと、そんな壮絶な人生を送っているのか…」  
私は自分がイヤになった。

リユカには目的がある。  
お父さんの遺言の為、お母さんを助ける為、その為に地獄の様な苦  
しみを耐え抜き、この町へやって来た。

なのに私は、そんな彼を騙し利用しようとしている。  
メイドが運んできた紅茶を、リユカは美味しそうに飲んでいる。

そんな彼からは、彼の壮絶な人生を伺う事は出来ない。  
「リュカ…あのね…今回の試練の本当の目的はね…」  
リュカは紅茶を飲みながら不思議そうな顔をする。  
「本当の目的は、私の結婚相手を決める事なの！」  
（ブツ！）

フローラSIDE END

<サラボナ>

「リュカ…あのね…今回の試練の本当の目的はね…」  
何だ？本当の目的って？人に嫌がらせをすることか？  
「本当の目的は、私の結婚相手を決める事なの！」  
（ブツ！）

思わず紅茶を吹き出した！

「え！何？財産譲渡の相手を決めるんじゃないの？」  
「何だ？君は知らなかったのか？だが、間違っではないだろ。フローラと結婚すれば我が家の財産も手に入る。」  
「いやいやいや！おかしいですよ、カテナさん！（byウツソ）  
「何考えてるんですか！娘の結婚相手をこんな方法で決めるなんて！そんな親、見た事無い！」

「ここにいるだろ。」

「ワア、ホントーダ！」

このおっさん！しれつと言いやがった！

「フローラはそれでいいの？」

「よく…ないです…」

「ほら！ルドマンさ」だから！

え！

「だから、真実を黙ってリュカに参加してもらいました。リュカに

合格してほしいから！私はリュカの事が好きだから！」  
フローラは泣いている。

きっと俺を利用した事を悔やんでいるのだろう。

また女の子を泣かせてしまった。最低だな俺。

「フローラ…僕は必ず二つのリングを手に入れる。そうしたら話し合おう。僕らはお互いの事を殆ど知らないのだから。」

< 死の火山 >

あの後一度宿屋に戻り、事の次第をみんなに告げた。

マーリンの爺は「ひよ〜っほっほっほ！フローラさんは美人なんじやる？お前さんの大好物じゃないか！良かったのお！」とかほざきやがった！

なんて爺だ！碌な死に方しないぞ！

そんな訳でピエールと死の火山に来ている。

他のみんなは宿屋で待機。

< 死の火山 >

アンデイスIDE

屈強な冒険者達が、このダンジョンの過酷さに耐えきれず早々に引き返して行く。

僕は諦めない！フローラと結婚する為に！

凶悪なモンスターが徘徊する中、慎重に気配を殺して突き進む。

僕も冒険者を一人雇った。自称？1の冒険者。報酬は成功払いで…

逃げ出すスピードが？1だった。まあ、後払いじゃそんなもんか…

一人は怖い…

モンスターに見つかりそうになれば、地べたを這いずり回りかわす。

壁と同化してやり過ごす。  
フローラには見せられない程情けない姿だ。

少しずつだが進んで行くと、遠くから歌が聞こえてくる。  
暑さと恐怖のせいで幻聴が聞こえてるのかと思っただが、どうやら誰かが歌っている。

他の挑戦者が大声で歌いながら進んでくる様だ。  
馬鹿なのか!?

このモンスターはかなり手強い!  
そんなモンスターの群れに、四六時中襲われ続けるのは危険極まりない!

にも関わらず歌い続けている。

歌に気付いたモンスターの群れが、僕の前を通過する。

僕は壁に同化してやり過ごす。(僕は壁、僕は壁です。)

歌は止まない。

途切れ途切れだが、すぐ再開する。

歌の源が僕の前を通り過ぎる。

紫のターバンを巻きマントをした逞しい戦士風の男だ。

彼の事は見覚えがある。

町でフローラと楽しそうに話をしてたのを覚えている。

彼はモンスターのスライムナイトを連れている。

出立前に町にモンスター使いがいると聞いたが彼の事らしい。

彼も財産目当てで、ご自慢のモンスターを連れてやって来たに違いない。

目の前で彼らが襲われる。

大声で歌っているからだ!

だが彼らは強かった。

僕では到底敵わない相手を、スライムナイトは一瞬で倒す。

しかし男の方の強さは、スライムナイトを凌駕するものだ!

4・5匹の敵を瞬時に駆逐する!

剣速が早すぎて、僕には刃が見えない…  
何事も無かった様に戦闘を終わらせると、何事も無かった様に進み始める。

この間30秒とロスはしていない…  
僕はこの人達を利用する事にした。

アンディSIDE END

< 死の火山 >

今日は喉の調子が良い！

『翔べ！ガンム』を歌っていたが、燃え上がりそうな歌だった為  
ピエールに止められた。

「リュカは熱いの平気なのか…」  
ピエールは辛そうに聞いてきた。

「うん！僕は寒いのは苦手だけど、熱いのは大丈夫。夏男！」

夏、大好き！熱いのへっちゃら！女性よ薄着になれ！！

「ところで…後ろのアレは何だ？」

ピエールは右手の親指を立てて、肩越しに後ろを指す。

さっきすれ違った、ヒョロい男が物陰に身を隠し（ているつもり）  
ながらついてくる。

「きつとこのモンスターに勝てそうにないから、僕らの事をボディーガード代わりに利用するつもりだよ。」

「いいのか？」

「別にいいよ。目的はリングだから。それさえ手に入れられれば…」  
リングさえ奪われなければ、それでいい…



29・人の過去は気にしない。自分の過去の方が気になるから…

<死の火山>

アンデイスイデ

案の定彼らはスイスイ進んで行く！

モンスターとの戦闘を物ともせず。

僕の存在には気付かず。

狙い通りだ！

しかし不測の事態というのは訪れる。

スライムナイトが唱えたイオラにより殆どのモンスターが吹き飛ばされた。

その中の1匹が、僕のすぐ側に吹き飛ばされ落ちた！

そのポロポロにやられたホーステビルは、まだ息があった。

僕と目が合うと、怒り狂って襲ってくる！

「僕じゃありません！僕攻撃してません！僕を攻撃しないで！！」

言っただって聞く訳ない！

僕は転げ回り、這いずり回り、攻撃をかわす。

この原因を作った彼らを見ると…もう、いなーい！！

僕ピンチですよね！僕ピンチなんですよね！

どうすればいいんですか！？どうすれば切り抜けられますか！？

…落ち着こう！…冷静に！…パニックたら負けだ！

よく見るとホーステビルは先程の攻撃でかなりのダメージを受けている。

そうだ！こいつは弱っている！

僕は腰から出立前に大枚を叩いて買った、モーニングスター（30

00G）を取り出す。

フツ…冷静になればこんなヤツ何て事はない。

僕は距離を詰め、モーニングスター（3000G）を振り下ろす！

スカ！

ひらりと避けられました。

次の瞬間、腹部にもものすごい衝撃が走る！

僕の胴回り程ある、ホースデビルの足が僕の腹部を蹴り上げる！

数メートル吹き飛ばされ、岩壁に叩きつけられ大量の血を吐き出す。

冷静に考えて……………絶対にムリ！勝てません！

僕、スライムにも勝った事無いんです！

ホースデビルは少しずつ躍り寄ってくる。

僕はモーニングスター（3000G）を投げ付けた。

スカ！

あっさり避けられる。

しかし構わない。

僕はホースデビルに背を向け、死に物狂いで逃げ出した！

走る！走る！走る！兎に角ヤツから、逃げる！逃げる！逃げる！

しかしこのダンジョンの熱気のせいか、先程の腹部への一撃のせい

か息が出来ない！

苦しい！でも、走る！逃げる！

口の中に鉄の味がする！でも、ひたすら走る！ひたすら逃げる！

何処をどう走ったのか、どうやってここまで来たのか分からない。

僕は眼下に溶岩が広がる崖っぷちに立っていた。

後ろを振り向くと…まだ、ヤツがいる！！

彼、しつこすぎませんか！？僕には心に決めた女性がいるので、諦

めてほしいんですが！？

僕は肩で息をし、苦しくて声も出ない。

ホースデビルは僕に近づき、拳を振り下ろす！

恐怖のあまり反射的に後ろへ避けた！

だが、後ろには地面も壁も無い。崖になっている。

僕は崖から転落していく…薄れ行く意識の中で、僕はフローラの事

を考える。

フローラ…僕には…君しか…

・  
・  
・  
「うぎゅー！」

ん！？人が死ぬ時の音はこんな音がするの！？

アンディSIDE END

<死の火山>

何とか『炎のリング』を手に入れた。

リングを手にしたら、ドロドロの溶岩の化け物に襲われた！

ちよ、聞いて無いツスよ！

熱すぎて近づけなかつたので、バギマを連発していたら『バギクロス』を唱えられる様になった。

『バギクロス』 凄えツス！3匹いた溶岩野郎が瞬殺ツス！

でもピエールが「お前のそれは、『バギクロス』じゃない！もはや、ハリケーンだ！めつたやたらに使うな！」って…

これって褒められてる？怒られてる？どっち…？

まあ、そう言う訳でサツサと引き上げてひとつ風呂でも浴びたいね。

「そう言えばリュカ。」

「ん？」

「あの後を付けてきてた男はどうしたんだ？」

「あれ？そう言えば途中でいなくなったね。」

あまりにどうでもよかつたので、忘れていた。

「諦めたんじゃない？根性無さそ、うぎゅー！」

ものっそい痛い！俺の上に何か降ってきた！

「リュ、リュカ！大丈夫か！」

俺は、俺の上に降ってきた物を押しつけて立ち上がる。

「何〜これ〜！」

見ると、あの男だ。

「何で降ってきたのあ？」

「きつと理由はアレだ。」

ピエールは崖の上を指さす。

崖の上には（ポニヨはいないよ）ボロボロに傷付いたホースデビルが1匹。

「ヤツから逃げ回った挙げ句、逃げ切れず落ちてきた。そんな所だろ。」

俺は上を見上げ、ムカついたので石を投げ付ける。

スコーン！

見事命中！そして絶命！

「何！？あんな弱っちいヤツに相手に、こんなにボロボロになってたの！？」

俺は男を肩に担ぐと歩き出した。

「フローラ…フローラ…」

男はフローラの名を謔言の様に呟く。

「相当フローラ殿の事を愛している様だな。お前と違って！」

俺はふて腐れ歩き続ける。

確かに俺はフローラを愛してはいない。セフレになりたいって感情しかない。

でも、幸せになって欲しいとも思っている。

「じゃあ！天空の盾も、伝説の勇者も諦めればいいんだろ！」

そう言ってピエールに炎のリングを投げ付けた。

「す、すまん！そんなつもりで言ったのでは…」

ピエールは泣きそうな声で謝罪した。

兜で顔を覆っている為、涙は分からない…

俺、心狭！

この男を送り届けたら、なんか甘い物でも奢って謝ろ！俺…最低だな…

<サラボナ>

フローラSIDE

リュカが帰ってきた！

しかも『炎のリング』を手に入れて！

リュカのお連れのレストランさんと、リュカの事をお話している時に、その報を聞いた。

私はすぐさま町の入り口方面に走り出した。

リュカがいた！

「リュカ！ご無事ですか？あら？…！アンディ！！」

「フローラの知り合い？」

「はい。幼馴染みのアンディです。どうしてこんな…」

「モンスターにやられたらしく骨折もしている。下手にホイミを使えなかったので早く医者に診せたいのだが…」

聞いた事がある。骨折の部位を、下手にホイミで癒すと骨が間違っ  
てくっついてしまう。

「か、彼の家はあちらです！すぐお医者様を呼んできます！」

どうやらアンディは命に別状は無いようです。

「リュカ。ありがとうございます。彼は…こんな事には向いてない  
んです。なのに…」

「君の事が相当好きな様だね。彼は…幼馴染み…なんですよ？」

「はい…」

「僕はルドマンさんにリングを届けたら、すぐに出立するつもりだ。  
今晚一晩くらい、彼の事を看病してあげてほしい。君にはその義務  
がある。」

「あの！…私…リュカのお連れの方達に、リュカの事を聞きました。」

「

リュカは目を丸くして驚いた！可愛い…

「クス！馬鹿でスケベなお調子者！そんな…所かな。」

「いえ！皆さんリュカの事をお慕いしています！…ですから…私の事も知って欲しくて…お時間を頂けませんか？」

私は貴方とお話をしたい。もっと、もっとよく知りたい。

「残念ですが…早く『水のリング』を手に入れたので…その後なら、時間が出来るはずですよ。」

そう言い残し、リュカは部屋を出て行った。

リュカならリングを手に入れる。

だから私は待っていていい。

そう、待っていていればリュカと…

フローラSIDE END

29・人の過去は気にしない。自分の過去の方が気になるから……（後書き）

デボラを出すタイミングが分からな～い！

キャラ強すぎて扱えな～い！

でも1話目で登場させちゃった。

もう後には引けな～い！

30. どんづにもならない事がある。どんづにも出来ない事がある。でも、どんづにか

<サラボナ近郊の川>

ルドマンさんにリングを渡すと「次は『水のリング』だな。北の『滝の洞窟』にある。

町の外の川に船を用意したから、自由に使ってくれたまえ。」って、船貸してくれた!

船って言ってもクルーザーぐらいの中型タイプ。

でも、凄く立派な帆船で買えば高そう。

世の中の男の子(大昔男の子も含む)には分かると思うけど、船とか、電車とか、飛行機とか、そう言うの「自由に使っていていい」って言われたらテンション上がるよね!

そんな訳で、船に一番乗りして「どっちが面舵か分からんけど、面舵いっぱい!」って、舵を回したら(バキッ)って壊れた。

じゃあ今度は!とばかりに帆を広げるロープを引っ張ったら(ボキッ)って折れた。

んで、修理に半日かかり、ルドマンさんに怒られ、マーリンに説教され、ピエールに「お前、船の上では何もするな!」って釘刺された。

そんな訳で、俺は甲板の上で静かにくつろいでいるプックルの腹を枕代わりに横になっている。

船の事はキャプテン(仮)ピエールと一等航海士(仮)マーリンに任せて…

(俺的に)優雅な船旅を満喫していると、行く手にでっけー水門が出現!

水門の至る所に看板が掛けてあり「水門の事は、山奥の村へご相談を」って書いてある。

「めんどくせーから、ぶっ壊しちゃおうぜ！」と言う意見を、多数決でボコボコにされ、俺・プツクル・キャプテン（仮）・ピエールの三人で山奥の村まで足を運ぶ事となった。

プツクルに乗って約2時間。（プツクル便利）

山奥の村、正式名称『温泉で超有名な山奥にある村』は名前の如く温泉の香りがする、風光明媚なステキな村だ。

村人に聞いた話では、「名前が長すぎたので山奥の村と呼ばれてる」と言う事だが、名前が長いと思った時点で『サンタローズ』とか『サラボナ』とか、イカ二モな名前を考えれば良かったのって思います。（ま、どうでもいいか！）

村の一番奥（山奥の村の奥って奥すぎ！）に、水門を管理しているお宅があるらしい。

とぼとぼと奥の奥まで歩いていくと、突然プツクルが走り出した！プツクルは絶対に人には危害を加えないけど、そんな事知らない人からすれば、大きいトラが襲ってきたとしか思えない！

俺とピエールが慌てて後を追いかける。

プツクルは村の墓地へ入り込み、お墓にお祈りを捧げている女性へ近づいていた。

とても綺麗に整備されたお墓は、生前とても大切な人だった事を物語っている。

そのお墓に祈りを捧げている女性は、後ろ姿ながら美しさを醸し出していた。

とても話し掛けられる雰囲気ではなく、邪魔をしてはいけないので立ち去ろうとプツクルを呼んだ。

「プツクル！ダメだよ、邪魔しちゃー！」

「え！プツクル…！」

その女性は立ち上がりプツクルを見る。

普通の女性はプツクルを見ると、悲鳴を上げて腰を抜かす。

しかし彼女はプツクルを見ても、驚いてはいるが悲鳴を上げない。

俺は彼女を見て息が止まった！

彼女は美しかった。

美しい金髪。

美しい青の瞳。

俺が今まで出会ってきた女性の中で一番…いや、他の女性の追隨を許さない程の美しいさだ！

彼女は俺を見てブツクルを見た時以上の驚きをした。

「…貴方…リユカ？」

俺の事を知っている！？

ま、まさか…もしかして…！？

「ビ、ビアンカ！？」

「やっぱり！リユカだ！リユカ！！」

やはり彼女はビアンカだった！

ビアンカは俺に駆け寄り抱き付いてきた。

あまりに不意打ちだった為、俺はビアンカに押し倒された。

ビアンカに押し倒されるのは2度目だ。以前はお尻で…

「ビアンカ！逢えて凄く嬉しいよ！最初、美人過ぎて分からなかったよ。」

「ふふっ、ありがと。リユカもお世辞を言える様になったのね。」

俺はビアンカを見つめながら彼女を抱き続ける。

俺の祈りが通じたのか、ビアンカはとても女性的に成長していた。

特にオツパイ。（フレアさんに勝るとも劣らず）

何時までも墓地でイチャついていた為、ピエールに「死者の前で何時まで抱き合っているつもりだ！」と怒られた。

二人とも服に付いた土を叩きながら、ビアンカの家（なんと、水門管理者宅）へ歩き出した。

「私ね、絶対リユカは生きてるって分かっていたの！」

「ありがとう。僕はアルカパにビアンカがないから絶望してたよ。」

「大袈裟ねえ。」

「くすつ。アマンダさんもダンカンさんも元気にしてる？」

「…母さんは…」

ビアンカの表情が暗くなる。

俺は自分の愚かさ加減が嫌になった！

さつきビアンカは墓地で祈っていた。

それを考えれば、安易に聞ける質問ではない！

「ごめん！ビアンカ…その…」

「ちょっと、ヤダ！いいのよ、そんな顔しないで。知らなかったんだから…」

ビアンカは最高の笑顔で許してくれた。

正直ビアンカを押し倒しそうになったが、存在を忘れていたピエールが氷の様な視線で睨んでいるのに気付き、踏みとどまった。

「パパスおじさまは元気にしてるの？」

「…」

「…ヤダ！私こそごめんなさい…」

「いや、いいんだ。その事はダンカンさんと一緒に聞いて欲しいから…」

俺は笑顔でそう言ったが、きっと先程のビアンカの笑顔には遠く及ばないだろう…昔は出来たのになあ…最高の笑顔…

ダンカンさんはベットで横になっていたが、俺の事を聞くと飛び起き盛大に歓迎してくれた。

俺の生存を心から喜んでくれて、涙が出てきてしまった。

ダンカンさんは俺の頭を抱き締めると「男がこんな事で泣くな！」と、さらに俺を泣かしやがった。

このおっさん、昔貽をやったのに恩を仇で返しやがった。

今日は最高の日だ！（水門ぶつ壊さないでよかった）

今日はもう日暮れも近く、夕食を作るので泊まって行く様誘われ、お言葉に甘える事にした。

夕食の席で、11年前アルカパで別れてから今日までの事を、順を追って説明する。

パパスの死、奴隷生活、そこからの脱出、母の事、伝説の勇者の事、天空の武具の事、そして天空の盾に関する今の事態。そして夜は更けて行く…

俺達は一人一室でゲストルームを宛われた。

ビアンカは予想以上…いや、想像を絶する美女に成長していたのは驚いた。

彼氏いんのかなあ…いたらヤダなあ…まだ処女かな？…あんな美人ほつとかないよなあ…

などと、一人思春期男児を行っている、

(コンコン)

「リュカ？いい？」

と、ビアンカが入ってきた。

「ど、どうしたの？」

正直ビアンカと二人つきりで緊張している。

何故緊張しているのか分からない。

「水門の事だけ…」

ああ…そうだよ…そう言う話だよ…

「私が水門を開けてあげるね。それと…」

「それと？」

「約束…守ってもらおうよ！」

約束！？何！？どんな約束した！？もしかしてヤバめ！？

「忘れてるでしょ…！」

「ごめんなさい。」

声が裏返ってしまった。

「もう、一緒に冒険しようねって約束したじゃない！」

「……………ああ！その事！」

ホツとしたあゝ。言った！確かに言った！

「でも、ダンカンさんは平気なの？」

「お父さんにも許可は取ってあります。それに連れて行かないと、この場で大声出すわよ！」

「何て言ってる？」

「みんなにリュカが勝手に外へ出てお化け退治に行こうとしているって。」

「ぷー」

あまりの台詞に吹き出し笑い転げてしまった。

「そう言えば子供の時も、そう言って渋々連れて行っただけ。」

「渋々〜？」

「いえ、失言でした。是非一緒に来て下さい。」

俺もビアンカともう別れたくない。今回は本心から付いて来て欲しかった。

「それに…リュカ…結婚するんでしょ？」

言われて俺は自分の立場を思い出した。

ビアンカに逢い、浮かれて忘れていた…

「これが最後のチャンスかもしれないし…」

ビアンカの言葉を聞いた時、俺はもうどうにも出来なくなっていた。退室しようとするビアンカを抱き締めキスをしていた。

ビアンカに嫌われたくない、そう思いつつ自分の欲望を止められない。

だがビアンカは両腕を俺の首へ絡め受け入れてくれた。

俺は唇を離さず、手探りでビアンカの服を脱がして行く。ビアンカも同じ事をしている。

ビアンカは俺を裸にすると俺の身体を見て驚いた。

「ごめん…こんな酷い身体で…」

「何言ってるの！酷いのはリュカにこんな事をした奴らよ！絶対…私、絶対許さない！」

そう言うとビアンカは、涙を流しながら俺の身体の傷にキスをしてくれた。

俺とピアンカの夜は更けて行く…返らぬ過去を惜しむかの様に…

### 31・美人に弱いのは昔から。美人が強いのは何時から？

<山奥の村へ滝の洞窟 船上>

いや〜昨日は人生で最高の日だった。色んな意味で。

でもビアンカは凄い！

俺、朝ダンカンさんと顔合わせ辛かったのに、ビアンカは平然としていた。

朝ベットから出る時もぎこちない素振りは無かったし…

俺の方が恥ずかしかったです。

今俺は、いつもの様にプックル枕で寝ている。

他のみんなは忙しそうに船を操っている。

俺とプックルとビアンカは何もしていない。

プックルは俺が巻き込んだので誰も何も言わないが、ビアンカはゲスト扱いされている様だ。

根が真面目なビアンカは、自分も手伝おうとしていたが、マーリンに「こっちは大丈夫じゃから、あの馬鹿のお守りを頼む。」って言われて俺の所に来た。

「ちよっとリユカ！」

何か怒ってる。

俺の近くまで来て腰に両手を当て仁王立ちしている。

黒のセクシーパンツがよく見える。

「みんなが働いているのに一人だけサボっちゃダメでしょ！」  
きつと、手持ちぶさたの気まずさによる八つ当たりだ。

「ピエール！何かやる気出てきたー！！手伝わせるー！！！」

俺は起きあがりもせず大声で言う。

「うるさい！黙れ！！お前は何もするな！！寝てろ！！！！動くな！！！！！！！」

うん…分かってたけどボロクソに言われて傷付く。

「ね！」

「何すればそんな言われ方するのよ！」

呆れ顔のビアンカも可愛い。

「そんな事よりお嬢さん！」

俺は自分の右横にスペースを作り、

「ご一緒はどうですか？」

プックル枕の共有を促す。

「別に僕としては、この状態もパンツが見れていいんだけど…」

ビアンカは慌ててスカートを押さえる。

「あ、相変わらずエッチね！」

「昨晚、再確認は終わっていると思っただけだ。」

ビアンカは顔を赤らめながら俺の隣へ腰を下ろす。

俺も負けなくらい顔赤いだろっなあ…

< 滝の洞窟 >

ビアンカSIDE

滝の洞窟は名の如く、滝の裏側にあるキレイな洞窟だ。

ルドマンさんが提示したルールにより、リュカともう一人しか洞窟内には入れない。

必然的に私とリュカだけになるのだが…

「リュカ！十分気を付けて慎重に行けよ！ビアンカ殿を怪我させるなよ！！！」

ピエールがくどい程私を…と言うより、リュカを心配している。

この娘もしかして…

「平気だよ。邪悪な気配無いじゃん、この洞窟。」

「今この洞窟内で、一番邪悪なのはお前だ！お前がビアンカ殿を傷物にしないかが心配なんだ！」

リュカはもてるわねえ…ま、格好いいもんね。

「もう手遅れなのに…」

小声で私だけに呟く…恥ずかしいなあ…もう…

「ともかく僕たちはもう行くから！お留守番よろしく！」

リュカは私の手を引き洞窟内へ入って行く。

…レヌール城を思い出すわあ…

リュカが言ったとおり洞窟内に邪悪な気配はない。

殆どモンスターがいないのだ。

偶に出てくるモンスターもリュカが一瞬で倒してしまい、私いるだけ…

リュカは強くなった。昔も6歳にしては強かったが、そう言うレベルではない。

昨日見たリュカの身体は、無駄のない引き締まった身体をしていた。普通の人生では、こんな身体は造れない。

リュカの壮絶な人生を物語っている。

リュカはもうこれ以上不幸になってはいけない！幸せになっていいはずだ！

サラボナのお嬢様の事は、私の耳にも届いている。

リュカの話の踏まえても、とても優しそうな良い人だと思う。

何より彼女と結婚しないと天空の盾が…パパスおじさまの遺言が実行出来ない！

私の夢は昨晚叶った…私の初めての相手が…

今度はリュカが自分の夢を叶える番だ…

フローラさんと幸せになってもらう！その為に私は協力を惜しまない。

「あれ！？誰がいる！」

リュカの優しい声が、私を思考の渦から引き戻す。

「あら？本当ね？船もなかったし、どうやって来たのかしら？」

冒険者風の男はこちらに気付くと、軽薄な笑みを浮かべ近づいてく

る。

「おいおい…ヒョロいニイちゃんは女連れで冒険ごっこかあ？」  
「何こいつ！腹立つ！」

「ここにはお宝があるらしいが、おめえみてーなモヤシには無理だぜ！」

リュカは気にすることなく、私の手を引いて男の横を通り過ぎる。  
その時、

「きゃ！」

「ネエちゃん、良いケツしてんな！そんなヒョロいじゃ無く、俺のぶつといで良くしてやんぜ！」

私はこの下品な男に文句の一つも言つてやろうと思つた…瞬間、私の手を握っていたはずのリュカの手が拳になり、リュカよりも頭1つ程大きい筋骨隆々男の顔面にめり込み、男を5・6メートル離れた岩壁に叩きつけた。

私は言葉を失う。

「ビアンカに汚い手で触れるな！ゲス野郎！」

多分、聞こえてない。

生きてはいるが、聞こえてない。

「リュ、リュカ！行きましょ！」

昔もそうだった。

私がソースまみれになつたのを見て怒つてくれた。

今もお尻を触られたのを知ると、すごい怒つてくれた。

リュカの優しさが心を揺らす…

でもダメ！イケナイ事は昨晚一度きり！

リュカは結婚するんだから…フローラさんと結婚して幸せになるんだから…

この冒険が終わつたら山奥の村へ帰り、静かに暮らそう。

結婚は…私はいいや…他の人なんて考えられないし…

ビアンカSIDE END



### 32・結婚って何の為にするの？

<滝の洞窟>

洞窟の最下層は滝が落ちる美しい泉だった。

滝の水しぶきが舞う最下層で、ビアンカは俺の手を握り先程から沈黙している。

さつき男を殴った事を軽蔑してるのかな？

ついカツとなつてしまったがマズかったかな？

だってムカつかない！？

楽しくデートしてたのに、いきなり人の彼女の尻触って邪魔するなんてさあ…

やっぱりいきなり暴力は軽蔑対象だよなあ…

あの男も見た目より軽く、盛大に吹っ飛んだから俺が暴力的に見えるちゃう。

「ビアンカ…ごめんね…さつきの…」

「リュカが謝る必要なんてないのよ。むしろ感謝してるわ、私を守ってくれて。」

ブラボー！！ブラボー、さつきの俺！

水しぶきで服が濡れ見事なボディーラインのビアンカを見て、俺の暴れん坊將軍が騒ぎ出す！大暴れ寸前！

ビアンカを抱き寄せキスをする。

最初はビアンカも絡ませてきたが、すぐに俺から離れ寂しそうに呟いた。

「ダメよ…リュカ、貴方は結婚するのよ。私達は昨晚だけ、一度きりなの…」

俺は何も言えなくなった。

そう、俺は結婚する…そして天空の盾を手に入れる…

フローラはいい娘だ。もっとよく知れば愛せるだろう…

だが、天空の盾の為に結婚する事実は消えない。

フローラは俺の事が好き、だろう…

ビアンカはどうだろうか…？

いや、それより俺はどうなんだ！？

俺は…

しかし天空の盾を手に入れないと、父さんとの約束を果たせない！

志半ばで殺された…俺の目の前で殺された父さんの遺志を…

だが…

・

俺は思考の迷路に迷い込んでいた。

そんな俺を連れ戻したのはビアンカの明るく爽やかな声だった。

「見てリュカ！水のリングがあるわ！」

「ビアンカ！危ない！！」

俺は死の火山での事を思い出し、剣を抜き放ち左腕でビアンカを抱き庇い、四方を警戒する。

…が、何も現れない…何も起きない…

「リュ、リュカ？」

腕の中を見るとビアンカが真っ赤な顔で俺を見上げている。

かわゆス…とつても、かわゆス！

「ご、ごめん…以前…リングを手にしたら、モンスターに襲われたから…その…ごめん…」

「守ってくれて…ありがとう。あの…もう危険は無さそうだから…

あの…腕の力を…」

俺はビアンカを離せないでいる。

キスする事も、離す事も出来ないでいる。

俺はどうすればいいのですか？

誰か、教えて下さい！父さん、教えて下さい！

<サラボナ・ルドマン邸>  
フローラSIDE

今、リュカが帰還したとの報を受けた。

サラボナ運河に突如船が出現し、船からはリュカ達が下船してきたらしい。

船ごと移転してくるなんて、やっぱりリュカはすっごい！

マーリン様に聞いた話では、本来術者一人しか移転出来ないらしいのだが、リュカは大人数…いや、船ごと移転出来る。

お父様もお母様も、リュカの事を高く評価している。

「旦那様。リュカ殿がお見えになりました。」

来た！とうとう水のリングも手に入れて！

「あゝ…遅くなりました、水のリングです。」

「おお！リュカ！待っていたよ。どれ、水のリングも預かるうか。」  
間違いなく水のリングだ！

リュカはお父様にリングを渡す。

あら？疲れているのだろうか？

リュカの表情が暗い様な気がする？

…後ろの女性は誰かしら！？…まさか…

「あ、あの…リュカ！…そちらの…方は…」

「ああ、彼女は僕の「私はビアンカ！リュカとはただの幼馴染みよ！」」

この人やつぱり…

「じゃ、じゃあ、私はこの辺で帰るわね！」

「ちょっと待ちなさいよ！」

ビアンカさんが帰ろうとすると、ドアからデボラ姉さんが入ってきてビアンカさんを止めた。

「リュカ…って言ったけ？あんた凄いわね！本当にリングを2つ手に入れるなんて。」

「はあ、どうも…あの…どちら様？」

「姉のデボラ姉さんです。」

「そう言う事！だから、私と結婚しても盾は手に入るわ。そうよね、パパ。」

え！？急に何を…？

「あ、ああ…まあ…そうだが…急に何を言…つまり、私と結婚しなさいって事！」

そんな！

「いきなり何だ！リュカがお前と結婚する訳ないだろ！」

「分かつてないわねパパ。リュカは天空の盾を手に入りたいのよ。だったら、私の様な絶世の美女を選ぶでしょ！」

そんな…酷い…

「あの…ちよつ…今回の試練は私の婚約者を決める試練です！」

「それが？」

「それに参加したリュカは私と結婚するつもりなんです！」

「見なさい、リュカの連れている女を！」

え！？ビアンカさんが…

「フローラ。貴女は可愛いわ。お淑やかだし清楚で可憐よ。でも、リュカの好みはスタイルの良い美女よ！」

うっ…

「僕の話を聞…そう言う訳よりリュカ！私と結婚するのなら、そんな田舎娘とは金輪際逢わないでもらうわよ！」

「田舎娘って私の事！？」

「他にいないでしょ。さっさと帰りなさいよ！何時までも彼女面して居座らないで頂戴！」

「そうです！貴女がいなければ話がややこしくならなかったのに。」

「な！？話をややこしくしたのは貴女のお姉さんでしょ！私は帰るつもりだったの！」

「ちよ、みんな僕の話し「静まらんか！」

お父様の一喝が静寂を呼び戻す。

「みんなの気持ちはよく分かった！だが、リュカは一人しかいない。だからここは、リュカに決めてもらおうじゃないか。」

…つまり？

「あの、僕は「つまり今夜一晩ゆっくり考えて、明日の朝に結論を出してもらおう。リュカは宿屋に泊まりなさい。部屋を用意しておこう。ピアンカさんは我が家のゲストハウスに泊まるといい。遠慮はいらんよ。」

お父様が強引に決めて、リュカとピアンカさんをそれぞれ案内させている。

私は…リュカに選んでもらいたい！どんな事しても…

でも…どうすれば…

フローラSIDE END

### 32・結婚って何の為にするの？（後書き）

どうも、あちゃです。

部屋に引きこもり2話更新！

予定では部屋から1歩も出るつもりは無かったのですが、レンタルDVDの返却期日が本日でした。（笑）

今日、もう1話更新は、ちょっとムリかなあ！

33・結婚は一人では出来ない。でも三人とも出来ない。儘ならない。

<サラボナ・ルドマン邸>  
フローラSIDE

私は気が付くとゲストハウスのピアノカさんの所に来ていた。

何をしていたのか分からない…でも、何かしないとリュカが行っちゃう…

だから私は…だから…

「あの…フローラさん…さっきは強く良いすぎでごめんなさい…」  
謝らないで！私は貴女には負けない…

「私はリュカの事が大好きです！絶対貴女には負けません！絶対！」

私は最低だ…自分の言いたい事を言うだけ言うと、彼女の前から逃げ出す様に立ち去った。

私はデボラ姉さんに会えないでいる。

今会つと、大好きなデボラ姉さんを嫌いになつてしまつ気がする…  
なんと自分勝手なんだろう…でも、リュカの事を考えると自分が自分じゃなくなる…

私はリュカと結婚する為ならどんな事でもする！色仕掛けでも…

以前、姉さんに貰つたシースルーのネグリジェを着ている。

下着は穿いていない…

鏡の前で自分の姿を見ている…恥ずかしくて死にそうだ…でも…

リュカは今、デボラ姉さんの部屋にいる。

声が聞こえてくる…

一方的に姉さんが怒鳴っている様だ…

私の部屋にも必ず来る。

そうしたら私はベットで寝たふりをする…この格好で…布団も御座なりに…

そうすればリュカは…エッチなリュカの事だから、私を襲うはず。私はリュカと結婚する為なら最低な女になる。

(コンコン)

来た！リュカだ！

「フローラ？入るよ？」

リュカが入ってきた！

どうしよう！心臓がドキドキしてリュカに聞こえてしまう…

「あれえ？寝てるのおおおお！すげー格好だな！オツパイ丸見えじゃん！」

ヤダ…恥ずかしいからあまり言わないで！！

「話をしようと思ったけど…」

リュカが私に近づく気配がする。

ついにリュカと…私、リュカと…

(スツ)

え！？

「風邪引くよ…」

私の身体に布団がかけられる。

リュカがドアに向かう気配がする。

(ボタン)

ドアが閉まる音が聞こえた…

私はそつと目を開ける。

そこにはリュカが……………

フローラSIDE END

<サラボナ・ルドマン邸・ゲストハウス>

ピアノカSIDE

はあ〜何でこんな事になったのかしら？

私はテラスで手摺りに頬杖を付き後悔している。

もっと早く帰ればよかった… 屋敷には入るべきではなかったのに…

リュカが手を握って離してくれなかった…

いえ…リュカのせいではないわ。

私も離れたくなかった…だから…

でも、リュカはフローラさんと結婚すべきなのよ！

あのデボラじゃなく！

そのデボラがここまで聞こえてくる声で喚いてる。

さつきリュカが屋敷へ入っていったから、リュカに何か言っているのだろう。

さすがのリュカもあの女だけは選ばないだろう。

胸は私より大きかったけど… 選ばないわよねえ… 彼女だけはヤダな  
あ…

あら… 静かになったわね…

彼女の喚きが収まった様だ。

・  
・  
・

5分もしない内にリュカが屋敷から出てきた。

フローラさんとは会わないのかしら？

リュカは宿屋へ戻らずゲストハウスへ進んで来る。

今、リュカと近くで会ったら意志が揺らぐ… そんな気がする…

「リュカ！ こんな遅くにどうしたの!？」

私は手摺りから身を乗り出しリュカを呼び止める。

ここへ来てはダメ！ お願いだから、離れてて…

「ピアノ、何かごめんね！ 私がもっと早く帰っていればよかったの  
に。」

リュカが何かを言おうとするが私はそれを遮る。

「ま、デボラさんも混乱の一翼ね！」

「あ、ああ……」

「リュカはフローラさんと結婚して幸せになるべきよ。」

「幸せ……に……」

「天空の盾を手に入れて、パパスおじさまの遺志を継がないと……ヤダ……私涙が出てきてる……リュカにはれない様にしなきゃ……」

「父さんの……気持ち……」

「いい！もうリュカは不幸を背負い込む必要無いんだから……幸せに……ならなきゃ……」

「幸せ……か……」

「そうよ！貴方のお姉さんとして……貴方が心配よ……」

お願いリュカ……早く……早く、宿屋へ戻って……私……もう……

「ビアンカは何時もお姉さんぶるね。」

リュカは踵を返し寂しそうに戻って行く。

私にはリュカの姿が滲んで見えない……

もう、涙が止まらない……

室内へ戻り壁際で蹲り嗚咽を漏らす……

これで……いい……はずなのに……

リュカの為に……いいはずなのに……

私の事なんかどうでもいいの！

リュカが……大好きなリュカが……

「リュカあ……イヤだよ……リュカあ……」

帰りたい……アルカパでリュカと遊んだ……あの時へ……

幸せだった……あの時へ……

ビアンカSIDE END



33・結婚は一人では出来ない。でも三人とも出来ない。儘ならない。(後書き

なんか、切ねえ〜!

機会があつたら、この時のリュカSIDEを書きたいです。

34・結婚しないと進まない関係がある。でも、結婚すると壊れる関係もある。

<サラボナ・ルドマン邸>  
ルドマンSIDE

昨晚は随分と騒がしかったな…まあ、しょうがないか。  
女性三人は既に我が家の居間に集まっている。

フローラとビアンカさんは泣き腫らした様だ…目が赤い。

デボラは…何時もと変わらんなあ…何の為に混乱を増大させたのやら…

後はリユカを待つただけだが…遅いなあ？

(コンコン)

「旦那様。リユカ様がお見えになりました。」  
「やっとなたか。」

「悩みすぎて寝坊したか？」

「うむ！」

「ん！？何やらリユカの表情が暗い…？」

「リユカ…良く眠れなかつたかな？」

「え？バツチリ爆睡です！どうしました？」

「いや…表情が暗かつたのでな…」

「ああ！いや…そこでメイドさんをナンパしたら怒られまして…」  
「婚約者がいるのにふしだらです。』つて…結婚したらナンパしちゃダメ？」

「イラ！」

「この男いったい何考えているんだ！」

「で！三人の内誰と結婚するか決めたのかね！？」

「あれ？イラついてる！？クス…冗談ですよ…」

「イライラ！」

「いい加減にしたまえ！昨晚の大騒ぎは君も知っているだろう！真

面目にやりたまえ！」

まったく！本当にこの男でいいのか！？

「大騒ぎの原因を作ったのは貴方でしょう…僕にイラつかれても困ります。」

ぐっ！

「で、では、誰とけっこ…その前に！」

む！？

「その前に、僕はルドマンさん！貴方に言いたい事が…文句があります。それを言い終わらない内は、事態を進めるつもりはありません！」

ほ…う…この私に文句を言う…面白い！

「何かね」

「まず最初に、この事態の原因になったフローラの結婚相手を決める試練の事です。」

今更では？

「貴方が築き上げた財産や資産を譲渡するのは貴方の自由だ。だが、フローラの人生を自由にしたいいい訳無いでしょう！」

そ、それは…

「今回…結果的に大事には至らなかったが、もし財産目当ての腕っ節馬鹿が合格していたらどうするつもりでした！？」

「だが…この物騒なご時世、フローラを守るには力がある！だから「馬鹿ですか！あんたは！」

なっ！

「物騒な世の中からフローラを守るのなら、金を使って武装すればいいだろ！一人の物理的な力なんてたかが知れてる。盗賊が1000人で攻めてきたら何も出来やしない。」

た、確かに…

「むしろ、そんな腕っ節馬鹿はフローラを不幸にする！」

え！？

「多額の泡銭が入り、あっちこっちで金を散撒き女をつくる！フロ

「ラの事を顧みてない男は、その事を指摘されると腕っ節に物を言わせるでしょう！」

「うむ…その通りかもしれん…」

「この男やはりフローラの事を…」

「もう一件、言いたい事が…これは、この場にいるみんなに言いたい！」

「娘達にも!？」

「昨日、僕の話有谁も聞こうとはしなかった!何度自分の気持ちを言おうとして遮られた事か!挙げ句、一晚悩んで持ち越せて…」

「言い終わるとリュカはビアンカさんを抱き寄せキスをする。なっ!?!おい!フローラを選ぶのでは…?」

「ちよ、リュカ!何!?!」

「ビアンカ!好きだ!愛してる!」

「何言ってるの!私なんかを選んだら天空の盾が「あんな物いらない!ビアンカがいい!」

「あんな物って…パパスおじさまの遺志は!」

「父さんを侮辱するのはやめてくれ!」

「ぶ、侮辱って…」

「父さんは偉大で優しい人だ!僕の幸せを思ってくれる人だ!」

「私達は何も言えない…ただ、黙って見ているしかなかった…」

「それに天空の剣があれば、勇者を捜せる。勇者を見つけてから盾を貰いに来ればいいし…」

「リュカ…そんな…私…」

「後はビアンカの気持ち次第だ。もし僕の事が嫌いだったら…諦める…誰とも結婚しない…」

「私も…リュカ(ヒック)リュカの事が(ヒック)大好き…」

「ビアンカさんは泣き出してしまった…」

「リュカじゃなきゃヤダ!私…私…」

「ビアンカさんはリュカに抱き付き泣きじゃくっている。

「気付くとフローラもデボラに抱き付き泣いている…」

私は自分の娘を泣かせるダメな父親だ…

「私を選ばないなんていい度胸ね！」

デボラ…また騒ぎを広げる様な事を…

「クスツ…そうですね…妹思いの巨乳美女は捨てがたかったですね

…クスクス…」

「フローラを馬鹿男共から守ってくれてありがとう。」

私もフローラもビアンカさんも、二人を交互に見て驚いている！

「ビアンカを救ってくれたからチャラです。」

私は驚く事しか出来なかつた…

二人の懐の深さに…

私は自分の娘を侮っていた様だ…

フローラとビアンカさんが一通り泣き止むとリュカから切りだしてきました。

「では、僕らはそろそろ行きます。」

いや、そうはいかん！

「待て！私は結婚式の準備をしまっているのだ！これを無駄にする事は許さん！」

「ふう…つくづく勝手な人ですねえ…貴方は…」

「何とでも言う方がいい！私はリュカ…お前が気に入った！私の好意を受け取ってもらおうぞ！」

「好意の押し売りです。それは…」

そう言いながら、リュカとビアンカさんは互いに見つめ頷き、結婚式を了承した。

「そんな訳で2日後には式を執り行つ。」

「2日！？はえ〜よ！準備は…」

「準備は殆ど出来ている！お前はほっておくと浮気をしそつだからな！サツサと結婚させておくしかないだろ！」

「そ、そんな事は…(ゴニョゴニョ)」  
リュカは情けなく口籠もる。

「それとリュカにはやってもらいたい事がある。」

「何ツスか？娘さん二人の今晚のお相手？」

「コロスぞ！…そうじゃない！お前のルーラで招待客へ招待状を渡し、連れてきてほしいのだ！」

「えーめんどくせー」

「コラ！リュカ！貴方にしか出来ないんでしょ！」

「…は…い…その間ピアノ力は？」

「ドレス合わせの為残ってもらおう」

リュカは渋々承諾をし早速ルーラで飛んでいった。

「便利よのう…」

ルドマンSIDE END

35 若い内の苦勞は買ってもしる。でも買う金がありません。

<ラインハット城>

ヘンリーSIDE

「兄さん！」

デールが騒がしく俺を呼ぶ。

珍しいな…あいつは冷静な方なんだが…

「どうしたんだ、デール？」

「お客さんが…リュカさんがお見えになりました！」

ほう、良い所へ来たもんだ。

「やあ、ヘンリー。まだマリアさんは愛想を尽かしてない？」

「あのなあ…まったく…お前こそどうなんだ？ピエール達に嫌われ  
たん…じゃ？」

あれ？リュカ一人だ！？

「おい！ピエール達はどうした！？本当に…」

「そんな訳ないだろ。他のみんなはサラボナで人質になっている。」

「人質！？どういう事だ！」

「うーん…僕が逃げ出さない様に…かな？」

何なんだ！？いったい…

「これ…読めば分かるから。」

俺はリュカに渡された書状に目を通す。

「お前、結婚すんのか！？」

・  
・  
・  
式まで時間が無い為に新郎自ら参列者を迎えに来ているそうだ。  
どんな式だよ…

皆に声をかけ参列を確認すると…

俺、マリア、ヨシユアさん、マリソル、デルコ、この5人が参列する事に決まった。

マリソルなんかは泣きながら「私がリュカさんと結婚したかったのに…」と、リュカを困り顔にさせる。

珍しいな、普段のリュカなら『僕もマリソルと結婚しちゃおう』とかふざけた事、言うのに…

後で聞いてみるか。

「リュカさん、このままサラボナへ行くのですか？」

「いえ、マリアさん。次は海辺の修道院へ行きます。」

なるほど…各所を回ってサラボナへ…か！

ヘンリーSIDE END

<海辺の修道院>

マリアSIDE

ここへ戻ってくるのは随分と久しぶり。

お世話になったのに、そんな事ではいけませんわね。

リュカさんが修道長様とお話をしている。

「まあ、おめでとございます。リュカもとととご結婚されるのですね。」

「はい。つきましては、お世話になったシスター方にご参列頂こうと思ひまして、お迎えに上がりました。」

「シスター・アンジェラ。貴女がご出席してあげなさい。」

「修道長様は？」

「私はここでリュカの為に祈りを捧げたいと思います。リュカ、シスター・アンジェラを連れて行って頂いてもよろしいですか？」

「はい。」

リュカさんはとても嬉しそうだ。

「では支度をして参ります。少々お待ち下さい。」

そう言うとシスター・アンジェラは奥へ下がっていった。

「アンジェラさん！荷物はそんなに必要ないですから。殆どサラボナでルドマンさんが用意してくれます。着替えを1・2枚で大丈夫ですよ。何なら裸でもいいし…いや、むしろ裸の方が…」  
ゲシ！

「お前は…結婚すんだろ！」

「関係ないだろ！結婚したって、嫁がいたって、女の裸は見たいだろ！」

リュカさんとヘンリーさんは相変わらずです。

「リュカさん！私なら何時でも見ていいですよ！」

「マリソル…期待…しちゃうよ、僕…」

ポカ！

ポカ！

「いたーい。」

「お前は…」

「ふふっ…アナタは弟妹が沢山いますね。」

「まったく…手のかかる…」

そうこうしていると、シスター・アンジェラの支度も終わり、次の目的地へ向かった。

マリアSIDE END

<サンタローズ>

フレアSIDE

私は今、信じられない…いや、信じたくない書状を見ている。

「リュウ君、結婚するの!？」

「はい。アルカパに住んでいたビアンカと…」

私はリユー君に抱き付きキスをした。大勢が見ている前で…

「こんなに愛している私を捨てるの!？」

「捨てないよ。結婚はするけど捨てないよ。」

え!?! どういう事?

私が考えていると、ヘンリー様がリユー君を蹴飛ばす。

「そんな訳いかねえーだろ!」

「あいた!」

「ちょっと! ヘンリー様! リユー君に乱暴しないで!」

「そうよ! ヘンリー様!」

「うっ! マリソルまで!」

このお嬢ちゃんもリユー君が好きらしい。

さすがもてるわねえ…

「じゃあ…それでいい! リユー君の事お祝いするね。でも、サラボナへ行ったら悔しいからビアンカちゃんをいぢめる。」

「クス…ビアンカは強いよ。かなりの修羅場潜り抜けたから。」

うっ… 負けない! リユー君の初めては私が貰ったんだから!

フレアSIDE END

< 山奥の村 >

マリソルSIDE

温泉の匂いがする静かな村に私達は来ている。

ここはリユカさんのお嫁さんになる人が住んでいた村だ。

リユカさんはここへ、お嫁さんのお父さんを迎えに来たみたい。

リユカさんのお嫁さんはどんな人なんだろうか?

こう言っでは何だが、私は将来美人になる自信がある。

ヘンリー様もデール陛下も、リユカさんまでも美人になるって言うてくれた!

あと5年早く産まれていればなあ…

リュカさんのお嫁さんのお父さんはダンカンさんと言つらしく、とても優しそうなおじさんだ。

「おや？リュカ…どうしたんだい？こんな大人数で…ビアンカの姿が見えないが…いつたい…？」

「ビアンカはサラボナで結婚式の準備をしています。お義父さん。」

「…？お義父さん？…リュカ…お前はサラボナのフローラさんと結婚する為に、危険な試練を受けたのではないのかね！？」

「何！どういう事だ！詳しく聞かせろ、リュカ！」

ヘンリー様が大声で問いかける！

みんな、リュカさんに大注目だ。

・  
・  
・

私の想像を超える事態が起きていた様だ。

それにしてもリュカさんは格好いい！

お金目当てで変な人がフローラさんを不幸にしない様に、危険な事をやってのけるなんて…

そして三人の女性の中からビアンカさんを選んだのか…

私もその中に加えてほしかったなあ…自信あるもん！

「今、私と同じ事考えているでしょ！」

シスター・フレアが小声で話しかけてきた。

「私は自信ありますよ。まだ、若いしこれからですもの。」

私も小声でシスターに話す。

「ふふっ…どうかしらね？」

む…！私だってシスター・フレアくらいのオツパイになるもん…！  
多分…

「…リュカよ！父親としては嬉しい限りだが…ビアンカと結婚しては、天空の盾が手に入らないのでは？」

「いりません！あんな物！どうせ装備出来ませんし！」

「しかし…パパスの…」

「僕はこの世界の何よりもビアンカが好きなんです。ビアンカと結婚して後悔はありませんし、これからもしません。」

出来れば聞きたくない言葉だった。

自信が揺らぐ…

シスター・フレアも啞然としている…

早く見てみたくなった…

嫌な女だったら絶対いじめる！

「リュカ…お前に話しておく事があるんだ…」

「もしかして、ビアンカとは血の繋がった本当の親子じゃないんです…とか言う？」

「…！知っていたのか！？」

「え！？…ええ…まあ…」

「そうか…知っていたか…ビアンカは私とアマンダの「どうでもいいです！」

「おい！リュカ！どうでもいいはないだろ！」

私もそう思う。重要な話だ。

「僕とビアンカが実は血の繋がった姉弟だったら重要な事だけど、この場合はどうでもいいです。」

みんなキョトンとしている。

「僕が愛しているビアンカという女性は、ダンカンさんとアマンダさんに育てられた素敵な女性です。そしてビアンカがダンカンさんをお父さんと呼ぶ限り、僕にとって貴方はお義父さんです。これからも娘夫婦を暖かく見守って下さい。よろしくおねがいします。」

もう…ズルイよ。

リュカさん、格好良すぎる。

諦められないよ…

私は耐えられなくなり、外へ出てしまった…

隣を見るとシスター・フレアも一緒だ。

お互い顔を見合わせ、抱き合い泣く。  
あと5年、早く産まれても無理だったかもしれない…

マリソルSIDE END

35・若い内の苦勞は買ってでもしろ。でも買う金がありません。(後書き)

当分リユカSIDEはありません。

わざとです。

いずれ外伝でリユカSIDE書きます。

お楽しみに。

### 36・結婚式の主役は、新郎？新婦？それとも参列客？

<サラボナ・ルドマン邸>

フレアSIDE

戦闘準備完了。

昨晩は山奥の村に泊まり、早朝リユー君のルーラでサラボナへ到着した。

私は朝一で温泉に浸かり美肌効果でパワーアップ！

今の私は『ムッチムチプリンプリン』だ！

必ずビアンカちゃんに『白旗降参参ったごめん』って言わせる！

私は勢いよくビアンカちゃんが居る部屋のドアを開ける。

…私は言葉を失う。(意識も失いそうになった)

「おお！！ビアンカ！！綺麗だよ！！母さんにも見せたかった…」

「お父さん…ありがとうございます。」

純白のウェディングドレスを纏ったビアンカちゃんは、言葉が出ないくらい綺麗だった。

これはドレスのせいではない。

ドレスの方が引き立てられている。

「あの…もしかして、シスター・フレアですか？」

「お久しぶりです。はあ…白旗降参参ったごめん…」

「は？あの…なんですか…それ？」

「いいえ…何でもありません。ビアンカちゃんが綺麗すぎて、勝負にならないなあ…と思っただけです。」

「勝負…？」

「幼い頃は敵じゃ無いと思ったんだけどなあ…」

「お褒めに預かり光栄です。」

「何よ、生意気ね！ふふっ…おめでとう。ビアンカちゃん。」

「ありがとうございます。」

「リュカのヤツには勿体ないくらい美人だな！」

ヘンリー様夫婦も驚いている様だ。

「ですよね！リュウ君には私くらいがちょうど良いですよね！」  
食いつく私。

「これから期待出来る私の方がちょうど良いです！」

食いつくマリソル。

「それだったら私だってちょうど良いです。」

「フローラさんまで…」

さらに食いついたのはフローラさん。彼女の結婚相手を探していたのに…

そして呆れるビアンカちゃん。

「何であいつはこんなにモテルんだ？馬鹿でスケベなお調子者なの？」

ヘンリー様が苦笑いで問いかける。

その問いにフローラさんが

「優しいからです。」

マリソルが

「格好いいからです。」

私が

「頼もしいからです。」

「で、当のビアンカさんはあいつの何処に惚れたの？」  
みんなでビアンカちゃんを注目する。

「あ、暖かいところ…かな？」

顔を真っ赤にして、俯き答える。

いいなあ…

リュウ君、暖かいもんなあ〜

「で？当のリュカはどうしたんですか？」

あれ？そう言えばリュウ君の姿が見あたらない。  
ビアンカちゃんは心配そうに聞いてきた。

「リュカならお父様に言われ、シルクのヴェールを取りに行きまし

た。」  
「ああ、確かにあいつ『んだよ！あのハゲ！先に言えよ！二度手間じゃねえーかよ！』て言ってる。ルーラで飛んでったよ。」  
さすがヘンリー様。リユー君の口真似が上手い！みんな笑いが止まらなくなった。

フレアSIDE END

<サラボナ・ルドマン邸>  
マリソルSIDE

ビアンカさんは良い人だった。

私のリボンはビアンカさんのリボンだった事を知った。

私はこのリボンの事を更に好きになっていた。そしてビアンカさんの事を凄く好きになってしまった。

でも複雑：リユカさんを独り占めするビアンカさんを嫌いになれない：その事をビアンカさんに話すと、

「リボンなら何本でもあげるけど、リユカは渡さない。絶対に！」  
って、意地悪く言うの。

でも嫌いになれない。

だからリユカさんは好きになったんだろうなあ…  
いいなあ…

「ただいま！」

リユカさんが戻ってきた様だ。

「おわ！ものっそいキレイじゃん、ビアンカ！」  
相変わらず戯けた口調でビアンカさんに近づく。

「もう結婚式なんかより初夜迎えたいんだけどベット行かない？」

「何子供の前で馬鹿言ってるんだ！」

ヘンリー様が丸めた本で叩く。

「いたゝい。何すんの…主役よ！？今日、僕は主役なんですよ！」

「じゃあ、真面目にやれ。」

「みんなが居たから恥ずかしくって戯けたんじゃないかあゝ」

「みんなが居なかつたら押し倒しているだろうが…」

「てへ。」

そんなリユカさんとヘンリー様のやり取りが私は大好きだ。

マリソルSIDE END

<サラボナ・教会>

ピエールSIDE

教会で神聖なる式典が厳かに執り行われて行く。

さすがのリユカも歌い出したりはしない。

式前にヘンリー殿と賭になった。

「あいつ歌い出すんじゃないか？」

「確かにリユカの事だからあり得る。」

「じゃあ、賭をしようぜ。式中、歌い出すかどうか…10G」

「のった！」

そして式典は滞りなく終了する。

・  
・  
・  
後でデルコに10G払わねば…

ピエールSIDE END



36・結婚式の主役は、新郎？新婦？それとも参列客？（後書き）

デルコだけが

『リユカさんは、そんな不真面目な人じゃないです！』って、  
歌わない方へ賭けました。

一人勝ち。

『ムツチムチプリンプリン』は

MPの略です。（笑）

柴田亜美先生ごめんなさい。お借りします。

37・友情とは何時までも美しい物。愛情はとつたるつつか？

<サラボナ・ルドマン邸>

ピアンカSIDE

私は目を覚ます。

ここはサラボナ、ルドマンさん邸のゲストハウス…

隣では静かに寝息をたてている男性…

私の左手薬指には美しいリングが…

私結婚しちゃった！リュカと結婚しちゃった！！

夢みたい！嘘みたい！！大好きなリュカが、私の旦那様！

私もリュカも裸だ…見渡すとベットの上は凄い状態だ…

「激しかったなあ…」

ポツリと独り言を呟いて考える。昨晚なのか今朝なのか分からない

…兎に角凄かった。

窓の外を見ると、もう日が高い位置にきている。

私は服を着て辺りを探す…パンツが無い…

ふつとリュカを見ると手に握り締めて寝ている…

何でそんなにそれが好きなのよ…

昨晚の披露宴を思い出す。

『私もパンツあげたんです！』

と、酔っぱらったフローラさんのカミングアウトから始まり、

『リュウ君の初めての相手は私よ！』

と、素面で叫ぶシスター・フレアに、

『うるさい！私だってリュカの事が好きなんだ！』

と、きつと記憶が無いと思われるくらい泥酔しているピエールが騒ぎ出した。

そして、私も止せばいいのに、

『でも結婚したのは私よ！』

と…

色んな意味で大荒れの披露宴会場に、トドメのリユカの一言、

『愛人募集中です。』

一生忘れられない思い出ね！

おっと！思い出に浸っている場合じゃない。

パンツ取り返してリユカを起こさないと。

リユカはこの後すぐに皆さんを送り届けないといけない。

リユカの手からパンツを取ろうとするが、握り締めてて取れない。

ちよつと…返してよぉ〜

私が一人でもがいているとリユカが目を覚ました。

「おはよう、ビアンカ…何してんの？」

「何って…パンツ返して。」

「何で？」

「あのねえ〜もう日が高い位置にあるのよ！リユカはみんなを送り

届けないといけないでしょ！」

「いいよ、待たせておけば…それよりパンツ穿く前に！」

そう言っつてベットに押し倒された。

・  
・  
・

…元気すぎませんか？

ビアンカSIDE END

<サラボナ>

ヘンリーSIDE

最高潮に落ち込んでいるピエールを眺めながら、俺達はする事もなく昼食を食べている。

「やあ、みんな！おはよう。」

ムダに爽やかな挨拶をするリュカが現れた。

「おはようじゃねえー！何時だと思ってるんだ！もう昼過ぎてんだぞ！」

「まーまー、アナタ落ち着いて下さい。」

リュカは気にすることなく席に着くと、勝手に俺のメシを食い始める。

こ、こいつは…

「リュウ君。ビアンカちゃんは？」

そう言えば姿が見えない…

「ビアンカならまだ寝てるよ。」

俺のメシをガツガツ食いながら何事もない様に答える。

「お前昨晚ガンバリすぎなんだよ！」

俺は意地悪くリュカをからかったのだが…

「いやいや…朝は起きてたんだ。でもさっき第2ラウンドになっちゃって…」

「お前…俺達待たせて、何やってんだよ！」

「うん。ナニやってた。」

何で恥ずかし気もなく言えるの？

「さて！じゃあ行きますか！」

俺は殆どメシを食って無いが…まあいい！

順序的に最初はビアンカさんのお父さん。

そして、俺達ラインハット組。

次いでシスター・アンジェラ。

最後はサンタローズ。

パパスさんの墓前に報告をしたららしく、この順番になった。

俺もパパスさんの墓参りをしたかったが、個人的にひっそりで行いたいと言っリュカの意見を尊重した。

HENRI SIDE END

<サントローズ>

フレアSIDE

丘の中腹、リユー君の実家があつた裏手にパパスさんのお墓がある。ご遺体も、遺品もない…墓石だけの…

リユー君が一人で造つたお墓…

私は教会正面からリユー君の姿を見下ろし、胸が苦しくなる。

リユー君はいつもの様に優しい笑顔で私の元へ来ると、

「じゃ、新妻を待たせると怖いので帰ります。」

つて、帰ろうとするので思わず抱き付きキスをしてしまった。

最低ね私…

ずっと我慢してたけど、我慢しきれなかったわ…

フレアSIDE END

<サラボナ・ルドマン邸>

ビアンカSIDE

日も暮れ町を月明かりが照らす中、私はリュカの帰りを待ち窓辺で佇んでいた。

「ビアンカさん。一緒に夕食でもどうかね？」

ルドマンさんが気を使って夕食に誘ってくれる。

「ありがとうございます。でも、リュカを待たないと…」

正直リュカが居ない状態で、この人達と食卓を囲むのは気まずい…

「なあくに！あの騒がしい連中に捕まり、帰るに帰れないのだよ。

遠慮する事はない。さあ……」

リユカあゝ早く帰ってきてえゝ

リユカが帰ってきたのは、夕食も終わり皆さんとゆっくり談笑をしている最中だった。

「いやゝ、ごめんごめん…ビアンカ待った？さあ、今晚も頑張ろうか！」

さすがに腹が立ちテーブルの上にあったリンゴを投げ付けてしまった。

「リユカ！さすがに遅すぎるぞ！ビアンカさんの事も考えなさい。」

「うん。本当にごめんね。ビアンカ。」

そう言つて優しくキスをする。

ずるいよ…許しちゃうじゃない…

「で！リユカ、これからどうするのかね？」

「ちよ、新婚夫婦にそんな事聞かないでよ！決まってるでしょ！」

「そう言う事じゃない！次の旅の目的地の事だ！馬鹿者！！」

さすがのルドマンさんも怒り、テーブルの上の果物…リンゴ・オレンジ・グレープ等を投げ付ける。

リユカはその全てをキャッチして食べる！

反省してないわね…

「ああ…そう言う事なら今晚中にポートセルミへ行つて船を探します。」

「船？」

「ヘンリーに聞いたんですが、南の大陸に『テルパドール』と言う国があつて、そこに勇者の墓があるらしいので情報もあるかと思つて…」

ちやんと考えてあるんだ…

「ふむ…では、この書状を持って行きなさい。」

「？これは…？」

「ポートセルミのドックは全て私が所有していてな…船を1隻用意する様に書いてある。」

1隻!?

「申し訳ありませんがルドマンさん。船をお借りする訳にはいきません。海上でも戦闘になる恐れがあり、元通り返せるか分かりません。」

「勘違いしてもらっては困る!貸すのではない!譲渡するのだ!」

「ルドマンさん!それは「それに…」」

驚くりユカの言葉を遮りルドマンさんが語り出す。

「それに、君の旅は世界を巻き込む事になる。伝説の勇者を見つけられなければ、世界は混沌とするだろう。その為に船が必要だ。だから私は君に船を譲渡する。世界を救う勇者を見つけてもらうために。」

「……………」

リユカが目を閉じ考える。

こういうリユカも格好いい…

「分かりました。ありがたく御好意、頂戴致します。」

「うむ。…天空の盾だが…」

「それはお預かり下さい。伝説の勇者と共に頂に戻りますので。」

私達はルドマンさんに深くお礼を言い、屋敷を後にする。

屋敷の外に出ると、体中に包帯を巻いた青年が一人こちらへ近づいてきた。

「アンディ…もう動いて大丈夫なの?」

「はい…フローラの看病のおかげで…」

この人も試練に参加した一人の様だ。

「貴方には負けたくなかった。でも勝てる訳無かった…申し訳ありません、助けてもらったお礼を言いに来たのに…でも悔しくて…」  
この人はフローラさんの事が本当に好きなんだ…

「今回の勝負は、僕の得意分野だったからね。負ける訳にはいかないよ。次は君の得意分野で勝負に挑めば良いじゃないか。」  
やっぱりリユカは暖かいなあ…

「ありがとうございます！本当にありがとうございます…」  
泣きながらお礼を言うアンディさんと別れ、町の外でみんなと落ち  
合う。

リユカとなら私は何処へでも行ける。私は幸せ者だ…

ピアンカSIDE END

38・海です。海と言えば水着。水着と言えば美女。美女と言えば…

<ポートセルミ>  
ピエールSIDE

リュカと会いづらい…  
あんなめでたい席で…あんな泥酔状態で…あんなふざけた愛の告白  
をしてしまった。  
朝からリュカは忙しく、あまり顔を合わせないのが、せめてもの救  
いだ。

夜も更け、リュカも一段落し明日の朝一からの船旅の準備も終わっ  
た時、私への試練が待っていた。

私はリュカとビアンカ殿に割り当てられた、夫婦用の部屋に呼び出  
された。

分かっている…

結婚披露宴と言う席で…大勢の前でリュカに対する恋慕を告げてし  
まったのだ…

そんな女と一緒にパーティーを組む訳にはいかない。

夫婦間の亀裂にも繋がる。

冷静に…笑顔でお礼を言っただけよう…

(コンコン)

「リュカ、入るぞ…って、何してんだ！」

部屋にはいるとリュカがビアンカ殿をベットの押し倒していた。

「あれ！？もう来た！」

「人を呼び出しておいて何だ、貴様は！」

「メンゴ、メンゴ！」

イラ！

イカン…冷静にならねば…

「で…何用ですか？」

「うん…ビアンカと二人で今後の事を話し合ったんだけど…」  
やはり私はここでお別れか…

「リュカ、分かっている…私も考えていた事だ…」

「そうか…やっぱり考えていたか…話が早くて助かる。」

「すまん。迷惑をかけてしまった…」

「ピエール…水臭い事言うなよ！君の事は分かっているんだ…  
で、どっちにする？」

「……………え？どっちって？」

「だーからー！水着だよ！水着！」

「み、水着！？」

「うん！僕が選んだハイレグ・ビキニか、ビアンカが選んだワンピース・パレオ付きか…あ、サイズは合ってるよ。君の事は分かっているから。」

そう言うと二人して水着を見せてきた。

「やっぱりピエールはワンピースよね！恥じらいを知っている娘ですもの。」

「いやいや…ピエールは着痩せするんだ。その事を分からせる為にもビキニでしょう！」

「……………あの……………も、申し訳ないが、私の考えていた事と違った…説明を…お願いしたいのだが…」

「え〜とね、無事船も手に入れたし、明日から当分船暮らしじゃない！船で暮らすという事は、周囲は海な訳ですよ！海ったら水着が必要でしょう！？まあ、僕的には裸でも大歓迎なんだけど……………」

「そうじゃない！……………そうじゃなくて…私はこのパーティーから出て行くつもりでいたんだ！」

「それは困る！」

「困られても困る！」

「君が居ないと船を動かせない。」

「リュカ、お前がやればいいだろう！」

「断る！船旅は優雅な物と決めている！それにピエールがいないと戦力が落ちる。」

「それこそリュカがいれば何も問題は無いだろう……」

「それについても断る！僕は戦闘はキライだ！」

「我が儘を……私はお前に恋慕を表明してしまっただぞ！そんな女と一緒に生活出来る訳無いだろ！」

気付くと私は泣いていた。

好きだからか、別れたくないからか……分からない……

「随分と自信家ね！美少女ピエールちゃんは！」

ピアンカ殿が嫌味な口調で食って掛かってきた。

「リュカは貴女と一緒に居ると、妻である私より貴女に気持ちが行ってしまっつて言いたいんですよ！」

「そんなつもりはない！ただ……私が居ると気まずくなるのでは……と……」

「ならないわよ！リュカも私もピエールの事を大事な仲間だと思っているのよ！もう、家族なのよ、私達は！」

「……仲間……家族……」

「もし、リュカの心がピエールに行ってしまったとしても、取り戻す自信が私にはあるわ！だから私達を見捨てるなんて言わないで……」

ピアンカ殿の優しい口調が、私の涙を止まらなくする。

「わ、私（ヒック）も……別れ（ヒック）たく……ない……（ヒック）」

リュカとピアンカ殿は、私を優しく抱き締めて囁く。

「じゃあ、ずっと一緒に居られるじゃない……私達。」

・  
・  
・

一頻り泣き晴れやかな気持ちになったところで、私は自室へ戻る事にした。

「あ！ピエール待って！」

リュカが呼び止める。

まだ私を泣かせる気だろうか？

「何？リュカ…？」

「で、どつち？」

そう言つて水着を2つ掲げる…

この男は………

「ワンピースだ！バカ！」

私は怒鳴り、ドアを勢いよく閉める！

ドアが閉まる瞬間、リュカの声が聞こえた。

「チエツ…ビキニの方がエロいのに……」

だから私はあいつが………大好きだ………

ピエールSIDE END

<テルパドール近郊の砂漠>

ピアンカSIDE

灼熱の砂漠にリュカの歌が響き渡る。

月の砂漠がどうの…と、訳の分からない歌を歌いながらリュカは砂漠を歩き続ける。

「…何であんなに元気なの？」

私はもちろん、他のみんなも耐えられず馬車の中へ避難している。

しかしリュカだけは大きな日傘（と言うよりパラソル）をさし、パトリシアに日陰を作り歌い続けている。

パトリシアと相合い傘をしているリュカを見て、ヤキモチを焼いている自分がいる事に気が付き一人赤面してしまう。

そんな私にマールンは気付いたらしく、

「あんな男と結婚してしまったんじゃ、馬如きにヤキモチを焼いて

いたら、気苦労が絶えんぞ！」

って、冷やかされた。

そしたらピエールまでも、

「ビアンカ殿は贅沢だ。ベットのの中まではパトリシアは入って行けないのだから、相合い傘くらいは許してやるべきだ。」  
と、からかわれた。

「しかし、本当に元気じゃのう！つい先程あんなに頑張っておったのに……」

にやつくマーリンに私は更に赤面する。

少し前に、結構大きめなオアシスがあったので、そこで一休憩をしていた。

そして、そこより少し離れた木陰でリュカと……その……してしまったのだが……遮蔽物の無い所だった為、みんなに声が丸聞こえだった様です……

そしたらピエールに、

「新婚夫婦でも、もう少し分別を弁えて下さい。」  
って怒られました。

でもマーリンが、

「まあまあ……ピエール……おヌシがリュカと結婚していたら、拒絶出来たかのう？」

「私は……分別が……あります……けど……ムリです……きっと……」  
凄い赤い顔して俯いちゃった。

気を抜くと奪われかねないわね……気を付けないと！

ビアンカSIDE END

### 39・税金は効率よく使うべきだ。地下庭園ってどうなの？

<テルパドール・宿屋>

日暮れにはテルパドールの城下町へ着く事が出来た。

まずは宿屋で寝床を確保！最近夜が楽しみでしようかない！

フロントで「僕たち新婚です！」って自慢したら、特別に良い部屋を用意してくれた。

でも案内してくれたボーイが、気を使ってゴムを渡してきた。

新婚だっつってんだろ！！

認知する気あんだよ！

チップ、ケチってやった。

<テルパドール城>

翌朝、ビアンカと二人でこの国の女王様に会いに行く。

事前にデールから書状を貰っておいたので、スムーズに謁見出来た。俺達を通されたのは地下に造られたキレイな庭園だった。

空気が涼しく、水が豊富で噴水もあり、多種多様な植物が咲き乱れる。

「うわあ〜…キレイ…」

確かにビアンカが言うとおりキレイだ！

だが俺は、不快感を露わにしていた。

「?どうしたの？」

俺の表情に気付いたビアンカは心配そうに訪ねて来たが、既に女王様が目の前に居たので沈黙で返答した。

「砂漠の地下に、この様な緑豊かな庭園がある事に驚かれた様ですね」と言うより、貴方は税金の無駄遣いと思っっているみたいですね。

「ピアノカ程ではないが、かなりの美女がそこにいる。ピアノカと出会っていなければ間違ひなく口説いていたであろう美女は、俺の表情から考えを読み取った。」

間違ひてはいないが、表情だけでそこまで読み取られるのは気に入らない。

「いえ、表情ではなく私は人の心が読めるのです。少しだけですが……」

「！！」

「心を読む！」

「嘘吐け！」

「じゃあ、俺の質問に答えてみる！」

「今日のパンツは何色だ！答えてみる！」

「薄紫です。でも、こう言う質問は女性に対しては失礼なのでは？」

「本当に読まれた！！！」

「でも俺、質問してないもん！思っていたただけだもん！」

「そうですね。思っていただけです。」

「何、この女……めんどくせえ……ちょーめんどくせえ……」

「うわ！マジめんどくせえー、もうヤダ！」

もう伝説の勇者の事なんか、どうでもいいから帰りたい。

「貴方は伝説の勇者について、何かお求めですか？」

「は、はい！私た「なるほど。伝説の勇者を捜す旅をしているのですね。」

「今度はピアノカ的思考を読みやがった。」

「もうどうでもいいから帰りたい……」

「お二人とも、私に付いてきて下さい。」

「ええ……もう帰りたい。」

「き・て・く・だ・さ・い……！！」

「リユカ……行きましょ。」

「……………はい……………」

「やっと貴方の声を聞けましたね。」

俺の声を聞きたいのなら心を読むのを止めてくれ。

「注意します。」

もう、マジヤダ〜！

女王様（アイシスと言っらしい）に（渋々）付いて行くと、神々しい兜が奉られている祭壇へ案内された。

「この国には勇者の墓があるとの噂ですが…実際はありません。あ  
るのは勇者の武器の一つ『天空の兜』です。」

ここにあつたのかあ…

「リユカ！貴方からは何かを感じます。是非被ってみて下さい。」

「どうせ装備出来ませんからヤです。」

「貴方からは何かを感じるのです。是非！」

「それはきつと勘違いです。もしくは僕に惚れてしまっただけです。  
今晚お相手しますので、それでいいですか？」

「か・ぶ・れ！」

とても怖いので従います。

俺は兜を持ち上げ頭に被る。

ものっそい重い。

「いたたたたたっ…」

首が…首が！

俺は慌てて兜を脱いだ！

「どうやら装備出来ないようですね。」

「だから最初からそう言っただじやん…！」

「私の勘違いだった様です。」

「それも言っただじや…！」

あの女…サツサと戻りやがった！

すげーム力つく女だな！

首筋を痛めただけだ…

この後サツサと宿屋に戻るつもりだったが「女王様がお呼びですの  
で…」って、兵士にしつこく言われ渋々赴いてやった。  
そしたら、一言も話題に出していないのにパパスの情報を色々くれ  
た。

首筋痛めたお詫びかな？

アイシスの話によると、「ここより遙か東の山脈を越えた所に、『  
グランバニア』』と言う国があり、その王様の名前もパパスだった  
様な気がする。」って…

実に曖昧だ！

他にどうしようも無いので、取りあえず行くけどね。

行くだけ行っても「やっぱり気のせいだったみたいですよ。」と  
か言いそうだ。

<テルパドール・宿屋>

宿屋へ戻り、さあ頑張ろうと部屋へ向かうと昨日のボーイが近づい  
てきて、

「あ！これ僕からのサービスです！」

って、またゴム渡しやがった！

何この国！

ムダに心が読めるヤツと、ムダに心が読めないヤツがいる！

お前ら結婚して子供作れ！

そしたら、ちょうど良いのが生まれるから！

39・税金は効率よく使うべきだ。地下庭園ってどうなの？（後書き）

何だか気に入ってしまいました、この話。  
感想を下さい。

40・因果と言つ言葉がある。やればできる。因果である。

<チゾットの山道>

俺達はチゾットの山道と言つ洞窟内を彷徨つ。

高地にある為空気も薄く、陰鬱な雰囲気を漂わせる洞窟だ。

俺は『手のひらを太陽に』を熱唱する。

歌詞の内容が気に入らないのか、アンデット系のモンスターが襲ってくる。

アンデット系が嫌いな俺は、戦闘はせずにただ歌う。大声で歌う。腕を振つて歌う。

同じ歌をリピートして歌っていた為、皆歌詞を覚えた様でピエールまでもが歌う。

そして戦う。(俺以外)

みんな俺色に染まってきた様だ…

しかし…ピアノカだけ気分が悪そうだ…

最も、ゾンビが吹き飛ぶのを見て気分爽快になる奴の方がおかしい。とは言え心配だ！

「ピアノカ…気分悪いのなら馬車で休んで良いよ。ムリは良くないから。」

「うっん…大丈夫よ…アンデット系には私のメラが必要でしょ。だから…」

「大丈夫だよ、ピアノカ。マーリンもメラは唱えられるし、ピエールは強いから。」

「ありがとう。でも大丈夫。もう少しで外へ出れそうだし…外の空気を吸えば治るから…」

そう言つと歩き出すピアノカが、心配で堪らない。

<チゾット>

ビアンカSIDE

気が付くと、リュカが寝ている私を覗き込んでいた。  
今にも泣きそうな表情で…

ヤダ…なんて顔してんの…この子…

「ビアンカ…大丈夫？」

思い出した…私、村に着いてすぐ倒れたんだ…

私のせいでリュカは泣きそうな顔してる。

「ごめんね、リュカ。私はもう大丈夫だから…」

「ビアンカ…一度お義父さんの所に戻ろう。」

「な、何言ってるの！もう少しでグランバニアなのよ！アナタの生まれの国なのよ！」

「そんな確証ないよ。」

アイシス様を信用してないわねえ…

「それにビアンカ…妊娠してる。」

「……………え！？」

「ビアンカを抱き抱えた時に感じたんだ。ビアンカの中に命の暖かみがある事に。」

何で本人が自覚してない事が分かるのよ…でも…リュカの事だから、本当なんだろうなあ…

「だったら尚更行かないと。私はグランバニアで出産したいの！」

「え！で、でも…」

「これ以上遅れると、私は更に足手まといになる！リュカと一緒にグランバニアへ行きたいの…せめて…そこまでは…」

私は泣いていた…我が儘を言った上、泣いてリュカを困らせている。リュカが私の涙をハンカチで拭ってくれる。

見るとリュカの目からも涙が一筋…

リュカの涙を私が拭う…

そう言えばレヌール城でも、こんな場面あったわね…

「分かったよビアンカ…でも、無理はしちゃ絶対ダメ！基本、馬車の中で待機。」

「えー…私がないとリュカ…パトリシアとイチヤイチャするからヤダ！」

「ちょ…馬にヤキモチ焼かないでよ…」

ビアンカSIDE END

<チゾット>

チゾットに架けられた大橋を渡ると、眼下に巨大な城が現れた。

「あ、あれがグランバニア城……」

「でかい！すごくでかい！」

東京 1ム20個分！

そんな無意味な例えが頭に浮かぶくらいでかい。

そして何より頑丈そうだ！

まるで要塞の様に…あの城なら、そうは簡単に陥落出来ないだろう。

「あそこがリュカの生まれ故郷ね。」

「どうだろうね？あの女の言った事だから…」

「でもパパスお義父さんが、本当に王様ならリュカは王子様じゃない。私、玉の輿に乗っちゃた？」

オ・ウ・チ・サ・マ・？……………！！！！

セレブ！！

俺、セレブ！！

ハラショー！ハラショーですよ、お父さん！！

よーし！頑張っちゃお、俺頑張っちゃお！

<グランバニア山の洞窟>

久しぶりにリュカがやる気を出している。

ビアンカ殿を戦闘に巻き込まないよう、自らを最前列に布陣し洞窟を進んで行く。

やはり父親になる男というのは、頼もしくなるものなのかもしれない。

洞窟を少し進むと、正面に屈強なる魔界のモンスター『メツサーラ』がこちらを睨んで立っている。

くっ！かなりの強敵だ！

私達が身構えると、リュカが一步踏みだしメツサーラに向けて右手を翳す。

「悪いけど、こっちには身重の妻が乗っているんだ！どいてくれな  
いか。」

リュカの言葉を聞き終わると、メツサーラは身体を左に少し傾けて馬車の中を覗く。

そしてリュカに向き直り、左手の親指を立てて肩越しに洞窟の奥を指さすと、静かに奥へ移動する。

「抜け道があるから来いってさ。」

リュカには奴の言葉（喋ってたの！？アレ？）が分かるらしく、警戒もせずに奥へ進む。

私達は警戒しつつリュカに続く。

少し行くと行き止まりになっており、壁際でメツサーラが待っていた。

「行き止まりではないか！」

「隠し通路だつてさ。」

何時喋ったのか全然分からん。

岩壁に偽装されたスイッチをメツサーラが押すと、行き止まりだと思っていた壁が開き、奥には下りの螺旋スロープが続いていた。

私達は戦闘をすることなく山を下る事が出来た。

外へ出ると、メツサーラが馬車の中を覗き込み頷く。

「元気な赤ちゃんを産めつてさ。ピアノカ。」

何時喋ったんだよ！

「あ、ありがとう…リュカ、彼の名前は？」

メツサーラはリュカと顔を合わせる。

「彼はサーラって言うんだって。」

「ありがとうございます。何かお礼をしたいから一緒に行きませんか？」  
さすが夫婦だ。

思考が似ている。

40・因果と言つ言葉がある。やればできる。因果である。(後書き)

グランバニア山の洞窟がめんどくさくなつたので、  
イカサマさせて頂きます。

一応断っておきますが、

原作にこの様な抜け道は在りません。

#### 41・やりたくも無い事を押しつけられるのは腹が立つ。

<グランバニア城・城下町>  
サンチヨ SIDE

「いいですか、まずはご自身のお身体の事を考えて下さい。まだ病から回復して無いのですから…」

半年前、病を患いパパス様と坊ちゃんを捜す旅より帰還して以来、毎日我が身を案じ足を運んでくれるシスター・レミ。

「はい…私もこれ以上は無理をしませんのでご心配なく…」  
自信の不甲斐なさからシスター・レミに対して、邪険な態度で接してしまう心の狭い私を、パパス様や坊ちゃんが見たらお叱りするだろうか…

シスター・レミを追い返し自己嫌悪に陥っていた。

(コンコン)

今日のシスター・レミは随分としつこいですね。

「どうぞ…開いておりますよ…」

「失礼します…」

澄んだ心地よい響きの声に心奪われ、客人に視線を向ける。  
入ってきたのはシスター・レミではない。

背の高い旅人風の男。

紫のターバンを巻き、鍛え上げられた肉体はその男の強さを物語っている。

日に焼けた肌は健康的で、そして…その瞳を私は知っている！

「あれ？サンチヨ…痩せた？」

「ま…まさか…ぼ、坊ちゃん！リュカ坊ちゃんですか！？」

「ごめんね。長い間…」

こんな…こんなに嬉しい日は初めてだ！

坊ちゃんが生きていた！そしてグランバニアに帰ってきてくれた！  
しかしパパス様の姿が無い…

「坊ちゃん…パパス様は…」

坊ちゃんの瞳に悲しい色に染まる。

やはり…

私が沈痛な面持ちで俯くと、お連れ的女性が爽やかに話しかけてきた。

「お久しぶりです。サンチヨさん。」

随分と美人な方を連れてらっしゃる。

マーサ様以上の美人は存在しないと思っておりますが…

「サンチヨ…紹介するね。僕の妻のビアンカだ。」

妻…？

ビアンカ…？

「ま…まさか、あのビアンカちゃん！？アルカパの！？ご結婚された！？」

吉報の乱れ打ちでパニック状態の私に、更なる追い打ちが…

坊ちゃんがビアンカちゃんのお腹をさすり

「どっつやら…いる！」

もう、私はどうしていいのか分からずに、ただ…ただ、泣いてしまった。

目が覚めたら全て夢だったら…ショックで死んでしまつかもしれない…

サンチヨ SIDE END

<グランバニア城・城下町>

半狂乱のサンチヨが落ち着くには、しばらくの時間が必要だった。  
落ち着いたサンチヨが父さんの事を語り出してくれた。

やはり父さんはグランバニアの王様らしい。

そして攫われた母マーサを捜し出す為、身分を隠し世界を旅していたという。

「も〜う…僕の事は城に残してくれれば良かったのに！」

「そうね…そうしたら私達は出会わなかったわね！残念ね〜。」

「トレビアン！父さん、トレビアン！親子は離れ離れになっちゃダメだよ〜！」

俺の反応にビアンカは笑顔で喜ぶ。

思わず押し倒しそうになっちゃった。

「現在は、パパス様の弟君のオジロン様が代理で国王を務めております。」

そう言うのと俺達を謁見の間へ導いた。

ちなみに、他の仲間達は城下町でくつろいでいる。

この国には他にもモンスターが普通に歩いていたりしている。

なんでも、母さんが改心させたモンスター達らしい。

プックルやサーラを見ても誰も驚かない事に驚いた。

何か俺、この国好き。

### <グランバニア城>

この国の構造は面白い。

城の1階部分と地下が城下町になっており、一般の人達が自由に往来している。

2階部分は上級兵士や国家の高官達の住まいになっており、3階以上が一般的な『城』であり、王族の居住空間になっている。

そして、その3階の謁見の間に俺達は通された。

目の前の玉座に座っているのが叔父に当たる、現国王代理らしいのだが…すげー貧相だなあ〜。

まだデールの方が王様らしい…いや、最近のデールは国王の風格を

要しており、生意気…ゲフンゲフン！……えっと…頼りになりそう  
だ。

「サンチョ！？珍しいな。お前が慌てて…どうしたのだ？」

「は！オジロン陛下。実は…」

サンチョはオジロンに近づき耳打ちしている。

「！！なんと！！兄上の…パパスの子リユカが戻ったとな！！」

オジロンのムダにでけー声が謁見の間に響く。

謁見の間にいた兵士や高官達が一斉に俺を注目し出す。

あまり良い気分では無いな。

「どれ、リユカよ。顔を見せてくれ。近くへ来てくれ。」

気色悪いからベタベタ触るのは止めてもらいたいのだが…

「うむ…確かに義姉上、マーサ殿に生き写しのその瞳…間違いなく

パパスの子リユカ本人である。」

え！？何？疑ってたの！？ムカつくう！

「して、そちらの女性は？」

直立不動で待っていたビアンカに、急に声がかかる。

「あ！わ、私はリユカの妻。び、ビアン…カ…で…」

(バタ！)

俺の視界でビアンカが倒れた！

慌てて抱き抱え、叫び出す俺！

「ベツトは！？ベツトは何処だ！」

「こ、この上に…4階に王族の寝室が…」

俺は最後まで聞かず、走り出す！

「お前ら待たせすぎなんだよ！空気読めバカ！」

口に出したつもりはなかったのだが、どうやら叫んでいたらしい。

一般人だったら打ち首ですね。

ビアンカは疲れと緊張から倒れたらしく、ひとまずは大したことは  
ないらしい。

あゝよかった！

先程失礼な事を叫んだ様な気がするので、取り敢えず謝りに行こう。

「あの〜…先程は失礼致しました…咄嗟だったもので…」

「いや、気にしてはおらんよ！身重とは知らなかったのよな。」

よかった〜。一応王家の血筋を引いていて…ビバ血統！

「リュカよ。お主が帰還した事で私は考えたのだが…」

知ったのさつきだから、あんま考えてねえーな！

「お主に王位を譲ろうと思う。」

……………は!?

「あの、どう「何をおっしゃいます！私に相談もなく！」

誰？こいつ？

「大臣よ…そう騒ぐな。パパスの子が戻ったのだ。順当であろう。」

「し、しかし…」

「それに私は人が良いと言うだけで王になったのだ…器では無いのだよ。」

何だ…自覚してたのか…

「そこまでおっしゃるのなら、王家の試練を受けて頂きます。」

え〜また試練〜危険なのかなあ〜？

「お、おい大臣。今や王家の洞窟にはモンスターも蔓延り、危険な状態だ。何もその様な時代錯誤な「しきたりです!!」

やっぱ危険なのお〜…ヤダなあ〜…

「と、言う訳で…ここより東にある王家の洞窟へ一人で赴き、『王家の証』を持ち帰ってきて下さい。」

「あの、別に王様になれな「リュカよ！頼む！危険は重々承知だが、グランバニアの民の為、そなたの父パパスの為に、試練を成功させてくれ！」

父さんの名前を出すなよお〜…断れなくなる…

「わ、分かりました…じゃあ、ピアンカの出産に関して協力をお願いしてもいいですか？」

「無論だ！今使っている部屋を使うがよい！そなたの仲間モンスター…の部屋も用意しよう。」

取り敢えず準備だけは入念にして出立しよう。  
すぐに行けって訳じゃないみたいだしね。

## 42・未来を担うのは若人の努め。老人の出番は無い。

<グランバニア城・中庭>  
ドリスSIDE

私は中庭の木につるしたサンドバックに蹴りを打ち込む。

「あー動きにくいなあードレスって!」

私はヒラヒラなドレスを着たまま、サンドバックを蹴り続ける。

さつき親父に『今日は、大切なお客様に会うのだから、ちゃんとした格好をしておきなさい!』と言われたので、ちゃんとしたドレスを身に纏っている。

でも、ちゃんとした態度でいるとは言われなかったので、サンドバックを蹴り続ける。

「お!可愛いパンツだね!」

急に後ろから声をかけられ、スカートを押さえ振り返る。

「な、何見てんのよ!スケベ!」

だからスカートはキライだ。

「スケベと言うのは否定出来ないが…見てはいないよ。見えたんだ。」

透き通る様なキレイな瞳に、透き通る様な爽やかな声…私は意識を持って行かれる様な感覚を覚えた。

「へ、屁理屈じゃない!つていうか、あんた誰よ!」

「あはは…ごめんごめん!僕はリュカ。君の従兄弟だ。」

そう言うと、私に近づき片膝を付いて視線を合わせる。  
近くで見ると分かる。

この人凄く強い。

今、この国で一番強いのは兵士長のパピンだ。

そのパピンでさえ、これ程の体付きはしていない。

「で、その従兄弟が私に何の用?」

「用…か……………うん！城下へ買い出しに行こうと思うんだけど一緒にどう？何だったら、可愛いパンツでも買ったあげるよ。」  
「何でパンツ限定なのよ！」

「いや、だって…スカートで蹴りを出し続けるのなら、可愛いパンツが沢山必要でしょ？」

「きよ、今日が偶々スカートだっただけよ！何時もスカートでこんな事している訳じゃ無いんだから！」

「まあ、どっちでもいいよ。さ、行こ！」

そう言って私の手を引き、城下へ下りていった。

ドリスSIDE END

<グランバニア城・城下町>  
ピピンSIDE

僕は裏庭の気に、長さ10センチくらいの木材をロープで数本垂らし、剣術の練習に勤しんでいた。

吊された木材を木刀で打ち弾き、反動で戻ってくる木材を交わし打ち返す…というのが理想で、現実とはかけ離れている。

幾つかの木材が頭に当たり、かすり傷だが血を流す。

「いててて…」

「クスクス…面白い事しているなあ…」

ビックリして後ろを振り向くと、この町では見た事がない紫のターバンを巻いた旅人風の男性が笑いながら近づいてくる。

「ホイミ」

暖かい光が傷を癒してくれた。

「あ、ありがとう。でも、笑う事無いでしょ！剣術の練習をしたたのだから！」

「剣の練習…か…。魔法の勉強はしないの？」

「魔法は…難しすぎて…でも、魔法が使えなくなったら父さんみたいな立派な兵士になるんです！」

「お父さんみたいなの…か…」

「そうです！父さんはこの国の兵士長をしているんです！」

「へえー、凄いなだね！」

何だか、この人とは初めて会ったのに話しやすい。

「でも、魔法は便利だよ。」

「ちょっとリユカ！こんな所で何してんのよ！」

表通りの方から、綺麗に着飾った女の子が大きな声で話しかけてきた。

この人リユカって言うのか。

「じゃあ…便利な所を見せてあげよう。」

そう言つて、こちらに近づいてくる女の子へ向かつて魔法を唱える。

「バギ」

バギの魔法と言えば、風を操り真空の刃を巻き起こし敵を切り裂く魔法だ。

「な！！！」

僕が驚いて女の子を見ると、女の子には傷一つ…いや、服にも切り裂かれた様子はなく、ただ風邪を舞い起こしている。

そして女の子のスカートが舞い上がり、白と青のシマシマが目についた。

次の瞬間、リユカさんの左頬に女の子の跳び蹴りが炸裂する。

僕は2度目のシマシマを体験する。

「いきなり何すんのよ！」

「いや、この子が見たいって言うから…」

「え！？言つてませんよ！」

「あれ？そうだっけ？まあ、いいじゃん。いい物見れたし。」

「バカ！スケベ！！最低！！！！」

そう叫び女の子は走り去ってしまった。

「うーん…一個も否定出来ない…」

「大丈夫ですか？」  
「うん。慣れてるから。君こそ、ムリはしちやダメだよ。兵士になる前に怪我で入院になっちゃうよ。」  
「そう言い残し、リュカさんは僕の前から去っていった。」

ピピンSIDE END

<グランバニア城>  
ドリスSIDE

最近私はリュカと一緒にいる事が多い。

リュカの仲間モンスター達が言っていたが「リュカは馬鹿でスケベでお調子者だ！でも、一緒にいると楽しい気持ちになる。」と…  
凄くよく分かる。

でも、近々一人で洞窟探索をしなければならぬらしく、その準備等で忙しそうだ。

だから私も我が儘は言わない様にしているが、時間がありそうな時に声をかけると「あ！ごめん。これからビアンカの所にいかなきゃ…」って、断られる時がある。

「…」って奥さんの事でしょ！

何時でも逢えるんだから私の相手をしてもいいじゃない！

頭くるわ！

そう、ピエールに愚痴を言ったら「じゃ、ビアンカ殿に会いに行つてごらん。」って言われた。

正直会いたくない！

リュカを束縛し独り占めしている様なヤな女には会いたくなかった。でもピエールが私の手を引いて、無理矢理会いに連れて行った。

(コンコン)

「ビアンカ殿。入ります。」

私は室内に入っても俯いたまま顔を合わせない様にしていた。

「リュカから聞いているわ。貴女がドリスちゃんね。」

そのクリスタルの食器を響き渡らせた様な美しい声に、思わず顔を上げてしまった私は、その美しさに見とれてしまった。

私はすぐにビアンカさんと打ち解ける事が出来た。

一緒にいると凄く幸せな気分になれる女性…

もっと早く会いたかった…

女三人で会話を弾ませていると、ケーキ片手にリュカが現れた。

「手土産持参したから僕も仲間に入れてよ。」

「ちよつと！何でもっと早くにビアンカさんと会わせてくれなかつ

たの!？」

「え!？だつて、紹介するつて言った時に『会いたくない』つて帰つちやつたじゃないか…!」

「それでも強引に連れて行くべきでしょ!」

「勝手だなあ〜」

この後、美味しくケーキを食べつつリュカは女三人に責められ続けた。

私はこの日を境に、ほぼ毎日ビアンカさんの所へ通い続ける様になる。

ドリスSIDE END

### 43・家族を守る為ならばエゴイストになれる。危険な思考だけど。

<グランバニア城>  
ビアンカSIDE

今日これからリュカが出立する。

たった一人で王家の試練を受けるのだ。  
試練に合格しないと王様にはなれない。

リュカは散々ぼやいていたわ…

「国王なんてなれなくてもいいのに…」  
だって！

普通みんななりたがるのに、我欲が少ないのね。

だから私はリュカが大好き。

そのリュカは今、部屋の外で最終打ち合わせをピエール達と行っている。

私の所にも声が聞こえる。

「じゃあ…ピエール。ビアンカの事を守ってあげてくれ」

「守ると言われても…城内ですから…」

「イヤイヤイヤ…そもいかないのさ！高官連中は僕が王位を継ぐ事を嫌がっている節がある」

「確かにそうじゃのう。今は御しやすいオジロン殿が国王じゃからな」

「それだけじゃない…オジロンには娘、ドリス一人だ！自分、もしくは息子と政略結婚させる目論見もあるのだから…」

「厄介じゃのう…」

「うん。で、僕にとって最悪なシナリオは、僕に新たな妻を宛おうとしてくる事だ」

「新たな妻!？」

？どういう事？

「娘等を僕の妻に差し出し、権力確保を考える。そうすると、ピアンカが邪魔なんだ」

！！

私は自分の立場の危うさを初めて感じた！

リュカはその事まで考え、念には念を入れて準備をしていたのだ。

リュカがこれから出立する…急に心細くなり震える私の手にプツクルがすり寄ってきた。

「プツクル…そうね、私には貴方達が付いているわね！不安な顔をしていると、リュカが試練に集中出来ないわね」

うん…いつもの様に笑顔で送り出さないと…

(コンコン)

「ピアンカ、開けていい？今、服ちゃんと着てる？」

「着てるわよ！何で普段は裸みたいな事言うのよ！」

「あははは、ごめんね！おっと、プツクルと不倫中！？」

「馬と不倫するアナタと一緒にしないで！」

もう…緊張感を和らげるのが上手いわねえ」

「じゃあ…渋々行ってくる…」

私を抱き締め、お腹を撫でてくれる。

リュカの暖かい手で撫でられると、身体全体に幸せが広がる。

「何か、でかいな！まだ5ヶ月にもなっていないんでしょ？」

「私だつて初めてだから分からないわ…でもリュカは大きいのが好きでしょ？」

「オッパイはね…」

「もう…エッチ…」

優しくキスをして、リュカは出て行った…

残された私は、彼の無事を祈り不安な日々を送る事しか出来ない…

「ガラじゃないわね！」

ピアンカSIDE END

< 試練の洞窟 >

ちまちまと嫌がらせ的な仕掛けのある洞窟の最深部に、ワシの紋章が彫り込まれた『王家の証』が奉られてある。

「お!? これかなあ? 王家の証ゲツチューー!!」

俺は意気揚々と踵を返し、『ゲッターロボ』の替え歌『ゲツチューロボ』を歌いながら洞窟を逆進する。

「おっと! ここを立ち去るのは、待ってもらおうか!」

見渡すと、ガラの悪い男達10人程が俺の行く手を遮っている。

「何ツスかあ?」

< 試練の洞窟 >

カンダダSIDE

俺達の前に旅人風の男が立ち尽くしている。

「何ツスかあ?」

危険な洞窟の最深部で、屈強な男共に囲まれているのに、緊張感の無い喋り方をする男だ。「あ!? もしかして…アンコール希望ですか!? う〜ん、忙しいので1曲だけなら披露しますけど…」

何なんだ、この男? 馬鹿なのか?

「ちげえーよ! あんたにその証を持って帰られると、困る人がいるんだよ!」

「そう! 然る止ん事無い方からの依頼で、オメーを殺しに来たんだよ!」

この馬鹿共…ベラベラと…

「うるせーぞ! テメーら!!! 余計な事言っんじゃねー!」

「あの〜…」

男が緊張感無く話しかける。

「おサルさんがどうしたんですか？」

「は？」

「イヤ…さつき、サルがどうのつて…」

「然る止ん事無い方だ！誰も動物のサルの事なんか言つてねえ！」

「ああ…で、僕を殺して何になるんですか？」

「オメーが王様になるのを阻みたいんだよ！」

やはり馬鹿なのか…

「馬鹿だなあ、君達は…」

な！こいつに馬鹿つて言われた！

「僕の奥さんは妊娠中なんですよ。僕が死んでも、男の子が生まれたら無条件で王様じゃないですか。君達のやっっている事は全くの無駄だね！」

「だったら、オメーの嫁さんとガキも一緒に始末すればいいじゃねえーか！」

「がははは、ちげーねえー！」

手下の一人が言った言葉に、他の手下が爆笑をした瞬間、男の姿が消え手下共の首から大量の血が噴き出した。

俺の足下に手下の頭が転がっている。

切断された事にも気付かず、大爆笑をしたままの顔で…

振り向くと、あの男が先程と変わらぬ優しげな表情で俺を見つめている。

敵や官憲に取り囲まれた時も恐怖しなかった俺が、手下共の返り血を大量に浴び、優しげに微笑む一人の男に震え上がっている。

強い…こいつには勝てない…何とか逃げないと…

「ま、待て…俺の、こ、降参だ！もう、あんたに手出しはしないし、あんたの家族にも近づかない！約束する。本当だ！！」

「黒幕は？」

声だけ聞くと、まったく怒りを感じさせない声で問いただしてくる。

「知らねえーんだ…本当だ！顔も素性も隠して接触してきやがったんだ」

「なるほど…君を信じよう…」

ほっ…助かった…

「じゃあ…もう君は、生きている必要無いね」

「えー!？」

「だって、何も知らないんでしょ？役に立たない!」

「待ってくれ！何も殺さなくても…」

「君が生きていると、第2・第3の君が現れるかもしれないだろ。

たかが金で雇われるぐらいの…」

「そ、それは…」

「でも、君が殺された事が広まれば、みんな怖くて引き受けない。

僕も家族も一安心さ」

そう言つて剣を抜き放ち、一步一步俺に近づく。

俺は恐怖で足が纏れ、尻餅をついて怯えている。

「それに黒幕はきつと、城の誰かだろう…君の首を持ち帰りみんなに見せつけければ、動揺してボロを出すかもしれないし。クスツ…やつぱり君は死んだ方がいいんだよ」

俺は怒らす相手を間違えた…

男が目前で剣を振りかぶつた時、人生最大の後悔を刻み込んでいた…

カンダダSIDE END

<グランバニア城>

ドリスSIDE

ビアンカさんの部屋で談笑を楽しんでいると侍女からリュカ帰還の報を受けた。

私はビアンカさんを待たせ、一人でリュカを迎えに走った。

城の正面階段2階でリュカと出会い、私は硬直する。

「あ!？ドリス…ただいま。ごめんね、こんな格好で…」

口調はいつもの様に優しい口調だが、格好は全身血まみれ状態！手には直径30センチ大の血まみれの包みが…あれはきつと…

「け、怪我…してるの!？」

「ううん…僕はかすり傷一つしてないよ。全部返り血なんだ…」  
返り血!？いったい何が…

「あ、ビアンカには心配させたくないから…返り血の事は言わない  
でおいて…少ししたら部屋に行く事だけ伝えておいて…」

「それはいいけど…すぐ来ないと心配すると思う…」

「ううん…じゃあ、『帰還早々メイドさんをナンパしている所を、  
オジロンに見られて説教されている』って言っというて…」

「え!？そんなふざけた…」

「クスツ、100%信じるから大丈夫」

新妻にナンパしている報告の方が心配するのでは…

「じゃあ…僕、会議室で叔父上や大臣達に会わないと行けないから  
…」

そう言うと、そのままの格好で会議室へリュカは歩いて行った。

ドリスSIDE END

44・疑うと誰も信じられなくなる。疑わなければ信じられる。自分次第だ。

<グランバニア城>

オジロンSIDE

「まったく！帰還早々我々を呼び付けるとは……いったい何を考えているのか!？」

ワシは大臣達と2階の会議室は向かい歩いているところだ。

國務大臣のエクリー（ワシの一番信頼の置ける側近）が、リュカの急な呼び出しに腹を立てている。

「試練に成功すれば既に国王とでも思っているのですかね!！」

エクリーの憤慨は止まる気配が無い……

「戴冠式が終わるまではオジロン様が国王で在らせられるのに、そのオジロン様まで呼び付けるとは!……いったいどう言……う……」

大声で不平を鳴らしつつ会議室のドアを開けると、そこにはリュカが優しい笑顔で佇んでいた……全身血塗れで……

「リュ……リュカ……無事か……?」

皆が声を失っている中、ワシは辛うじてリュカの無事を確認した。

「全部返り血です。ご心配なく……」

「いったい何が……」

「試練の洞窟で命を狙われました。」

リュカは表情を変えずに優しい口調で話していく。

「い………いったい誰に……」

エクリーの疑問を聞くと、持っていた血塗れの包みをテーブルに置き中身を晒す。表情を変えずに……

「彼と彼の手下10人程に命を狙われました」

そこには男の生首が1つ。

「大盗賊カンダタ!」

「あれ?叔父上の知り合いですか?」

「いや…そうではない。世界を股に掛けて盗賊家業を行っている犯罪者だ！」

「盗賊が殺し屋の真似事…クスツ…世も末だ」

「しかし…何故…？」

「この中の誰かが僕を王様にしたく無いんですよ」

ワシの問いに不思議そうに答えるリュカ。

「な！我々の中にその様な不屈き者がいると、疑っているのか！！」  
エクリーは声を裏返ししながら憤慨する。

ワシも疑われるのは心外だ。

「あはははは…疑っているのではなく、確信しているのですよ！国務大臣閣下！！」

全身血塗れで腹を抱えて笑うリュカの姿に畏怖の念を抱き、言葉を発する事が出来ない…

「まあ…正直…この中の誰であるかまでは分からないのですが、これだけは言っておきます。今回は僕の実力を過小評価してくれたお陰で、あの様なザコの相手で済み大事には至らなかつた」

違う！カンダタ一味はザコではない。

我が軍も再三手痛い被害を被っている！

「だが…もし、またこの様な事が起こりビアンカや生まれ来る子供に何かあつたら…」

リュカの顔から笑みが消え、氷の様な瞳で我々を見つめている。

これ程恐ろしい怒りを感じたのは初めてだ。

兄上の怒号に恐怖を感じた事もあつたが、その比ではない！

「で…では…は、犯人捜しは…」

絞り出す様な声でエクリーが問いかける。

「別に犯人捜しなどどうでもいい！僕が王になれば自ずと浮彫になる！」

皆、互いに顔を合わせ何も言えないでいる。

「では、僕はこの辺で…、国務大臣殿。申し訳ありませんでした、国王でもない身分の者がお忙しい皆様を、この様なくだらない事で

呼び出してしまい」  
そう、いつもの様な優しい笑顔で言い終わると、リュカは一人会議室を後にする。

オジロンSIDE END

<グランバニア城>

俺は兵士用のシャワールームで返り血を流し、キレイな服に着替えるビアンカの所へ歩き出す。

途中、オジロンとサンチヨが話しかけてきた。

「リュカよ！まさか叔父であるワシまで本当に疑っている訳ではあるまいな！」

何だあ？めんどくせーなあ……

「叔父上！僕は叔父上の事をあまりよく知りません。この国で僕に疑われて無いのはサンチヨぐらいですよ」

「坊ちゃん……」

サンチヨは嬉しそうに頷き、オジロンは口を尖らす。

「ワシが王位を譲ると言い出したんだぞ！」

「それこそ目眩ましの芝居かもしれませぬ。まあ……疑えば……と言う事ですから、お気になさらずに。」

「気にするわい！」

「クスツ…本命は別にいますから…あくまで疑う要素が少なからずあるという事ですよ」

「だからといってワシを脅さんでも……」

あゝ…めんどくせーなあーも〜！

「叔父上にはこれから王になる為の事を色々教わらねばなりません。どうか機嫌をなおして下さい。では……」

オジロンはサンチヨに何かブツブツ愚痴っていたが、それを無視してビアンカの元へ向かった。

ビアンカの部屋に入るといきなり抱き付かれた。

「リユカ!!大丈夫!?怪我はない!?何があったの!?!」

「ちょ…ビアンカ、落ち着いて!」

「だって!リユカが血塗れで帰ってきたって…」

「口軽っ!」

思わず叫びドリスを見つめる!

「わ、私じゃないわよ!戻ってきたら、もう知っていたのよ!」

「だれだあ…ベラベラ喋るヤツは…お尻ペンペンだ!」

「侍女のエリー又が教えてくれたの…」

「エリー又さんって…あのキュートなお尻の?…よし!あとでお

仕置きのお尻ナデナデだな!」

「ペンペンがナデナデに変わったけど!」

「あれ!?本当?最初からナデナデじゃなかった?」

「もう…でも、無事で本当に良かった…」

またビアンカを泣かせてしまった。

「ビアンカは心配性だなあ…そんな娘にはお仕置きのオツパイモ

ミモミだ!」

「ちょ…ダメ…リユカ!…い、今は…コラ!…ドリスが居るから

…」

「ドリスが居なければいいの?」

「え!?!」

「よし!ドリス。出てって」

ドリスの踵落としを喰らい、その日はお開きとなった。

44・疑うと誰も信じられなくなる。疑わなければ信じられる。自分次第だ。

最近良いサブタイトルが浮かびません…

ですが、『以前は良かったのか?』と

聞かれれば疑問が残ります…

スランプですかねえ?これって…

#### 45・式典とは重要なもの。望む望まぬに関わらず。

<グランバニア城>

俺は今、オジロンの隣で謁見に立ち合っている。

王になる為の一環として、ほぼ毎日オジロンと行動を共にしている。もう、飽きた。

王様なんてどうでもいい。

ピアノカとイチヤツきたい。

そのピアノカも、お腹がかなり大きくなり毎日辛そうだ。

日々生活するだけで体力を奪われるらしく、夜は早く寝てしまう。

しょうがないからピエールの所へ行つて『欲求不満です』つて言つたら、沢山イオラをかまされた。

言っただけじゃん！

戴冠式も間近に迫り、皆慌ただしい。

俺は『ひっそりと戴冠式は済ませましょ』つて言ったのに、國務大臣が『そんな訳にはいきません！大々的に、式後の祝賀会も盛大に執り行います』つて、率先して取り仕切っている。

俺は言つたんだ『いやいや、そんなに目立つ必要は無いでしょう。』

気付いたら王様が変わっていたつてぐらいでいいんじゃない？』つてね！

そしたら『いい訳ねえーだろー！』つてみんなに怒られちゃった。

今日も戴冠式と祝賀会の打ち合わせで、國務大臣と話し合っている。

「……と言う様に、新国王陛下の挨拶の後、盛大に祝賀会を開催するつもりです。如何ですかナリユカ殿？」

「うん。盛大にする必要無いよね。ひっそりと身内だけで乾杯しよ。

あと、新国王の挨拶もいらさないよ、顔見せだけでいいよ」

「何を言われます！このグランバニアの新たな国王陛下のお声を、国民全員に聞かせるありがたい瞬間ですぞ！また国民全員が心待ち

にした、新たな国王陛下のご即位ですぞ！皆で祝わずどうするのですか！」  
何かコイツ、俺の嫌がる事ばかりする。試練押しついたり、スピーチ押しついたり…  
ハッキリ言つてこれは打ち合わせじゃない。  
俺に、こんな嫌がらせするよつて報告しているだけ。  
断つても強行される。

今日のお勤めから解放され、ビアンカとまったりタイムを過ごす為  
中庭を横切ると、後ろから呼び止められた。

「リュカ陛下！」

振り向くと、そこにはパピン兵士長と、いつぞやの剣術少年が寄り  
添つて立っている。

「パピンさん…『陛下』はまだ早いつて！」

「ははは、申し訳ありません。しかし、時間の問題ですから」

「そちらの剣術少年は？」

「はい。私の息子のピピンです。以前リュカ殿に魔法を御指南頂  
いたそうで…直接お礼を言いたいと申しまして、ご迷惑かと思いま  
したが連れてきてしまいました」

「指南なんて事は…ただ、ドリスのパンツを見ただけですから。ね  
え」

ピピンは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「それにお礼だったら言葉じゃなく、立派な兵士になるという態度  
でお願いしたいな」

「ピピン、これは高く付いたな。生半可な気持ちでは、お礼しきれ  
ないぞ」

「はい！父さん。僕、リュカ様のご期待に添える様頑張ります！」

俺も父さんの背中を見て、こんな気持ちでいた時代もあったなあ…

「それとリュカ殿。もう一つお願いがあります」

「お金なら持つてないよ。全部ビアンカが握っているから」

「い、いえ！違います。リュカ殿の腕前を聞き及びまして、私と手合わせをお願いしたいのです」

「痛い！痛い痛い痛い！頭痛でお腹が痛い！だから無理！」

「そんな意地の悪い事を言わず、どうかお願いします」

「何でそんなに戦いたいの？ピエールだったら相手してくれるよ。」

ピエール凄く強いよ」

「ピエール殿とは幾度か手合わせをして頂きました。その際、リュカ殿の強さには遠く及ばないと聞きました…：どれほどのものなのかを経験したく、お願いしております」

ピエールのヤツ、ここにきて嫌がらせをしてきやがった。ふられた腹いせか？

だいたい勝てる訳ねえーじゃん！

グランバニア随一の戦士だよ！

これアレか？最近息子が自分より俺に敬意を持ってしまったから、ここで父さんの方が強いんだよ的なアピール？

あゝ…きつとOKするまで諦めないんだろうなあゝ…

サツサと負けて優越感に浸らしてやるか。

「じゃあ…ここでもいい？」

「是非もない」

俺は剣を正面に構えパピンの動きを待つ。

パピンは鋭く踏み込むと、右へ左へ絶え間ない連撃を繰り返す。

とは言え、思っていた程本気では無い様だ。

どうやらアレだ！接待ゴルフならぬ接待手合わせだ。

俺に花を持たせ媚びを売る。

俺、褒められるの好きだから、受け取っちゃうよ。そう言うヨイシヨは。

<グランバニア城>

ピピンSIDE

すごい！

素人の僕から見ても、父さんの連撃は重く早く全てが本気だ。王様に対して手加減していない。

でも、掠りもしない…リユカ様は涼しい顔で去なしている。

父さんは顔から汗を流し肩で息をしているのに、リユカ様はいつもの優しい笑顔で汗一つかいていない。

リユカ様は、あの大盗賊カンダター一味を一人でやつつけてしまったのだ。

父さんも部隊を率いて何度も討伐に行ったのに、逃げられてしまった。

その時に大勢の部下を失い、父さんも大怪我をした事が何度もある。気が付くと中庭の周囲に大勢のギャラリーが集まっていた。

ドリス様やサンチヨ様。手の空いている兵士達。4階にある王家の寝所のテラスからは、とても美しい女性が3階の中庭を眺めている。あの方がピアンカ様だろうか…リユカ様の奥様なだけあって美しい人だ。

ピアンカ様の隣にはピエールさんも一緒にいる。

ピエールさんには何度か指南を受けている。

その時聞いたのだが、『リユカは、馬鹿でスケベでお調子者だが、それに目を奪われてはいけない。真に強い男だ』と。

そんなリユカ様に仕える兵士に早くなりたい。

「ま、参りました」

別の事を考えていたせいで肝心な場面を見逃してしまった様だ。

父さんの首元にリユカ様の剣が添えられている。

「悪いね、パピンさん。息子さんの前で…」

「いえ…己が不甲斐なさのせいです…」

リユカ様格好いいです。

負けちゃったけど父さんも格好いいです。

早く二人に追いつける様に頑張らないと。

UNSHED  
EZE

46・出産。男に出来る事は何もない。やることしか出来ないなんて情けない。

<グランバニア城>

俺は謁見の間で落ち着かない時間を過ごしている。

もう…どのくらい経過したのだろう…

たいして経過してないのかもしれないが、とても長く感じるイヤな時間だ！

ビアンカが俺の目の前で蹲り産気づいたのだ。

俺は情けない声でビアンカの名を呼び狼狽える事しか出来なかった。俺、何の役にもたつてない。

俺の存在なんて必要ないのではないか！

今、ビアンカは寢室で苦しんでいる。

かなりの苦痛に耐え、苦しんでいる。

俺は何をしている？何もしていない…

せめて苦痛だけでも俺が引き受けられないだろうか？

そんな思いが俺の中を堂々巡っている。

<グランバニア城>

サンチヨSIDE

「リュカ！少しは落ち着かんか！」

謁見の間を落ち着き無く彷徨っていた坊ちゃんに、オジロン様から叱咤がとぶ。

坊ちゃんが産まれた時の事を思い出す。

パパス様もこの部屋を落ち着き無く歩き回っていたものです。

「え！？ヤダなあゝ、落ち着いてますよ。本当、本当！だってビアンカは強いもん！心配する必要無いもん！全然平気。全然大丈夫。」

僕、冷静。僕、平常心。僕へっちゃら」

「そうですね、坊ちゃん。ビアンカちゃんなら大丈夫ですよ」

「そうだよね！心配する必要無いよね！あんなのウンコするのと変わりないよね！ちよつとでつかいだけだよね！死んだりしないよね！？そんなこと無いよね？ビアンカ、また笑顔見せてくれるよね？死なないよね？…大丈夫だよね…？」

そこまで言い終わると坊ちゃんの目から涙がこぼれ落ちてきた。

坊ちゃんは幼い頃からビアンカちゃんの事が好きだったのだ。

その思いが強すぎて坊ちゃんを不安にさせる。

「大丈夫ですから！もうすぐですから！」

そんな事しか言えない自分が情けなくなる。

出産は女性が主役なのだ…我ら男は、ただ狼狽える事しか出来ないのだ！

サンチヨ SIDE END

<グランバニア城>

ビアンカSIDE

私の目の前に涙目のリュカが立っている。

「もうリュカ…パパになつたんだからそんな顔しないの！」

「うん…ごめん、ビアンカ。大丈夫？」

「私は大丈夫…疲れたけど…」

「双子だったんだね。どうりで大きい訳だ…」

お産を手伝ってくれたシスター・レミと侍女のブレンダさんが、それぞれ男の子と女の子を抱いてリュカに見せている。

「ねえ…リュカ…名前、考えてある？」

「え！？名前って？」

まさか…

「赤ちゃんの名前よ！考えてないの？」

「…ソナナコトナイヨ」

「はあ…考えてないのね…まあ、いいわ。私、考えてあるから！」「ゲレゲレとかボロンゴとか言わないよねえ…」

「古い事持ち出さないでよ！」

「（クスツ）ごめん。で、ビアンカが考えた名前は？」

「うん。男の子が『ティミー』、女の子が『ポピー』！…どう？」

「『ビアンカ』の次に良い名前だね」

リユカは双子を抱き抱え、

「こんな情けないパパだけど一生懸命頑張るから、あんまりいぢめないでね」

（コンコン）

ノックと共にサンチヨさんが入ってきた。

「ビアンカちゃん。双子出産おめでとぅございます」

「ありがとうサンチヨさん」

「おめでたい所申し訳ありませんが坊ちゃん、オジロン様がお呼びです」

「何だよあゝ、空気読めよあゝ…」

「リユカ！式典の事よ、きつと」

「シキテン？」

「今日、戴冠式なの忘れてたの？」

「ソナナコトナイヨ。オボエテイルヨ」

「ほら！私達の事はいいから、お仕事してきて！」

大きなため息を吐くと、渋々…本当に渋々部屋を出て行った。

ビアンカSIDE END

<グランバニア城>

今俺は、オジロンの前で片膝を着き俯き畏まっている。

初めて知ったのだが、俺の本名は『リユケイロム・エル・ケル・グランバニア』と言っらしい。長いね！

「ここに宣言する。リユケイロム・エル・ケル・グランバニアがグランバニアの新たな国王になった事を！」

俺は立ち上がり、家臣達を見渡して城下町へ下りて行く。

<グランバニア城・城下町>

城下町の中央広場に大勢の人が集まり、ステージ上に立っている俺の事を瞳を輝かせながら見つめている。

中には泣き出している人も……

パパスの息子と言うだけで凄い人気ぶりだ。親の七光りってすげー。さつき國務大臣が小声で、『オジロン様の後でリユカ陛下のスピーチです。準備はいいですか？』ってプレッシャーかけてきたので、『モチロンサ』と答えてやった。

すげー不安そうな顔してた。だから止めようって言ったのに！

「……………では、皆に紹介しよう。先代デュムパパスの子！リユケイロム・エル・ケル・グランバニア！グランバニアの新たな国王を！」

来てしまいました！この瞬間が！

だが、大丈夫！俺には秘策がある！

偉大なる不敗の名将が残したスピーチが……

俺はオジロンより前に出て、大きく息を吸った。

「リユケイロム・エル・ケル・グランバニアです。どうぞ、よろしく」

俺はまた、オジロンの後ろに下がり笑顔でみんなに手を振った。

みんな啞然としている。

ちらほらと拍手が聞こえてくると、その拍手は瞬く間に広がり皆が  
歓喜の声を上げている。家臣の方達の顔を見ると、オジロンはヤレ  
ヤレと言った感じ。

国務大臣は………だから止めようって言ったのに！

新国王戴冠祝賀会と銘打って開かれたドンチャン騒ぎは、俺が居な  
くても盛り上がれるだろうと思うくらい盛り上がっている。

早くビアンカの所に行きたい俺は、国務大臣の隙を見ては抜け出そ  
うとしているのだが、結構目聡く抜け出せない。

「リユカ陛下が祝杯をあげなければ皆が心から祝えません。さ、ど  
うぞこれを！」

国務大臣が満面の笑みで俺にワインを渡してきた。

飲めなくはないが、あまり酒は好きでは無い。強くも無い。

心から断りたい。

でも、飲むしかないんだろうなあ……

何で王様が気を使うの？

俺は覚悟を決めて一気にワインを飲み干した。

予想以上に強いワインは、俺の喉を熱くする。

視界が歪み、足の力が抜け、その場に倒れ込む。

俺は闇の中に落ち、記憶がそこで途切れた……

あ、あれ……？こ、こんなに……弱かつ……た……け……？

47・變する者を守る為ならば鬼にでも悪魔にでもなれる。きつと…（前書き）

今回はシリアスです。

難しいですね。

## 47・愛する者を守る為ならば鬼にでも悪魔にでもなれる。きつと…

<グランバニア城>

オジロンSIDE

祝賀会の夜、我々はリュカの叫び声で目を覚ました。  
ビアンカ殿が攫われたと言う！  
驚いた事に、その間城内の者は皆眠りこけていた！

調査の結果、祝賀会の飲み物に睡眠薬が混入されていた事が分かり、犯人は國務大臣のエクリーであるとと言う見解になった。

ワシは信じられないでいた。あのエクリーが…  
ワシにとつては頼りになる家臣が…

「叔父上は利用されていたんですよ！」

リュカの不機嫌な口調がワシを一層落ち込ませる。

そのリュカは今、エクリーの屋敷を家捜ししている。

よほど腹に据えているのだろう…普段綺麗好きなりユカが散らかる事を気にもせず荒らし回っている。

程なく1冊の計画書と、奇妙な靴を1足見つけ出した。

リュカは計画書を読み終わると、冷たい表情で一笑して計画書をワシに渡してきた。

計画書にはこう書かれてある。

祝賀会の飲み物に睡眠薬を混ぜ全員を眠らせる。そして王妃ビアンカを誘拐して国王リュカの人望を失墜させる。次にエクリーがワシ（オジロン）を利用して王妃ビアンカを救出する。その功績によりワシは次の国王に正式に即位し、リュカを退かせる。そしてワシを操りエクリーが国を牛耳る。

要約するとこんなとこだ。

更に、あの奇妙な靴の事も書いてある。

この計画の打ち合わせをする際は、空飛ぶ靴（あの靴の事だ）を使

い打ち合わせ場所兼人質監禁場所へ移動する事。

つまりあの靴を使えばビアンカ殿の所へ行けると言う。

「リュカ…いえ、陛下。これは罠です！」

「だろうね！だが…それが何か？」

冷たく感情のない口調で言い放つと、サンチヨの側へ近づき誰にも聞こえない様に耳打ちをする。

「……………しかし……………はい……………分かりました……………」

サンチヨにだけ…サンチヨだけを信頼し、特別に何かを告げている。

「サンチヨ！絶対他の人には告げない事。信用しているからサンチヨにだけ話したんだ。お願いするよ」

「分かりました。命に代えましても……………」

「そんな大袈裟に考えなくていいよ」

そう言い、リュカは空飛ぶ靴を手にベランダへ出て行く。

まさか！

「リュカ！まさか一人で乗り込むつもりか！？」

「靴は1足しか無いからねえ」

「罠なのは分かっているだろう！まず、準備を「ビアンカを失うつもりは無い！」

ぐっ！

「時間をかけて準備をして敵地へ乗り込んでビアンカの死体を回収する…（クスツ）絶対ごめんだね！」

リュカはこちらを振り向くことなく空飛ぶ靴を使い、北の方角へ飛んでいった。

ワシがエクリーを信用した為に、この様な事態になったのだ…

リュカに謝罪する為にも、リュカの手助けをせねば…ワシに出来る事をせねば…

オジロンSIDE END

<デモンズタワー>  
エクリースIDE

私は光の教団に裏切られた。

地位を使い、懸命に布教活動を行ったきたと言っのに…

此度の件で、私の地位を強固なものにしてグランバニアを牛耳り、国民全てを信者にする計画だったのに…

しかし、光の教団の計画は違った…

リュカを誘き寄せ殺害し、魔族がリュカに化けグランバニアを支配するのが目的だった。

早くリュカに…いや、リュカ様にお知らせせねば…

だが私は魔族共に足を折られ、塔の中で置き去りにされている。野垂れ死にさせるつもりだろうか？

耳を澄ますと、こちらへ近づく足音が聞こえる。

私を殺す為に来たモンスターかと思いきや息を殺して身構えた。

「…………… 国務大臣……………」

現れたのはリュカ様だった！

なんと、たった一人でこの塔を登って来たのだ！

「リュカ様。これ以上先に進んではなりません。これは罠です。リュカ様を殺して魔族が成り代わる罠です」

リュカ様は冷たい瞳で私を見下ろし、私の言葉を聞き続ける。

「お許し下さい、陛下… 私は光の教団を広める為に地位を利用し固執しました。しかし魔族と手を結ぶつもりはありませんでした」

「もういい…」

「しかし私「もう、喋るな！」

リュカ様の怒号が私の言葉を遮る。

「ピアノカの誘拐を手引きしたお前を俺は許さない」

その言葉を言い終わる前にリュカ様は剣を振り切っていた。

私…意識も…遠退いて…行く…

エクリーSIDE END

<デモンズタワー>  
ピアンカSIDE

私は今、塔の最上階に囚われている。

凶悪なモンスターが蔓延る禍々しい塔の最上階に…  
そして私の前にリュカが居る。

私を助ける為に一人でこの塔を登ってきたのだ。

「リュカ！来てくれたのね！？…でも…来てはいけなかった…ア  
ナタを殺してすり替わる為の罠なの！お願い、逃げて！」  
そこまで言い終わると、私は見えない力で弾き飛ばされた。

壁に身体を打ち付け、苦しくて声も出ないでいる。

「グランバニアの王よ！お前は王としてあるまじき過ちを犯した。  
王とは国民を守る為に存在する。にも関わらず、お前はここに来た。  
たかが一人の女の為に…その行為、万死にあたいする！」

「黙れ馬！家畜如きが王について語るな！」  
その刹那！リュカが馬の化け物、ジャミに斬りかかる！  
が、リュカの剣はジャミの身体まで届かない。

ジャミの身体を特殊な結界が覆っている。

「ふはははは！無駄だ、無駄無駄！俺はゲマ様の力で強化されたの  
だ！お前もあの時の父親と同じように、じわじわとなぶり殺しにし  
てやる！」

あの時！？父親と同じ！？

コイツが…この化け物がパパスお義父さんを…

「黙れと言っただろ！お前は口が臭い！」

リュカは怯むことなく攻撃し続ける。

斬りつけ、呪文を唱え、諦めない…

しかし一切の攻撃は効かず、逆にリュカの剣が弾き飛ばされた。

リュカの剣は、遙か後方の壁に深く突き刺さり取りに向かえば隙だらけになる。

ジャミは右前足の蹄でリュカの頭を握ると、力任せに振り回し始めた。

壁や床に身体を打ち付け反撃する事も出来ないでいる。

「ふはははは！己の無力を痛感しろ！貴様は国も、女も、何一つ守れんのだ！ふはははははは！」

「そ、そんなに…」

「ん？何だあ？」

「そんなに可笑しいか？」

リュカはジャミに頭を握られたまま、ジャミの目の前に力無く垂れ下がっている。

もう戦う気力も無いかの様に…

「ああ！可笑しいね！無力なヤツをいたぶるのは！」

リュカはジャミの目をジッと睨み付けている。

「じゃあ…笑えよ…可笑しいんだろ？笑えよ！」

まだ目は死んでいない。

「ふはははは！お望み通り笑ってやるよ！お前の情けなさを！ふはははぐがっ！」

リュカの目の前で大笑いするジャミの口の中に両腕を深くねじ込む。

「バギクロス！」

リュカのバギクロスがジャミの体内で荒れ狂う！

「バギクロス！バギクロス！バギクロス！」

ジャミの体が胸から裂け二つに分かれて崩れ落ちる。

リュカは腕に残ったジャミの上半身を壁に投げ捨てると、私の元へ駆け寄り抱き寄せた。

「ビアンカ！大丈夫？」

「リュカ…ありがとう…私…」

「いいんだ、何も言わなくて。さあ、帰ろう。みんなが…ティミーとポピーが待っているよ」

私とリュカは寄り添い、この部屋を出て行こうとした…その時！  
「おっほっほっほ。いけませんねえ。逃げようなどとしては  
とても耳障りなイヤな笑い声がこだまする。

「！ゲマ！！」

リュカはこの声の主を知っている！

リュカが怒りの形相に代わり室内を見渡しだす。

死んだはずのジャミの上半身が起きあがりこちらを見つめている。

焦点の合わぬ目で…

「あの時の子供が、ここまで成長するとは思いませんでしたよ。お  
っほっほっほ。でもここまでですよ。貴方達は世界の終わりを石  
になって眺めるのです。」

言い終わるとジャミの身体が四散し、どす黒い霧が私達を包んでい  
く。

「きゃ！何、この霧？……え！？」

気が付くと私とリュカの身体石に変わっていく。

もう既に首まで石化してきた。

私にもリュカにもどうする事も出来ない…

「ビアンカ！」

リュカが話しかけてきたが私は答える事が出来ない…

「ビアンカ…必ず助ける…僕が助ける…ま、待って…い…て…

………」

私とリュカは石になってしまった…

でも…私は…怖くない…だって…リュカが…助けてくれる…

……

ビアンカSIDE END

47・愛する者を守る為ならば鬼にでも悪魔にでもなれる。きっと…（後書き）

戦闘を上手く書けない自分に苛立ちを感じます。  
大目に見て下さい。

48・青い鳥と言つ物語がある。実は自分の家の鳥が探し求めた鳥だったとい

サブタイトル長っ！

#### 48・青い鳥と言う物語がある。実は自分の家の鳥が探し求めた鳥だったとい

<世界の某所>

強張った身体に血潮を感じる！

闇の中に小さな光が瞬き、そして広がって行く…

遙か彼方から呼びかける声が近付いてくる。

俺の視界が開け目の前で恰幅の良い男性と、男女の幼い双子が見つめている…

「サ…ンチヨ…？」

声が上手く出ない。

「坊ちゃん…いえ！リュカ様…私の事が分かりますか？お答え下さい。リュカ様が幼い頃、ラインハットへ赴く前に私が探していた物は何ですか？」

「まな板だよ」

「間違いありません！リュカ様です。リュカ様に化けた偽者ではありません！」

どうやらサンチヨは俺の言い付けを守った様だ…

「さあ、ティミー様、ポピー様…お父上ですよ！」

ティミー？ポピー？父？

「お父さん！」

双子は俺に抱き付き感涙しながら俺を父と呼ぶ！

子供特有の早口で一気に話す為、殆ど理解出来ない。

何とか理解できたことは、俺は石にされて8年経過していた事。そして、この双子は俺の子で、親は無くとも子は育ちまくった事。

「さあさあ…お二人共！そんなに一度に話してもお父様が混乱してしまいます。一度お城に帰り、ゆっくりしましょう」

そうサンチヨが宥めると、娘のポピーが呪文を唱えた。

「ルーラ」

参ったなあ…

あんなキツイ思いをして魔法適正を得たのに…

この子は生まれつき魔法の天才の様だ…

俺、形無し…

<グランバニア城>

昨晚は双子が甘えてくる為、一緒のベットで眠ったがイマイチ自分の子であると言つ実感湧かない。ダメな父親だ！

朝…というか昼に近い朝。俺はオジロンに呼び出され謁見の間へ来た。

オジロンは俺に玉座を薦めたが、俺は断り手近な椅子に腰掛ける。

「叔父上、8年もの間留守を守つて頂きありがとうございます」

「なに、ワシに出来る事をしただけだ」

「それともう少しの間、国王代理をお願いします。何だったら、代理の字を外してもいいですよ！」

「馬鹿を申すな！！今後は王としての勤めを果たしてもらおう！国王はリユカ、お前なのだぞ！」

「お断りします。僕は王である事より、夫である事を優先します。

8年前そうした様に…もつとも、僕にとっては昨日の事ですか…」

「まったく…お主も兄上も無責任だ！いつも苦労するのはワシだ…」

「オジロン様！諦めて下さい。分かっていた事でしよう」

「そうだよ、親父！リユカが言つて聞く様なヤツじゃないのは分かっているでしょ！」

不意に巨乳の美女が現れ、オジロンを親父と呼び宥める。

「！？もしかしてドリス？…美人になっちゃつて…まだシマシマ穿いてる？」

強烈な踵落としを喰らつた！しかも残念な事に中にスパッツを穿いていた。チエツ！

「お父さん！僕も連れて行ってくれるよね！」  
ティミーが不安気に問いかける…

「私、いっぱい魔法の勉強しました。お父さんの足手纏いにはなりません！」

足手纏いか…実力はあるのだろうか…

「「お願い！お父さん！」」

「……………誰か……………剣を貸してくれ！」

周りを見渡すと一人の若い兵士が近付き剣を手渡す。

「リユカ様これをお使い下さい。リユカ様の剣です」

受け取った剣を見ると…父、パパスの剣だ！回収してくれたんだ…

「ティミー。着いてきなさい」

俺は剣を腰に差し、中庭へティミーを誘う。

皆それにつられて着いてくる。

中庭へ着くとティミーに向き直り剣を構える。

「え！？」

「足手纏いになるかどうか、確かめさせてもらう。構える！」

ふとティミーの背中の剣を見ると……………あれ？

天空の剣？

あれ！？

もしかして俺の息子……………伝説の勇者！？

まだ！？

勝てる訳ねえーじゃん！

やっべー！どうしよう…『構える！』とか格好つけちゃったよ！

息子にボコボコにされたらハズカシー！

負けるにしても威厳を保たないと…

まずは先手必勝だ！いきなり攻撃を仕掛けて優位に立つ！

あとは負けない様にして、ある程度したら…うん！勝敗をうやむや

にして、何か格好いい事言っつて終わらせる！

よし！それでいこう！

…まずは、不敵に笑って先手必勝…

<グランバニア城>  
ドリスSIDE

リュカは不敵に笑うと鋭い一撃をティミーに放つ！

ティミーは、あの鋭い一撃をすんでの所で受けると、リュカに向かい構え直す。

さっきの一撃に対応出来る人間はいないだろう…

ティミーも天空の剣じゃなかったら、防げなかったに違いない。

天空の剣がティミーを動かしたと言った方が正しいだろう…

リュカの連撃が続く！

ティミーはリュカのフェイントに翻弄され、情けないダンスを踊っている様に見える。

本当はティミーも強いのだ！

まだ8歳なのに、ピピンやピエールと互角に渡り合える！天空の剣無しでだ…

だがリュカは強すぎる！

天空の剣が無かったら、既に勝負は着いていただろう…

ティミーも意地を見せ反撃をする。

リュカは難無くティミーの攻撃を去なし、軽やかに舞って見せる。

ティミーが天空の剣を使う限り、決着は着かないだろう…

そう思った時、リュカが手近にいたポピーを抱え、刃を突きつけた！

え！？どういう事！？

「ティミー、剣を捨てろ！」

「え！？…どういう事…？」

「お前が剣を捨てないと、お前は兄妹を失う」

「ズルイよ！ポピーは関係ないじゃん！」

「（クスツ）…確かにズルいな。ズルをした父さんの負けだ。」

そう言くと剣を鞘へ納め、ポピーを抱きながらティミーの所まで近

付き腰を下ろす。

そしてティミー、ポピーを膝の上に乗せ語り出した。

「昔、パパスという屈強な戦士が息子を連れて旅をしていたんだ」  
皆が静かに聞き入っている。

「パパスは強かった。誰にも負けないくらい強かった。だがある時、  
息子を人質に取られ無抵抗なまま魔族に殺されてしまった」

「お父さん……」

「確かに父さんはズルをした……でも、敵はズルい奴らばかりだ。も  
し、お前達が入質に取られたら……父さんはパパスと同じ道を歩むだ  
ろう……」

リュカの気持ちが痛い程分かる……だが……

「お言葉ですがリュカ様！パパス様は一人で旅をなさっております  
ました。リュカ様には多くの仲間がおります。私も両殿下をお守りす  
る為、ご一緒させて頂きます」

「君はさつき剣を渡してくれた……」

「はい！お久しぶりであります。ピピンです」

「偉そうな事を言う様になったな！………パピンさんは？」

「父は陛下の行方を捜す途中で……」

「そうか……すまない……」

「いえ、父は私の誇りです！ですから、父パピンの為にも私と両殿  
下をお連れ下さい」

格好いい事言っじゃない、あいつ！

「………分かったよ。分かったけど、今にも旅立とうとするのは止  
めてくれる？まだ出かけないよ！やる事あるから、まだ旅立たない  
よ……」

ピアンカさんを助け出す旅かあ……私も行きたいなあ……

ドリスSIDE END



49・因果と言つ言葉がある。ヤチャつとデキチャつ。因果である。

<ラインハット城>

俺は8年もの間、心配してくれたであろうと思われる人達へ、無事を伝える為、双子やサンチヨ・ピエール達と一緒に各地へ赴いている。

ラインハットに来て、まず驚いたのはヘンリーの子供である。

ヘンリーのクローンかと思う程、子供時代のヘンリーに似ていたのは驚いた。

しかも、あの『子分の印』ネタは健在だし…

本人は「まったく！誰に似たのか…こんな悪戯坊主になっちまって！…」

『お前じゃ！ボケえ〜！』って言ってやりたかったけど、大人な俺は優しくこう言った。

「ヘンリーにクリソツ！」

夫婦揃ってニガワラ。

とても仲睦まじい二人で一安心！

でも、羨ましくて何か悔しくなったので、お子さんのコリンズ君をいぢめてやるうと思ひ、城内を徘徊し書庫を探索していたら、すんげー美人に出会した！

「リュカさん！！」

口説こうと思ったら向こうから抱き付いてきた。

オッパイが大きく、とてもいい匂いがする長い黒髪を古ぼけたりボンで結っている。

「マリソル！？」

「リュカさん、酷いです！9年間も会いに来てくれないなんて！」

「いやいやいや！最初の1年はごめんなさいだけど、残りの8年は不可抗力だし！」

俺の腕にオツパイを押し付けむくれるマリソル…

ヤバイ…俺のバズーカが火を噴きそうだ！

「リュカさんの結婚式の夜に『愛人募集』したじゃないですか！私あの場で応募したんですよ！なのに迎えに来てくれないなんて…ず」とリュカさんの為に守ってきたんですよ、私！」

守ったって何！？

この娘、一途なの？馬鹿なの？真面目なの？

一途な馬鹿真面目っ娘？

「ちよつと…待って…あのお…マリソル、彼氏いないの？」

「いる訳無いじゃないですか！リュカさん、王様になったって聞いたから、きつとハーレム造るだろうなって思ったんです！だから待ってたんです！」

「いや…ハーレム造りたくても、奥さんが許してくれないだろうし…」

「その奥さんは、今いないじゃないですか。チャンスじゃないですか！ここ、今居ませんよ！チャンスじゃないですか！…」

チャンスなんですか？ヨクワカリマセン。

でも俺は『食える時に食つとかないとね！』（by武蔵っぽい人）つてのが信条です。

深く考えちゃいけません。

これってやつぱりチャンスなんですか？

結局、その日はラインハットにお泊まりしました。

子供達も仲良く一緒に寝てたし…

翌朝、マリソルの部屋から出てくるところを、よりによってヘンリーに目撃されました。

めっさ怖い目で睨むヘンリーでしたが、ごっさ怖い目で睨み返すマリソルのおかげで、お小言は回避されました。

でも、マリソルが居なくなるとゴチャゴチャ言われそうだったので、すぐにお暇させてもらいました。

<サンタローズ>

気分的（自分的）には1年ぶり。でも実際は9年ぶりに父さんのお墓にやって来ました。

未だに人口10人未満のこの村は、復興が遅々として進まない様子だ。

元実家跡の裏手に父さんの墓を建てたのは、9年以上も前の事だ。俺達が墓の前まで赴くと、一人の少女が墓を掃除していた。歳は双子と同じくらい。

黒い艶やかな髪の毛。

その瞳は吸い込まれそうな程澄んでいる。

……………見た事がある…瞳…です……………

「……………リュカ様の幼い頃にそっくりですね!？」

サンチヨが余計な事を言う。

少女が瞳を輝かせ俺に問う。

「貴方がリュカさんですか？」

「ソウデスガナニカ？」

「じゃあ…貴方が私の…「リユー君!」

少女が取り返しのつかない事を言う直前に、後ろから歓喜に満ちた声が上がった。

「やっぱリユー君だあ!無事だったのね!」

「フレアさん…お久しぶりです…あの…」

フレアさんは俺に抱き付き喜ぶ。

しかしすぐに離れると、少女に視線を移し恥ずかしそうに喋り出す。

「リユー君、紹介するわね」

出来れば遠慮したいのですが…

「私の娘の『リュリユ』よ」

「ほおう…随分と貴様に似ているな!容姿も名前も!」

ピエールがいらぬ事を言う。

「あ、あーそー！フ、フレアさんの…」

「ふふつ。そちらの双子ちゃんはピアノ力さんのお子さん？」

い、言い方が…

「は、はい。ソウデス」

俺の声が裏返る。

「僕、ティミーです。」「私、ポピーです」

「あら、ご丁寧にありがとうございます。リュリュ、ティミーちゃんとポピーちゃんに村をご案内してあげて」

「はい！」

子供達は元気よくこの場を後にした…案内する様な施設など無いのに…

「さすがシスター…気が利きますね」

気が利くってどういう事？ピエール？

「さて、シスター。リュリュちゃんの父親は誰ですか？」

ピエールさんが怒っている。奥さんでもないピエールさんが何故か怒っている。

「申し訳ありません、ピエールさん」

「…え！？」「…」

「然る止ん事無い身分の方が、あの娘の父親です。その事を口に出しては迷惑がかかります。だから、この事は聞かないで頂きたい。

詮索もしないで下さい」

俺…最低だね…男として…人として…

「フレアさん。親子でグランバニアに住みませんか？僕はあのこ…私…は…！」

！！

「私はサンタローズから移る気はありません。リュー君にご迷惑をかけるつもりもありません。だから…リュー君が気に病む必要無いのよ」

「でも…フレアさんを幸せにしたいんです！どうすれば良いのか分

からないけど…」

「じゃあ、早くピアンカちゃんを助け出して、リユウ君！そして時折遊びに来てくれれば…リユリユと遊んでくれれば良いから…ね！」  
俺はただ、俯くしか出来なかった…

フレアさんが優しくすぎて…

「でも、今日一晩くらいは泊まっついていてくれるでしょ？」

「そうさせて頂きましょう…リユカ様」

ピエールの視線が怖かったけど、概ね楽しく過ごせました。

ただ…ティミーが…

「僕…リユリユちゃんの事が好きになっちゃった！」

ダメです！絶対ダメですう〜！

どんな馬鹿女に惚れてもいいけど、リユリユはダメですう！貴方達はそういう関係になってはダメですううう！！

手を繋ぎイチイチャしている二人を見て、ハラハラしている俺がいる。

どう言えば良い？何て言えば良い？

ごめんなさい。本当ごめんなさい。助けて下さい。そんな愛は認められませんから！

50・便りが無いのは元気な証拠。って、8年は無いわあ…

<山奥の村>

「会いづれえ〜…」

俺は先程から同じ言葉で繰り返しばやいている。

「もう、いい加減うるさい！お前が行くと言いだしたんだろ！」

「だって、何て言えばいいの？8年間音沙汰が無かった事を？」

「正直に言っしかないだろう。自分だけでも無事である事を伝えな  
いと…」

ピエールが叱り付けてきた。

「君がそう言う事、言う！？」

「な、何だ！私は関係ないだろ！」

「8年だよ！8年間、音沙汰無しだよ！ありえないよ！君やマーリ  
ンはダンカンさんと面識もあり、8年前の事も把握しているのだから、  
手紙の一つでも出してきてくれてもいいんじゃないの？」

「な！…何て書けば良いんだ…」

「正直書いてくれれば良かったの！」

そんなやり取りをしながら俺達は村の奥へと進んで行く。

村の一番奥の家にノックをして入る。

「お義父さん…お久しぶりです…お元気でしたか？」

「ん？おお！リユカか！久しいなあ…何だ、随分と音沙汰もなく…  
？ピアンカの姿が見えないが…何かあったのか？」

「はい…あの…」

・  
・  
・

「そうか…8年間、石に…お前も苦勞したのだな…」

「……………ビアンカも……………」

「ビアンカの事は……………心配してないよ。お前が必ず助け出してくれるのだから?」

「はい!必ず」

「うん……………では、心配はしておらん。お前ならビアンカを助け出してくれるだろうて……………とところで……………後ろの子供達は……………もしかして……………」

「あ!はい。お義父さん!紹介します。僕とビアンカの子供です」

「ティミーです」

「ポピーですおじいさま」

「おお!!二人ともビアンカによく似ている!」

え、俺には!?

「こんなお祖父ちゃんだけど、何時でも遊びに来ておくれ」

「はい!」

ダンカンさんの好々爺ぶりは母の居ない双子の心を癒してくれた様で、ここに来て本当に良かったと思う。

<山奥の村へサラボナ - 途中>

双子はダンカン祖父さんが気に入ってしまった様で、昨晚は楽しく過ごす事が出来た。

しかし、朝起きて出立の準備をしていたらポピーが突然「お父さん!西の方から嫌な気配を感じる……………」と、何やら震えだした。

可愛い娘が怯えているのに無視も出来ず、みんな確認へ向かう事にする。

山奥の村より4・5時間行った所に、奇妙な気配のする祠を発見した。

中に入ってみると下りの螺旋階段があり、底が見えない程深い所まで続いている。

俺達は螺旋階段を下り始めた。

するとポピーに続いてティミーまでもが震えだした。

二人の気を紛らわす為に『時代』を歌い、続いて『夢想花』を回りながら歌ってあげた。でも、あまり効果は無かったかな…

「しまった！！」

俺はある事に気が付き、後悔と共に叫んでしまった！

「どうした！リユカ？」

ピエールを始め皆が注目する…

俺はとんでもない事を忘れていた…

それに気付いたのは30分以上下り、底が見えてきた頃だった…

「すげー長い階段だけど…帰りめんどくせー」

これって切実だと思わない？

みんなして呆れ顔で睨むんですよ！

でも双子が笑ってくれたので、良しとしますか。

・  
・  
・

祠の底に着くと、ぶっさいくな壺が一つ置いてあり、赤く奇妙に光っている。

しかし、それ以外の物は何も無い。

確かに奇妙な気配は感じるが、恐怖する程でもないし、早々に立ち去る事にする。

双子にもあんまり気にするなと、言い聞かせる事で落ち着いてくれたし、サラボナへ行つて天空の盾を受け取らないと…

フローラ元気にしてるかなあ〜

こっそり手え出しちゃおうかなあ〜

デボラのオツパイも魅力的だなあ〜

垂れてないといいなあ〜

<サラボナ>

町に入るとすぐにルドマンさんを発見した。

町の警備兵と何やら深刻そうに会話をしている…

何か…マズイ時に…来た…かな？

うん。先に天空の兜を回収しに行こう！

そう思い踵を返したその瞬間に…

「あ！リュカさん！？リュカさんじゃないですか！！」

俺を呼ぶ声が…アンデイだ！

「何！！リュカか！？おお…ちょうど良い時に来てくれた！」

ルドマンさんが気付いちやった。

面倒事だったら…アンデイ、ボコる！

「オヒサシブリデス。るどまんサン」

「うむ…会って早々悪いのだが…」

きたよ…面倒事の予感、大！

「な、何っすかあ〜？」

「そうイヤそうな顔をするな…簡単な用事を頼みたいのだ」

イヤそうじゃなくて、イヤなだけ…

「ナンデスカ？」

「うむ、実はな…ここより北に行った所にある、祠の一番深い所に壺があるのだが、その壺の色を見てきてほしいのだ…奇妙な事を「赤でした」

「「え！？」」

ルドマンさんとアンディーが間抜け面で呆けている。

「ここへ来る途中に寄ってきましたが、真っ赤に燃える太陽みたいでしたね」

「そ、それは…本当か…嘘を吐いたり、見間違いと言う事はないか！？」

「ルドマン殿、私も見ましたが間違いなく赤かったです」

「ピエール殿が仰るのなら本当なのだろう…」

何か酷い事言われてませんか？俺：

「アンディ君！君は警備兵達に町の警備強化をする様に伝えてくれ！」

「はい！」

「その後で、戦えぬ者達への避難勧告もお願いする！」

「分かりました！」

アンディが颯爽とかけて行く。

何やらアンディが頼もしくなった様に見えるのは気のせいだろうか？  
頼もしいアンディなど、常時満席の『山田 どん』みたいで違和感がある。

「リユカよ…お主は私と一緒に警備用の塔へ来てくれ」

「あ、あの…お忙しそうなので僕達はお暇しましょうか？」

「私とお前の仲だ！遠慮はいらん！」  
遠慮したいんですけど…

・  
・  
・

ルドマンさんは塔の最上階へ着くまでの間に、今回の起こっている事のあらましを説明してくれた。（説明より、解放を求めたがスル―された）

今から150年前、ルドマンさんの祖先のルドルフさんがブオーンと言う化け物を壺に封じ込め、北の祠へ封印した。その封印の効力が切れかかっている、その証拠が赤く光る壺らしい。封印が解けると、山の様に大きな化け物が復活し、世界を破壊し尽くすと言われているらしい。

「……………と言う訳なのだ」

「へー…。ルドマンさんも大変ですね。じゃ、僕達はこの辺で…」  
踵を返して帰ろうとする俺の腕を掴み泣きすぎるルドマンさん。

「そんな事言わず助けてくれ！」

「ええ〜！めんどくさい！」

「す、少しの間ここで見張っているだけでいいから…私が再封印の準備をしている間だけでいいから！な？な！？」

仕方ないなあ〜！

ルドマンさんは塔を下り、再封印の準備に取り掛かっている。

みんなを見渡すと、ものつそい不安そうな顔をしている。

俺が、みんなの不安を取り払う為に、『We are the World』を熱唱し自己満足に浸っていると、遠くから地響きが近づいて来た。

不思議に思い振り返ってみると、そこには山の様に大きな豚の様な犬の様な化け物が佇んでいた。

「ぶい〜い！ルドルフは何処だ！隠すと為にならんぞ！」

何これ？

50・便りが無いのは元気な証拠。って、8年は無いわあ…（後書き）

巨大怪獣ブーちゃん登場！

果たしてルドマンは間に合うのか！？

緊迫の度合いは高まるばかり！

次回、

『スーパー商人ルドマン！決死の大作戦！』をお送りします。

乞うご期待！！

うっそぴゅん！

51 逃がした魚は大きい。でも後悔なんてしてないんだから！

<サラボナ>

「ぶい〜い！ルドルフは何処だ！隠すと為にならんぞ！」  
何これ？

「まあいい…眠気覚ましにお前らを「あはははは！何これー!？」  
俺は腹を抱えて笑い転げた。

「あはははは！すげー不細工ー！あはははは…でも可愛いー！」

「な!?!に、人間…」

「あはははは！不細工で可愛い！あはははは…ぶさかわ！あはははは  
は！ぶさかわ、ぶさかわ！あはははは…」

「い、いい加減にしろー！不愉快な人間め!！」

でかい化け物が怒号を発する！

俺は笑うのを止めて正面から向き直る。

今の怒号で、双子を始め皆緊張している様だ…が、

「ぷー!!! やっぱムリ! だってぶさ可愛いんだもん! あはははは  
…」

ムリでした。我慢出来ませんでした。

「このブオーン様を舐めるなー!」

自称ブオーンが大きな腕を振り下ろす！（名前は不細工だね!）

皆、辛うじて避けた様だが足場の悪いこちらは不利だ!

俺は振り下ろされた腕を伝い、ブオーンの頭へ近付き3つある内の  
額にある瞳に剣を突き刺した。

「おいたはいけません!」

ブオーンは頭を抱え苦しみもがいている!

上下左右に頭を振る為、俺は突き刺した剣にしがみついていたが、  
剣が抜けてしまい勢い良く振り飛ばされた。

俺は先程まで居た塔の最上階をイメージし、魔法を唱えた。

「ルーラ」

「お父さん！大丈夫！？」

短距離ルーラに成功です。

ポピーが俺を心配してくれた。

「イエーイ！結構楽しかったでいす」

他のみんなはそれぞれ魔法等で攻撃を行っているが、俺はポピーを高い高い（+放り投げ）をしてじゃれ合っている。

「キヤー！お、お父さん、やめて！高いの怖いの！ヤメテー！」  
どうやら娘は俺と違い賢いらしく、高い所が苦手の様だ！

そここうしていると、ティミーのギガデインがブオーンに直撃し力尽き倒れたしまった。

やがてブオーンの身体は消滅し、跡には大きな宝箱が残った。

・  
・  
・

俺達は塔を下り、宝箱を開けに行く。

開けると中には豪華な赤いマントが一つ…

それと奇妙な生き物が1匹入っていた。

「ぶ〜？」

スライムより、ちょい大きめのサイズの小型ブオーンが、邪気の無い瞳で見上げている。

「ちょー可愛いー！」

いや、やっぱりぶさ可愛い！

「イエーイ！お前は今日から『ブオーン』だ！あはははは…ぶさかわー！」

俺はブオーンを高い高い（+放り投げ）し、じゃれあっている。

「ぶー！ぶー！！」

<サラボナ・ルドマン邸>



ルドマンさんと入れ替わりで入ってきたのは、長女のデボラだ！  
そのケバケバしさに双子が引いている。

「僕は貴女と違ってルドマンさんを困らせる様な事はしませんよ」  
デボラは俺の言葉を聞き、気分を害した風もなく人の悪そうな笑み  
で話し始める。

「言うじゃない！まあいいわ。この町を救ってくれてありがとう。一  
応、礼を言っておくわ。しかし、相変わらず厄介事に巻き込まれる  
体質ね！」

俺はデボラに近付き、徐に胸を揉む。

「相変わらずなのはデボラのオツパイだよ！でけーなー！（モミモ  
ミ）」

（バリッ！）

おもつきし顔を引つ搔かれました！

「気安く揉んでんじやないわよ！あんたのじゃないのよ！9年前に  
手に入れるチャンスを逃したのよ！理解しなさいよ！」

揉んでくれと言わんばかりに胸を突き出していたから思わず揉んで  
しまったが、やっぱりダメだったか…

「あんたが田舎娘と結婚するから、私の義弟があんな情けない男に  
なるんじゃない！責任取りなさいよ！」

「え！？フローラ、結婚したの！？誰と？」

くそ！ちよつと大人の火遊びを期待してサラボナへ来たのに…誰だ  
！俺の女に手を出したヤツは！

「前のゲストハウスに住んでいるから、自分で確認しなさいよ。」

（バン！）

俺は勢い良く元ゲストハウス（現フローラ夫妻の新居）の扉を開け  
た。

「たのも〜！」

中にはフローラが居た。

そしてフローラの手を握り、イチャ付いている男が一人……………アン

デイじゃん！

「え〜！アンディなお〜？」

「な、何ですか！？リユカさん！僕がフローラの夫じゃ不満ですか？」

「イイエ。ソナナコトナイヨ。オメデトウ」

「クスクス。相変わらずですねリユカは！お元気でしたか？」

「はい。元気に8年間、石になってました」

「相変わらず壮絶な人生を送っているんですね！」

フローラが俺の為に涙を流してくれた。

「ちよ、泣かないでフローラ！この8年間は全く記憶が無いんだ！気付いたら8年過ぎてた。そんな感じ。だから辛くは無かったんだ。むしろ子供達の方が辛かったと思う」

「ふふつ、じゃあ泣くのは失礼ですね。ごめんなさい」

この後、アンディ・フローラ夫妻と共に楽しい時間を過ごさせてもらった。

ただ残念なのは、口説こうと（夜這いしよう）と思ったけど旦那が居るので諦めざるを得ない事だ！

あ！デボラが居んじゃん！

実行しましたが、蹴り上げられ挫折しました。  
痛いのお〜

52・何時も無心で居る事は出来ない。何かしら考えてしまっている。

<テルパドール城>

あゝ…女王に会うのめんどくせえ

よく考えたら兜貰うだけだし、俺行く必要無いよね。

「ねえ、ねえ！俺行かなくてもいいよね！宿屋で大人しくしていたいのですが！」

「いいわけ無いだろう！この中で女王様と面識あるのはお前だけだ！しかも勇者の父親だろうか！」

やっぱりダメか…

よし！何も考えない様にしよう！無心、無心。

「お久しぶりです。リュカ。」

「あの、初めましてアイシス様。僕は…」

「まあ、リュカのお子さんですか。早いものですね。時が過ぎるのは…」

「あの、アイシス様…「え！？それは誠ですか!?!」

え！？何が？

「リュカ！貴方のお子さんが伝説の勇者様なのですか!?!」

まだ何も言っただろうが！

「あの時貴方から感じたのは気のせいでは無かった様ですね」

何だよ！気のせいとか言われたの根に持ってたのかよ！

意外と小せえーな！オツパイと違って…

「貴方はオツパイが好きみたいですな」

だからこの女キライ！人の心読みやがって！

「もう！お父さんはオツパイばかり見てたの!?!エッチ！」

ポピーに怒られた！

「いやいや…ポピーさん、よく覚えておきたまえ。男とは皆こんなものだ！な、ティミー！」

「ぼ、僕は…別に…」

顔を赤くして俯いちゃった。

「ふふっ…親子ですね。二人とも私の胸ばかり見てますよ」

「ティミー君も男じゃのお〜！この女は外見だけは良いからね」

「……………だけは……………？」

とつてもイヤな沈黙が流れました。

<グランバニア〜エルヘブン - 船上 >

天空の兜を手に入れた俺達は、一度グランバニアへ戻り、翌朝エルヘブンへ向けて出港した。

俺のパーティーは以前と比べれば賑やかになり、長旅も随分と楽しい物になるだろう。

俺は何時も通りプツクル枕で寝そべっていると、ドリスが仁王立ちで文句を付けてきた。

「ティミーとポピーですら手伝っているのに、リュカは何で何もしないのよ！」

「ああ、そいつはいいんじゃない！ドリス嬢。何かさせると碌な事をしないからのお…」

俺は寝そべってまま肩を竦め両腕を広げる。

「そんな事より本当にいいの？いくら伝説の勇者がいるパーティーとは言え危険だよ！？」

「くどいわよ！散々話し合っただでしょ！」

城でドリスと一緒に行くと言い出したので、オジロンを始め皆で説得したのだが、双子の事が心配だからと強引に付いてきた。

オジロンとの協議の結果、邪魔になったらルーラで送り返す事を条

件に、随行を承諾したのだが…これが、結構戦力的に役に立つ。ただ…小言がやたらと多い。

あまりにも五月蠅かったので「オジロンにそっくり」って言ったらマウントポジションで殴って来やがった。

まあ、そんな訳で今現在のパーティー構成を紹介しよう。

俺、テイミー、ポピー、ドリス、サンチヨ、ピピン、ピエール（スラッシュ）、マーリン、プックル、プオーン、サーラ、ホイミン、スラリン。

結構頼もしいです。

今、俺達はエルヘブンと言う村を目指し航海をしている。

何でも、母マーサの生まれ故郷らしい。

オジロン達が調べてくれた様だ。

正直、今は母さんの事より、ビアンカの事の方が気掛かりだ。

とは言え、何ら手懸かりのない状況の為、流れに身を任せて行動するしかない。

まあ、旅している内に情報が入ってくるだろう。

深く考えたら負けだよね。

最近やつと双子と打ち解けてきた様で、よくビアンカの事を聞かれる。

だが、その殆どが惚気話だ。

自分の子供に惚気話をする父親。最悪だな！

この間、ビアンカとの初めての夜の事を話していたら、ピエール・ドリスの美少女トップに「子供に何話してんだ！馬鹿者！」って怒られちゃった。

でもポピーが「お父さんって本当にお母さんの事好きなのね。いいなあ〜」だつてさ！

聞いた？「いいなあ〜」って言ったのよ！

俺の娘はパパに惚れちゃってる！？

いずれ「お父さんと結婚する！」とか言い出したら、俺王様の権力

使って、近親結婚了承する法を強引に作るね！

そしたら娘は誰にもやらんね！

もー、可愛くって！

息子の方には跡取り問題もあるし、あっちこっちで女作ってもらいたいね。

ただしリユリユを除いて！

近親結婚了承法はグランバニアだけだし！

サンタローズはラインハットだし！

治外法権だし！

53・廃墟が好きな人がいる。良さがよく分からない。(前書き)

このサブタイトルは、

廃墟好きの人への批判ではありません。

あくまで天空城への塔と廃墟を重ねたサブタイトルです。

ご不快に思われた方へは陳謝させて頂きます。

### 53・廃墟が好きな人がいる。良さがよく分からない。

< 天空への塔 - 前 >

ドリスSIDE

リュカ達が塔を登り始めて3日が経過した。

塔攻略パーティーは、リュカ、ティミー、ポピー、ピエール、サン  
チヨ、ブックルだ。

従って私達は塔の前で陣取り、帰りを待っている状態だ。

「何で私が留守番組なの!？」

「うるさいのお〜…毎日毎日飽きもせず…」

「そうですね、ドリス様。留守番も重要な役割ですよ。リュカ様は  
我々の事を信じて任せて頂いたのですから」

「まあ…そうだけど…暇なのよ!」

「……………し、しかしエルヘブンへ行ってよかったですね」

「そうじゃのお。天空の城の事も聞けたし、魔法の絨毯も貰えたか  
らのお!」

そう!魔法の絨毯!あれは素敵だ!

1メートルも浮かび上がらないのだがスピード感が最高!

水しぶきをあげて海を疾走した時は最高の気分だった。

この旅が終わったら貰っちゃってもいいかな?

……………それにしても……………

「暇ねえ〜!」

ドリスSIDE END

< 天空への塔 - 内部 >

1フロアが無駄に広い内部に、モンスターが無駄に蔓延っている。内部は酷く荒れていて、近年人が立ち入った形跡はない。黙って探索していると気が滅入るので歌う！

大きな声で歌う！

モンスターに襲われる！

みんなが駆逐する！

腹の底から歌う！

モンスターに襲われる！

みんなが駆逐する！

滅多やたらに歌う！

モンスターに襲われる！

みんなが駆逐する！

「お父さん…お願いだからダンジョン内で歌わないで。敵が寄ってくるから…」

半泣きの息子に止められた。

「もしくはお前も戦え！歌っているだけで戦闘は何時も観戦だ！」

ピエールがキレる。

「がうにゃん」

プツクルに慰められる。

「で、でも…何時も楽しくて良いと思うな…」

娘がフォローしてくれる。

「ポピー大好き！」

娘を抱き上げ、クルクル回りながら踊る。

(ドン！)

娘を抱き上げ一人ロンドを踊っていると、何やら煉瓦造りの壁に衝突した。

「いた〜い。何でこんな所に壁があるの？」

「ふんがー！」

「お、お父さん！壁じゃ無いー！」

ポピーが上を見上げて驚いている。

俺もつられて見上げると、そこには煉瓦造りのゴーレムが立っていた。

「ふんがー!!」

何か怒ってるし!

ゴーレムは巨大な拳を振り回し攻撃してくる。

俺はポピーを庇いつつ、拳をのらりくらりと避けかわす。

うわあ〜…あの拳骨に当たったら痛いだろうなあ〜。

逆鬼師匠の拳骨レベル? (誰だよソレ)

しかし俺に拳が掠りもしないので、更に怒り出すゴーレム。

勝手だなあ〜…

って言うか、何で誰も助けてくれないの?

仕方がないので抱いていたポピーをサンチョにパスして、ゴーレムに対峙する。

俺は右手をゴーレムに翳して牽制してから話し出す。

「待ちたまえ!何をそんなに怒っているのかね?」

「ふんふんふんがー!ふがふんがー!!」

「勝手だなあ〜!」

ゴーレムは両腕を振り回して突進してくる!

当たってやる義理はない。

難無くゴーレムを避けると、勢いの付いたゴーレムはそのまま壁に激突する。

激突した壁が崩れ、ゴーレムが塔の外へ落ちた!

現在の標高は槍ヶ岳レベル。

煉瓦造りの彼でも、さすがにマズいかな?

「ふ、ふん…が〜」

ゴーレムは壁の縁に何とか掴まり、落下を凌いでいた。

俺は慌てて壁の穴から身を乗り出し、ゴーレムの手を掴むと塔内をイメージして魔法を唱える。

「ルーラ」

「ふんがふがふんが!？」

「いやいや…助けるのは当然だろ！」

「ふんが?ふんが」

「別に構わないけど…」

「ふんふんがー!ふがんが」

「そうか、よろしくね。ゴレムス！」

俺とゴレムスの話が一段落すると、ピエールが困り顔で訪ねてきた。

「リュカ…頼むから、通訳と説明をしてくれ」

めんどい…………

「彼はゴレムス。聞こえてくる歌が気に入って近付いたら、歌が聞こえなくなった。だから怒っていたんだって。そして、命を救われたから、仲間になるってさ」

何故だか皆呆れている。

おかしいな…要点はちゃんと説明したのになあ…

「…本当に…そんなにくだらない理由なのか？」

「何でピエールは何時も僕の事を疑うの？」

「いや…すまない…疑った訳では…」

この後、俺達は強力な仲間を新たに加え、並み居る強敵を粉碎しつつ塔の上部へと突き進んで行く。

俺の歌声と共に…

< 天空への塔 >

ドリスSIDE

いくら暇でもお腹はすく。

拾い集めた枯れ木に火を付け食事の用意をし、簡単な料理を作る。

料理も出来上がり、みんなを呼びに鍋の側を離れた途端、上空から塔の外壁が落ちてきた!

「な!？」

よりによって出来上がった料理を直撃した。  
暇は解消された。

また食事を作らないと…  
暇を呪った自分が憎い。

ドリスSIDE END

54・ふざけてはいないのだが不真面目な奴がいる。そう言う奴はキーマンにな

< 天空への塔・内部 >

天空への塔の最上階には天空城は無かった。

代わりに妙な爺さんが居て『マグマの杖』をくれた。

爺さんが言うには、

「天空城はその力を失い、世界の何処かの湖に沈んでしまったらしい。」

今、水中城になっているってさ！（笑）

爺さんはそこまで話すと消えちゃった…

幽霊だったのかな？

あ！そう言えばビアンカってまだお化け怖いのかな？

未だに怖がっていたら可愛いよね！

何かムラムラしてきちゃった…

ラインハットにでも行こうかな…

「ねえ！世界中の何処に天空城（笑）が沈んでいるか分からないし、

一度一息入れる為ラインハットへ遊びに行こうよ！」

「リユカ様！何を暢気な事を言っているのですか！今は一刻を争う

時ですぞ！一旦グランバニアへ戻り、対策を協議しましょう」

サンチヨに却下されちゃった。

< グランバニア城 >

ドリスSIDE

今グランバニアの会議室では、世界中の湖探索の為に慌ただしく協議をしている。

親父や軍の高官、各大臣にピエール、マーリン、ピピン、サンチヨ、

そして私…

グランバニアは国家の総力を挙げて天空城の搜索に力を入れるつもりだ！

だが…

肝心のリュカが朝から居ない！

双子を連れてルーラで何処かに消えた！

私を含め、皆ご立腹だ！

さすがのサンチヨも怒っている！

翌日の昼過ぎ…

リュカと双子は帰ってきた！

親父が戻ってきたリュカに怒鳴ろうとした時、

「リュカ、天空城が何処に沈んでいるか分かったから、明日朝一に出発ね」

「……え！？」「……」

リュカは何処で情報を得たのだ！？

私達は昨日一日中話し合って、世界中の湖を探索する段取りを付けたのに…

「リュカ…リュカ…天空城が何処にあるのか…分かったのか？」

親父が驚きながら訪ねている。

もう怒りは無いようだ…

「うん！エルヘブンのちよい南の湖に沈んだよ」

「ちょ、直接見たの！？」

「何でそこだと思ったんだ？」

「何処からその情報を！」

みんなが一斉に疑問をぶつけ出した。

リュカはみんなを落ち着かせると話してくれた。

・  
・  
・

ラインハットのシスターが天空城の伝承について語っていたのを思い出し、色々聞いたそうさ。

それと、9年前のラインハットの争乱の時に書庫で天空城の事についての書を見た記憶があったので、ついでに読み漁り大まかな位置を確認したらしい。

そして、帰りのルーラで飛行中に、その場所を目視確認して帰ってきたそうさ。

「ただ、遊びに行っていた訳じゃないのね…」

みんなさっきまで怒り心頭だったのに、今ではリュカに尊敬の眼差しを向けている。

特に探索を実行する軍人達からは、これ以上ないくらいの敬意を払われている。

ドリスSIDE END

<地下遺跡の洞窟 - 前>

ティミーSIDE

僕達は今、大きな湖の側にそびえ立つ大きな山の前に来ている。

ここまで来たのは良いけれど、どうやったら天空城を復活させられるかが分からない。

サンチョ達が話し合っている中、お父さんはマグマの杖を振り回しながら歌っている。

今、このパーティーは2派に別れている。

サンチョやピエール、マーリン、ドリス、ピピン、サーラの頭を悩ませているチームと、お父さんを中心とした歌って踊っているチームと…

僕としては、お父さんのチームに入りたいけど…伝説の勇者としては真面目に考えるチームに入らないとダメだよね…

ちよつと寂しい…

「やかましい！お前も少しは考える！」  
ドリスとピエールが怒り出した。

よかつた、真面目チームに入つてて！

「わあ！」

お父さんは怒られた拍子に、振り回していたマグマの杖を放り投げ  
てしまった様だ。

大きくそびえ立つ山に杖が突き刺さる！

「もー！急に大声出さないでよ！ビックリするじゃないかあゝ」

お父さんは悪びれた様子もなく、杖を回収しようとしている。

「私達が真面目に考えているのに、貴様（ゴゴゴゴゴッ）な、  
何だ！」

「地震か！？」

急に大地が震えだした！

よく見ると山に突き刺さっているマグマの杖が、真つ赤に燃えだし  
ている。

「！！ルーラ！」

いきなりお父さんがルーラで少し離れた所まで、みんなを連れてき  
た。

「ど、どうしたの？お父（ドゴーン！！！！！！）え！？」

先程まで居た山がいきなり噴火をして、地形を変化させていった。  
先程まで居た場所も溶岩に飲まれてしまった。

もし、あの場に留まっていたら…お父さんはやっぱり凄いなあ…

僕…伝説の勇者なのに…全然敵わない…

お父さんの方が勇者に向いている…

強いし…モンスターと話せるし…色んな事を解決しちゃうし…

何で僕…勇者になんか産まれちゃったんだろう…

ティミーSIDE END



54・ふざけてはいないのだが不真面目な奴がいる。そう言う奴はキーマンにな

お気付きの方も居ると思いますが…

ただ遊びに行っていました。

何か偶然、場所が分かりました。

結果オーライ？

## 55・メリーゴーランドとかコーヒーカップとか、同じ所を回るのが好きな人が

< 地下遺跡の洞窟 - 前 >

突然の噴火は1時間程で収まった。

仕組みがよく分からんが、溶岩の熱も無くなり普通に歩く事が出来る。

高く切り立った山の麓を見ると、一人一人が何とか入れそうな穴が開いている事に気が付いた。

中を覗くとかなり奥の方まで続くダンジョンになっている様だ。

とは言え、大人数で入るのは無理そうなので少数で探索する事に決まった。

当初は俺と、双子と、サンチヨで入ろうと思ったのだが…

「私が行く！もう、留守番なんてイヤよ！何の為に…来て来たと思っ  
ているのよ！留守番要員じゃないわよ！」

って言うって、さっさと入っていちゃったのでサンチヨの代わりにド  
リスを含んだ4人で探索する事に決まった…

勝手だなあ…

最初の内は狭く長い回廊が続いていたが、急に拓けた場所が現れた。  
採掘現場の様な造りの洞窟内には、縦横無尽に線路が走っており各  
所にトロツコが置かれている。

「トロツコの眼」

「？トロツコに眼なんてないよ？お父さん」

「テイミー君！そのツツコミは間違っている！そこは『シロツコの  
眼だろ！』って、ツツコミが欲しかった」

「あ…う、うん…ごめんなさい…でも、シロツコって何？」

「…ごめんなさい。忘れて下さい」

彼らにシロツコと言っても分かる訳ないよね。『落ちろカトンボ！

！』のパプテマス様なんだけどね…

この洞窟は厄介だ！

敵は殆どいない。

しかし、トロツコを上手く操らないと先に進めない仕組みになっている。

途中にある切り替えポイントを操作しないと、トロツコを元の位置に戻してやり直しになる。

パズル的な要素が強い！

「あゝも〜！僕、こつ言うの苦手ー！無理矢理付いてきたドリサさん、頑張つてー！」

「わ、私は戦闘要員ですので、こつ言った頭脳労働は国王陛下の領分です。私ども家臣は陛下に付き従うのみです」

「勝手だなあ〜…何でこつ言う時だけ敬語なの？」

「お父さん。みんなで頑張りましょ！モンスターもいないから、ゆつくり落ち着いて攻略出来るよ」

「どうやらポピーはビアンカ似の様だ。言い娘だなー！嫁にやりたくねー！！」

将来『娘さんを僕にください！』なんつー輩が現れたら、どごそのハゲの様に無理難題を押し付けよう。リングを2つ取ってこいの的な！

少しずつだがダンジョンを奥に進むと、一台のトロツコが同じ所をグルグルと回っている現場に遭遇する。

「だ〜れか、た〜すけて〜！！！」

トロツコには一人のおっさんが乗っているのだが、楽しんでいる訳では無い様だ。

助ける為切り替えレバーを操作しようと思う、が…錆び付いているらしく動かない。

力任せにレバーを動かす！鈍い音と共にレバーが動く。同時にレバーが壊れる。

ループ車線からストレート車線へトロツコは移行し、線路の終着点へ着くと勢いそのままでおっさんは放り出された。大丈夫かな…あのおっさん。

「いや…助かりました」

おっさんはひょっこり起きあがり、何事もなかった様に近付いてくる。

「申し遅れました、私は天空人のプサンです」

「はあ…よろしく…僕はリュカ、ティミーとポピーは僕の子供です」  
「初めまして」

「よろしく願います」

「私は、ドリスよ。このパーティーの実質的なリーダーよ！」

勝手だなあ…

「あの…何故こんな所に？」

「はい。私は墜落した天空城を目指していたのですが、切り替え間違えまして…20年間もあそこで回ってました」

「…へー…」

ヤバイ！この人馬鹿だ！

あんな勢い良く放り出されてもケロっとしているのだから、トロツコから飛び降りても大して怪我はしないだろうに…

にも関わらず20年間も…

「あなた方も天空城を目指しているのですか？」

「はい。やはり、この洞窟から天空城へ行けるのですね」

「はい。私が乗っていたトロツコで真っ直ぐです！」

え、大丈夫かな？

「切り替えさえ間違えなければ大丈夫ですよ」

説得力ねえ…！20年の重みはでかいね。

<天空城>

プサンの言う通り、あのトロツコに乗って直走ると急に視界がぼやけ気が付いた時には水中の城の前に立っていた。

「ここが天空城（笑）！」

「リュカさん…何で笑うんですか？正真正銘の天空城ですよ！」

「だあ〜てえ〜…天空に無いじゃん！水中城じゃん！」

「ぐっ…な、何故墜落したのか原因を調べてみましょう！」

そう言うとプサンは俺達を誘い、城の奥へ進んでいく。

プサンに付いて行くと、奇妙な部屋に辿り着いた。

「やや！ここにあるはずのゴールドオーブがありません！どうやらゴールドオーブ紛失が天空城の墜落の原因の様です！」

何も乗っていない台座を見て慌てふためくプサンの姿が滑稽だ！

「じゃあ…もう二度とこの水中城は天空城に戻らないんですね」

「いえ！ゴールドオーブさえあれば、この城は天高く浮かび上がります！リュカ、探すのを手伝って頂けますか？」

うっ…また面倒事の予感…

「べ、別にいいですけど…何処にあるのかわからない物を探すのは…」

遠回しに断ってみる。

「今からゴールドオーブの残留思念を辿ってみます。リュカの頭に直接ビジョンを送りますので、そこへ行って手に入れてきて下さい」  
そんな便利な事が出来たのね…

「では、いきますよ。」

「お手柔らかに…」

56・知りたく無い事もある。でも、知ってしまったらどうすればいいの？

<天空城>

「では、いきますよ」

「お手柔らかに…」

プサンが瞳を閉じて瞑想状態に入っていく。

それと同時に俺の頭の中にゴールドオーブに関わるビジョンが鮮明に浮かび上がる。

ゴールドオーブは天空城の床に出来た穴から落ち、懐かしのレヌール城へ墜落する。

そして月日がたち、二人の男女の子供がゴールドオーブを拾い持ち帰る。

「って、これ俺じゃん！やっべー、フレアさんにあげちゃった！」

「リュカ！ビジョンの方に集中して下さい！まだ続きがあります」

「いかん！集中！」

ゴールドオーブを持った俺は、サンタローズの教会の前でフレアさんと旅の男と話をしている。

「そう言えば、あの男が『誰にもあげるな』って言ってたっけ！何かアイツの言う通りにしておけばって思うのがムカつく！」

「リュカ！集中を！」

「集中、集中！！」

ゴールドオーブをフレアさんに渡している俺が見える。

フレアさんはゴールドオーブを大事に保管してくれてた様だ。

サンタローズにラインハット兵が攻め込んできた！

無抵抗な人々が兵士達によって殺されている！

神父様もフレアさんの目の前で殺された！

そして…フレアさんが大勢の兵士達に犯されている…

代わる代わる何人もが何度も…

ぐっ……………これ以上…見たくない…

「リュカ…目を逸らさないで下さい。ゴールドオーブの行方に集中して下さい」

……………

性欲を満足させた一人の兵士がゴールドオーブに気付き、自分の懐へ入れ王都へ帰って行った…

ラインハットへ帰った兵士は、仲間の兵士達にゴールドオーブを見せびらかしている。

そこへ太后が現れ…いや、偽太后が現れてゴールドオーブを没収して行きやがった…

「ここまでしか追跡出来ませんでした…」

「じゃあ…ラインハットにあるのですね！行ってきます！」

俺は直ぐさまルーラを唱えた。

<ラインハット城>

「ヘンリー！」

「お！？どうしたリュカ…血相変えて」

「偽太后が接収した財宝類は何処にある！？」

「分かる限り持ち主に返したが…分からないのは城の保管庫にしまつてある」

「今すぐ見せてくれ！その中に大切な物があるんだ！」

俺は殆ど脅しに近い状態でヘンリーに詰め寄った！

「わ、分かった、分かったから…」

保管庫には無造作に財宝類が山積みになっていた。

まあ…一つ一つ梱包されていたら探しにくいのだが…どれもこれも、キンキラ光っていて探しにくい。

あの時オーブを手放さなければと思うと、何か焦るね。

「なあ…リュカ…何を探しているのか教えてくれないか？」

「ゴールドオーブ。金色の宝玉だ！」

「これか？」

ヘンリーは別の所から、ゴールドオーブを取り出した。

「全部ここにあるんじゃないのかよ！何で別にしてあんだよ！財宝の山を探し回ったのは無意味かよ！」

「す、すまん…マリアが、これには魔力が籠もっているからって言うから…別にしておいた」

「もっと早く言えよ…てか、もっと早く聞けよ、何探してるかを！」

「ま、まあ…見つかった事だし…ほら！………とここで何なんだ、それ？」

「説明がめんどいから、今度ゆっくり説明する！じゃ！」

俺はゴールドオーブを受け取ると、一目散に引き返した。

途中、マリソルとすれ違い何か言おうとしていた様だが完璧に無視した。

今度来た時に謝らないと！

<天空城>

天空城（笑）へ戻ると一目散にプサンの元へ行き、ゴールドオーブを手渡した。

プサンはゴールドオーブをしげしげと観察すると、

「これはゴールドオーブではありません。偽物です！」

「あ…？何言ってるの！？ビジョンで見たじゃん！その通りにライオンハットにあっただじゃん！」

「どうやら途中ですり替えられた様ですね。あまりにも良く出来た、魔力まで帯びている偽物だったので騙されました」

「ぶっざけんなよ！じゃ、何処にあんだよ！」

何だったの？この無意味な時間は？

子供達、待ちくたびれて寝てんじゃん！

「リュカ。貴方がゴールドオーブを手に入れてから他に誰が触りましたか？多分、その人がすり替えたんです！」

「え〜と…あ！ビアンカ…は、触ってねーや…あぁ、フレアさんに渡した…いや！その前に、あの男が勝手に触りやがった！」

「きつと、その人でしょう！」

「あの野郎！フレアさんを奪っただけでなく、ゴールドオーブまで奪いやがったのか！」

「ちよつと！リュカ！フレアさんを奪うってどういう事？」

ドリスが何やら怖い顔でツツコンでくる。

「え！？いやぁ…ワ、ワスレテクダサイ。…ってか、今はそれどころじゃないでシヨ！」

狙ってました、なんて言えないでシヨ！

「で！プサン！あの男は何処へ行ったんですか？」

「それが…どうやら、あの人は別の次元から来たらしく…追う事が出来ません…多分、この世界にはゴールドオーブは無いのでしよ

…」

なっ…

じゃぁ…何だったんだよ！あんな胸くそ悪いビジョン見せやがって！

「じゃぁ、この城は水中城って事でいいですね！」

ちよいギレ気味で言い放つ。

「いえ…まだ方法があります。エルフの女王に頼みます」

エルフの女王？それって、もしかして…

「それはポワン様の事ですか？」

「リュカはエルフの女王に会って事があるのですか？」

「以前に…」

「では、話が早い！この宝玉を持ってエルフの女王の元へ赴いて下さい」

「どつやって？」

「……以前に会ったのでは？その時はどしどしっ」

どしどしっどしどしっ

57・過去とは、現在への土台であり、未来への教科書でもある。過去に学ぶ。

<サンタローズ>

俺は今、一人でサンタローズの元実家の地下に来ている。

俺は地下室で四苦八苦している。

壁や天井を触ったり、叩いたり、撫でたり、くすぐったり…くすぐる？

「あの〜リュカさん…何をなさっているのですか？」

振り向くとリュリュが不思議そうな顔で俺を見ている。

やっべ！壁くすぐっているところを見られた！ハズガシー！！

「お母さんから聞いてない？とても奇妙な事をする男だと」

「い、いえ…そうは聞いてませんが…」

どんな事を聞かされているのか気になるなあ…

「あの一！」

「なあに？」

俺は視線を合わせ、顔を覗き込み訪ねる。

もしかしたらこの娘は俺の事を嫌っているかもしれないから…

「あの…他の人が居ないここでは…私も…お父さんって…呼んで…

いいですか？」

どうやら、辛うじて嫌われてはいない様だ…

俺はダメ親父だ！間違いない…

でも、これ以上はダメにならないようにしないと！

「リュリュ。僕は君のお父さんだ。何時何処で誰が居ようと、お父さんと呼んでくれて構わないんだよ」

「お、お父さん！お父さん、お父さん！」

リュリュは泣きながら俺に抱き付き、お父さんと連呼する。

やっば子供って可愛いなあ…

気が付くとフレアさんが俺達を見守っていた。

もしかして…壁をくすぐるハズカシー姿も見られたかな？

・  
・  
・  
リユリユを落ち着かせ、教会でフレアさんに経緯を話した。

「そつか…ラインハット兵が攻め込んできた時の事を、リユ―君見  
ちゃったんだ…」

「……………ごめんなさい……………」

「やだ！リユ―君が謝らないですよ…私こそごめんね。こんな状態の  
女で…」

俺はフレアさんにキスをする、そのまま押し倒していた。

「違う！フレアさんは悪くない！！悪いのはフレアさんに酷い事を  
した奴らだ！僕はフレアさんの事が好きだ！どんな事があつたっ  
て関係ない！」

「リユ―君…」

俺とフレアさんは重なり見つめ合っている。

「あ、あのう！わ、私…………お外へ行ってきました！！」

「「あ！！」」

リユリユが居るの忘れてた！

「ごめん！リユリユ！いいよ、気を使わなくて！ここにいていいか  
ら」

「ごめんなさい、リユリユ。つい…」

「お父さん…お母さん…」

「と、ところでリユ―君は…いつ、その妖精の国に行ってきたの？」

「あ、ああ…え〜と…あれは…フレアさんに黄金の宝玉を渡す前ま  
で、妖精の国に居たんだ！」

「じゃあ…あの桜の枝は、妖精の国から持ち帰った物なのかしら？」

「桜？」

「ちよつと…忘れちゃったの？桜の枝を育ててって、渡してくれた  
じゃない。教会の横に咲いている桜は、その時の桜よ」

「そうだ！！ポワン様が誓いの証ってくれたんだ！」  
俺は慌てて桜の元へかけだした。

桜の木へ触れ、心の底から祈る。

ポワン様、困った事があつたら力になるって言ったよね！  
今困ってます！すんごく困ってます！何故だか困ってます！  
タチケテ！

<妖精の国>

俺の祈りが通じたのか、元からこうしたシステムなのか…よく分からないが、気付いたらポワン様の前に立っていた。

「お久しぶりです、リュカ」

相変わらず可愛いなあ…

歳とってないんじゃない？

あつと…そうじゃねえーや！

「あの、ポワン様！」

「分かっております。ゴールドオーブの事でしょう」

「そうです！これです！」

俺は懐から光る宝玉を取り出す。

「リュカ…大変申し訳ありませんが、今の我々には天空城を浮上させる程の魔力を持っている者はありません」

何なの今日！

無駄に胸くそ悪いビジョン見て、無駄にラインハットまで行って、  
無駄に財宝の山を漁って、無駄に壁をくすぐって、無駄にポワン様に泣き付いて…

「でもリュカ。方法があります」  
出た！

また無駄へ誘う魔法の言葉。

「大変危険ではありますが、これしか方法がありません」

無駄でもいいから、危険な事は止めましょう！

「ポワン様！みんなで一緒に違う方法を模索しましょ！大丈夫！きっと、良い方法が見つかりますよ！」

「いえ！これしか方法はありません！今からリユカ！貴方を過去の世界へ送ります。ですが気を付けて下さい。人々にこれから起こる未来の事を教えてはなりません」

「……………何で？」

「過去が変わってしまうと、現在の貴方の存在が消えてしまうかもしれないからです。例え不幸な事でも、起こらなければ今の貴方は存在しないのです」

「要はゴールドオーブさえ、すり替えてくれば良いんでしょう？楽勝ツスよ！」

「そうさ！あの男より先にゴールドオーブをすり替えれば良いんだから！」

「いいですか！気を抜かないで下さい。とても辛く、危険な任務ですよ！」

もく…ポワン様は大袈裟だなあ〜！

過去の俺からゴールドオーブをくすねて来れば良いだけじゃん！

今までで一番、楽勝なミッションだよ！

そう言えば誰かが言ってたな…ポワン様は天然だって！

きつと、危険視するポイントがずれてるんだ！

単純明快超楽勝！

じゃ、チャツチャカ行って、水中城を天空城に戻してやるかな！

58・耳は遠くの事まで聞く事が出来るが、目は近くの事しか分からない。

<サンタローズ>

俺の目の前に風光明媚な村が広がっている。

とても美しい村が…

ラインハットに攻め込まれる前のサンタローズ…俺は教会の横で村を一望している。

もう春だというのに肌寒いこの村で、人々は日々の営みに従事している…

「あの…旅のお方…どうかありませんか？」

荒らされる前の美しい風景に見入っていると、後ろから声をかけられた。

「申し訳ありません。あまりにも美しい村…だった…の…で…！」  
振り返るとそこには、まだ10代半ばの美しいシスターが不思議そうな表情でこちらを見ている。

「?どうかしましたか？」

「し、失礼…美しいものに目が無くて…貴女はとても美しい！」

何より若い！

「まあ…お上手ですね」

そうだ！このままじゃフレアさんは酷い目に遭ってしまおう！

何とか助ける方法はないだろうか？

「シスター！貴女はこの村から離れるべきだ！」

「え!?何ですかいきなり！」

「今から1・2年後にこの村は滅ぼされる…その時貴女は酷い…不幸な目に遭ってしまう!せめて、その期間だけでもこの村から離れた方がいい！」

「貴方は…占い師…ですか？」

「……………いえ……………ただ…貴女の未来を憂う者です……………」

「…村人を見捨てて、私一人だけ逃げると仰るのですか？」

「……………はい……………しかし、貴女の様な美しい女性が体験してはいけない事態が訪れます！ですから…どうか…」

未来を知っているとはこれ程辛い事なのか…

「お気遣いありがとうございます。ですが私はこの村を見捨てません！それに、失礼ですが…貴方の仰る通りの未来が訪れるとは限りません」

フレアさんはとても優しい笑顔で微笑んでくれた…

「しかし！私は貴女に幸せになって欲しい…不幸にはなってほしくない…」

「何故…初めてお会いした私を…気にかけてくれるのですか？」

心がはち切れそうだ…俺がフレアさんの事を知っていても、フレアさんは俺の事など知るはずがない…俺はまだ6歳の子供なのだから…

「…申し訳ありませんでした…詮無いを言ってしまった…」

「…い、いえ…」

フレアさんが俺の瞳を見つめている…

俺も彼女も互いに目を離せないでいる…

二人の男女が重なり合うのに、これ以上の事は必要なかった…

・

先程、物置小屋でフレアさんとキスをしていると、リュカ(6)と目が合った。

あのガキ…何、覗いてんだ！

まあ…いい…

フレアさんの処女は俺が守ってやったんだ！感謝しろよ！

教会の正面で途方に暮れているリュカ(6)を見つけ声をかける。

「やあ、リュカ(6)。綺麗な宝玉だねえ」

そう言つて、リュカ(6)の手からゴールドオーブを奪い取る。

「あ！ちよ「あら？リユール君。私に会いに来てくれたの？」

文句を言おうとしたリユカ（6）の言葉を遮り、フレアさんが遅れて訪れた。

リユカ（6）の視線がフレアさんに向いた際に、ゴールドオーブと光る宝玉をすり替える。

今がチャンス！！

もう用は無いし、あの男が何時来るか分からんし終わらせよう。

「ありがとう。これ返すよ」

偽物でも無くされたら困る！

俺は強引にリユカ（6）の腰の袋にしまい込んだ！

俺はリユカ（6）と同じ高さの目線になって囁く。

「その宝玉は、とても貴重な物だ。人にあげたりせず、大事にするんだよ」

「う、うん……」

うん、やはり俺は素直な良い子だ！

よし、ご褒美に安心させてやろう。

「フレアさんの処女は俺が貰った」

安心しろ！フレアさんの処女は未来のお前の物だ！

お！？嬉しいのか、目を見開いて驚いている。

うん、これであの男が来ても大丈夫！

ただ…フレアさんを村から退避させられないのが心残りだ…

「それではシスター。私はこの辺で…あなたに出会えた事は、私の一生の宝です」

「まあ……」

あゝ…やっぱりフレアさんには幸せになって欲しいなあ…

「あの…お名前を教えてくださいますか？」

名前？何て言う！？リユカ（6）の前でリユカです、って言ったらマズイよね！

「次、お会いした時に名乗らせて頂きます。では、またお会いしましょう」

帰ったら、あの時の僕は僕でしたって言って、イチヤツこう！

<サンタローズ - パパス邸>

実家の前で物思いに耽っていると中からサンチヨが現れて俺を中に引き入れた。

どうやらパパスの客と勘違いしたらしい…

2階に案内され書斎に入ると、そこにはパパスが佇んでいた。

幼い頃は大きく見えたのに、今では俺と大して変わりはない…

瞳の奥が熱くなる…だが、ここで泣く訳にはいかない！

ぐっと涙を堪えパパスと対峙する様に向き直る。

「君は…どなたかな？ いったい、何用かな？」

「…はい…貴方はこれからラインハットへ赴くのでしょうか？」

「ほう…よく…知っているな…」

パパスが警戒心を露わにする。

「行けば不幸になる！ 行つてはいけない！ と、言っても貴方はラインハットに行くのでしょうか？」

「君は占い師なのかね？ 生憎だが私は占いは信じないのだ」

「いえ…占いではありません…ただ…未来を憂う者です…」

「……………」

「…貴方の息子さんは…リュカ（6）はこの先…極めて不幸な人生を歩みます」

「リュカが…」

「はい。ですから……………」

「……………」

「いや！ これ以上言つてはいけない！ 未来を変えてしまう恐れがある…」

「……………」

「……………」

「ですから、息子さんに優しくしてあげて下さい。息子さんは貴方の事が大好きなのです！」

「……………」

俺はそこまで言つと、踵を返して立ち去った！

後ろではパパスが…父さんが何かを叫んでいるのだが振り返る事が出来ない！  
もう…涙が溢れて止まらない…  
俺は実家を出て歩き出す。  
何処を歩いたのか分からない…  
後ろを振り返らず…ひたすら歩いた。

<妖精の国>

気が付くと目の前にポワン様が佇んでいた。  
ポワン様は静かに…優しく俺の頭を抱き締めてくれた。  
俺はポワン様に抱き付き…声を殺して泣き続けた…  
父さんを見殺しにした事に…フレアさんを見捨てた事に…

59 過去に犯した過ちは、いずれ未来で償う時がくる。大小違いがあるけど

<妖精の国>

泣く事に集中しすぎてポワン様の胸の感触を味わう事を忘れました。

「あの…もう1回その胸で泣いていいですか？」

「顔がにやけているからダメです」  
ちえっ！

少しポワン様と大人な会話（近況報告とか今回のお礼とか）をし、帰ろうかと思つた時に隣の部屋から騒がしい面子が押し寄せてきた！

「リユークーン！！」

真っ白いドレスに、スリットが深く入ったスカート。

それにマツチしていない青紫のスカーフを首に巻いた、ナイスバディの美女が抱き付いてきた！

オッパイが柔らかい！

「もー！こつちに来ているなら会いに来てくれてもいいじゃない！」  
誰？

「こら、スノウ！！リユカだって忙しいのよ！アンタなんか構っている暇ある訳無いでしょう！」

あ！この娘は確か…

「そうだけ。スノウ！リユカは天空城復活の為に動いてんだぜ。オイラ達に構ってられないよ」

コイツ誰？いたっけ？

俺の目の前でギャーギャー騒ぐ三人を見ながら、必死に記憶を呼び覚ます。

え〜と…こつちの女の子は…確か…！ベラだ！そうだよ、ベラだ！何度かボコられたけ。

こつちの美女は…スノウ？……………あ！雪の女王スノウだ！

相変わらず良い女だ！ご馳走になりたいね！

そのチビは誰だ？

全然思い出せん！

「な、なあ…もしかして…オイラ達の事忘れてないか？」

「ベラとスノウは覚えているんだけど…君、誰？」

「ちょ…そりやないだろ！壮絶なバトルを繰り広げたオイラ達だろ！」

バトルう？

「妖精の世界でバトつた覚えは無いのだが？」

「リユカ、安心して。貴方は妖精の世界では1度も戦闘をしていないわ。このザイルが勝手に襲いかかって自爆したただけだから」

「……ああ…そ…ザイル君て言うんだ。初めましてよろしく」

「そんなあ…つれないなあ」

6歳の時の事など事細かに覚えている訳ねえーだろ！  
特に男の事なんか…

「そんな事より、リユー君！責任取って下さい  
せ、責任！」

何事！？俺またやつちやつた！？子沢山か、俺！？  
いやいやいや！ないないない！！ありえない！

あの時俺6歳よ！  
ムリだから！ムリ！

「春風のフルート事件の後…私、雪の女王を解任されちゃった！責任取ってよお！」

俺関係無いじゃん！自業自得じゃん！  
やめてよ、悪質な言い掛かり！

『責任取れ』なんて、前科持ちの俺にはNGワードですよ！  
「自業自得って言葉、知ってる？スノウ…」

「私、リユー君に付いて行く事に決めた！ここにいっても暇だし」  
うわあ…何、この女…

「あのね、スノウ…今「それに聞いたわよ」

ナニヲデシヨウ？

「今、奥さんが行方不明中なんでしょ。夜…寂しいでしょ…私が紛らわしてア・ゲ・ル！」

「一緒に行きましょう！」

俺の暴れん坊將軍が勝手に指令を発した。

「リュカ！オイラも一緒に行つて手伝つてやるよ！助けて貰った借りを返したいからな！」

え〜！お前はいいよあ〜…

「何でそんなにイヤそうな顔なんだよ！」

「ソナナコトナイヨ。イツシヨニガンバロウ」

まあ…賑やかな方がいいだろ…

俺の危険度も減るし。

「リュカ…助かるわあ〜その喧しい連中を引き取つてくれてベラがホツとした様に笑顔を見せる。

しくぢりましたか？俺！？

「べ、ベラも一緒に行こうよ。僕、ベラの事が好きなんだ！」

飼育係が必要かもしれん！ベラに押し付けねば！

「私、アンタ達の事嫌いだからヤ！」

実も蓋も底も無い事を言われました。

<サントローズ>

フレアSIDE

リュウ君が桜の木へ吸い込まれる様に消えてから、随分と時間が経過した。

リュウ君は疲れたらしく、部屋に戻って眠ってしまった。

私はリュウ君が心配で部屋に戻れないでいる…

不意に桜の木が光だし、目前にリュウ君が現れた！

「リュウ君、お帰り！」

「ただいま。待っていてくれたんだ…ありがとう」

リユー君に抱き付こうとした時、

「なあ〜に？この村あ…随分と荒れ果てているわねえ〜」

リユー君の後ろから、露出度の無駄に高い女性が現れた。

随分と服装に合っていない、青紫のスカーフを巻いている。

「リユー君？そちらの方は？」

「ああ…紹介するね。妖精の国からやって来た、スノウとザ…ザ…

ザクロ…君？」

「ザイルだ！間違えんなよ！」

「あはははは、メンゴ！」

妖精の国！？本当に行ってきたんだ…

「それでリユー君！ゴールドオーブは…」

「うん。この通りバッチリ！」

リユー君は懐からゴールドオーブを取り出した。

私には先程の宝玉と違いが分からないが、リユー君がバッチリと言

っているのでバッチリなんだろう。

「リユリユは…もう、寝ちゃった？」

「うん…ごめんね…」

「いや…しょうがないよ。こんな時間だしね。寝顔だけでも見てき

ていいかな？」

「是非…お願い」

部屋に入っていくリユー君とザイル君。（何である子まで？）

残ったスノウさんは、私の事を睨んでいる。

「アンタ、リユー君の何なの？」

…私っていったいリユー君の何？

「さあ…近しい知人…ですかね…」

「ハン！私は、リユー君の愛人（予定）よ！アンタと違ってリユー

君に付いて行くんだからね！」

先程の私とリユー君の会話から、何かを感じ取った様で私につっか

っかってくる。

私程、濃密な時間は過ごして無いクセに！

「あら、愛人（妄想）さんですか。大変ですねえ…リュウ君、もてますからねえ…」

「な、何よ！余裕カマして！」

「余裕なんて無いですよ…私には娘が居ます。リュウ君との間に出来た…その子育てでいっぱいはいっぱいです」

「な！こ、子供！いい、いい気になるんじゃないわよ！私だって子供の2・3ダース、すぐに産んでやるわよ！」

「あらあら、大変。出産、子育てをしながらリュウ君の旅に付いて行くのですか！？足手纏いにしかならないですね」

「うっ…そ、それは…」

「辛くなったら、何時でもサンタローズに来て下さい。出産も子育てもお手伝い致しますから。愛しいリュウ君の子供の為なら、私頑張っちゃいますよ」

スノウさんは何も言い返せず、泣きそうになっている。ちよつと言い過ぎちゃったかしら？

「こちらから…いい大人がケンカしない！リュウ君が起きちゃったでしよ！」

「あ…ごめんね…リュウ君」

「うっん、大丈夫よ…お母さん。お父さんに抱っこしてもらっちゃたし」

リュウ君に抱っこされている。

いいなあ…実の娘に嫉妬してしまう…リュウ君は格好良すぎるよ。

「リュウくん！私も子供産む！リュウ君の子、産む！」

「お父さんの子供？じゃあ、ティミー君やポピーちゃん以外に姉弟が増えるのね！？」

「だったら、私が産むわ！リュウ君には父も母も同じ姉弟が必要よ！」

「ちよ、みんな…落ち着いて下さい。」

「リュウ君…大変そうだな！オイラも手伝ってやろうか？」

「お前は」アンタは「君は」黙っててよ!..!」

「..!」ごめんなさい。そんな...みんなして怒らないでよ!..!」

こうして夜は、更けていった。

結局リユー君達は一晚泊まっていつてくれた。

・

・

・

.....リユー君...体力...あるのね...二人がかりだったのに.....

59・過去に犯した過ちは、いずれ未来で償う時がくる。大小違いがあるけど

次回ようやく天空城復活！

もう、水中城なんて呼ばせないんだからね！

<天空城>

朝一で天空城（笑）に帰ってくると、みんな待ちくたびれていた。俺もかなりくたびれていた。（ダブルヘッダーはきつい）

ゴールドオーブを手に入れた事を告げると、みんな喜んでくれたが…スノウとザイルを紹介したら、空気が変わった。

しかも、スノウの自己紹介で最悪なムードになった。

だって「リユウ君の愛人（希望）です」って言うんだもん！子供達、引いてますよ！そりゃそうですよ。

母親を捜す旅に出ているのに愛人（希望）を連れて帰るなんて…ティミーは男だから、いずれ分かってくれるだろう。

問題はポピーですよ！『お父さん、不潔！』的な目で睨まれていますよ！

いや、違うんですよ！そう言うんじゃないんですよ！いや…そう言う事昨晚しちゃったけど、違うんですよ！

何かいい訳しないと…

「リユカはお盛んですね」

って、おい！プサン！余計な事言うな！お前黙ってる！

「ふくん…お父さんは、お盛なんだ。ふくん…」

キヤー！たすけてー！

リユリユは姉弟が出来るーって、喜んでくれたのに！フレアさん押し倒した時も、気を使ってくれたのに！

「まあまあ…ポピーさん。落ち着いて」

プサン…

「お父さんは男なんですよ。こう言う生き物なんですよ」  
フォローになつてねえーよ！バカ！（泣）

ポピーとドリスにジト目で睨まれながら、プサンにゴールドオーブを手渡した。

プサンはゴールドオーブを台座にセットし、中央の操作台で瞑想を始める。

大きく天空城（笑）が揺れ、浮かび上がる感じがする。

「ふむ…これ以上高度は上がりませんか…ま、いいでしょう」

どうやらプサンが思っていた程、高くは浮かなかった様だが、これで正真正銘の天空城になったみたいだ。

てな訳で、天空城探索ツアー開催！

湖の前で待機していた仲間を拾い、城内を探索する。

どうやら天空人はしぶとい生き物の様だ。

あの状態だったのに殆どの天空人が生きている。

コックローチの様なしぶとさ。

プサンはみんなの無事な姿を見て、懐かしんでいたのだが急に、

「リュカにお願いしたい事があるのですが…」

と、真面目ぶった表情で話しかけてきた…

きつと面倒事だ！

<ボブルの塔>

スノウSIDE

何だかよく分からないけど私達は今、ボブルの塔と呼ばれるダンジョンを攻略中なの。

リュウ君があのにゲメガネに頼まれて、何かを探しに来たみたいなんだけど…何を探してんのかよく分かんない！

私はリュウ君とイチヤイチャ出来れば何だっていいんだけどね。

この塔は最上階からロープで進入する造りになっている。

めんどくさい造りね！ロープを伝えて下りる時に、リュウ君の腕を

放さなければならぬのが頭にくる！

リユー君ってば、お子さんの前で恥ずかしいのか、

「ちょ…スノウ…離れて歩いてくれない!? 動きづらい…」  
だって。

も〜テレちゃってえ〜！カワイイー！！

「よりによつて人間だけのパーティー構成の時に…」

つて、ぶつぶつ囁いてたの！

恥ずかしがり屋のリユー君！ちょーかわいいー！！

いま、塔の地下の広大なダンジョンを彷徨っている。

とてつもなく邪悪な気配が充満するダンジョン…

リユー君を見ると、さっきまでは優しい笑顔だったのに今は緊張した面持ちになっている。

でも、真顔のリユー君もステキ！

「お父さん…凄くイヤな気配がするよ…奥に…強い敵が居る！」

ティミー君が泣き言を言っている。

「うん、そうだね。お父さんはこの気配を…この敵を知っている！  
かなり強い敵だ！（クスツ）…でもティミーは伝説の勇者様なんだ  
から、何時でも余裕ぶつてないとダメだよ」

リユー君が優しくティミー君を諭す。

……………カツコイイ……………

私…邪魔しない様に少し離れてよ…

「ほ〜っほっほっほ。まさか、これ程までに邪魔な存在になるとは  
思いませんでしたよ…リユカ！」

私達の前に、紫色のローブを纏った気色の悪い奴が現れた…この場  
に居るだけで気分が悪くなる！

「ゲマ…！！！」

リユー君はコイツを知っている！

普段見せた事のない形相で睨んでいる！

怖い…こんな怖いリユー君もいるんだ…

「やはり…あの時、お父上と一緒に殺しておけば良かったですねえ」

「な…！コイツが旦那様を…パパス様を！」

サンチヨちゃんが怒りに震えてる…

「それとも、デモンズタワーで、夫婦揃って殺しておくべきでしたか…」

「コイツが僕達のお母さんを！」

「許せない！！」

ティミー君とポピーちゃんが身構える。

「まあ…いいでしょう…過去の失敗は、今は正すれば！」

「（クスツ）…出来もしない事を言うな、ボケナスが！」

「ほ…っほ…っほ…言ってくれますねえ…リユカ…！ゴonz…やってしまいなさい！」

紫の奴の後ろから、ブタとカバを混ぜて不細工にした様な奴が現れた。

「げ…はっはっは！俺様がお前らをミンチに…し…ぐ…………」

ゴonzと呼ばれた化け物は、自分の首が切り落とされた事に気付かなかった様だ。

いや…ゴonzだけではない！私達皆、リユー君が何時斬りつけたのか分からないでいる。

そして、そのリユー君は既にゲマに向けて凄まじい剣撃を叩きつけている。

洞窟内の壁や天井を使い、非常識な角度から非常識な連撃を浴びせている。

私達が援護をする隙がない。

リユー君の怒りに任せた激しい攻撃が、ゲマを追いつめていく。

「くっ！これ程までに強くなっているとは…！」

ゲマに先程までの余裕は無くなっている。

「ビアンカを何処へやった！」

「なるほど…一撃で私を仕留めないのは、それを聞きたいからですか…」

「いや…お前を蹴りたいだけだ…」

リユー君が薄ら笑いを浮かべながら、ゲマの左腕を切り落とす。

「ほ…っほ…っほ…いいでしょう。今回は私の負けにしてあげます。勝者の貴方に情報を差し上げましょう」

ゲマは余裕をカマして嘯き始めた。

「お探しの奥さんは…セントベレス山頂の大神殿に居ます。頑張つて登ってみるのですね。ほ…っほ…っほ」

「光の教団の総本山か…」

リユー君は、そう呟くとゲマの身体を突き刺した！無表情に…

「ん！？手応えが…」

「ほ…っほ…っほ。この身体が私の本体だと思っていたのですか？おめでたいですねえ…私の本体は魔界にあるのですよ。魔力が大きすぎて、今あるゲートでは通り抜けが出来ない。ほ…っほ…っほ。残念でしたねえ…絶望なさい！」

ゲマに突き刺したリユー君の剣が、ゲマの身体に浸食されゲマ諸共崩れ去る…

私達の間にも、酷い徒労感が漂っている。

ゲマの嫌悪感より…リユー君の本当の姿への恐怖感が…

でも…でも、私は挫けない！そんな所も含めて、リユー君が大好きだから！

だから、悲しそうな表情で佇むリユー君に抱き付く！

優しいリユー君に戻ってもらいたいから！

奥さんが居ようが、子供が居ようが、関係ない！

リユー君の事が好きだから！

スノウSIDE END



## 61・見た目に騙されるな。

<ボブルの塔>

ポピーSIDE

お父さんが怒ったところを初めて見た。

凄く…怖い…

でも、お父さんは怒るのが嫌いなんだと思う。

だって、今のお父さんは凄く悲しそう…

本当はきつと、モンスターでも殺したくないんだと思う。

ゲマが消え去った跡に、キレイな小さい石が2つ落ちていた。

「お父さん！きつとこれが『竜の目』だよ！塔の中にあつた竜の像の目にはめ込むんだと思うわ！」

私はなるべく明るい声で話しかけた。

「わお！ポピーちゃん鋭い！さすがはリユー君の娘！」

スノウがお父さんに抱き付きながら明るく喋る。

きつとスノウも、いつものお父さんでいてほしいんだ…

だから戲けて話しかけているのだろう。

さつきまでお父さんにベタベタするスノウが嫌いだったけど、ちょ

っと好きになっちゃった。

それにしてもベタベタしすぎよね！

ゴレムスクらいある竜の像の頭に竜の目をはめ込むと、口が開き中に入る事が出来た。

お父さんは「趣味悪い仕掛けの像だな…これを造った奴とは友達になりたくないね！」だって。

いつものお父さんに戻ってくれたみたいで良かった。

中には『ドラゴンオーブ』が奉られてある。

「これがプサンの言ってた物かな？」

「多分そうだと思う。凄いパワーだね！」

ティミーがドラゴンオーブを手に取り眺める。

「じゃあ…こつちの杖は何だろう？」

お父さんは奥に飾ってあった竜の姿を形取った杖に近付き興味ありげに突いてる。

「剣…無くなっちゃたし…貰っても…いいかな？」

そう言いながら杖を手に取り構える。

カ…カツコイイ…!

「キヤー…! ちょく格好いい…! それもうリユー君の為だけに存在している物よね! 『貰っちゃう』どころかリユー君の持ち物よ!」

誰も反対意見を言わない…

当然だ…誰がどう見てもお父さんの為に存在している杖だ。

「伝説の勇者より…ティミーより格好いい…」

王者のマントを靡かせ、竜の杖を持つ姿は伝説の勇者を超えた存在にしている。

「ちえ! 天空の鎧が揃えば僕だつて…!

私の呟きにむくれるティミー…子供ねえ…

ポピーSIDE END

< 天空城 >

天空城へ戻ってくると、何やら皆さん大騒ぎ中。

一旦グランバニアへ戻って出直そうかな?

「おお! リユカ殿…! ちょうど良い時に…!

やべ! 見つかつちつた!

「実はこの城に不審者が居たのです…!

訪ねて無いのに教えてくれた。

「へー……」

「どうぞこちらへ！」

天空人が俺の手を引き歩き出す。

ちよ、何で俺が！？関係無いじゃん！

「あ、あの……何で僕を連れてくの？」

「その男がリユカ殿の名を出したのです」

別に名前くらい幾らでも出してよ！

巻き込まれたく無いよ……

玉座の間に来ると、数人の天空人に囲まれて、何やらいい訳ぶつこいているプサンが居た。

不審者ってアイツ！？

プププツ……20年間もトロツコで回ってたから人相が変わっちゃたのかな？

プサンと目が合うと、瞳を輝かせて俺の元へ近付いて来た。

「リユカ！待ってましたよ！それでドラゴンオーブは？」

ティミーの腰の袋からオーブを取り出しプサンに見せる。

「おお、まさしく「そ、それは……ドラゴンオーブ……」

天空人達がざわめき出す。

「いけませんぞ、リユカ殿！ドラゴンオーブを素性の知れぬ者に手渡しては……！」

「大丈夫だよプサンは。変な人だけど悪い人じゃ無い。ちよー変な人だけど……ものっそい変な人だけ……」

俺は苦笑いのプサンにオーブを渡す。

オーブを受け取ったプサンは、オーブを抱き締め瞑想をする。

するとプサンが眩く輝きだした！

次の瞬間、プサンは消え……巨大な黄金のドラゴンが目の前に佇んでいた。

………何これ？

< 天空城 >  
ピエールSIDE

私達の目の前に、神々しい黄金のドラゴンが姿を現した。  
な、何だ…

「マ、マスタードラゴン様!!」

天空人の一人が驚き叫んだ！  
マスタードラゴン!?

この天空城の主、マスタードラゴンだと!?

「何これ?…マスターベーションって言うの?」

「やだー!リユー君のエッチ〜!!」

こ、この馬鹿共!!

「馬鹿者!!この方はマスタードラゴン様だ!竜の神、マスタードラゴン様だ!!」

「え?プサンだよ。眩しかったけど見てたもん。このマスターベーションはプサンだよ」

「マスタードラゴンだ、馬鹿!間違えるな!」

「どっちでもいいよ、そんなん。それよりプサン!お願いがあるんだけど…」

ど、どっちでもよくないだろう!

「何かなりユカ」

「うん。ドラゴンオーブと一緒に、この杖もあつただけど…貰っていい?」

「無論だ。その杖は『ドラゴンの杖』と言う。扱える者が所有するべきだ」

何でこの男は神に対してタメ口なんだ…

「それとさあ…セントベレスの山頂に登りたいんだけど…何か方法無い?」

「私が皆を送り届けよう」

「まぢ！？大丈夫？結構高いよ？」

「私を見くびらないでもらいたいな」

「だって…20年間もトロツコで回っていたんだもん！」

天空人を始め、ティミー、ポピー、サンチヨ殿…みんな直立不動で  
マスタートラゴン様を見つめている。

何時もと変わらないのはリュカと、リュカにまわりつく馬鹿女だ  
けだ。

ピエールSIDE END

61・見た目に騙されるな。(後書き)

サブタイトルの意味ですが…

プサンみたいなしょぼいオッサンが、実は凄い存在だった…  
ではなく、

マスタードラゴンが凄い存在に見えるが、中身はプサンだよ！  
って事です。(笑)

62・一つの事に気を取られると、周りが見えなくなる。よくあるよね。

<大神殿>

ティミーSIDE

僕達はマスタードラゴン様の背に乗ってセントベレス山頂上の光の教団大神殿に降り立った。

空気が薄い…

僕もポピーもあまり動いていないのに、肩で息をしている。

「私はここで待機しよう」

「そだね。プサンのその身体じゃ建物内に入れなもんね」

マスタードラゴン様と別れ神殿内へ入ると、入口すぐの脇の部屋から懐かしい感じが漂ってきた…

「お父さん…こっちの部屋に何かある」

僕はそう声をかけると勝手に部屋へ入っていった。

部屋の中には神々しい鎧が飾ってある。

間違いない…『天空の鎧』だ！

僕はふらふらと天空の鎧に近付いていく…すると突然頭上で金属がぶつかり合う音が響いた！

僕の頭の上に、この部屋を警備しているシュプリンガーの剣が振り下ろされ、それをお父さんが防いでくれていた…

僕はシュプリンガーの存在に全然気付いていなかった！

ピピンとピエールの連撃によってシュプリンガーはあっさり倒さる。

「ちょっと、ティミー！油断しすぎよ！ここはもう敵地なんだからね！」

ポピーに怒られてしまった…

お父さんは優しい笑顔で頭を撫でてくれる…まだまだ子供だって意味だろうか…

悔しいなあ…

ティミーSIDE END

<大神殿>

ポピーSIDE

大神殿の礼拝の間は異様な雰囲気にもまれていた。

奥にある祭壇に向かい、大勢の信者が祈りを捧げている…

でもみんな変！

生気を失った様な光のない瞳で操り人形みたいにお祈りをしている。祭壇を見ると黒髪の教祖らしき女性が、更に奥のご神体の様な石像に祈りを捧げている。

「あれは…まさか…」

お父さんは独り言の様に囁くと、信者の群れを掻き分けて祭壇まで歩き出した。

私達は慌ててお父さんの後に続く！

「ちょ、リュカ！待ちなさい！迂闊に行動したら危険よ！」

ドリスは後を追いつながら呼び止めるが、お父さんは振り向きもせずひたすら進み続ける。

祭壇に辿り着いたお父さんは、何かに取り憑かれた様に前だけを見ている…私達の声が聞こえてない様だ…

教祖らしき女性が、こちらへ振り返り微笑みながら手を差し伸べる。「リュカ…一目で貴方だと分かりましたよ。私はマーサ…貴方の母です」

母！？マーサ！？

目の前の女性は自身をマーサだと名乗った…お父さんの母だと告げた！

違う気がする…理由は分からないけどイヤな感じのする女性だ…

お父さんは一歩ずつ前に進む…マーサと名乗る女性の方へ…

「お前には苦勞をかけましたね。パパスに…あんな男に任せたのが間違いです。本当にごめんなさい」

お父さんは何も反応しない…パパスお祖父様の悪口を言われたのに！お父さんはお父さんじゃ無くなってしまうたのか！？

「さあ、リュカ！母と一緒にイブールさ「ちよつと邪魔！退けよ、おばさん！」

え！？

みんなも驚いている…私達だけじゃなく、マーサと名乗る女性も…

「ここに居たんだ…やつと見つけた！見つけたー！！」

お父さんは奥にあるご神体を掲げ、喜び踊り出した！

いったい何事！？

「リュ、リュカ！それはこの大神殿の神聖なるご神体です。元の場所に戻しなさい！」

「違うよ。ビアンカだよ。僕の奥さんのビアンカだよ」

ビアンカ！？お母さんなの！？その石像は私達のお母さんなの！？

「リュカ！その石像に戻しなさい！お前は私と共にイブール様に仕えるのです。元へ戻しなさい！」

「ヤダよ、バカ！つか、お前誰だよ！？」

………どうやらお父さんは、お母さんの石像に気を取られ、さつきまでの話を聞いていなかった様だ…

ティミーと同じ…一つの事に集中すると、周りが見えなくなる…親子ねえ

「わ、私はお前の母、マーサです！」

「あ…？何言ってるの？バカなの？お前のどの辺がマーサなの？目が濁ってんじゃない！どうせ低俗なモンスターが化けてんだろ！バレバレだつゝの、バカ！」

この状況を勝手に不安がっていた私は馬鹿みたいだ…

お父さんが凄すぎるのかなあ？もうよく分からない…

「て、低俗…低俗だと…」

マーサ（偽）は、わなわなと震え邪悪なオーラを放っている。

お父さんが言った通りモンスターが化けている様だ！

「何だ？何震えてんだ？……おしっこか？おしっこ我慢してんのか？我慢すると身体に悪いぞ！待っててやるから行ってこいよ！」  
お父さんは敵を挑発するのが上手い…ブオーンの時も挑発してた…でも、あの時はナチュラルだったからなあ…

今回ののはわざとだよね！？だってありえないもの…この状況で…普通おしっこ間違えないもの…

「おのれ…馬鹿にしおって…人間風情が！」

マーサ（偽）の身体が3倍くらいに膨れあがり、そのおぞましい姿を露見させた！

「おわ！！何か膨れちゃったぞ！だからおしっこ我慢するなって言っただのに！」

どうやら今回もナチュラルだった様です…

ポピィ SIDE END

<大神殿>

「おのれ…馬鹿にしおって…人間風情が！」

おばさんの身体が3倍くらいに膨れあがり、一つ目の化け物に変わった！

「おわ！！何か膨れちゃったぞ！だからおしっこ我慢するなって言っただのに！」

この世界じゃ、おしっこ我慢すぎると化け物になるのか…気を付けよ！

「我が名はラマダ！イブール様の忠実なる僕！貴様らをこの場で滅ぼしてくれる！」

ラマダは手にしたこん棒を振り回し、強烈な攻撃を繰り出した！

俺はビアンカ（石像）を抱え、逃げまくる！  
ティミー、ピピン、ピエールの三人が斬りつける！  
俺はビアンカ（石像）を抱き抱えたまま、飛びはね逃げまどう！  
ポピー、マーリン、サーラが魔法を浴びせ続ける！  
俺はビアンカ（石像）と一緒に後方で待機する！  
ゴレムスがラマダの鳩尾に強烈な一撃を入れ、ゴレムスを踏み台にしたドリスがラマダに延髄切りをカマし、ドリスの背中にしがみついていたプオーンが激しい炎でトドメを刺す！  
俺はビアンカ（石像）のオツパイを揉む！堅くてつまらん！

俺一人だけ戦闘をせず後方へ避難してたので、みんなが非難する！  
「ま、まあまあ…そんな事よりさ…これ…どうやって戻すの？堅いオツパイはつままないけど…」  
みんな呆れてくれた。

怒られるより呆れられた方が良い。  
「くつくつくつ…そ、その…石像には…」  
まだ息のあるラマダが何か言い出した。

「その石像には…イ、イブール様…の…呪いが…かけられて…いる…」

「で？」  
「イブール様…がご健在…の…限り…お前の…つ…妻は…石…の…ま…ま…」

そこで力尽きた。わざわざありがとう。  
イブールを探し出そうと思ったら、信者（元奴隷）達の正気が戻り騒ぎ始めた。

ちっ！めんどくせーなー！  
取り敢えず近くにいた信者（元奴隷）に話しかけ落ち着かせる。  
すると有力情報ゲット！

イブールはこの地下に居るらしい。  
しかもこの祭壇に隠し階段があるらしい。

この信者（元奴隷）が「貴方は昔僕の家にあつた、お守りの像に似ています」って、よく訳の分からん事を言っていたが無視。

ドリスとピピンに信者（元奴隷）達をプサンの元に連れて行き、グランバニアへ連れて行かせる様指示を出した。

でもドリスが…

「何言ってるのよ！私もイブールの所に一緒に行くわよ！」

って、いつもの様に我が儘を言い出した。

さすがにキレたね、俺！

「勝手な事言うな！何時も何時も我が儘言いやがって！」

「な！？」

「彼ら信者（元奴隷）をこのままここに置いておく訳にはいかないだろう！一旦グランバニアで保護するんだ！その為には王族の一員であるドリスが引率しないとダメだろう！」

「そうですよ…ドリス様。グランバニアの兵士である私と、王族であるドリス様が、責任を持って行くべきです。さあ…参りましょう」  
ドリスとピピンは信者（元奴隷）を伴って外へ…プサンの元へ移動して行く。

俺に怒鳴られたドリスは少し涙目だった…後が怖いな…

### 63・思い出とは人々の歴史であり美しい物ばかりではない。

<大神殿・地下迷宮>  
サンチヨ SIDE

入り組んだ造りになっている大神殿内をリュカ様は迷うことなく進んで行く。

石像のビアンカ様を小脇に抱えたまま…

「あの…リュカ様…重くは無いのですか？」

「コラコラ。ビアンカが重い訳無いだろ。怒られるよ、そんな事言うとー！」

「いえ…そう言う意味では…」

「それにビアンカの何倍も大きい岩を、この場で転がしてたからね…このくらい気にならない…」

リュカ様は幼少の10年間を、ここで奴隷として過ごしたのだ…辛い10年間だったに違いない…

「いや、懐かしいな〜！10年間も石コロを転がしてたんだなあ〜！」

…辛い10年間…だったのだろうか！？

「そうだ！ティミー、ポピー！あそこにある柱の根元を見てごらん。お父さんが名前を彫っておいたはずだから！」

「え！？本当？」

「ティミー、見てみましょう！」

…本当に辛かったのだろうか…？

「ほう…確かにお前の名前が刻まれているな！ついでに相合い傘で隣に『エイデン』と、刻まれているが…どなたですか、リュカ！」  
ピエール殿が冷たく言い放つ…

「……………さ、さあ！もう少しでゴールだ！気を抜くなよ！」

「話を逸らすな！お前は本当に奴隷だったのか？先程の信者（元奴

隷)の中にエイデン殿が居るのか!?また、不埒な事を企んではないだろうな!」

「...あの中にエイデンは...居ないよ」

...それが意味する事は...

「エイデンは僕等子供達の、お姉さんの女性だったんだ」

リュカ様が悲しそうに語る。

「美人で優しかったから...みんな大好きだった...本当に美人だったからね...兵士や獄卒共に犯されて身籠もっちゃたんだ...だから...殺された...」

リュカ様はスラリン達と共に先行しているティミー様、ポピー様に聞こえない様に語る...

優しく...悲しく...

「リュカ...その...すまない...」

「構わないよ、別に...ただ、懐かしい思い出が必ずしも良い物であるとは限らないんだ。それだけ...覚えておいて」

やはりリュカ様にとっては地獄の10年間だったのだろうか...

サンチヨ SIDE END

<大神殿 - 最深部 >

ティミー SIDE

「イブール君!呪い解いて〜!」

教団の大主教が待ち構えている部屋に、必要以上に明るく入って行くお父さん...

何で緊張しないんだろう...この人...

お父さんの明るさとは裏腹に、室内は薄暗く禍々しい気配が漂っている。

気配の元凶は部屋の奥に鎮座しており暗くて顔は見えない。

「良く来たな…伝説の勇者とその一族よ…」  
気配の元凶は立ち上がり、こちらへ近付いてくる。  
お腹の底から響いてくる様な威圧感のある声を発しながら…  
「我々の画策も虚しく勇者などと言っくたらぬ存在が産まれてしま  
った…ここまでは神のシナリオ通り。しかし、ここからは違っ！貴  
様らを滅ぼし、神をも滅ぼし私が世界を構築してくれよう！」  
イブルが暗がりから抜け全身を表した。  
巨大なワニの化け物…それがイブルだ！  
みんなに緊張が走る！  
身構え今にも飛びかかりそうなその時！  
「そんなんでもいいから、僕の奥さんの呪いを解いてよ。そし  
たら許してやるから」

「……………えつと…お父さん！？…状況…分かってる？」

「え！分かってますよぉ〜！でも、堅いビアンカは味気ないんだ！  
早く元に戻して柔らかいビアンカを堪能したいんだ！」

…真面目にやってよ〜！

「ふっふっふっ…面白い…リュカよ、私と手を組まぬか？」

「……………は？」

え！？気に入られちゃった！？

「魔界には魔族の王、ミルドラスが人界に進出しようとして力を蓄え  
ている。そなたの母を攫い、その力を利用して…」

魔族の王ミルドラス！

「我と手を組み、魔王も神も共に滅ぼそうぞ！後の世界を支配する  
のだ！」

なんて奴だ…

「答えを聞かせて貰おう…リュカ…」

「……………」

お、お父さん！？

「ビアンカを元の姿に戻してよ。話はそれからだ」

「ラマダに聞かなかったのか…我が生きている限り、呪いは解けん！しかし世界を手に入れば女など幾らでも好きに出来るぞ！」

「ふむ……じゃ、答えは単純！ビアンカが良い！お前死ね！！」

「愚かな男よ！死ぬがいい！！」

イブールは輝く息を放つ！

お父さんはそれをバギクロスで防ぐ！

慌てて僕等も戦闘に加わった！

イブールがイオナズンを唱え、みんなを吹き飛ばす！

何故だかほぼ無傷のお父さんが、ベホマでみんなを回復させる。

ポピーのマホカント、僕のフバーハ、サンチヨがスクルトで守りを固める。

ザイル、プオーン、ゴレムスがそれぞれ打撃を加える！

しかし、然したるダメージを与えられない！

スノウがマヒヤドを唱えるが、魔法が弾かれスノウを襲った！

だが、間一髪のところでお父さんがスノウを庇った！

「お父さん！！」

強烈なマヒヤドにより氷の様に真っ白になるお父さん！

「さみー！！もうヤダー！！後は任せた！」

またも、ダメージは負ってなさそうだ…何故？

意識を切り替えイブールへ斬りかかる！

お互いに魔法が効かない状況の為、直接攻撃のみになった！

イブールは堅く、なかなか決定的一撃を与えられない。

しかし後方にさがったお父さんが、随時ベホマをかけてくれるので、

戦況はこちらに有利である。

・  
・  
・  
戦闘開始から凡そ1時間…

僕の天空の剣がイブールの身体を貫く！

激闘の末、辛うじて勝利する事が出来た…

みんなボロボロだ…お父さんを除いて…さすがに腹が立つ…

「ば、馬鹿な…私が…敗れるなどとは…」

「伝説の勇者様を舐めるなよ！」

お父さん…黙ってて下さい…

「ふっふっふっ…良かるう…私がお前らを魔界へ送ってやる…魔界でミルドラスに滅ぼされるがよい！！」

血だらけの身体でイブールが両手を掲げる！

………が、何も起きない…

「何も起きねえーじゃねえーか！コノヤロー！！」

お父さん………

「な、何故だ！？何故、何も起きない！？」

「ほっほっほっほ。何時まで大教祖のつもりなのです。貴方の企みなど、当に気付いておりましたよ」

「『ゲマー！！』」

お父さんとイブールの声が重なった。

突然、イブールの頭上に巨大な火球が現れイブールに直撃する！

「ぐはああああ！！！」

イブールの身体が跡形もなく消し飛ぶと、辺りからゲマの声だけが響き渡る。

「ほっほっほっほ。リュカ、束の間の幸せを味わいなさい。いずれミルドラス様自ら、人界を滅ぼすでしょう。ほっほっほ『あー！！』」

ゲマの笑いを遮って、突然お父さんが騒ぎ出す！

何事！？

「ピアノカに温もりが戻ってきた！！」

お父さんは一人、色を取り戻すお母さんを抱き締め、喜び騒ぐ…どうやらゲマの事など眼中に無い様だ！

本当にこの人と血が繋がっているのか不安になる…

テ  
イ  
ニ  
シ  
ド  
E  
N  
D

63・思い出とは人々の歴史であり美しい物ばかりではない。(後書き)

影の薄いヒロイン、ビアンカ復活！

しかし、ビアンカに迫る愛人三人集、フレア、マリソル、スノウ！

はたして妻の座は死守出来るのか！？

次回、

『エッチな下着は戦闘服！ビアンカ淫華乱れ咲き！！』  
をお送りします。お楽しみに！！

・  
・  
・  
もちろん、うそ！

## 64・今が幸せなら過去も未来も気にしない。

<大神殿 - 最深部>  
ピアンカSIDE

私の目の前に優しい微笑みを浮かべた男性がいる。

私の大好きなリュカが…

「リュ…カ…」

上手く声を出せない…

リュカが突然キスをしてきた！

リュカの口から水が移り入る。

リュカは予め水を口に含み、私の喉を潤してくれている。

…が、突然リュカの頭が横にズレる！

「何時まで子供の前でイチャイチャするつもりだ！馬鹿者！！」

この声はピエールだ。

「ち、違うよ！石からの復帰後は喉が渴いてて上手く声が出ないん

だ。だから、口移しで水を…」

「本当よ！ピエール！今、水を飲ませてもらったの！」

あれ？ピエールってこんなに大人っぽかったかしら？

「す、すまん」

「…たく…ほら、ティミー、ポピー！自己紹介しなさい」

ティミー？ポピー？もしかして！？

「お、お母さん！ずっとずっと、ずっと会いたかった！」

「お母さん！やっと会えた！私、お母さんにお話したい事がいっ

ぱいあるの！」

「ポピーさん…それって、お父さんの悪口じゃ無いよね！？」

「ちよっと…悪口を言われる様な事してきたの？」

「ソナナコトナイヨ。ソナナコト何ヒトツナイヨ」

みんなに笑いが巻き起こる。

そんな中一人だけ笑わずリュカのマントの端を掴んでいる女性が居た。

白いドレスにそぐわない青紫のスカーフを巻いた女性…

あのスカーフはきつと…そう言う事…まったく、リュカは…

「リュカ…」

私はリュカの首に腕を回し、徐にキスをする。

私が妻である事を、全員に分からせる為に…

ビアンカSIDE END

<大神殿 - 最深部>

「さあさあ！何時までもここにいてもしょうがありません。一旦グランバニアに…我が家に帰りましょう」

サンチョがみんなをまとめ出す。

うん。俺も早く帰ってビアンカとベットインしたい！

そうと決まれば、さっさと帰ろう！

と、思った時…突然目の前に指輪が現れ、そこから声が聞こえ出した！

『リュカ…聞こえますか？私の可愛いリュカ…』

「はいはい。聞こえますよー。どなたで〜すか？」

『……………随分とノリの軽い子に育ちましたね…』

何！？馬鹿にされてるの？俺…

『私はマーサ…貴方の母です』

「お義母さま！？本当にお義母さまなんですか！？」

『その声はビアンカさんね…さぞかし美しいのでしょうか…一目で良  
いから顔を見たいものです…』

息子の俺には？

『しかし、それを望んではいけません…魔界の王ミルドラーズは強

敵です。伝説の勇者と言えど敵わないでしょう…』

「そんな！？勇者が敵わない訳ない！僕がミルドラーズを倒してみせる！」

おー、勇ましいなあ…さすがは勇者。俺、勇者じゃ無くて本当に良かった…今更ながらそう思う。

『幼き勇者よ。貴方は家族と共に幸せに暮らしなさい。私がミルドラーズを食い止めます！けして人界に影響を及ぼさぬ様に！』

「そんな…お婆さま！」  
ポピーが泣きそうに叫ぶ。

むっ！格好いいところ見せないといカンかな？

「お母さん！残念ですが貴女の息子は只今反抗期です！親の言う事など聞きやしない…だから貴女はそこで大人しく待っていて下さい。出来ない息子が迎えに行くまで」

そこまで言い終わると、俺は指輪を掴み強制的に通信を終わらせた。ちよー格好いいじゃん！俺！！

ラマダの時も、さっきのイブールの時も、俺何もしてないからね。みんな冷たい目で睨んでたのよ！

でも今の台詞で尊敬の眼差しに変わったね！  
女性陣なんかベタ惚れっばいもん！

よし！後はさっさと帰ってシッポリと楽しもうとしよう！

### <グランバニア城>

俺はテラスから星空を見上げ黄昏れている…

ピアノカを押し倒そうとしたら、双子ちゃんが乱入！

ピアノカと共に眠りについてしまったので、沸き起こるリビドーを落ち着かせる為、一人テラスで黄昏れる。

スノウの元に行こうかと、ちよっとだけ思ったけども、さすがに気が引けるので又の機会に取っておく。

もう1時間以上こうしてる…一向に収まらん！

かなり期待して帰って来たからなあ…

「リユカ」

ビアンカが部屋から出てきた…艶めかしく瞳を光らせ、俺に抱き付きキスをする。

どうやら俺達は似た者夫婦だった様だ…

・  
・  
・

よく考えたら、ビアンカって産後だったね…

母乳が凄い…

64・今が幸せなら過去も未来も気にしない。(後書き)

相変わらず短い話でごめんなさい。

## 65・家族団欒って良いよね。出来れば邪魔しないでほしい。

<グランバニア城>

翌朝、家族揃って朝食を食べていると、オジロンが割り込んできた。ちよつとは空気読めよ！

「家族団欒のとこすまん！」

「いえ…オジロン様も、一緒にいかがですか？」

「おお！ピアノ力殿…忝ない。では、お言葉に甘えて  
社交辞令だつっくの！気付よ！

「それで…何時…出立するつもりだ？」

……………何が？

「ふん！隠さなくても良い！マーサ殿の事、全て聞いておる。また、  
王の職務を放り出して、魔界へ赴くのだろう！」

ああ…そう言えば格好つけて行かつて言っちゃたな…

えー…魔界になんて行きたくねえーよー！

よし。今回はオジロンの言う事を聞こう。

『いい加減、王の勤めを全うしろ！』って言ってきたら、素直に受け入れよう！

「私は10年もの間、国王不在を支えてきた！」

うんうん…もう、我慢の限度だよな！

「だがしかし、もう少しぐらい我慢しても良からう。必ずマーサ殿  
を連れ帰るのだぞ！」

え！？違うよ！違う違う！台詞が違う！？

「あ、あの…（バン！）！？」

魔界行きを拒否ろうとした時、突然部屋のドアが騒がしく開く！  
ドリスを始め、みんながなだれ込んでくる。

「リュカ、今度こそ連れて行ってもらうわよ！」

「リュカ様。私も一緒にしますぞ！亡きパス様のご遺志を遂げま

しよう！」

みんなが口々に随行を表明する…

勝手だなあ…

今更『格好つけてました。本当は行きたくないです』なんて言えねえ…どうすんべ…

取り敢えず時間を稼がねば…

「みんな、落ち着いて！」

一同は静まり、俺を見つめる。

うつ…そんな目で見るな！

「と、ともかく…直ぐさま赴くつもりはない。休息は必要だよ」

「休息…ですか…？具体的には？」

「うん。1週間、仕事も戦いも忘れて、ゆっくり過ごしてよ。ピピンやドリスなんかは家族と共に過ごす事！これは命令です！」

「リュカ様はどうなさるのですか？」

うーん…どうしよう…

！そつだ！

「僕は…ビアンカ、ティミー、ポピーと一緒に家族だけで、山奥の村やラインハットへ家族が揃った事を告げに行ってくる。この間挨拶に行つてから、大分時間も経過してるからね。サンチヨには悪いけど家族団欒を邪魔しないで」

「は…はあ…仕方ありません…」

「サンチヨもシスター・レミでも誘つて、デートでもしてなよ」

お！？珍しくサンチヨが顔を赤くしたぞ！脈ありか！？

こうやって、郷愁を誘い家族の元を離れにくくすれば、魔界行きをみんなが断念するかもしれない。そうすれば『やっぱ行くの止めよう』的な流れになるかも…

その為にもお義父さん、ヘンリー、利用させてもらつぞ！

## ピアンカSIDE

私達一家は温泉を貸し切り状態で堪能している。

久しぶり（てか、10年ぶりって…親不孝すぎる）に、お父さんに顔を見せる事になったのだが、私の無事より孫の方に気持ちが向いていて複雑だった。

でも、お父さんが気を利かせて温泉を借り切ってくれたので感謝しない…

ティミーはリュカの子らしからぬ純情ぶりで、私の裸を見る事が出来ずひたすら俯いている。

ポピーはリュカと会話をしているけど…内容が…

「お父さん…ごめんね」

「何が？」

「昨日の晩…お母さんを占領しちゃって…」

「はっはっは！気にする必要はない！もう遠慮はしないから。アレは昨晚限りの特別サービスだよ」

「…………… 昨晚は…スノウの所に行ったの？」

「いや、昨日の晩は行かなかったよ」

「微妙な言い方…」

10歳の女の子と父親の会話って、こんなのかしら！？

ポピーは絶対にリュカの血を引いてるわね！

ピアンカSIDE END

<サンタローズ>

嫌な事は早めに終わらせる主義です。

『紹介するね。僕の娘のリュキュです』って言ったら怒るかなあ…  
怒るよなあ…

でも、一生秘密に出来ないし…他から情報を得たら、もっと怒るだろうし…正直話して許しを請うのなら、今しかないよなあ…

「あーリユール君、お帰り」

「お久しぶりです、シスター・フレア」

「ピアンカさん、ご無事だったのね！良かった」

「フレアさん…リユールは？」

「……………いいの？」

俺は黙って頷く…

フレアさんは教会からリユールを連れてきた…

「リユール…随分…リユールにそっくり…ね？」

うん。怖いです。

・  
・  
・

精神的に無事ではないけど、無事乗り切りました。

しかも、ティミーがリユールとの関係を理解してくれたらしく、恋慕を諦めてくれました。

やっぱり正直に話して正解だね。

でも、夜が怖かったのでティミー、ポピー、リユールと一緒に同じベットで寝ました。

ピアンカとフレアさんは深夜まで語り合ってたけど、内容は知りません！怖くて聞けません！

65・家族団欒って良いよね。出来れば邪魔しないでほしい。(後書き)

哀れ!

ティミーの初恋、砕け散る!!

66・因果と言つ言葉がある。ヤちゃったらデきちゃった。因果である。

<ラインハット城>

ラインハットに着き、先ずはテール陛下に挨拶を済ます。

大人な俺は順序を弁えている。

後にヘンリーだ！

この間のゴールドオーブの事もあるし、ちゃんと説明しないと後でうっさいし…

「ちわくッス！ヘンリー君あゝそゝぼゝ」

室内へ入ると既に俺達の来訪を知っていたらしく、お茶の用意がしてあった。

きつとマリアさんだろう…気が利くね。

「ヘンリー、マリアさん、ご心配をかけましたが、無事家族4人揃いました」

ヘンリーの前に着席して早々、大人として挨拶をする。こつ言つたつて重要だよな。

「そうか…無事揃ったか…更に無事一人増えたしな！」

……………？

「？あの…ヘンリー君？何言ってるの？」

ヘンリーは無言で部屋の隅を指さす。

そこにはマリソルが椅子に座っていた…

……………何かを抱いている……………

クルンジャンカッタ……………コンナトコ……………

・  
・  
・

はい！順を追って説明します！

マリソルが女の子を産んだ。

名前は『リユーナ』

きつと…てか、間違いなく、天空城を見つける直前に訪れた時が発端だ。

マリソルも俺以外とは関係を持つ男性は居ないと、断言してくれた。先日、ゴールドオーブ探しの時に俺に何か言いたげだったのは、この事の様です。

あの時は有無を言わず来て、有無を言わず帰ったからね…

「お前…どう責任を取るんだ！」

「せ、責任つて…いいんです、ヘンリー様！」

「…え！？いい訳無いだろっ！」

俺とヘンリーがハモる！不本意だ！

「私…ある方と同じ悩みを有していて、すごく親しい友人同士なんです…10年前から。その方はサンタローズに住んでいて、同じ男性に恋をしまい今尚叶わぬ恋に悩んでおります」

フレアさんの事だよね…

「その方も…出産しました。私もです」

「お前…シスター・フレアにも…」

呆れるヘンリー…ジト目のビアンカ…ピンチな俺！

「私はリユカさんとビアンカさんの仲を裂くつもりはありません。

お二人とも私は大好きなんです。でもこれで…私とフレアさんはリユカさんとの絆を保つ事が出来ます」

「絆…」

ビアンカが目を丸くして驚いてる…

普段だったらビアンカの表情に欲情して、押し倒したりしてるんだろっが…今はとても…

「だからリユカさん！私の旦那様にはなれなくても、リユーナのお父さんにはなつて下さい！」

「ど…努力しまふ…」

緊張のあまり噛んだ！

「私も負けてられないわ！リュカ、魔界から戻り次第頑張るわよ！」  
とても嬉し恐ろし楽しみなのですが…

子供達やヘンリー夫妻の前で高らかと宣言する事では無い様な気が…  
でも、万事丸く収まったので良しとしましょう。（丸いか？）

・  
・  
・

この後でヘンリーに呼び出しを喰らい、2〜3時間の説教を受けました。

<グランバニア城>

ピピンSIDE

休暇として頂いた1週間など、あっと言う間に過ぎ去った。

お袋に親孝行も出来たし、ドリス様に思いを告げる事が出来たし、  
思い残す事は何もない。

俺は隣で寝息をたてるドリス様を眺め、幸せに浸る。

昨日の夕刻にリュカ様達がお戻りになった様だ…

俺はドリス様を起こし、服を着させて準備をする。

中庭へ出るとリュカ様ご家族他、皆さんが揃って待っていた。

「おや？お楽しみ過ぎて遅刻かい？ピピン、ドリス…」

「か…からかわないで下さい！皆さんがお早いだけです」

「メングメング。ところで…オジロンは知っているのかい？君達の  
関係を…」

「親父には言ったわ！『反対したらぶ殺す』って？」

「ちえっ…つまらん！」

言葉の割には嬉しそうだ…リュカ様流の祝福なのだろう。

全員が揃い、準備万端なところでリュカ様がみんなに話し始めた。  
「みんな、これから赴く魔界は兎に角恐ろしい所だ。モンスターもこちらとは比べ物にならない程、強く邪悪だろ。『やっぱり帰りたい』等と後から言っても手遅れになる。残留を希望するのなら今しかないから…遠慮せず、恥ずかしがらず、手を挙げて」  
リュカ様が手を挙げて皆を促す。

……  
しかし誰も手を挙げない…

無論だ！皆、思い残す事は無いのだから！

「リュカ様！ご無礼ながら申し上げます。リュカ様に頂いた1週間で、我々は思い残す事の無い様過ごしました。皆、リュカ様に命を捧げる覚悟でここに居ます！」

ドリス様が俺の手を強く握ってくれる。

愛する人と共にいれば何も怖い物など無い！

「ピピンのバカチン！！」

え！？

何故…怒られたの？

「僕は命など捧げて欲しくは無い！いるかー、そんな粗末な命！！1週間の休暇を与えたのは、故郷から…この世界から離れたくないと思わせる為なの！死ぬ気になって欲しかった訳じゃないの！もう、無駄に1週間過ごしやがって！！」

……さすがリュカ様…懐が深い…

死ぬ覚悟を決める1週間では無く…生きて帰る決意を高める為の1週間…

その通りだ！思いを告げただけで満足してはダメだ！

俺はドリス様と…いや、ドリスと添い遂げるのだ！

ピピンSIDE END



66・因果と言つ言葉がある。ヤちゃったらデきちゃった。因果である。(後書

うん。

手を挙げたのはリユカー人だけでした。

皆様にご報告があります。

この度、今作品が

日間ランキング30位、

週間ランキング91位、

月間ランキング57位になりました。

これも皆様の応援の賜です。

ぶっちゃけ大満足ですが、これじゃあいけません!!

更なる高みを目指して日々精進しつつ、

ニヤけながら布団で身悶えようと思えます。

67・自分の考えの甘さに驚く事がある。時既に遅し！

<ジャハンナ>

ピアンカSIDE

私達は魔界唯一の町ジャハンナに来ている。

リュカが言った通り、魔界のモンスターはどれも強敵だ。

しかし、この町が在ったおかげで一息つく事が出来る。

この町はマーサお義母様が造られたそうだ。

町の住人は、皆元はモンスターだったらしく、今はマーサお義母様の心に触れて改心しているらしい。

さすが親子…リュカと似ている。

そのリュカは今、町の高台に登りマーサお義母様が居るであろう『エビルマウンテン』を睨んでいる。

さすがのリュカもかなり緊張している様子だ。

幼い頃より救出を夢見た母親がそこに居る…きつと心の中でお義父様と話をしているのだろう…

私は邪魔をしない様に双子と共に町を散策する事にした。

ピアンカSIDE END

<ジャハンナ>

やべー…『やっぱ行きたくない』って言えばここまで来ちゃった…

魔王が居るんだよね…あそこに!?

それってラスボスだよな!?

今までは『俺主人公だし死なない!』って思っていたから安心してたけど…

ラスボス戦で主人公が死ぬ事ってありえるよね！？  
だって俺、伝説の勇者じゃないし…

最後は勇者がトドメを刺したけど、主人公が尊い犠牲になって他のみんなの命を救った的なエンディング！？

感動的だよねえ…

ありえるよね！？ヤバイよね！

あー！こんな事ならドラクエ5やっておくんだった…  
最後までなるの！？誰かおせーてー！！！！！！！！

ダメだ…考えれば考える程怖くなる！

こう言う時は何も考えず女を抱くべきだ！

快楽に身を委ねれば恐怖も和らぐ！

俺はビアンカを探す…

……………居た！

けど…双子と戯れている…

さすがに子供の前で『怖いから一発ヤリたいんだけど！』ってのは  
マズイ…

仕方ない…嫁は諦めよう。

よし、スノウだ！スノウなら喜んで股開く！

俺はスノウを探す…

……………居た！

ピピン、ドリス、ザイルと共に持ってきたチェスで遊んでいる。

俺は近づき徐に、

「スノウ、やらせろ！」

直後、鳩尾にドリスの蹴りが突き刺さる！

声が出ない程痛い！

「いきなり何なんだお前は！！！」

「ちょ、ドリスちゃん！酷い事しないの。さすがのリュー君も、この状況で、みんなが居て、奥さんも居て、そう言う事言わないって

ば！ねえ、リユー君」

俺は蹲りひたすら頷く。額から脂汗をかきながら…

「じゃあ、何だったんだ…さっきの一言は！」

「きつとチエスよ。私達が楽しそうにしてたから…ね！リユー君」

俺は涙目で頷く。声が出ません！

くそっ…今スノウはダメだ…

どうする…

見渡すとピアンカが双子と別れ、何処かに行ってしまった様だ。

チャンス！

ピアンカを探そう。

俺は探す…酒を置いてない酒場（酒場じゃ無いじゃん）や風車小屋…

そして宿屋を…

ピアンカは居ない…

代わりにピエールが居た！

……うん。ピエールでいこう！

俺はピエールの手を取り、目を直視しながら口説く。

ピエールは顔を真っ赤にしながらも俺の目を見続けている。

これはいける！

そう思った次の瞬間…ピエールの視線が俺の後方へ移る…慌てて手

を離す…そして部屋から出て行く…

俺はゆっくりと後ろを振り向く…

「ごめんね。邪魔しちゃって？」

僕の奥さんが優しい笑顔で立ってました。

テへ やっっちゃった。

・

子供には見せられない…いや、誰にも見せられない程の卑屈ぶりで

平謝りをし、辛うじて許しを得ました。

そして泣き付く俺。

魔界が怖いと泣き付く俺。

そんな俺を優しく抱き締めてくれるピアンカ。  
いつの間にか眠ってました。ガキみたいに…

67・自分の考えの甘さに驚く事がある。時既に遅し！（後書き）

次回、

さつさとゲマ戦！

魔界のフィールドをブラついてても大したイベントは無いので、エビルマウンテンに突入させます。

## 68・親孝行ってどうやるの？

<エビルマウンテン>

邪悪な気配を漂わせるダンジョン！

襲い来るモンスターも凶暴凶悪。

されど、どんな強敵が現れようと凄まじい勢いで撃破して行く我がパーティー。

……俺一人テンションが低いとです。

何故か皆さんテンション高いとです。

「お父さん！良い調子だよ、僕達！このまま魔王も倒しちゃおうね  
！！」

わ〜い…伝説の勇者様がやる気マンマンだあ〜…

……自分の息子じゃ無かったら丸投げするのに…

「ふっ…ムリはするなよ…お父さんを頼ってくれよ」

「うん！お父さんが居れば怖い物無しだよ！！」

……憧れてたんだ！息子に頼られる父親って！

でも、この難易度はないわあ〜…

俺、父親歴2年以下ですよ！ビギナークラスからお願いしたいです  
げど。

伝説の勇者って赤の他人だと思ったから探したのに…

エビルマウンテン中腹の広大な台地を突き進む。

「お父さん…遠くで何か聞こえるよ!？」

「……うん…歌…だね!？」

そう、歌が聞こえる！

歌と言っても教会とかで歌われる様な、聖歌みたいな歌だ。

何処の馬鹿だ!?!こんなモンスター蔓延る危険地帯で歌うなど!

「お父さん…何故だか懐かしい感じがするわ…行ってみましょ」

……娘じゃなかったら『ふざけんなバカ!』って言うてました。  
「うん。行ってみようか、ポピー」  
娘が可愛いって拷問ですね。

歌が聞こえる方へ歩き進める。

暫くすると大きな祭壇が見えてきた。

そこでは黒髪の美しい声の女性が祈りの歌を捧げている……

この声……あの容姿……覚えがある……

そう……幼い頃の記憶……優しく俺を抱き上げる女性の記憶……

授乳直前で奪い攫われた女性……あの人は俺の母さんだ!

「母さん!!!」

俺は叫び、走り出していた!

「その声はリユカですか!? 本当に私の息子のリユカですか?」

母さんは歌を止め振り返り俺を見据える。

俺は祭壇の手前で足を止め、片膝を付き頭を垂れる。

母に……やっと会えた母に、立派に成長した息子の姿を見せたくて……

「大変お待たせして申し訳ありませんでした、母上。父デユムパポ

スに代わり私リユケイロム、お迎えに参上致しました」

「リユカ……立派になって……後ろの女性がビアンカさんね」

「お義母様……」

涙ぐむビアンカ……

「そしてティミーとポピーね……私ももうお祖母ちゃんですか……」

「初めまして。僕ティミーです!」

「私ポピーです。お祖母様ごめんなさい……言い付けを破って魔界に  
来てしまいました……」

「私は幸せ者です。こうして息子夫婦と、孫にまで会う事が出来た  
のですから……」

母さんの目から涙がこぼれる……と同時に、嫌な感じが俺の肌突き  
刺さる!

言い様のない嫌な感じ……そう……まるで父さんが殺された時の様な……

!?

「もう、思い残す事はありません。私が全ての力を投じて、魔王ミルドラースを次元の狭間に封印します!」

言い終わると同時に母さんは両手を高らかに掲げ、祈りの言葉を唱えだした!

しかし、何も起きない…

「!?!何故!?!」

驚く母さん!俺の嫌悪感が頂点に達したその時!

「おっっほっほっほ」

俺は笑い声と同時にドラゴンの杖を母さんの頭上に投げ付けた!

(ズガ〜ン!!)

母さんの頭上で弾け散る巨大な火球!

「おや?阻まれてしまいましたか…さすがはリュカ…やりますねえ、おっっほっほっほ」

俺のドラゴンの杖とゲマのメラゾーマが接触し弾けた衝撃で、祭壇から吹き飛ばされる母さん!

俺は慌てて母さんを抱き抱えると、第2第3のメラゾーマをバギク口スで牽制する。

「お前は相変わらず親子の感動的シーンをぶち壊すのが好きだな!俺は放心状態の母さんにベホマをかけ治療すると、声のする方を睨み悪態をつく。」

「おっっほっほっほ。子を思う親の気持ち。いつ見てもいい物ですからねえ…つい壊したくなるのですよ」

周囲の影が一カ所に集まり一体の魔族を形成する。

「な、何故…私の力が及ばないのでか…!!」

「おっっほっほっほ。偉大なるミルドラース様が、何時までも貴女の手を負えると思っただのですか?」

「リュ、リュカ…お逃げなさ…この者を押さえ込むくらいの力は残ってます。私が…母が押さえ「イヤです!」

母さんは俺を見つめ言葉を無くす。

「(クス) 言いませんでしたか。貴女の息子は反抗期なんです。帰れと言われたら帰りません。逃げると言われれば戦います」

俺、カツコイイー！

「おっっほっほっほ。勇ましいですねえ、リユカ…しかし貴方の武器は私の足下にありますよ。どう、戦うのですか？」

.....

母さんに会えて…しかも、美しく若々しい母さんに会えて、はしゃいでました。

俺、武器ねえーじゃん！！

どうやって戦えばいいの！？

魔法の虫けらピンチちゃんが、俺の周囲を飛び回るのが見える…

こう言う時はアレです…口八丁です。

「お前の様な汚物相手に、武器なんぞいらん！覚悟しろ、ゲロ！」

「！！私の名前はゲマです！物覚えが悪いですね！」

「わざとだよ、バカ！そのくらい分かれよ！」

俺は母さんをサンチョに託し、ゲマ相手に挑発を続ける。

怒り狂って襲いかかってくる様に挑発する…

が、ゲマはドラゴンの杖を左足で踏んだまま、メラゾーマを連発してくる。

ピンチちゃんが見える！

俺にメラゾーマが当たりそうになった瞬間、「マヒャド」

ポピーの魔法がメラゾーマをかき消してくれた。

ここから、みんなの怒濤の様な攻撃が始まった。

ティミー、ピピン、ドリス、ピエール、ゴレムスらが直接攻撃を仕掛ける。

ビアンカ、ポピー、マーリン、サーラらが魔法で応酬する。

だが、決定打を与えられない。

ゲマは輝く息や激しい炎で、確実にダメージを与え続ける。

業を煮やしたティミーが、ゴレムスを踏み台にしてゲマに飛びかかった！

しかし、ゲマには読まれていた！

ゲマのメラゾーマが空中でティミーに直撃！

ティミーは吹き飛ばされ、天空の剣は虚しく中を舞う。

チャンス！

俺は咄嗟にバギクロスを連発する！

砂埃を舞い上げゲマの視界を奪う！

俺もゴレムスを踏み台にし、空中で天空の剣をキャッチする。

そのまま天空の剣の軌道を変えゲマに向けて剣ごと落下。

ゲマの胸へ上方から突き刺す！

例え装備出来なくとも触る事は出来る。一緒に落下する事は出来る。

「ぎゃはあああああ！馬鹿な！！この私が！この、ゲマ様があああ

あ……………」

ゲマは断末魔と共に消滅した…

俺は息子を犠牲にした事を思いだし、慌ててティミーの元へ駆け寄った。

やっべー！父親として最低な事をしてしまった！

普通、逆だよな！

幸いな事に天空の武具のおかげで大事には至らなかった。

母さんが素早く治療してくれた為、大した怪我もなく無事だった。

ま、結果オーライという事で許してはもらったが…

理想の父親像から懸け離れて行く自分がある…

何とか挽回せねば…

68・親孝行ってどうやるの？（後書き）

こんな戦い方ってアリですか？  
ご意見下さい。

気分的にマーサ救出成功させてしまいました。  
許して頂けますか？

## 69・最後に笑うのは誰？

<エビルマウンテン>

ティミーSIDE

僕は本当に伝説の勇者なのだろうか？

さっきのゲマ戦で、僕は焦り失敗をしてしまった。

勇者などと言う大役は僕には務まらないのでは…

お父さんが伝説の勇者なら…天空の武具を装備出来ていたのなら、

既にこの世は平和になっていたかもしれない。

このまま魔王の所に行っても、僕は足手纏いにしかならないだろう…

ハア…憂鬱だ…

「どうしたの、ティミーちゃん？」

僕が一人で落ち込んでいると、マーサ様が心配して話しかけてくれた。

正直言つて『お祖母ちゃん』って呼びづらい！

だって…全然お祖母ちゃんじゃ無いんだもん…凄く…若い…

お母さんより少し年上くらいにしか見えない！

「お腹痛いの？どうしたの？大丈夫？」

俯き悩んでいた為、余計に心配させてしまった様だ。

「うっん…何でもないよ、マーサ様」

「……………そんな他人行儀な呼び方しないで『お祖母ちゃん』って呼んでいいのよ」

「そ、そんな！マ、マーサ様は若くて美しいから…その…『お祖母ちゃん』だなんて…呼べないよ！」

僕は恥ずかしくて下を向いてしまう…

「まあ！まあまあああ！！リュカ、ちよつと聞きましたか！お前の息子はとても素直で正直者の良い子ですね！」

「当然です！僕の子ですから！！」

「そうですね、マーサ様！リユウ君の息子なんですから、女性を口説くなんて日常生活の一部ですよ」

「あ、あの…スノウさん…何も「スノウ！それは間違っている」ピエールがお父さんを庇った!？」

「な、何よ！ピエールちゃん！」

「リユカは普段は女性を口説いてはいない！普段口説いている様に感じるのは、リユカが優しいからそう感じるのだ」

「さすがピエール！付き合いが長いだけあってよく分かっている」  
お父さん嬉しそうだなあ」

「リユカが本気で口説いたら、先程のティミーの台詞など日常挨拶ですらない！」

「ちょ、ピエールさん…フォローしてくれるのでは…?」

「経験者として言う！リユカに本気で口説かれたら100%落ちる！」

力強い言葉だ…

「何故ならば…私は昨日落ちた！奥様が現れなければ、最後まで終えていただろう！」

え！？何？最後って何!？」

「まあ！リユカ…アナタって子は…」

お父さんが動揺している…

「お母さん心配だわあ…。…アナタは王族なのだから…あっちこちで子供を作ると、後々問題になるわよ」

「……………」

皆黙る。

「…リユカ…何故…黙るのですか？」

お父さんの目が泳いでる。

「リユカ…一つ質問しますが、お前には子供が何人居るのですか？」

「……………」

「……………」

「……………」

「リユカ…」

「…4人です」

「……………数が…合いませんね…」

「マ―サ様が僕とポピーを目で数える。2人しかいない…」

「…皆、それぞれの母親と共に居ます…」

「まったく…ピアンカさん、苦勞をかけますね」

「（ニコ）惚れた私が悪いんです！」

（クスクス）（ゲラゲラ）（くっくっくっ）

みんなに笑いが巻き起こる。

「お母さん、フォローになつてないわ！」

ポピーがお腹を抱え笑いながら、お母さんにツッコミを入れる。

「あら…ダメな妻ね、私は。夫のフォローも出来ないなんて」

右頬に手を当て困り顔のお母さん。

みんなこれから最終決戦なのに、そんな雰囲気感じさせない…いいなあ…この感じ。

「ティミー。お母さんからの忠告よ。お嫁さんにするのなら、フォローの出来る娘を選びなさい。そんな娘が居なければ、フォローの必要のない男になりなさい。」

其処彼処から「違うくない！」とか「しかし血は争えんから」とか…笑い声と共に飛び交っている。

「ティミー…お父さんからも忠告だ。」

お父さんが負けじと発言してくる。

「お母さんの言う事には従つた方がいい。お父さんも反抗せずに魔界に来なければ、こんな酷い目に遭わずにすんだのに…」

お父さんはめげないなあ…

僕は涙を流して笑っていた。

あんなに憂鬱だった気分が嘘の様に消え去っていた。

ティミーSIDE END

<エビルマウンテン>  
マーサSIDE

「母さん、ありがとつ。」

リュカが小声で礼を言ってきた。

「テイミーちゃん、元気になって良かったわね」

リュカは嬉しそうに頷く。

ちゃんとお父さんをやっている様ね。

伝説の勇者などと言ってもまだ子供…

私達大人が正しく導かなければ、心が折れてしまう。

それにしても、皆良い人達みたいね。

あれ程の強敵との戦闘後でも、笑いを作り出す事が出来るなんて…

リュカは素晴らしい仲間巡りに巡り会えたみたい。

でも、ミルドラスには敵わないでしょう…

その時が来たら…私が命に代えても…

「母さん…その必要は無いよ！」

リュカが心を読んだかの様に語りかけてきた。

「僕達は皆、生きて故郷へ帰るつもりなんだ。誰一人として命を犠

牲にしない…母さんも、そのつもりでいてもらつよ」

子はいずれ親を超える日が来る…

この子は既に私やパパスを超えている様だ。

私が母として出来る事は、息子達を信じて祈る事だけみたい…

「で、母さんに協力して欲しい事があるんだ。内密に」

？

リュカが私にだけ、もしもの時用のミルドラス戦を告げてきた…

・  
・  
・

私に緊張が走る！

この子は…リユカは、そんな事まで考えているのか！？  
私に出来るだろうか！？

大役を任せられ…私に果たせるだろうか！？

悩んでも始まらない。

息子に救われた命…息子の指示で戦うまで！

マーサSIDE END

70・諦めたらそこで試合終了って、安西先生が言った。

<エビルマウンテン・魔王の間>  
テイミーSIDE

僕達は和気藹々と険しい山道を進み続けている。

周囲の景色は禍々しいが、僕等の雰囲気は楽しげだ！

「何かピクニックみたい！」

ポピーが楽しそうに感想を述べると、

「ポピー、違うよ。ピクニックってのは、もっと真面目にやるものだ！」

って。

おいおい！

しかし楽しい時間は終わりを迎える。

僕等の正面に一人の老人が玉座に座っている。

コイツが魔王ミルドラスだ！

凄まじい威圧感を放ち、こちらを睨んでいる。

「ふっふっふっ…ようやく来たか…伝説の勇者とその一族よ」

見た目は貧相な老人…しかし、漂う邪気がとてつもない…

「我が僕を滅ぼし、よくぞここまでやって来た…その勇氣に敬意を表し、私自身がお前らを滅ぼしてくれよう！」

ミルドラスから邪悪なオーラが放出される！

僕は堪らず後ずさってしまった。

みんなも先程までの楽しげなムードは吹き飛んでしまい、1歩2歩と後ずさる…

でも、お父さんだけが前へ踏みだしミルドラスを見据えて言い放つ！

「ゲマといい…お前といい…出来もしない事を言うな！クソじじい

「！！」

すごい！お父さんは何時もと変わらない態度でミルドラーズと対峙している！

「人間風情が神をも超えた存在の私に大言を吐くな！！」  
ミルドラーズの凄まじい怒気が僕等を襲う！

「フ、フンだ！こ、こつちには勇者様が居るんだもんね！天空の剣を装備した伝説の勇者様が！」

え！？

「勇者様ー！あんなじじい、やっつけちゃってよー！！」

ええええ！！

まさかの丸投げえええ！？

「ちょ…お父さん…ズルイよ…そんなの…」

「リユカ！貴様、息子に全てを押し付けるとは…どういつつもりだ！！」

ピエールの抗議に、お父さんはキョトンとした顔で、

「だって、みんなビビてるじゃん！戦力としてあてにならないじゃん！じゃあ勇者様に頼るしかないじゃん！」

「ふざけるな！！あんな老人一人、子供に頼る必要はない！！」

ピエールは言い終えると、もの凄い勢いでミルドラーズへ斬りかかる！

そして他のみんなもそれに続く！

やっぱり凄いな…みんなミルドラーズの威圧感に負けて闘志が萎えていたのに…お父さんには敵わない…

「心が負けたらお終いさ」

お父さんの言う通りだ！

僕等は勝つんだ！勝ってみんな帰るんだ！

僕もみんなに負けじと斬りかかる。

お母さんのベギラゴン。

ポピーのイオナズン。

スノウのマヒャド。

サーラのメラゾーマ。

それぞれ魔法を唱えて攻撃している。

プックルは稲妻を放ち、プオンが激しい炎でミルドラーズを包む。ピピン、ドリス、サンチヨ、ピエール、ゴレムスが剣や拳で連撃を与える。

ミルドラーズはよろけ隙が出来た。

僕はチャンスとばかりにギガデインを唱えミルドラーズに追撃を喰らわせた。

ミルドラーズは身体から煙を放ち膝を付く。

「どうだ！お前なんかに負けるもんか！！」

僕は勝利を確信した！

「ふっふっふっふっふっ………」

だがミルドラーズは笑っている！？

「な、何が可笑しい！？」

「哀れな者達よ。なまじ強いが為に、私の真の姿を見る事になるのだから……」

し、真の姿……！？

「プフー！！ダッサー！！」今まで本気じゃ無かったんだからね！！  
つて、ガキがお前はー！！」

お父さんがお腹を抱えて笑っている。

「では、その目に焼き付けて死ぬが良い！私の真の姿を！！」

言い終えるやミルドラーズの身体が闇に包まれ、5倍以上に巨大化した！

巨大な目が3つ、巨大な角が3本、口は裂け腕はお父さんの胴回りとはほぼ同じ、尻尾も同じくらい太い醜悪な化け物が姿を現した。

「さあ……全員跡形もなく滅ぼしてくれようぞ！」

先程とは比べ物にならない程の邪気を放ち僕等を威嚇する。

「貴様など……！！」

ピエールが戦陣を切りミルドラーズへ斬りかかると、僕等もすぐ後に続く！

しかし、ミルドラーズの凄まじい一撃が僕等を襲う！  
突撃した僕等はミルドラーズの太い腕に弾かれて、地面に身体を強く叩きつけられた。

マーリンがベギラゴンを唱える…が、魔法が弾かれマーリンに直撃する！

間髪を入れず、ホイミンがベホマでマーリンを回復した為、辛うじて命は助かったが、これ以上ミルドラーズに魔法を使う事は出来ない。

お母さんとポピーがマホカンタを唱え、ミルドラーズの魔法を無力化しようとする。

しかし、ミルドラーズの手から凍てつく波動が僕等を包む！

僕等を守っていた魔法が全て無力化されてしまった！

「イオナズン」

次の瞬間、ミルドラーズがイオナズンを唱えた。

僕等は皆吹き飛ばされ、致命的なダメージを負ってしまった。

「ベホマズン」

ホイミンのベホマズンにより身体の傷は癒えたが、ミルドラーズに対する恐怖心は強さを増した。

僕は立ち上がる事も出来ず、ただミルドラーズを見上げる事しか出来ないでいる…

僕の隣にお父さんが立っている…

お父さんはいつもの優しい口調で話しかけてきた。

「どうしたティミー？座っていたら、アイツは倒せないぞ！」

倒す！？アイツを！？そんなの…

「父さんがアイツの注意を引き付けるから、隙をみ「ムリだよ!!」

僕は俯き叫び出す。

「……………ムリ…なのかい？」

「…ムリだよ…アイツには勝てないよ…最初から…勝てる見込みなんて無かったんだよ…」

「…じゃあ…無駄な事をしていたのかな？みんな…」

「……………」

僕はもう、何も答えられなくなっていた…

「そっか…無駄な人生だったのか…」

「お、お父さん…！」

「無駄に幼い頃から世界を旅し、無駄に父親を目の前で殺され、無駄に奴隷として生き、無駄に友の国を救い、無駄に結婚し、無駄に子供を作り、無駄に魔界へ赴き、無駄にここで死ぬ…」

お父さんは怒らない…ただ、悲しそうだ。

「(クス)ここまで無駄な事をしてきたんだ…僕は無駄に戦い抜くよ。最後まで！」

そう言つて僕の頭を撫でると、お父さんは一人でミルドライスに襲いかかつて行く。

お父さんはミルドライスの魔法をバギクロスで打ち落とし、太い腕から繰り出される打撃をすり避けて強烈な一撃をぶち当てる。

しかし、ミルドライスの硬い身体には傷一つ無く、お父さんの攻撃をモノともしない。

だがお父さんも、ミルドライスの攻撃を全てかわし、再三攻撃を仕掛ける。

お父さんがミルドライスの隙を付き、額の瞳へドラゴンの杖を突き刺した！

次の瞬間、ミルドライスの太い尻尾がお父さんの身体を強烈に弾き飛ばす！

お父さんの身体は地面を2度3度とバウンドして僕等の遙か後方で動かなくなる…

マーサ様が慌てて駆け寄り、ベホマを唱えて治療を試みる。

2度3度と魔法を唱え、その都度お父さんの身体は淡い光に包まれる…

しかし、お父さんは起きあがらない…ピクリとも動かない…

僕は…いや、みんな自分の目を疑っている…

だって…お父さんが死ぬ訳無い…

どんな時でも緊張感の無い、あの人が死ぬ訳無い…

「リュ、リュカーイー!!」

横たわるお父さんの身体に覆い被さり泣き崩れるマーサ様…

「……………うそ…だ…!」

僕は立ち上がり、お父さんを見つめていた。

ミルドラスに背中を向けて、ただお父さんの身体を見つめていた。

ティミーSIDE END

71・気付かないよりは気付いた方が良い。例え手遅れでも…

<エビルマウンテン・魔王の間>  
ティミーSIDE

「……………うそ…だ…！」

僕は立ち上がり、お父さんを見つめていた。

ミルドラーズに背中を向けて、ただお父さんの身体を見つめていた。  
「クツクツクツ…でかい口を叩くだけはあつたな。」

僕は振り返り奴を睨む！

アイツがお父さんを…アイツが…

イヤ…僕が…諦めたのがいけないんだ…

僕は勇者なんかじゃ無い！

勇気の欠片もない、弱虫だ！

だからお父さんを死なせてしまったんだ！

「どうした…次はお前か？伝説の勇者よ」

「…違う…僕は勇者じゃ無い！」

「ほう…では何だ？」

「僕は英雄リユカの息子、ティミーだ！勇者等というくだらない存在と一緒にするなあ…！」

僕は腹の底から叫び、天空の剣を頭上高く掲げる！

すると、天空の剣から凍てつく波動が発せられ、ミルドラーズを包み込む！

「ぬう…！その剣にその様な力があつたとは…！」

ミルドラーズは驚いている。僕も驚いている…

「小僧め！先に貴様を叩き潰してくれ！」

ミルドラーズの拳が僕に迫る！

慌てて剣を振り切った！

(ザシュ…！)

！！

ミルドラーズの腕に大きな傷を負わせる事が出来た！？

「どうやらさつきまでは『スカラ』で強化してあったようね！」

ポピーが立ち上がり怒りと悲しみを合わせた様な表情で呟いた。

「おのれ！！塵へと還るが良い！！メラゾーマ」

巨大な火球が僕へと迫る！

「マホカント」

ミルドラーズのメラゾーマが僕を直撃する直前、お母さんのマホカントが僕を包み守ってくれた。

「ぐおおおお！！！！」

弾かれたメラゾーマは、術者であるミルドラーズへと跳ね返る。

自ら作り出した巨大な火球によって身体を焼かれるミルドラーズ！

「魔法も効く様になった様だな！」

ピエールの力強い声がみんなを立ち上がらせた！！

マーリンのベギラゴンから始まり、お母さんとサーラのメラゾーマがミルドラーズを襲う！

スノウがマヒヤドを唱えると、ポピーがイオナズンで追い打ちをかける！

連続の魔法で怯んだミルドラーズに、プオーンが激しい炎をスラリッンが灼熱の炎を浴びせ、プックルが稲妻を喰らわせる！

ザイルがミルドラーズの肩に斧を食い込ませ！

サンチヨのビックボウガンがミルドラーズの胸に刺さると、ゴレムスが矢の刺さった部位をエグる様に殴る！

ドリスとピピンが華麗に連続攻撃を決め、ピエールの会心の一撃がミルドラーズを追いつめた。

今しかない！

お父さんが命を賭けて作り出したこのチャンス！

今、全てをぶつけなければ僕はお父さんの息子では無くなってしまっう！！

「みんな、僕に力を貸してくれ！！」

僕は両手をミルドラーズに翳し、僕の使える最強の魔法を唱える！  
「ミナデイン！！！！！」

みんなの魔力を借り受けて生み出された稲妻は、ミルドラーズの額の瞳に突き刺さったドラゴンの杖目掛け迸る！

…それがトドメだった。

ミルドラーズの身体を強力な稲妻が突き抜き、ミルドラーズは力無く倒れ崩れる。

「バ、バカな…我は…か、神を…も…超える…そ…ん…ざ…」

・  
・  
・

ミルドラーズの身体が塵へと還り、跡には1本の杖が佇んでいる。  
僕はドラゴンの杖を掴み胸が苦しくなった。

僕が諦めなければ…僕が怯まなければ…お父さんは…

お父さん……………お父さん……………

(パチパチパチ)

「いやあ…さっすが伝説の勇者！見事だね！」

！？

この場にそぐわない緊張感の欠落した声が拍手と共に響き渡る。

幻聴か！？心が望むあまり幻聴が聞こえたのか？

僕はゆっくり振り返る…

そこには優しい表情で胡座をかいているお父さんが居た！！

驚きと嬉しさと不思議さとで混乱している僕等に、マーサ様が申し訳なさそうに説明してくれた。

「皆さんを騙す様な事をしてごめんなさい。ミルドラーズとの戦闘直前にリユカから言われて…」

お父さんが！？

「万が一戦う事を諦めてしまったら、僕は死んだフリをするから、母さんも話し合わせてね」って

死んだフリ！！

「リユークーン！！良かった！！生きてて良かった！！」（エッ  
ン）」

「お父さ〜ん！私…私…」（グスツ）」

スノウとポピーが泣きながらお父さんに抱き付いた。

「馬鹿者！！この、馬鹿者！！二度とこんな真似はするな！！」

あのピエールが人目を憚らずお父さんに抱き付き泣いている。

お父さんは立ち上がりお母さんにキスをする。

「ピアンカは泣いてくれないのかな？」

「わ、私は…知ってたわ…」（ヒック）アナタが私達を見捨てない  
事を（ヒック）」

肩を振るわせ泣くお母さんを抱き締め、お父さんは僕を手招きする。

「お、お父さん…ごめんなさい…」（グスツ）」

僕はお父さんに近付きながら、嬉しさと後悔と謝罪の気持ちで泣い  
ていた。

「何を謝る事がある？立派に魔王を倒したじゃないか！」

「お父さんが（グスツ）諦めちゃダメって言っていたのに（グ

スツ）…僕は（グスツ）諦めちゃったんだ」

「（クス）泣く必要は無い！ティミーは悪くないよ。こんな面倒事  
を子供に押し付ける大人が悪いんだ！」

お父さんは僕の頭をグシャグシャに撫で、優しく励ましてくれる。

「だから、最初からこうなるって思ってたんだ！」

え？最初から！？

「ティミーやみんなが諦めちゃう事を念頭に置いていたのさ！」

「で、ではリユカ様は最初から我々が挫けるとお考えでしたんです  
か！？」

「悪いねピン！全く持ってその通り！しかもさ、天空の剣にさ、

あんな力があるなんて知らなかったしい〜」

みんないつもの呆れ顔に戻っちゃた。

「…やつぱり…お父さんには…敵わないや…」

「さあ！帰りましょうか！みんな無事ですかあ？死んだ人は手を挙げて！」

いや…ムリだから…お父さん、それムリだから！

「……………ところでさ、どうやって帰るの？」

『私が力を貸しましょう』

どこからともなくマスタードラゴン様の声が響く。

「あ！プサン！！」

僕達の身体を黄金の光が包み込む。

とても暖かく柔らかい光だ。

周囲全てが光に包まれた次の瞬間、視界が戻り目の前にマスタードラゴン様が佇んで居た。

ティミー SIDE END

71・気付かないよりは気付いた方が良い。例え手遅れでも…（後書き）

案の定ですよ！

そんなこつたるうと、思いましたよね。皆さん！

次回、最終話です。

今回も含めて、感想をよろしくお願いします。

## 72・ハッピーエンドは磨れない。

<天空城>

気が付くとそこは天空城だった。

目の前にはプサンが偉そうに座っている。

「何だよ！こんなに凄い事が出来るのなら、手伝ってくれても良かっただろ！こんな所でふんぞり返りやがって！」

(ドカ！)

ものっそい衝撃が後頭部へ走る！

「お前、マスタードラゴン様に何って口きいてんだ！」

ドリスの拳がクリッンヒット！

「はっはっは！良いですよ！」

「そうだよ、僕とプサンは友達なんだから！砕けた会話は普通なもの！」

「私が友人ですか!？」

「あれ？違ったの？じゃあ…恭しくしようか、マスタードラゴン様！」

「止めてくれ…気持ちが悪い。友のままできてくれ！」

そこまで言わなくても…

「じゃあ…僕達は帰るよ！ヘンリー達にも平和が訪れた事を知らせたいし」

「では、私の背に乗るが良い。お前達を縁ある者達の元へ運ぼうぞ」

「え!?!本当に!?!いやぁ〜悪いね。じゃあ…お願いするよ!順序はプサンに任せるから!」

みんな喜んでくれるかな？

リユリユやリユーナは幸せになれるかな？

<グランバニア城>  
テイミーSIDE

魔王ミルドラーズを倒してから3年の月日が経過した。

世界は概ね平和である。

グランバニアも平和そのもので、ベビーラッシュが巻き起こっている。

中でも、現グランバニア国王周辺のベビーラッシュは当事者達を悩ませる。

王妃であるビアンカ陛下（僕のお母さん）との間に3歳になる娘が一人。

名前を『マリー』

そしてイマイチ立場の分からない女性、スノウとの間に3歳の娘が一人。

名前を『リユーノ』

さらに皆を驚かせた人物も出産。

お父さんの騎士として剣を振っていた女性、ピエールとの間にやはり3歳の娘が一人。

名前を『リユーラ』

そしてサンタローズのシスター…リユーリュのお母さんであるシスター・フレアとの間に4歳になる娘が一人…

名前は『フレイ』

計算が合いませんよね！

『何時の間に！』って、みんな叫びました。

お母さんを救出して、挨拶に赴いた時にはお腹に居たという事ですね。

とても重大な使命を帯び旅を続けている人の行動では無い気がしますが…

従って今の僕には妹が7人居ます。あちらこちらに…

「お父さん、もう居ないですよね！」

不安に駆られ訪ねると…

「さあ…居ないんじゃないかなあ…確認してないだけで居るかもしれないね」

本当…不安です…

もしかすると…もしかするかもしれませんが。

マーサ様も怒るところか呆れて何も言えません。

しかし女性関係で問題のある人ですが、国王としての実力は皆が舌を巻く程の人物です。

長きに渡る魔族との争い、それに乗じた光の教団の勢力拡大。

それらの事象によって衰退した国家を再建させるべく、幾つかの法案を実行する。

国民への衣食住を確保する為、商業・工業の発展を促す為の新たな開拓事業を発足。

海運業の発展を促す為に、港の新規建設。

海路の確保の為に、海軍発足。

グランバニアの森を切り開き、港と王城への道を整備。

その為の物資運搬等への利用可能な運河を、グランバニア山から海まで開河させ開拓事業へのサポートと共に、運河沿いに新たな営みの場を築き人口増大へ拍車をかける。

以上の開拓事業を行う為に財政確保の一環として、貴族への課税法案を強行。

一時、貴族達が武力による抵抗を見せたが1週間で鎮圧。

理由は簡単。軍の高級士官達は貴族だが、一般兵達は平民である。

武力発起後も纏まった戦力が集まらず、戦場へゴレムスの肩に乗って姿を現した陛下を前に、あえなく投降。

これにより、財政難は一挙に解消。

新たなる国造りへ向けて、国家全体が動き出しました。

また、未来を担う子供達の育成をスローガンに、義務教育法と言う法案を実行する。

義務教育法とは、その年に6歳になる子供から15歳になる子供を対象に、無料（全額国家負担）で教育を受ける為の法案だ。

今までグランバニアでは…イヤ、他国でも、教育を受けられる者は一握りで、家族内に博学な者が居るか、家庭教師を雇うだけの裕福な家柄の者しか教育は受けられなかった。

これにより、貧富の差を少しでも無くし、国家の未来を安定させ、国力を向上させるのが陛下の狙いである。

ふざけている様に見えても、やっぱり凄いな！お父さんは…

僕とポピーも義務教育を受けている者の一人である。

身分を秘匿し、一般平民として学校に通うのは結構楽しい。

友達も幾人か出来たし…

彼女は………ただだけど…

僕とポピーが学校から帰ると、オジロン國務大臣がポピーに泣き付いてきた。

「おおお！ポピー！！濟まぬがリュカを…いやいや、陛下を連れ戻してきてはくれぬか」

どうやらまたの様だ。

お父さんは真面目に政務を行うのが性に合わないらしく、度々城を抜け出してはルーラで何処かへ逃げてしまう。

世界でルーラを唱えられるのはお父さんとポピーだけな為、度々ポピーに泣き付いてくる。

「このところ毎日ですね…」

「陛下にも困ったものだ！」

「昨日はラインハットだったし、今日はサントローズかな？」

僕の提案にポピーは、

「そんな単純な人じゃないでしょ！今日もラインハットへ行ってみましょ」

嬉しそうに答えるポピー。

「そんな事言つて、コリンズ君に逢いたいだけじゃないの？」

「何よ！悪い！！」

認めちゃったよ……

気付いたら、この二人は付き合っていた。

お父さんが執務を抜け出して、ちよくちよくラインハットに行っていたからポピーもコリンズ君と親しくなつたんだ。

「何、アレ？ティミーは彼女が出来ないからって、私に嫉妬してるの？」

ポピーはだんだん性格がお父さんに似てくる。

きつとコリンズ君は苦勞する。可哀想に……

「あ！？それともアレ？リユリユに逢いたかったのかしら？愛しいリユリユに！？」

リユリユは外見はお父さんを女性にした感じの美人だが、性格は母親のシスター・フレアのように優しい女性に成長してる。

僕の初恋の女性だが、よりによつて腹違いの妹だった。

早めに判つて良かった。

あと2・3年後だつたら……

「手えく出しちゃいなさいよ！お父さんの自業自得なんだから！構う事無いわよ！ピエールみたいに思い切つて踏み出してみなさいよ！何だつたら駆け落ちでもしちゃいなさいよ！応援するわよ？」

もくコイツ最悪……早くラインハットへ嫁げよ！

妹には不自由してないから、一人くらい嫁いでも悲しく無いよ！

「分かつたから黙れ！じゃ、ラインハットへ行こうよ！」

疲れ切つた僕と、ニヤけ顔のポピー。

テラスまで出てポピーがルーラを唱える。

ルーラで空を飛びながら思う。

僕はとても幸せな人間だと…

お父さんとお母さんの子供に生まれて良かったと…

ティミールSIDE END

人が居て、営みがあり、人が増える。

他人が友となり、男女が恋をする。

絆を以て人々は繋がり栄えて行く。

ハッピーエンドへ向けて…

## 72・ハッピーエンドは磨れない。(後書き)

取り敢えずは完結です。

リユカを始め、キャラクター達には愛着が湧きました。機会があったら、別の話で登場させたいと思います。

外伝と別伝を制作しておりますので、そちらもよろしくお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7273v/>

---

ドラゴンクエストV～友と絆と男と女

2011年10月8日21時38分発行